

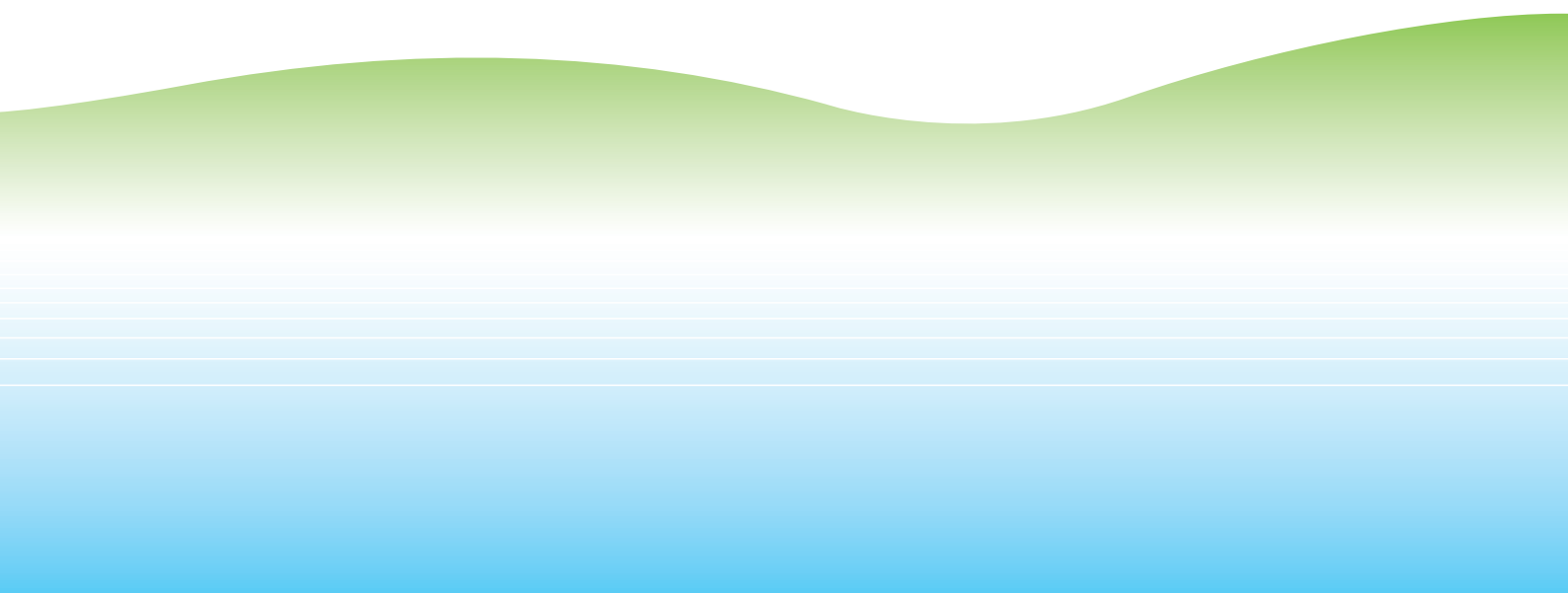
年報

京都大学フィールド
科学教育研究センター

Annual Report

Field Science Education and Research Center,
Kyoto University

No.15 2017



年 報

京都大学フィールド科学教育研究センター

第15号

2017

目次

1. フィールド研の概要

(1) 組織	1
(2) 施設等	2
(3) 教育研究部	3
(4) 森里海連環学教育ユニット	4
(5) 管理技術部	5
(6) 事務部	5
(7) 2017年度の活動（総括）	6
(8) 2017年度の主な取り組み（日記）	7

2. フィールド研の活動

(1) フィールド研2017年度の主な取り組み	
1) 森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」	13
2) 京大ウィークス2017で5施設がイベント開催	15
3) 森里海連環学教育ユニット6年間が終了	16
4) 芦生研究林と上賀茂試験地における台風21号被害	18
5) 和歌山研究林における精密森林情報整備と地域共同連携事業	20
6) 白浜水族館特別企画展「ヤドカリと貝殻」	21
(2) 全学共通科目	
1) 2017年度における全学共通科目	22
2) 統合科学科目群 森里海連環学分野	24
①森里海連環学I：森・里・海と人のつながり ②森里海連環学II：森林学	
③森里海連環学実習I ④森里海連環学実習II ⑤森里海連環学実習III ⑥森里海連環学実習IV	
3) キャリア形成科目群 博物館実習	30
①博物館実習（自然史・上賀茂試験地） ②博物館実習（館園実務・舞鶴水産実験所）	
③博物館実習（館園実務・瀬戸臨海実験所）	
4) 少人数教育科目群 ILASセミナー	33
①京都のエコツーリズムー森での感動とは何かー ②北海道の森林 ③森の創りだすもの	
④京都の文化を支える森林 ⑤瀬戸内に見る森里海連環 ⑥原生的な森林の働き	
⑦貝類の不思議 ⑧森を育て活かす ⑨環境の評価 ⑩南紀の自然史 ⑪森林河川調査入門	
(3) 大学院教育・学部教育	44
(4) 森里海連環学教育プログラム	48
(5) 教育関係共同利用拠点事業	
1) 公開実習科目一覧	50
2) 日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点（舞鶴）	52
3) 黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点（瀬戸）	53
4) 人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点（芦生・北海道・上賀茂）	54
(6) 研究活動・外部資金の獲得状況	55
(7) 社会連携活動	59
(8) 広報活動	61

3. 各施設等の活動

(1) 各施設等の活動概要

1) 芦生研究林	63
2) 北海道研究林	64
3) 和歌山研究林	65
4) 上賀茂試験地	66
5) 徳山試験地	67
6) 北白川試験地	68
7) 紀伊大島実験所.....	69
8) 舞鶴水産実験所.....	70
9) 瀬戸臨海実験所.....	71
10) 森里海連環学教育ユニット.....	72
11) 森里海連環学プロジェクト支援室.....	73
12) 企画情報室	74
(2) 各施設を利用した学生実習等.....	75
(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等	79

4. 教職員の活動

(1) 研究成果.....	81
(2) 他大学・各種学校の講義・実習.....	102
(3) 学会等における活動.....	103
(4) 社会貢献活動.....	105
(5) 国際活動.....	110
(6) 研修参加・資格取得等.....	112

5. 資料

(1) 職員配置表.....	114
(2) 常設委員会名称および委員一覧.....	115
(3) 全学委員会等.....	116
(4) 運営委員会.....	117
(5) 協議員会.....	117
(6) 教育関係共同利用拠点運営委員会	118
(7) 森里海連環学教育ユニット関連委員会	119
(8) 新聞・雑誌等に掲載された記事.....	120
(9) 各施設利用者数.....	122
(10) 瀬戸臨海実験所附属水族館月別入館者数.....	122
(11) 人事異動.....	123
(12) 規程の改正等.....	124

1. 概要

(1) 組織

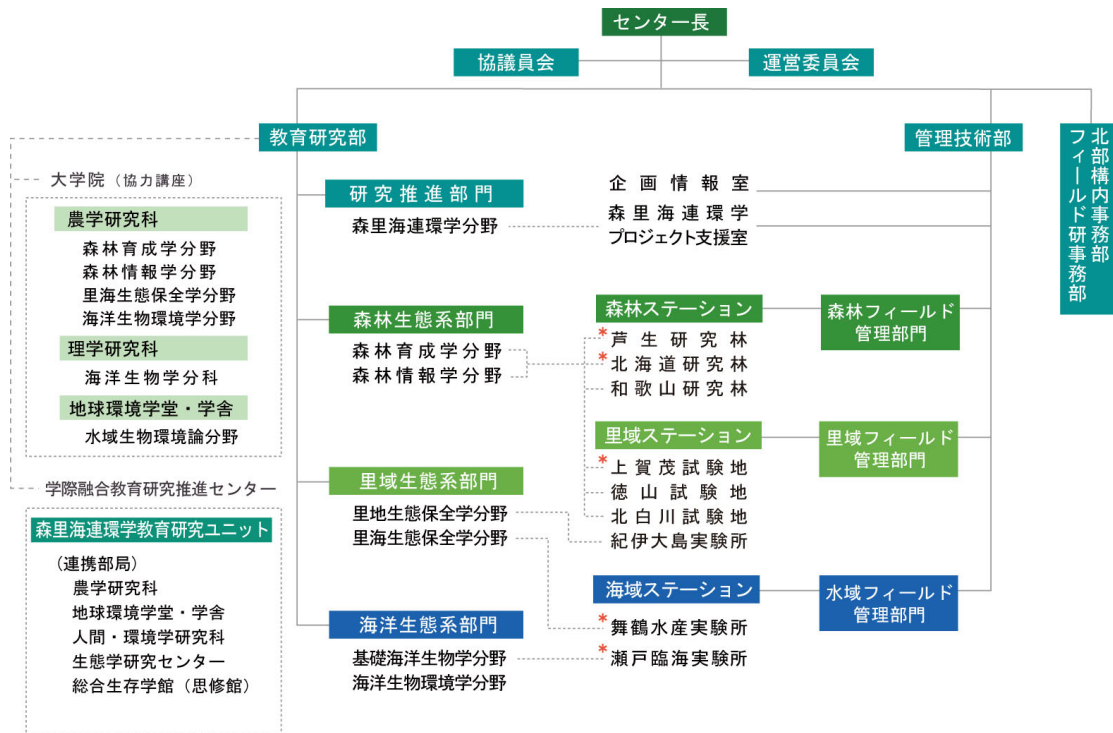
フィールド科学教育研究センター（以下、フィールド研）は、京都大学が長年に亘って森林域、里域、海域の研究現場としてきた9の施設によって構成される。各施設は、太平洋側から日本海側に至る近畿圏を中心に、北海道から山口県までの広域に位置する。「森里海連環学」を教育研究の中心にしている。

フィールド研は、学内共同教育研究施設として各研究科の学生の教育、教員による研究の支援を行うとともに、全学共通教育への科目提供、農学研究科、理学研究科へ協力講座として参画して、大学院教育および学部教育を行っている。また、大学院地球環境学舎へ基幹分野および協力分野として参画している。さらに、学内の3つの大学院研究科と連携して、学際融合教育研究推進センターに森里海連環学教育ユニットを設置し、流域・沿岸域の統合管理を学ぶ大学院生のための「森里海連環学教育プログラム」を開講している。学内外の学生や研究者の教育研究を支援しており、5施設（3拠点）が文部科学省から教育関係共同利用拠点に認定されている。吉田キャンパス北部構内に森林系図書室、瀬戸臨海実験所に瀬戸臨海実験所図書室を有する。

教員は教育研究部に属し、森－里－海の連環を軸とした教育・研究を進めている。技術職員は管理技術部に属し、フィールドの管理・運営および基礎情報の収集、情報管理、技術開発、教育研究支援を行っている。事務職員は、フィールド研事務部および共通事務部である北部構内事務部に属している。フィールド研本部は本学吉田キャンパス北部構内に置かれている。

センター長 山下 洋 （2017.04-）

副センター長 徳地 直子 （2017.04-）



* 教育関係共同利用拠点（文部科学省）

(2) 施設等

森林ステーション

- 芦生研究林 京都府南丹市美山町芦生 林長 伊勢 武史
1921年設置（芦生演習林）／面積4,185.6ha／ 常駐教職員11人
- 北海道研究林 林長 舘野 隆之輔
標茶区 北海道川上郡標茶町多和553
1949年設置（農学部附属北海道演習林標茶区）／面積1,446.8ha／ 常駐教職員11人
白糠区 北海道白糠郡白糠町西二条北8-1-10
1950年設置（農学部附属北海道演習林白糠区）／面積880.4ha
- 和歌山研究林 和歌山県有田郡有田川町上湯川76 林長 長谷川 尚史
1926年設置（農学部附属和歌山演習林）／面積842.0ha／ 常駐教職員6人

里域ステーション

- 上賀茂試験地 京都市北区上賀茂本山2 試験地長 徳地 直子
1926年設置（農学部附属演習林上賀茂試験地），1949年移転／面積 46.8ha／ 常駐教職員6人
- 徳山試験地 山口県周南市徳山鉢窪769 試験地長 吉岡 崇仁
1931年設置（農学部附属徳山砂防演習地），1942年移転（農学部附属演習林徳山試験地），1966年再移転
／面積 41.9ha
- 北白川試験地 京都市左京区北白川追分町 試験地長 吉岡 崇仁
1924年設置（農学部林学科苗畑）1925年所管替（農学部附属演習林本部試験地）／面積1.3ha／常駐教職員2人
- 紀伊大島実験所 和歌山県東牟婁郡串本町須江 所長 梅本 信也
1937年設置（農学部附属大島暖帯植物試験地），1967年改称（亜熱帯植物実験所）／面積11.8ha／常駐教職員1人

海域ステーション

- 舞鶴水産実験所 京都府舞鶴市長浜 所長 益田 玲爾
1947年設置（農学部水産学科）1972年設置（農学部附属水産実験所）／面積は2.0ha／ 常駐教職員10人
- 瀬戸臨海実験所 和歌山県西牟婁郡白浜町459 所長 朝倉 彰
1922年設置（理学部附属臨海研究所），1930年水族館一般公開開始，1938年改称（瀬戸臨海実験所），
1968年島島実験地を取得／面積6.8ha（島島実験地2.7haを含む）／常駐教職員16人

- 森里海連環学教育ユニット 京都市左京区北白川追分町 ユニット長 朝倉 彰
2008年発足（海域陸域統合管理学研究部門），2012年改組／ 常勤教職員6人

（京都本部地区（吉田キャンパス北部構内）／ 常勤教職員 17人）

会議室・センター長室・森林系図書室・研究室・実験室・事務室など : 農学部総合館

j. Pod（京大フレーム工法）実証実験棟 *

森里海連環学教育ユニット 研究室・会議室・実験室

: 連携研究推進棟 *・北部総合教育研究棟

隔地教員研究室

: 旧演習林事務室棟 *

森林/里域フィールド管理部門・森里海連環学プロジェクト支援室

: 北白川試験地事務室棟 *

* 北白川試験地内

(3) 教育研究部

教育研究部は、研究推進部門、森林生態系部門、里域生態系部門、海洋生態系部門の4部門、7分野から構成される。

研究推進部門

本部門には、フィールド研および森里海連環学教育ユニットの教職員が所属し、森里海連環学に関わる研究プロジェクトや教育活動を実施している。この部門には、森里海連環学プロジェクト支援室が設置されており、フィールド調査や化学分析を支援している。

森里海連環学分野

日本の沿岸域生態系は、多様な海洋生物を育んできたが、近年は深刻な問題を抱えるようになった。人間の過剰な経済活動が、水質汚染や藻場・干潟の消失を引き起こし、ダム建設、埋立、堤防建設といった経済開発による水・砂の流系の分断が生態系間のつながりを破壊している。当分野では、森里海連環学を通して、森から海までのつながりと人間の関わり方を統合的に管理していくことによって、問題の解決を図ろうとしている。

森里海連環学教育ユニットはフィールド研とは独立した組織であるが、森里海連環学を主導してきたフィールド研とは、深く連携する必要があることから、ユニットの教員はフィールド研の本部門にも所属することとしている。

〔教員〕横山 壽（社会連携教授）・清水 夏樹（連携准教授）・吉積 巳貴（連携准教授）・Laverigne, Edouard（連携講師）

森林生態系部門

本部門は、3ヶ所の研究林と3ヶ所の試験地の管理と運営を担当し、森林生態系に関するフィールド教育・研究活動を展開している。生態系サービスや多面的機能の定量的評価や社会的評価を目標として、森林生態学、森林育成学、森林管理学、生物地球化学などさまざまな分野にわたる手法と概念を用いて総合的に解析している。森里海連環学への取り組みとして、森林生態系と水域生態系の間の生物と物質のつながりも研究している。

森林育成学分野

森林育成学分野では、森林生態系サービスをバランス良く享受できる森林資源の育成と管理、利用方法の構築を目的とし、窒素等の物質循環を通じた森林生態系機能と更新機構を中心とした森林動態の解明に関する研究を行っている。さらに、シカによる植生被害の影響および対策や、生態系情報に基づく持続可能な森林資源の育成・利用方法に関する技術的研究にも取り組んでいる。当分野は、協力講座として農学研究科に森林育成学分野を提供している。

〔教員〕徳地 直子（教授）・長谷川 尚史（准教授）・伊勢 武史（准教授）・石原 正恵（准教授）・中川 光（特定助教）

森林情報学分野

森林情報学分野では、森林から流域に流出する物質と森林環境の関係や、伐採等の人間活動が植生・土壌・流域の物質循環系におよぼす影響など、森と流域の連環について研究している。さらに、国産材の流通・消費の変化を解析することで、適切な森林資源の管理手法を検討している。これらの研究をもとに、地球環境変化や社会環境の変化のもとでの森林流域生態系の変化を把握するとともに、適切な森林利用と管理をするために人びとの森林環境に対する意識調査に取り組んでいる。当分野は、協力講座として農学研究科に森林情報学分野を提供している。

〔教員〕吉岡 崇仁（教授）・舘野 隆之輔（准教授）・中島 皇（講師）・小林 和也（講師）・寄元 道德（助教）・坂野上 なお（助教）・中西 麻美（助教）

里域生態系部門

山間部から沿岸部に至る広く、変化に富む地域は、人間の関与が様々な強度で継続しており、自然と人間の相互作用、もしくは人間と自然との共生によって生み出される特有の生態系を形成する。この生態系には、農業、林業、水産業という人間の生活を維持するために必要な基本的な生業による二次的自然が含まれるほか、居住域としての農山漁村や都市も含まれる。これらの人間が与えるインパクトを把握することは、現在の地球環境問題の本質の把握にも通じるものであり、本部門ではそのために不可欠な人間－自然相互作用環の解明を多くの視点から実践し、その共生システム構

築のための教育研究を行う。

里地生態保全学分野

里地生態保全学分野では、人里と一部に里山や里海、里空を含む、いわゆる里地に分布するかく乱依存性植生ならびにかく乱依存性植物の起源、伝播、歴史および生態的特性を、文明や地域文化的多様性とその変容と関連付けながら明らかにし、それらの管理保全体系ならびに持続的共存に関して考察をしている。

〔教員〕梅本 信也（准教授）

里海生態保全学分野

里海生態保全学分野では、魚介類の生態、行動、系統分類などについて、多様な視点から研究を進めている。また、陸域の環境と人間活動が沿岸域の生物生産機構に与える影響を調べている。森から海までの生態系のつながりの分断によって、海の生態系が劣化しているという仮説を検証し、そのメカニズムの解明をめざす。当分野は舞鶴水産実験所および教育ユニット総合生態系管理領域（吉田キャンパス）を教育研究の拠点とし、協力講座として農学研究科に里海生態保全学分野、地球環境学舎に水域生物環境論分野を提供している。

〔教員〕山下 洋（教授）・益田 玲爾（准教授）・甲斐 嘉晃（助教）・鈴木 啓太（助教）・
澤田 英樹（特定助教）・田城 文人（特定助教）

海洋生態系部門

本部門では、海洋生物を研究材料として用い、分類学、進化生物学、発生生物学、生理生態学、生物地理学といった様々な基礎生物学的な研究教育活動を、分子レベルから生態系レベルにわたって広範囲に展開している。更にその研究フィールドを熱帯域・北方域へと地球規模に広げながら、環境生物学や保全生物学といった応用的な領域へと、その教育研究活動の内容を拡大している。

基礎海洋生物学分野

基礎海洋生物学分野では、海洋生物の多様性と進化プロセスを解明するための自然史研究を行っている。系統分類学は、形態および分子レベルにおける系統と分類学の研究、および、生物地理、地史をも含め、系統地理学、進化的研究を進めている。機能形態学では、比較形態学的研究や、発生学、分子生物学的手法による形態形成のメカニズムを解明する研究を行うとともに、海洋生物の多様性を保全するために、多様な生物が環境の変動に対してどのように反応するのかを明らかにするべく、研究を行っている。当分野は瀬戸臨海実験所を教育研究の拠点とし、協力講座として理学研究科に海洋生物学分科を提供している。

〔教員〕朝倉 彰（教授）・久保田 信（准教授）・大和 茂之（助教）・中野 智之（助教）・
後藤 龍太郎（助教）・原村 隆司（連携助教）・加賀谷 勝史（連携助教）

海洋生物環境学分野

海洋生物環境学分野では、海洋をはじめ、湖沼や河川を含む水圏における、持続的な生物生産をもたらす水圏生態系の仕組みや、その変動機構ならびに水圏生態系に生息する魚類や海産ほ乳動物などの行動生態を研究している。そのための手法として、安定同位体分析、生態系モデルによるシミュレーションならびにバイオテレメトリーやマイクロデータロガーによるバイオリギングを用いた研究を行っている。当分野は、時限的にフィールド研にも所属する農学研究科からの流動分野である。

〔教員〕荒井 修亮（教授）・市川 光太郎（准教授）・小林 志保（助教）

（4）森里海連環学教育ユニット

フィールド研が推進してきた森里海連環学を教育と研究に生かし、学問分野として確立すること、そして、この考え方を実践し、国際的に活躍する人材を育てることを目的に、日本財団との共同事業として「森里海連環学教育プロジェクト」を2012年4月からスタートさせ、「森里海連環学教育ユニット」を、人間・環境学研究科、農学研究科、地球環境学舎・学舎とともに学際融合教育研究推進センターに創設した。

〔教員〕横山 壽（特任教授）・清水 夏樹（特定准教授）・吉積 巳貴（特定准教授）・Laverigne, Edouard（特定講師）

(5) 管理技術部

森里海連環学プロジェクト支援室，企画情報室と，森林，里域，水域の3フィールド管理部門，9施設の管理技術班からなる。フィールドの管理・運営および基礎情報の収集，情報管理，技術開発，教育研究支援を行う。

技術部長 山下 洋(2017.04-)

企画情報室 室長 山下洋(2017.04-)

森里海連環学プロジェクト支援室 室長 山下 洋(2017.04-)

森林フィールド管理部門 技術長 山内 隆之

○芦生研究林管理技術班

○北海道研究林管理技術班

○和歌山研究林管理技術班

里域フィールド管理部門 技術長 境 慎二郎

○上賀茂試験地管理技術班

○徳山試験地管理技術班

○北白川試験地管理技術班

○紀伊大島実験所管理技術班

水域フィールド管理部門 技術長 加藤 哲哉

○舞鶴水産実験所管理技術班

○瀬戸臨海実験所管理技術班

(6) 事務部

フィールド研の事務は，2017年度に設置されたフィールド科学教育研究センター事務部が担っている。また，共通事務部である北部構内事務部の各担当部署がフィールド研の業務を所掌している。

フィールド科学教育研究センター事務部 事務長 清水克哉(2017.04-)

事務室長 松尾 隆(2017.04-09)／南 幸一(2017.10-)

北部構内事務部（フィールド研担当部署のみ表示） 事務部長 古 田靖高

総務課 第二人事掛，給与掛 総務課長 奥 村晃弘

農学研究科等総務掛

管理課 管理掛，第三予算・決算掛*，研究推進掛 管理課長 上 原孝 俊

(* 2017年度から，フィールド研の担当が第二予算・決算掛から第三予算・決算掛に変更)

経 理 課 フィールド研経理総括掛 経理課長 馬場 勉(2017.04-)

芦生研究林事務掛

北海道研究林事務掛

瀬戸臨海実験所事務掛

第二運営費・寄附金掛，旅費等経理事務センター事務掛，

受入企画掛，科学研究費等補助金掛，研究支援掛

施設安全課 施設掛，設備掛，安全管理掛 施設安全課長 大塚 正人

教務・図書課 農学研究科等学術情報掛**，共通図書掛 教務・図書課長 清水 克哉(2017.04-)

(** 森林系図書室を所掌)

国 際 室 国際企画支援掛 国際室担当課長 一井 信吾(2017.04-)

学術研究支援室 北部地区担当チーム

森里海連環学教育ユニット支援室

(7) 2017年度の活動（総括）

センター長／里海生態保全学分野教授 山下 洋

京都大学中期目標・中期計画第3期2年目となり、部局の行動計画に沿って活動を行ってきた。組織改革の一環であり人事と定員管理を行う学域・学系制度にもとづいて、生態学研究センターとの間で構成された「生態フィールド学系」も2年目に入り、人事選考等を進めるとともに長期的な将来展望についても意見交換を開始した。

大学教育では、農学研究科、理学研究科および地球環境学舎の協力・基幹分野として、研究科の教育ならびに学部教育に貢献し、博士2人、修士12人、学士7人の学位研究を指導した。一方、全学教育に関しては、昨年度の全学共通科目の改変にともない統合科学科目群に「森里海連環学分野」が創設され、従来の科目を再編し、森里海連環学講義2科目、森里海連環学実習4科目を実施した。少人数セミナーが改変されたILASセミナーは、12科目が隔地施設等を利用して実施された。また、キャリア形成科目群として博物館実習が、瀬戸臨海実験所、舞鶴水産実験所、上賀茂試験地において実施された。2013年度から開始された森里海連環学教育プログラムが本年度で終了した。本プログラムにおける大学院教育については、責任部局として事業最終年度の運営に携わるとともに、協力部局と連携して講義・実習科目を着実に実施し、67人に修了証を授与した。本教育プログラムの修了生は5年間で合計208人となった。

教育関係共同利用に関する3拠点（舞鶴水産実験所、瀬戸臨海実験所、芦生研究林・北海道研究林・上賀茂試験地）においては、公開実習14科目を実施した。また、他大学の実習科目も受け入れるほか、他大学学生・院生による論文作成のための利用も多数受け入れた。各拠点の運営委員会では、共同利用の現状把握と今後の質的量的向上に向けた検討が行われた。また、水産・臨海・臨湖実験所フィールド実習ワークショップ、人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点・実習検討会を開催し、公開実習関係者、受講生との意見交換を行った。

研究活動としては、科学技術振興機構のCRESTの支援を受け、舞鶴水産実験所を中心に沿岸生態系調査と飼育施設を活用した実験により、環境DNAを用いた魚類群集の定量モニタリング生態系評価手法の開発に関する一連の研究を行った。また、海洋生物環境分野ではCRESTの課題として、データ高回収率を実現するバイオロギング・システムの構築に関する研究を進めた。部局として取り組むべき森里海連環学研究に関しては、公益財団法人日本財団より、森里海連環学教育プログラムの後継事業として、森里海の連環研究に焦点を絞った、「森里海連環再生プログラム」が2021年度までの計画で開始された。本事業は、当センターを責任部局として、農学研究科、人間・環境学研究科、地球環境学堂、生態学研究センター、総合生存学館が参画し、日本全域で森里海の連環を解明しその成果を地域振興に活かすことを目的としている。外部資金に関しては、科学研究費補助金事業（代表者15件、分担者17件）のほか、受託研究、共同研究を多数受け入れた。また、寄附金については、20件を受け入れた。

教育・研究と並んで社会貢献は部局活動の大きな柱の一つである。隔地施設では、白浜水族館特別企画展「ヤドカリと貝殻」や従来から行ってきた一般公開、観察会、地域との連携公開講座など多数実施した。また、京都大学全学の取り組みである「京大ウィークス」では、5施設が実施し参加者は141人であった。個々の教職員もそれぞれの活動の中で市民や中高生などを対象とした講演を多数行った。2017年10月27・28日には、センターと森里海連環学教育ユニットが主催する森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」および国際人材の育成に関する「国際ワークショップ」が開催され、センターの教員も多様な立場から参画し、森里海連環学に関するこれまでの大学院教育の成果を確認した。高大連携に関しては、複数の施設でSSHプログラム等の実習を受け入れるとともに教員によるセミナーを実施した。

国際交流活動としては、11月にハノイ工科大学（ベトナム国）で開催された京都大学地球環境学堂シンポジウムにおいて、森里海連環学国際セミナーを開催し教育ユニットの活動報告を行ったほか、3月に本学農学研究科および地球環境学堂と西ブルターニュ大学ヨーロッパ海洋研究所との間で部局間学術交流協定が締結され、両研究科に協力分野を提供するセンターの教員が締結にあたり中心的な役割を担った。

2017年度は、第3期中期目標・中期計画および学域・学系制度の導入2年目という環境のもとで、活発に教育研究活動を行うことができた。一方、10月に東海地方に上陸した台風21号では、京都府内の施設や樹木に予想外の被害を受けた。今後も地球環境の変化による大雨や大型台風の増加が予測されており、対応策の検討が急がれる。災害対策も含め予算、人員については厳しい状況が続くことが想定されるが、全教職員の自覚と協力のもとに今後も活動を推進していきたい。

(8) 2017年度の主な取り組み（日記）

- (1) 2017年4月1日
センター長および企画情報室長（吉岡 崇仁教授→山下 洋教授）・副センター長（山下 洋教授→徳地 直子教授）が交代、
- (2) 2017年4月1日
横山 壽社会連携教授が着任
- (3) 2017年4月～
2017年度（前期）全学共通科目少人数教育科目群ILASセミナーを開講
 - ・「京都のエコツアー ズムー森での感動とは何かー」（芦生研究林） 伊勢 武史
 - ・「地域連環学入門」（紀伊大島実験所） 梅本 信也
 - ・「北海道の森林」（北海道研究林） 舘野 隆之輔
 - ・「森の創りだすもの」（芦生研究林） 徳地 直子
 - ・「京都の文化を支える森林ー森林の持続的管理に関する地域の知恵と生態学的知見からのシナリオ作成」（芦生研究林，上賀茂試験地ほか） 吉岡，徳地，伊勢，石原，坂野上，中川
 - ・「瀬戸内に見る森里海連環」（徳山試験地） 中島 皇，久保田 信，大和 茂之
 - ・「原生的な森林の働き」（上賀茂試験地，芦生研究林） 中島 皇
 - ・「貝類の不思議」（瀬戸臨海実験所） 中野 智之
 - ・「森を育て活かすー林業体験をとおして考える」（和歌山研究林） 長谷川 尚史
 - ・「環境の評価」（徳山試験地） 吉岡 崇仁
 - ・「南紀の自然史」（瀬戸臨海実験所） 大和 茂之
 - ・「森林河川調査入門」（芦生研究林） 中川 光
- (4) 2017年4月～7月
全学共通科目「森里海連環学I：森・里・海と人のつながり」「森里海連環学II：森林学」を開講
- (5) 2017年4月1～28日
ニホンジカの捕獲を行うため，和歌山研究林において，平日は日出から午前9時まで，土日・祝日は終日の入林制限を実施
- (6) 2017年4月1～9日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において，「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」「バックヤードツアー」を毎日開催（解説ツアー（一般57人），バックヤードツアー（小学生以上72人））
- (7) 2017年4月3～5日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において，「大水槽えさやり体験」を開催（小学生以上30人）
- (8) 2017年4月～
紀伊大島実験所において，古座川プロジェクト関連の古座川合同調査を実施（毎月実施，第137回～）
- (9) 2017年4月7日
平成29年度第1回海域ステーション舞鶴水産実験所共同利用運営委員会を開催
- (10) 2017年4月7日
平成29年度第1回海域ステーション瀬戸臨海実験所共同利用運営委員会を開催
- (11) 2017年4月7日
水産・臨海・臨湖実験所フィールド実習ワークショップ「水産実験所における実践教育の新たな取り組みー水産海洋実践教育ネットワーク」を開催
- (12) 2017年4月10日
舞鶴水産実験所において，安全管理講習会を実施（25人）
- (13) 2017年4月11日，4月15日，6月16日
瀬戸臨海実験所において，瀬戸海洋生物学セミナーを開催

- (14) 2017年4月13日
フィールド研会議室において、学生・院生向けガイダンス「研究公正，経費の適正使用」と「安全管理教育」を開催（学生・大学院生18人，教員・研究員等13人）
- (15) 2017年4月17日，5月31日，8月10日
森里海連環学教育ユニットが，京都大学・日本財団共同事業協議会（後期第7～9回）を開催
- (16) 2017年4月18日～2018年1月9日
和歌山研究林において，和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催でウッズサイエンスを開講（週1回・計23回 3年生1人）
- (17) 2017年4月22日
上賀茂試験地において「2017年度上賀茂試験地春の自然観察会」を開催（参加者15人）
- (18) 2017年4月29日，5月27日，6月24日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において，きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験」を開催（参加者 4月21人・ 5月21人・ 6月20人）
- (19) 2017年5月20日
芦生研究林において，教育・研究利用現地ツアーを開催（参加者9人）
- (20) 2017年5月20日～7月21日
ニホンジカの捕獲を行うため，和歌山研究林において，平日は日出から午前9時までおよび午後5時から日没まで，土日・祝日は終日の入林制限を実施
- (21) 2017年5月22～28日
瀬戸臨海実験所において，公開実習「博物館実習」を実施（教育関係共同利用拠点事業，他大学3人）
- (22) 2017年5月31日
和歌山研究林において，和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催で「SIMIZUタイム」（森林ウォーク）を実施（1年生3人・引率者3人）
- (23) 2017年5月31日，7月19日
森里海連環学教育ユニットが，事業推進委員会（後期第7～9回）を開催（後期第7回委員会は，書面審議（回答期限：4月28日）によって開催）
- (24) 2017年6月1日
和歌山研究林において，有田川町立八幡小学校との共催で，総合的な学習の時間「森のことを知ろう」を実施（5年生11人，教諭2人）
- (25) 2017年6月3日，12月3日
北白川試験地において，京都市，スターバックスコーヒージャパンとの共催で，外来種いけばなを実施（6月44人，12月11人）
- (26) 2017年6月15日，2018年3月6日
森里海連環学教育ユニットが運営協議会（後期第3～4回）を開催
- (27) 2017年6月23日
徳山試験地において，周南市との連携事業の一環として，和田中学校の環境学習を実施（中学生23人・引率者8人）
- (28) 2017年6月24日，11月25日
徳山試験地において，京都大学・周南市連携講座（全2回）を開催（6月19人・11月18人）
- (29) 2017年6月26日
北海道研究林標茶区において，標茶町立沼幌小学校との共催で草木染めを実施（生徒16人，教諭7人）
- (30) 2017年7月7日
京都大学東京オフィスにおいて，第84回京都大学丸の内セミナーを開催。山下 洋教授が講演「森・里・海のややこしい三角関係」（参加者63人）

- (31) 2017年7月8日～10月22日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において、特別企画展「ヤドカリと貝殻－生態と芸術－」を開催
- (32) 2017年7月19日、9月27日、12月12日、2018年1月30日、2月14日、3月14日
新ユニット設置準備委員会（第1～6回）を開催
- (33) 2017年7月22日～8月31日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において、夏休みイベント「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」「バックヤードツアー」を毎日開催（解説ツアー（一般387人）、バックヤードツアー（小学生以上366人））
- (34) 2017年7月24日～8月31日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において、夏休みイベント「大水槽のエサやり」を開催（小学生以上128人）
- (35) 2017年8月4日
北海道研究林標茶区において、ひらめき☆ときめきサイエンス「大学の森で学ぼう2017～森の木を伐るとどうなるのか～」(ミニ講義、野外調査体験等)を開催（小中高校生12人）
- (36) 2017年8月5日
芦生研究林において、「知ろう、守ろう芦生の森－芦生の森探索とシカ防除ネット設置ボランティア活動－」の一環として、ブナ芽生え調査の継続調査およびシカ防除ネット内外の植生調査等を実施（主催：芦生地域有害鳥獣対策協議会、京都府南丹広域振興局／共催：フィールド研他）参加者28人
- (37) 2017年8月5～8日
北海道研究林標茶区において、京都大学公開森林実習II-夏の北海道東部の人と自然の関わり-を実施（教育関係共同利用拠点事業、特別聴講学生1人・一般聴講学生2人、全学共通科目ILASセミナー「北海道の森林」併催）
- (38) 2017年8月6～10日
芦生研究林および舞鶴水産実験所において、全学共通科目「森里海連環学実習I（芦生研究林－由良川－丹後海コース）」を実施（14人）
- (39) 2017年8月6～10日
芦生研究林および舞鶴水産実験所において、公開実習「森里海連環学実習I（芦生研究林－由良川－丹後海コース）」を実施（教育関係共同利用拠点事業、他大学5人、全学共通科目「森里海連環学実習I」併催）
- (40) 2017年8月17～19日、28～30日
芦生研究林・上賀茂試験地および北白川試験地において、京都大学公開森林実習I－近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴-を実施（教育関係共同利用拠点事業、Ia：一般聴講学生12人、Ib：特別聴講学生2人、一般聴講学生12人）
- (41) 2017年8月24～29日
舞鶴水産実験所において、公開実習「海洋生物科学実習I」を実施（教育関係共同利用拠点事業、特別聴講学生1人・一般聴講学生2人、農学部科目「海洋生物科学技術論と実習I」併催）
- (42) 2017年8月29日～9月3日
舞鶴水産実験所において、公開実習「海洋生物科学実習II」を実施（教育関係共同利用拠点事業、他大学1人、農学部科目「海洋生物科学技術論と実習II」併催）
- (43) 2017年9月1日
木村里子特定研究員（海洋生物環境学）が、国際高等教育院附属データ科学イノベーション教育研究センターへ転出
- (44) 2017年9月1～7日
北海道研究林標茶区および北海道大学厚岸臨海実験所において、全学共通科目「森里海連環学実習II京大・北大合同実習（夏の北海道実習）」を実施（教育関係共同利用拠点事業、京大7人・北大11人）
- (45) 2017年9月4～11日
瀬戸臨海実験所において、公開臨海実習「自由課題研究」を実施（教育関係共同利用拠点事業、他大学1人、理学部科目「臨海実習第1・4部」併催）

- (46) 2017年9月6～7日
百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、瀬戸内海研究フォーラム in 京都「川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系」を共催（179人）
- (47) 2017年9月18～24日
瀬戸臨海実験所において、公開臨海実習「発展生物学実習」を実施（教育関係共同利用拠点事業，他大学10人，理学部科目「臨海実習第2部」併催）
- (48) 2017年9月20～22日
和歌山研究林において、有田川町立八幡中学校との共催で、総合的な学習の時間「職業体験学習」を実施（4人）
- (49) 2017年9月24～29日
舞鶴水産実験所において、公開実習「若狭湾秋季の水産海洋生物実習」を実施（教育関係共同利用拠点事業，京大2人・他大学9人）
- (50) 2017年9月26日
森里海連環学勉強会（第3回）を開催
- (51) 2017年9月28日
北白川試験地において、近畿地区国立大学法人等教室系技術職員研修「施設見学」を実施（12人）
- (53) 2017年9月30日
和歌山研究林において、神戸大学大学院理学研究科との共催で、ひらめき☆ときめきサイエンス「寄生虫が溪流魚を育む！？ハリガネムシを通して自然をみてみよう」を開催（高校生11人）
- (54) 2017年10月11日
フィールド研会議室において、研究費等の適正使用に関する研修を開催（51人）
- (55) 2017年10月14日
徳山試験地および西緑地において、周南市と共催で、周南市・京都大学フィールド科学教育研究センター連携公開講座を開催（京大ウィークス参加イベント・参加者20人）
- (56) 2017年10月16～20日
瀬戸臨海実験所において、全学共通科目「博物館実習（館園実務）」を実施（3人）
- (57) 2017年10月21日，12月9日，2018年2月3日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の飼育体験」を開催（参加者 10月20人・12月11人・2月8人）
- (58) 2017年10月21日
北海道研究林白糠区において、ミニ公開講座「自然観察会」を実施（京大ウィークス参加イベント・参加者10人）
- (59) 2017年10月21日
芦生研究林において、芦生研究林一般公開を開催（京大ウィークス参加イベント・参加者60人）
- (60) 2017年10月22日～11月2日
台風21号により、芦生研究林内および研究林に通じる道路で大きな被害が発生したため、入林制限を実施
- (61) 2017年10月23日～2018年3月31日
台風21号により風倒木が多数発生したため、上賀茂試験地において、一般の入林制限を実施
- (62) 2017年10月28日
北部総合教育研究棟 益川ホールにおいて、森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」を開催（参加者115人）
- (63) 2017年10月28日～2018年3月31日
白糠町エゾシカ被害防止緊急捕獲事業の活動の一環として、エゾシカの捕獲のため、北海道研究林白糠区の土日・祭日（終日）の入林制限を実施

- (64) 2017年10月28日
瀬戸臨海実験所において、「瀬戸臨海実験所 施設見学会」を実施（京大ウィークス参加イベント・参加者18人）
- (65) 2017年11月3日
上賀茂試験地において「2017年度上賀茂試験地秋の自然観察会」を開催（京大ウィークス参加イベント・参加者33人・応募者139人）
- (66) 2017年11月9日
和歌山研究林において、有田川町立八幡小学校との共催で、総合的な学習の時間「森は友だち 森林の町清水」を実施（5年生11人・教諭2人）
- (67) 2017年11月16日
藤井佐織連携助教（森林育成学，白眉センター特定助教）が着任
- (68) 2017年11月17日
和歌山研究林が，株式会社マルカ林業丸山山林において，マルカ林業および和歌山市立野崎小学校との共催で，和歌山県紀の国森づくり基金活用事業「林業体験して森で遊ぼう」を実施（小学5年生42人，教諭5人）
- (69) 2017年11月27日～12月15日
芦生地域有害鳥獣対策協議会の活動の一環として，ニホンジカの捕獲を行うため，芦生研究林の平日午前9時まで（12月5，6日は終日）の入林制限を実施
- (70) 2017年11月28日
瀬戸臨海実験所において，自衛消防訓練を実施（教職員23人，白浜町消防署職員4人）
- (71) 2017年12月2日
上賀茂試験地において，平成29年度京都市青少年科学センター 未来のサイエンティスト養成事業秋冬期講座の小中学生に対して，講義と自然観察を実施 参加者19人
- (72) 2017年12月8～9日
京都大学 国際科学イノベーション棟で開催された「国内及び海外のフィールドを活用した研究教育活動に関する国際研究集会」のセッション3において，各施設における活動を紹介
- (73) 2017年12月23～27日
舞鶴水産実験所において，公開実習「博物館実習（館園実務）」を実施（教育関係共同利用拠点事業，他大学1人，全学共通科目「博物館実習（館園実務）」併催）
- (74) 2017年12月23～27日
舞鶴水産実験所において，全学共通科目「博物館実習（館園実務）」を実施（3人）
- (75) 2017年12月23日～2018年1月8日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において，冬休みイベント「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」「バックヤードツアー」を毎日開催（解説ツアー（一般126人），バックヤードツアー（小学生以上135人））
- (76) 2018年1月20～21日
北海道研究林標茶区において，標茶町教育委員会 しべちゃアドベンチャースクール ステージ6「冬の野外活動」を開催（北海道研究林共催） 参加者41人
- (77) 2018年2月8日
瀬戸臨海実験所が理学研究科セミナーハウスにおいて，久保田 信 准教授の「最終講義：不死のベニクラゲと早死のカイヤドリヒドラクラゲの生活史・生態・分類・系統について」を開催（参加者101人）
- (78) 2018年2月23日
舞鶴水産実験所において，福井県立大学とともに，合同セミナーを開催（30人）
- (79) 2018年3月2～6日
京都府立植物園において「芦生研究林の植物」写真展を共催。3月4日の講演会において，石原正恵准教授が講演
- (80) 2018年3月3日～5月30日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において，特別企画展「ガタガール生物展」を開催

- (81) 2018年3月12～16日
舞鶴水産実験所において、公開実習「若狭湾春季の水産海洋生物実習」を実施（教育関係共同利用拠点事業、特別聴講学生1人・一般聴講学生5人）
- (82) 2018年3月17日
おかやま未来ホールにおいて、第13回京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの挑戦－地球社会の調和ある共存に向けて【京大起春風】」
- (83) 2018年3月24～31日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において、「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」「バックヤードツアー」を毎日開催（解説ツアー（一般59人）、バックヤードツアー（小学生以上65人））
- (84) 2018年3月26～31日
瀬戸臨海実験所附属白浜水族館において、「大水槽えさやり体験」を月・火・水曜日に開催（小学生以上29人）
- (85) 2018年3月31日
久保田信准教授が定年退職，横山壽特任教授，吉積巳貴特定准教授，原村隆司特定助教（白眉センター），田城文人特定助教が任期満了退職，藤井佐織特定助教が辞職。

2. フィールド研の活動

(1) フィールド研2017年度の主な取り組み

1) 森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」

研究推進部門 連携准教授・森里海連環学教育ユニット 特定准教授 清水 夏樹

2017年10月28日（土）に、京都大学北部総合教育研究棟の益川ホールにて、森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」を開催しました。本シンポジウムは、京都大学森里海連環学教育プログラムをふりかえり、これから社会で活躍する人材が森里海連環学から何を学んだか、どのような経験を得たかを共有するとともに、「これから」のためのネットワークづくりを目的として開催されたものです。

朝から冷たい雨が降るあいにくのお天気でしたが、多くの方々がお越し下さり、115人の参加がありました。ヘッドセットによる英語の同時通訳もあり、シンポジウム全体が主に日本語で進められたものの、登壇者・会場参加者とも国際色豊かなシンポジウムとなりました。

プログラムは、まず、山下洋教授の基調講演「森里海連環学；森里海のもつれた三角関係を解く」から始まりました。日本の沿岸漁業漁獲量が1980年前後のピーク時から大きく減少したのはなぜか？その理由を、これまでの森里海連環の研究成果から解説いただきました。森里海連環学の発端となった「森は海の恋人」の紹介（畠山重篤社会連携教授も会場にお越しくださっていました！）、大分県の国東半島、京都府の由良川～丹後海などを対象とした具体的データから、水圏生態系を再生するために森里海連環学的重要性が示されました。

特別講演では、環境省自然環境局の奥田直久・自然環境計画課長より、『『つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト』について』と題してご講演いただきました。本プロジェクトは、森里川海の恵みの再生と循環、その恵みを支える社会をつくることを目指したプロジェクトです。全国で地域単位のプロジェクトが進められており、森里海連環学を学んだ学生の活躍の場になりそうです。講演の中では、これらの課題のために、技術、社会システム、ライフスタイルのイノベーションが望まれていることが紹介されました。そこで続いての特別講演として、「社会に新しい価値を生み出す：日本の「革新者」たちのキラースキル」と題して、齋藤義明・野村総合研究所2030年研究室長にご登壇いただきました。齋藤室長には、国内100人の革新者へのインタビューから導き出されたイノベーションのための5つのキラースキルと1つの裏スキルについて、具体的な事例をあげてご紹介いただきました。実践に向かってぐっと前進したくなるお話でした。

シンポジウム中盤は、教育プログラムのレビュー報告を行いました。まず、朝倉 彰・森里海連環学教育ユニット長より、5年間のプログラムの成果を、人材育成や同窓会活動など履修生・修了生に関する成果、また、森里海連環学を巡る国内外のネットワークの拡大などが紹介されました。たとえば、2017年4月までにプログラムに登録した履修生は9研究科から298人、修了生は現時点で141人となり、大学院修了後は、国内外の企業だけでなく、中央官庁や自治体、大学などに就職しています。補助を受けてインターンシップを実施した学生は97人、行き先は31カ国に上っています。益川ホール前のポスターセッション会場には、シンポジウムに都合で参加できない修了生・履修生から寄せられたメッセージも掲示されました。

会場の参加者全員での記念撮影の後、世界中から京都に再集合した修了生が登壇し、現在の仕事内容などの近況報告と、前日および当日の午前中に開催されたグループワークの報告がなされました。原田真実さん（経済産業省資源エネルギー庁）、Kaya Abdulgaffarさん（トルコ・南東アナトリア森林研究局）、Kieu Kinh Thiさん（ベトナム・ダナン師範大学）は、教育プログラムの講義や実習、他分野の大学院生との交流が現在の仕事に役立っていることを語ってくれました。グループワークの報告のうち、履修生を中心とした教育プログラムの成果の報告では、当日に発表者が急に変更になり、ピンチヒッターの農学研究科修士1年の世古将太郎さんが発表しました。CoHHOプログラムに参加して役立った経験について、個人、研究およびネットワークづくりの項目ごとに意見を出し合った結果の報告です。グループワー

クでも、インターンシップやグループディスカッション、フィールドワークを通してさまざまな人と交流できたこと、新たな視点、知識、スキルを獲得できたことがメリットとして挙げられていました。今後のCoHHO研究・教育・実践活動の展開については、橋口峻也さん（環境省）、Sandra Carrasco Manshilla Milenaさん（メルボルン大学研究員）、松本京子さん（東京大学生産技術研究所特任研究員）が各グループの代表としてグループワークの報告をしました。最後に、柴田昌三・副ユニット長がグループワークの感想を述べました。

クロージングセッションでは、インターンシップを受け入れている機関であるダナン大学のHoang Hai国際関係部長と環境NGOイカオ・アコの倉田麻里理事から、プログラムが目指してきたことやグループワークについてコメントをいただきました。続いて、本プログラム開講時の開講記念講演をしてくださったDenis Bailly教授からのビデオレターがとりやめになり、急遽、ベトナム・ダナン科学技術協会連合のHuynh Phuoc副会長からコメントをいただきました。Phuoc副会長は、森里海連環学の理念に深く共感し、森里海連環学をベトナムでの環境保全活動に導入しています。いずれも、環境問題の解決には森里海連環の考え方が重要であり、今後の研究の進展に大いに期待したい旨のコメントがありました。

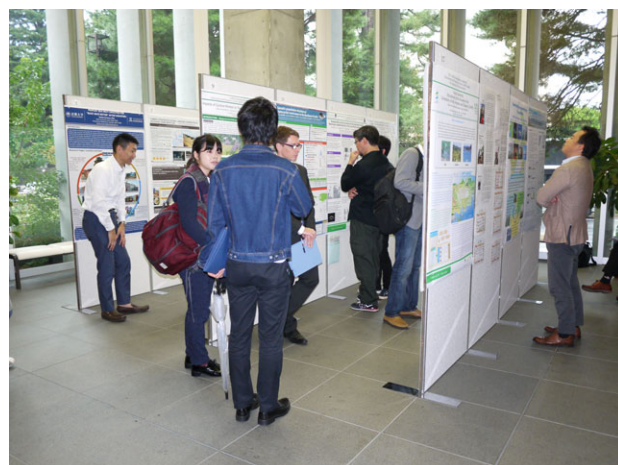
最後に、本プログラムの共同実施者である日本財団より、梅村岳大・海洋事業部海洋チームリーダーがコメントし、横山壽ユニット特任教授の閉会のあいさつでシンポジウムは閉会となりました。

本シンポジウムの一部は、京都大学のOCW（オープンコースウェア：インターネット上での無償公開活動）で公開される予定です。

（初出：森里海連環学教育ユニット活動記録 2017）



朝倉彰ユニット長による教育プログラム報告



ポスターセッション



集合写真

2) 京大ウィークス2017で5施設がイベント開催

社会連携委員会委員長 海洋生物環境学分野 准教授 市川 光太郎

京都大学には、北海道から九州まで全国に数多くの教育研究施設があり、それぞれの地域で「京都大学の窓」として親しまれています。京大ウィークスは、これらの施設における公開講座・施設公開等を一定期間に集中して実施するという、2011年からはじまった企画で、フィールド研でも多数のイベントを精力的に開催しています。

2017年度は、10月7日～11月11日の期間中に開催された26イベントのうち、5つがフィールド研の施設で開催され、延べ141人に参加していただきました。芦生研究林（京都府南丹市）では10月21日に、教員によるガイドツアー（原生林体験：上谷、森林軌道散策）、川魚調査体験、ミニ講義、資料館開放を、また、徳山試験地（山口県周南市）では10月14日に、周南市との連携公開講座として、原皮師（もとかわし）による檜皮（ひわだ）採取作業見学と教員による水質分析実習を実施しました。北海道研究林白糠区（白糠町）では10月21日、上賀茂試験地（京都市北区）では11月3日に、それぞれの教育研究や植生の特徴を活かして、林内を歩きながら教職員が開設する自然観察会を開催しました。京都大学白浜水族館を併設する瀬戸臨海実験所（和歌山県白浜町）では10月28日に施設見学会を開催し、観測船「ヤンチナ」でレーダーや魚探などの観測機器などを作動させ、採集の雰囲気を経験するとともに、坂田の鼻から、各種の観察研究を続ける島島の解説を行いました。それぞれ、天候の悪いところもありましたが、普段立ち入ることのできない森林や施設の中で、自然環境や動植物、最新の研究成果などについて、教職員がわかりやすく解説しました。なお、10月29日に和歌山研究林（有田川町）で予定していたミニ公開講座は台風22号の接近に伴い中止しました。

イベントは好評で、「日頃見る機会のないものを見られた」「解説がとても面白く、あっという間でした」「とてもよかった。勉強になりました」「大学の活動に興味があった」「京都大学の施設がこの場所にあることが理解できた」など多くの感想が寄せられました。



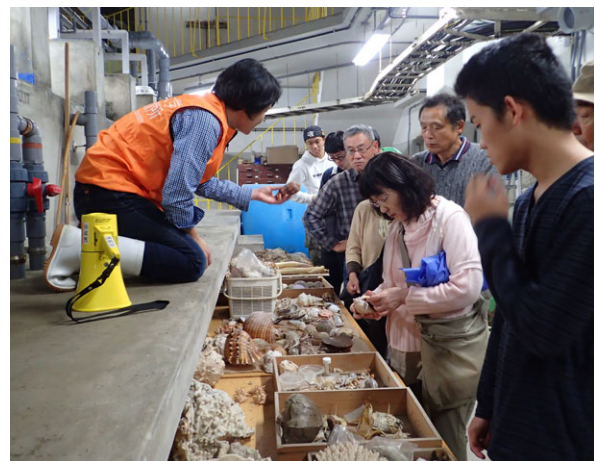
芦生研究林 一般公開：川魚調査体験



北海道研究林白糠区 自然観察会：センサーカメラの説明



徳山試験地 連携公開講座：檜皮採取の実演



瀬戸臨海実験所 施設見学会：水族館バックヤードでの標本の説明

3) 森里海連環学教育ユニット6年間が終了

森里海連環学教育ユニット 連携教授 横山 壽

フィールド研は、農学研究科、地球環境学堂・学舎、人間・環境学研究科とともに、環境問題に国際的に活躍できる人材育成を目的に、2012年4月、学際融合教育研究推進センターに「森里海連環学教育ユニット」を設立し、京都大学・日本財団共同事業「森里海連環学教育プロジェクト」を始めた。翌年4月に、京都大学の全ての大学院生を対象として、森里海連環学に基づいた「森里海連環学教育プログラム」を開講し、2018年3月末に共同事業としての教育プログラムを終えた。6年間の事業費総額は約6億3400万円であり、このうち日本財団が約6億円を助成した。事業の成果の概要は以下の通りである。

(1) 人材育成

- ・履修生の受入：298 人（9 研究科）（2013～2017）

- ・修了生：208 人（8 研究科）（2013～2017）

※内訳：農学研究科 61, 人間・環境学研究科 7, 地球環境学舎 133, 経済研究科 1, 工学研究科 3, アジア・アフリカ地域研究研究科 1, 公共政策大学院 1

- ・修了生の状況（2018.5 現在 修了生 208 人）：在学中 67 人, 就職等 141 人

※内訳：中央省庁 18（うち海外 6）, 地方自治体 8, 大学等教育機関 15（うち海外 7）, 日本企業 68, 海外企業 2, 国際機関 2（うち海外 1）, その他 28

- ・修了証を京都大学学際融合教育研究センター長名で発行（2016.3～）
- ・履修生のインターンシップ実施数：129 人（38 カ国）（2013～2017）
- ・履修生の国際学会発表数：54 人 63 件（2013～2017）
- ・英語スキルアップ講座の受講者 220 人

(2) 森里海連環学の普及

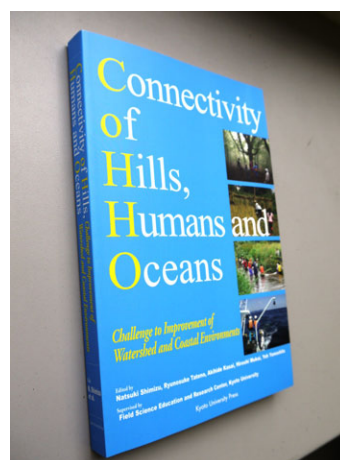
- ・森里海連環学に関する英語版教科書の出版
- ・「森里海連環学教育ユニット活動記録」（年 1 回）出版
- ・「インターンシップ・国際学会発表成果報告書集（年 1 回）」出版
- ・「森里海 NEWSLETTER」の発行（年 2 回）

(3) 森里海連環学研究の海外展開

- ・森里海連環学の立地に優れるベトナムでの拠点形成と研究交流の実施



修了式（2018年3月）



英文教科書

(4) 森里海連環学ネットワークの構築

- ・インターンシップ研修機関：38 カ国，95 機関
- ・森里海シンポ，国際シンポ，地域連携講座，森里海公開講座，NEWSLETTER/活動記録の発行
- ・森里海連環学国際シンポジウム参加者：19 カ国，188 人（2013）
- ・森里海シンポジウム参加者（メーリングリスト登録者数）：215 人
- ・学術協力覚書の締結：たねや，国連大学 OUIK

(5) 教育プログラムの効果の検証

- ・2017 年 10 月 27～28 日に，国内外で活躍する修了生に広く参加を求めて国際ワークショップを開催し，教育プログラムの効果を検証

(6) 同窓会活動による帰属意識の醸成

- ・帰属意識を高めるため同窓会を設置（2014 年 3 月）
- ・教育プログラム同窓会会員：208 人
- ・修了イベントなどスタディツアーの実施，フィールド実習のサポート
- ・NEWSLETTER/活動記録に修了生の動向を掲載

(7) 学部教育への貢献

- ・第 1 期事業で開講した，学部生を対象とした全学共通科目の森里海連環学関連科目 5 科目が，2016 年度から総合科学科目群を構成する一科目分野「森里海連環学分野」として認知



森里海連環学国際シンポジウム（2013年11月）



森里海連環の理論と実践（実習）竹林整備と竹加工実習
（近江八幡市 2015年7月）

4) 芦生研究林と上賀茂試験地における台風21号被害

芦生研究林・森林育成学分野 准教授 石原 正恵
上賀茂試験地長・森林育成学分野 教授 徳地 直子

2017年10月16日に発生した台風21号は、10月23日3時頃に大変強い勢力で静岡県に上陸し、9時に日本の東で温帯低気圧になった。各地で大雨と風速30m/秒を超える猛烈な風が記録され、西日本から東北地方の各地で河川の氾濫や土砂災害が発生した。芦生研究林および上賀茂試験地でも大きな被害がでた。

(芦生研究林)

芦生研究林が位置する美山町のアメダスでは23日午前2時30分頃に観測史上1位となる最大瞬間風速25.5m/秒を観測した。増水した美山川の氾濫により府道38号が美山町内久保で崩落しさらに道路上に倒木や土砂崩れが生じ、芦生を含む知井地区の集落が孤立した。特に、芦生では24日夕刻まで緊急車両も通行できない孤立状態が続き、一般車が通行できるようになったのは11月2日であった。停電は23日から24日夕刻まで続き、インターネットも携帯電話も通じなくなり、京大本部との唯一の連絡手段は固定電話であった。水道も取水口がつまり一時利用できなくなった。寒い季節で暖もとれず温かい食事もないなか、当時芦生研究林にいた教職員は、迅速な被害状況の確認と応急処置・復旧にあたった。

構内では、職員宿舎2棟、学生宿泊所、木材乾燥小屋、人夫小屋、休憩室、自動車庫庫、消防ポンプ庫の計8棟に被害があった。特に職員宿舎1棟、木材乾燥小屋、人夫小屋はトタン屋根の大面积が吹き飛んだため、室内に漏水し、内壁、天井、研究用機器、研究サンプル・調査機材、職員の家財が損傷した。被害の大きかった職員宿舎に居住していた職員一家は、真夜中に屋根が剥がれ飛ぶ音を聞き、飛散するがれきと暴風雨のなか、命からがら車庫に駐車していた自家用車内に緊急避難をし、眠れぬ一夜を明かした。当然宿舎は生活ができる状態ではなかったため復旧するまでの2ヶ月間、避難生活を余儀なくされた。構内の気象観測では最大風速5.4m/秒と京都府下での観測値と比べ小さかったにもかかわらず、被害が大きかったのは施設の老朽化が著しかったことが原因と考えられる。構内の復旧については、積雪期までに職員宿舎を含む5棟の復旧および応急処置を行った。復旧がすべて完了するのは2018年度の予定である。

林道では土砂崩れ、雨水や増水した川による侵食、落石、倒木が多数発生し、事務所から1km地点ですでに通行できなくなった。森林軌道でも落石により通行できなくなった。そのため、研究利用と予定していた実習は受け入れを中止せざるを得なくなった。すぐに林道復旧に取り掛かり、長治谷までの路線が応急的に開通したのは10月30日で、研究利用者の受け入れは11月2日から開始した。しかし、全線の復旧は雪解け後の4月であった。復旧に必要な重機を自己保有し常駐教職員がいたため、比較的早期に復旧することができ、研究・教育利用者への影響は最小限に留めることができた。



林道崩落（芦生研究林）



10号棟被害：トタン屋根が剥がれ飛んだ（芦生研究林）

林内の被害については倒木が全域で生じた。桝上谷生態系プロジェクト毎木調査区（6.3ha）全域を踏査した結果、風倒木は26本（本数被害率0.43%）で、尾根部のスギや谷部の広葉樹に被害が見られた（阪部 2017）。これは既存の風

倒被害事例と比べ比較的軽微なものと言える。しかし、野田畑谷の尾根部ではブナの倒木が多数見られ、ギャップが拡大したと考えられる。今後さらにギャップが拡大し、シカの過採食によって後継樹の更新が阻害され下層植生が衰退している現状では、土壌流亡や土砂災害の危険性が高まっていると危惧される。また大雨により河川では侵食が進行し、溪流沿いの一部の希少植物種への影響が指摘されている。

今回の台風では、備蓄水がなかったことなどの課題も判明し、今後の災害にむけて備えを充実させていくと同時に、依然老朽化している建物の改修や建替えなどの対策が必要である。

阪部拓海（2017） 「スギが優占する冷温帯天然林における2017年台風21号による被害～ 幹折れに対する腐朽及びクマハギの影響～」京都大学農学部卒業論文

（上賀茂試験地）

2017年の台風21号の被害は、上賀茂試験地ではおもに強風によるものであった。建物関係では、事務所の脇にあったヒマラヤゴヨウ（胸高直径64cm）が倒れ、事務所の屋根にかかったため、瓦がはがれるなどの被害が生じた。屋根に倒れたヒマラヤゴヨウは翌日（10月24日）自力で除去し、隣接する総合地球環境学研究所の構内に達した倒木は、10月26日に処理した。また、事務室屋根復旧工事（ヒマラヤゴヨウ撤去費含む）などへは災害復旧経費が手当された。

被害が特に甚大であったのは外国産マツの植林地であった。数にして327本（238.4m³）が被害を受けたが、ほとんどが植栽木であり、天然木で根返り被害を生じたものは1本（ヒノキ）だけであった。植栽木ではスラッシュマツやテーダマツ、ストロブマツといった種で風による根返り、幹折れ、かかり木などが数多くみられた。特に被害が大きかったのは2林班（30本、23.3 m³）、4林班（67本、50.8 m³）、11林班（28本、23.6 m³）、12林班（36本、35.4 m³）、13林班（53本、30.3 m³）であった。

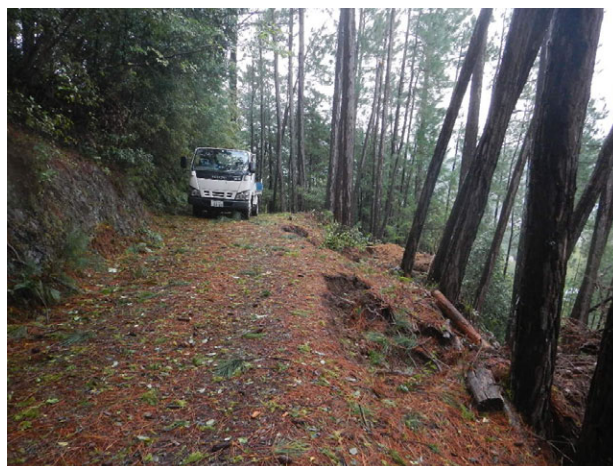
被害木のうち238本は年度内の3月15日までに処理が完了したが、残りのうち64本の処理は翌年度に持ち越されることとなった。屋根の倒木の除去などのように難易度の高い作業も自力で行うことができるが、今回の台風のように被害が甚大であると、職員の数が少ないことから外部に委託せざるを得なくなる。

植栽地の中にある自然観察コースも倒れた木によって通行が困難になり、実習などでのコースの変更を余儀なくされた。また林道脇の植栽木の根返りに伴って林道も一部崩壊し、林道・法面復旧などの工事を災害復旧経費で行い、3月2日に完了した。

台風で多くの植栽木が倒れ、植栽地にたくさんのギャップが形成された。このようなギャップは風などの被害を受けやすいと考えられる。外国産マツの植栽地は上賀茂試験地の特徴の一つとなっているものであるが、これまでもマツ枯れによって多くの被害があり、そのたびにギャップが形成されてきた。今回さらに風倒が生じ、植栽地のギャップが目立っている。今後の植栽地の管理方法なども検討が必要である。



風倒で講義室を直撃したヒマラヤゴヨウ（上賀茂試験地）



根返りにより路肩が欠損した林道（上賀茂試験地）

5) 和歌山研究林における精密森林情報整備と地域共同連携事業

和歌山研究林長／森林育成学分野 准教授 長谷川 尚史

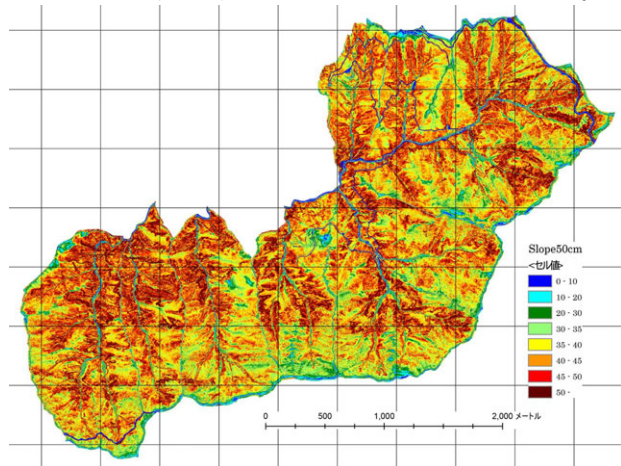
和歌山研究林は全面積842ha中、約450haが人工林であり、フィールド研の研究林・試験地のなかでは最も人工林率が高い。しかし多くが急傾斜地であるため、直営での搬出作業は一部に限定されている上、採算の合う形で搬出できる事業体も地域にはほとんどない。また近年は新植事業も行われてこなかったため、20年生以下の人工林はほとんど存在せず、学生実習等に適した小径木の確保が困難になってきている。さらに、現在の事務所および研究棟は仮事務所として林道沿いに移設されたプレハブであるため、大規模な学生実習等に供することのできる宿泊施設がない。これらの状況は、利用者数の低迷、事業費の減少、路網や施設の未整備、森林の手入れ不足といった悪循環を生む状況であった。加えて2011年の紀伊半島大水害で大きな被害を受け、2015年に災害復旧工事が完了するまで入林が不可能なエリアが多かったため、一時は利用者数が延べ232人にまで落ち込んだ。

こうした状況を打開するため、和歌山研究林では精密な森林情報の整備と地域共同連携事業の拡大を行い、利用促進と教育研究のための森づくりを推進している。森林情報の整備は以前から和歌山研究林が注力してきたもので、現在も林内140箇所箇所の固定標準地を維持し、教育研究に活用しているが、さらに高密度LiDARデータ(20点/m²)を取得し、50cmメッシュの微地形図のほか、スギ・ヒノキ造林木の単木データ(位置、樹高、推定胸高直径、推定材積等)等を整備した。現在はドローンを活用したデータ更新手法の開発等にも取り組んでいる。

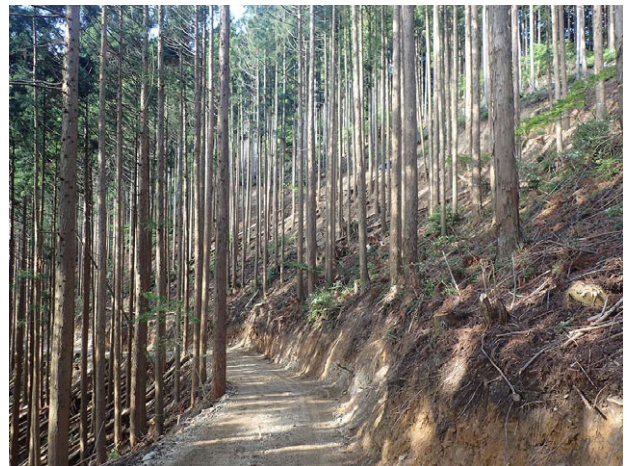
一方、2014年度には和歌山県立有田中央高等学校と高大連携協定を締結し、2002年に開始した清水分校3年生向けのウッズサイエンスや1年生向け森林ウォーク事業の充実を図った。ウッズサイエンスは1年間、毎週研究林等で森林に関する講義や実習を行うプログラムであり、修了生からは地域の森林組合等に就職する生徒も生み出している。2016年度の受講生も設立されたばかりの和歌山県農林大学校林業研修部に進学するなど、その成果は地域でも認知されつつある。また2015年度には、地域の森林資源の有効活用と森林の多面的機能の発揮を目的に、和歌山県・マルカ林業(株)と産官学連携協定を結び、木材収穫・共同販売・人材育成・森林環境教育等の検討と実践を行っている。この取り組みは、地域の森林管理主体者がそれぞれ個別に森林経営を行うだけでなく、森林管理の方向性を共有することによって、路網の共同利用や木材の共同販売、高能率な作業システムの導入を図るものである。同年、有田川町でも素材生産効率の向上と新たな需要の創出を目的とした林業活性化協議会が設立され、和歌山研究林も参画して、作業システムの改善や、地域の薪需要の掘り起こし、小規模木質バイオマス発電所の誘致などに協力している。

さらに、2017年2月には清水森林組合と共同森林整備協定を締結した。これは、和歌山研究林の森林を教育研究のために最大限機能を発揮させること、地域林業の持続的森林管理技術の向上に寄与することを目的とする協定で、具体的には和歌山研究林が一部の林班で策定した森林経営計画の実行のために、清水森林組合に協力の元、森林経営計画に沿った路網作設と間伐、研究利用者が安全に使用できる路網整備を実施するものである。この協定によって、従来は林内に放置せざるを得なかった間伐材が、奈良県の木質バイオマス発電施設で利用される効果も得られている。さらに直営による小面積皆伐による新植地の造成や路網作設なども再開しているところである。

これらの取り組みによって、徐々に地域全体の森林整備費用の低コスト化が進展し、これまで採算が合わず放置されてきた森林を教育研究のための森として再整備できつつある。整備が進むことによって、2017年度には利用者が豪雨災害前から倍増(延べ1,601人)し、上記の悪循環が解消されつつある。現状では大規模な学生実習が実施できるような施設整備は困難であるが、今後もこれらの取り組みを継続、拡大し、日本や世界の森林に関する教育研究に貢献できる施設としての機能を充実させていきたいと考えている。



LiDARデータから作成した傾斜図



協定によって整備された人工林と路網

6) 白浜水族館特別企画展「ヤドカリと貝殻」

瀬戸臨海実験所長・基礎海洋生物学分野 教授 朝倉 彰

特別企画展「ヤドカリと貝殻」を2017年7月8日から10月22日まで白浜水族館にて開催しました。ヤドカリ類は、甲殻類の中でも特に多様性の高いエビやカニの仲間である十脚類に属し、主として軟体動物の巻貝の貝殻を背負って生活する特殊な生態をもつ分類群です。瀬戸臨海実験所では、ヤドカリ類の分類学や生態学の研究を進めてきました。また白浜水族館では、南紀白浜にみられる様々なヤドカリ類を飼育展示しています。

世界で活躍する現代美術家のAKI INOMATAさんは、ヤドカリ、ミノムシ、インコなどの生物との協働作業によって、社会における様々な境界を問いかけるプロジェクトを展開しています。特に、3Dプリンタを用いて都市をかたどったヤドカリの殻をつくり実際に引っ越しをさせる「やどかりに『やど』をわたしてみる」という作品は有名で、今回もそれらの一連の作品を中心に展示がなされました。

この企画展では「ヤドカリと貝殻」に関する我々の研究成果とINOMATAさんのヤドカリ作品を、コラボさせることによって、エンターテインメント性の高い展示を制作しました。また実際にINOMATA作品を背負わせた生きたヤドカリを飼育展示しており、元気に動き回る様子を見ることができました。ヤドカリ類にとって貝殻は、魚や他の甲殻類の捕食から身を守るポータブルなシェルターで、そのおかげで、ヤドカリ類は捕食の危険にさらされることなく、昼間でも活動ができます。INOMATA氏は、この貝殻に自身のアート作品である世界の都市の建物を乗せたものを背負わせ、自然物と人工物の非調和が生み出す特殊な表現をすることによって独自の世界を形成しています。

熱帯に起源を発する人間は、文明の発達とともに、みずから築き上げた集落で安全に暮らすようになり、それが発展して現代の都市になりました。しかし一方、大都市で暮らす人間は、自然をもとめてそこに回帰しようとする心理が働くことがあり、ある意味これは当然の心理かもしれません。INOMATA作品の特殊な人工物を背負うヤドカリの姿は、現代文明の「都市」で生きる人間の生活のようでもあり、非常に象徴的です。

(初出：ニュースレター43号 2017年10月 を改編)



イシダタミヤドカリと「やど：中国」



展示の様子

(2) 全学共通科目

1) 2017年度における全学共通科目

教育プログラム委員会委員長／基礎海洋生物学分野 教授 朝倉 彰

2016年度から、全学共通科目の統合科学科目群の中に、新たに「森里海連環学分野」が開設され、フィールド研が従来から提供している以下の講義2科目と実習4科目が移行された。2017年もこの6科目が開講された。

少人数教育科目群の「ILASセミナー」は、2017年度には12科目が開講された。

博物館実習はキャリア形成科目群の「学芸員課程」の科目に位置付けられ、舞鶴水産実験所と瀬戸臨海実験所で開講されたほか、博物館実習（自然史）の一部を担当し上賀茂試験地で実習を行った。

フィールド研では、国際高等教育院が実施する授業評価アンケート（携帯端末から回答する）と同時に、各施設を利用する全学共通科目の実習においてアンケートを独自に実施し、121件の回答を得た。その結果、男女比は2:1、文理の学部比は約2:8で、おおよそ実習の内容に満足していることが分かった。実習の難易度は7～8割が「ちょうど良い」であった。実施期間についても約9割が「適当」と回答した。宿泊施設については、「快適」「普通」の回答が多数を占め、経費についても「普通」「安い」の回答が多かった。ただ、トイレが男女共用であることや乾燥機・ドア・シャワーなどの故障、実習の行程についての詳しい情報（荷物準備などのため）を事前にほしかったといった指摘があった。また実習が長引き、レポート作成が夜中まで渡ったと報告された。実習の感想として、「森里川海のつながりを実習を通じて身をもって感じた。」「話で聞いて理解はしていたが、実際に見て実感できたことがあった」「チェーンソーを使うことができて良かった」「生物をたくさん同定することで生物多様性を実感できた。」などが寄せられた。おおむね例年同様の評価であったが、設備管理や実習課題の分量などについての改善が求められる。

(講義・実習：統合科学科目群)

講義名	担当教員 *印はコーディネーター	形態	対象	開講期	単位
森里海連環学I：森・里・海と人のつながり	吉岡，山下*，徳地，清水	講義	全回生	前期	2
森里海連環学II：森林学	吉岡，徳地*，長谷川，伊勢，石原，中島，坂野上，中西，中川ほか	講義	全回生	前期	2
森里海連環学実習Ⅰ：芦生研究林－由良川－丹後海のつながりを探る	山下*，徳地，益田，伊勢，甲斐，坂野上，中西，鈴木，中川，澤田，田城	実習	全回生	前期集中	2
森里海連環学実習Ⅱ：北海道東部の森と里と海のつながり	吉岡*，館野，小林(和)，中西，中川ほか	実習	全回生	前期集中	2
森里海連環学実習Ⅲ：暖地性積雪地域における冬の自然環境	中島	実習	全回生	後期集中	1
森里海連環学実習Ⅳ：沿岸域生態系に与える陸・川・人の影響	朝倉*，久保田，大和，中野，後藤ほか	実習	全回生	後期集中	2

(講義・実習：キャリア形成科目群)

講義名	担当教員 *印はコーディネーター	形態	対象	開講期	単位
博物館実習（自然史）	寄元ほか	実習	3回生～	前期集中	2
博物館実習（館園実務）	朝倉，甲斐，大和，田城ほか	実習	3回生～	後期集中	1

(ILASセミナー：少人数教育科目群)

講義名	担当教員 *印はコーディネーター	形態	対象	開講期	単位
京都のエコツアーリズム－森での感動とは何か－	伊勢	ゼミ	1回生	前期集中	2
地域連環学入門	梅本	ゼミ	1回生	前期集中	2
北海道の森林	舘野	ゼミ	1回生	前期集中	2
森の創りだすもの	徳地	ゼミ	1回生	前期集中	2
京都の文化を支える森林－森林の持続的管理に関する地域の智慧と生態学的知見からのシナリオ作成	吉岡，徳地，伊勢，石原*，坂野上，中川	ゼミ	1回生	前期集中	2
瀬戸内に見る森里海連環	中島*，久保田，大和	ゼミ	1回生	前期集中	2
原生的な森林の働き	中島	ゼミ	1回生	前期集中	2
貝類の不思議	中野	ゼミ	1回生	前期集中	2
森を育て活かす－林業体験をとおして考える	長谷川	ゼミ	1回生	前期集中	2
環境の評価	吉岡	ゼミ	1回生	前期	2
南紀の自然史	大和	ゼミ	1回生	前期集中	2
森林河川調査入門	中川	ゼミ	1回生	前期集中	2

「フィールド実習“森は海の恋人”」「地域連環学入門」は，参加予定の学生の都合により不開講となった。

なお，フィールド研の非常勤講師として全学共通科目の講義の教員を担当していただいた方は，次の通りである。

全学共通科目における非常勤講師

森里海連環学I：森・里・海と人のつながり	畠山 重篤	(社会連携教授)
森里海連環学実習II	中山 耕至	(京都大学大学院農学研究科・助教) *
森里海連環学II：森林学	松下 幸司	(京都大学大学院農学研究科・准教授)
	東 若菜	(日本学術振興会 特別研究員PD (京都大学大学院農学研究科受け入れ))

(* 2017-03-08教授会において了承された)

2) 統合科学科目群 森里海連環学分野

①森里海連環学I：森・里・海と人のつながり

里海生態保全学分野 教授 山下 洋

フィールド研所属の4人の講師が、森林生態系、地域振興、環境の価値と住民の意識、河川と沿岸域の水圏生態系の4分野について講義を分担する形式とした。

4月14日から7月28日まで14回（7月28日はフィードバック）、吉田南総合館共北28号室（金曜日4限目14：45～16：15）にて開講した。対象は、文系、理系を問わず1回生から4回生までとした。成績は出席および各回の講義の最後に実施する小テストの成績を総合して評価した。

2016年度から全学共通教育のシステムが大きく改変され、その前年度まで例年60～90人程度の受講生であったものが、昨年度は28人に激減した。今年度は60人が受講し、また講義に参加した学生の多くは大変熱心であったことから、2016年度からの新制度が実を結び始めたのかもしれない。受講生の内訳は部学部、法学部、経済学部の文系が31人、理学部、薬学部、工学部、農学部、農学部の理系が27人、総合人間学部が3人であり、受講生はバランスよく文系と理系から受講していることがわかった。学年の分布を見ると、1回生が4割程度と従来（5-6割）よりも高学年の受講生が増えた。海に囲まれた森の国である日本は、森里海とそれらをつなぐ河川で特徴づけられる国土であり、持続的な我が国の未来のために環境や生態系の保全に興味を持ち、森から海までの複合した生態系と生態系サービスについて、自然科学と社会科学の両面から広い視野で学んで頂きたい。

実施した講義の構成

1. 4月14日	「森は海の恋人」と森里海連環学—畠山重篤氏を迎えて—	山下 洋
2. 4月21日	森里海連環学の概要（沿岸域の重要性）	山下 洋
3. 4月28日	川の生態系と	山下 洋
4. 5月12日	里海と沿岸域生態系	山下 洋
5. 5月19日	日本の森林の特徴と現状	徳地 直子
6. 5月26日	森林生態系の生態系サービスとこれからの森林	徳地 直子
7. 6月2日	森林から川を通じた海への物質移動	徳地 直子
8. 6月9日	日本の里域生態系と農業・農村	清水 夏樹
9. 6月16日	森里海の資源と産業振興	清水 夏樹
10. 6月23日	森里海の資源と暮らしの維持	清水 夏樹
12. 6月30日	環境の価値と生態系サービス	吉岡 崇仁
12. 7月7日	人間自然相互作用	吉岡 崇仁
13. 7月14日	森林に関する社会調査事例	吉岡 崇仁
14. 7月21日	沿岸域に対する陸域の影響	山下 洋
15. 7月28日	フィードバック	



畠山社会連携教授



清水特定准教授

②森里海連環学II：森林学

森林育成学分野 教授 徳地 直子

森林は我が国の国土の7割を占め、私たちの環境の主要な構成要素である。また、そのうちの4割は人工林であり、人間活動と森林の関係は非常に重要なものとなっている。この講義では、森林について、森林をとりまく社会情勢、林業の現状、森林の生態学的把握、森林の生み出す機能、森林をよりよく利用するための方策など、多方面から森林を解析し、総合的に森林に対する理解を深めることを目的としている。講義の形式は、森林を考える場合、自然科学の面のみならず、林業などを含んだ人間とのかかわりを考えることが欠かせず、他分野にわたるため、各分野の専門の教員によるリレー講義としている。本年度は、各講師によりテキストが作成され、講義資料として学生たちは事前に学習ができるように工夫された。

講義では、まず、石原正恵准教授により日本の森林植生の特徴が紹介された。中島皇講師からは森林と水・土(2回)の関係について述べられた。次いで、伊勢武史准教授より、森林生態系炭素循環について紹介され、徳地直子教授より窒素およびその他の物質循環についての検討が加わった。さらにこれらの知識をもとに、森林生態系の創り出す生態系サービスについて紹介した。本年は、昨年度まで特定助教としてフィールド研に所属されていた東若菜先生に特別講義をお願いし、植物についての基礎的な講義をしていただいた。東先生は樹にロープをかけて樹冠にアクセスし、サンプルを採取するという独自の手法で得られた樹木の水利利用についての最新の知見を紹介され、学生の理解が深まったようだった。次いで、中西麻美助教からは樹木の一次生産について、特に花粉症の問題をいれて総合的な説明がなされた。中川光特定助教からは森林生態系との連環において成立している河川生態系の紹介がなされた。このような多様な生態系を包括的にとらえて、吉岡崇仁教授が森林を流域の中で位置付け、流域と環境に対する意識についての講義がなされた。さらに森林と人間とのかかわりの上で重要な森林政策について、農学研究科森林・人間関係学の松下幸司准教授が講義されたのち、森林資源の利用について林業機械などを含め長谷川尚史准教授による講義があり(2回)、坂野上なお助教により木材の消費・流通システムが考察された。以上のように、最後に専門の異なる複数の教員によるリレーの形式で、森林の持続可能な利用についての総合的な講義が行われた。



長谷川尚史准教授による講義



長谷川尚史准教授による講義

③森里海連環学実習I：芦生研究林－由良川－丹後海のつながりを探る

里海生態保全学分野 教授 山下 洋

京都府の北部を流れる由良川は、芦生研究林を源流とし若狭湾西部の丹後海に注ぐ。本実習では、森林域、里域、農地、都市などの陸域の環境が、由良川の水質、生物多様性、沿岸域の生物環境にどのような影響を与えているかを分析し、川を通した森から海までを生態系の複合ユニットとして、科学的に捉える視点を育成することを目的としている。今年度は15人（本学10人；農学部5人，理学部1人，医学部1人，工学部1人，文学部2人，他大学5人；東京農工大学2人，京都学園大学2人，宮崎大学1人）の学生が参加した。日程は以下の通りである。

- 8月6日（日） 京都大学（吉田キャンパス）集合後実習概要と安全に関する講義，芦生研究林へ移動して午後は研究林長治谷周辺で森林観察，由良川源流調査，夜は研究林の概要についての講義
- 8月7日（月） 由良川上流～下流までの河川調査（水質，生物，流域景観），舞鶴水産実験所にて水質分析
- 8月8日（火） 午前中は由良川河口，神崎浜調査，午後は舞鶴水産実験所にて，生物の分類，水質分析
- 8月9日（水） 舞鶴水産実験所において，生物の分類，消化管内容物分析，水質分析，データ解析とまとめ
- 8月10日（木） 舞鶴水産実験所において，データ解析とまとめ，レポート作成，報告会，その後京都大学（吉田キャンパス）へ移動し解散

実習の内容は、芦生研究林における森林構造観察、鹿による食害の影響やナラ枯れ被害木の観察、土壌調査、由良川に沿って芦生研究林内の源流域から美山、和知、綾部、福知山を経由して丹後海に注ぐ河口域までの水質（水温、塩分、電気伝導度、溶存酸素、COD、硝酸態窒素、亜硝酸態窒素、リン酸態リン、珪酸、懸濁物質）調査、魚類、水生昆虫、プランクトン、底生動物などの水生生物の採集調査および土地利用様式の調査である。調査地点を、芦生研究林長治谷の由良川源流、森林域を流れる上流（美山川）、大野ダム湖、中流（和知）、農業地帯を流れる犀川合流点、市街地を流れ下水処理場排水が流入する和久川合流点とした。これらのフィールド調査を通して、森林、水田、耕地、都市などの流域の土地利用や河川を横断する構造物であるダムが、水質や水生生物の群集構造にどのような影響を与えているかを解析した。今年度は、水質班、プランクトン班、ベントス班、魚類班、の4班に分けて得られたデータを解析した。水質班は栄養塩の組成から基礎生産の制限要因、プランクトン班は大野ダムの放水と珪藻の生産の関係、ベントス班は水質と水生昆虫の組成、魚類班は過去のデータとの比較から種組成を決める環境要因、などに焦点を当ててデータ解析と考察を行った。実習を通して安全の確保、森林観察、マイクロバスの運転、調査地の草刈り、栄養塩の分析などを担当くださった技術職員の皆様に感謝申し上げる。



美山川での水生生物の採集調査



水質分析（舞鶴水産実験所）

④森里海連環学実習II：北海道東部の森と里と海のつながり

森林情報学分野 教授 吉岡 崇仁

森里海連環学実習 II は、京都大学フィールド研の北海道研究林標茶区と北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの厚岸臨海実験所を拠点として、京都大学と北海道大学が共同で実施するものである。

【受講生】計 18 人 京都大学 理学部 2 人、農学部 4 人、医学部 1 人、計 7 人

北海道大学 理系総合 7 人、工学部 1 人、農学部 1 人、水産学部 2 人、計 11 人

【担当教員】吉岡崇仁・館野隆之輔・小林和也・中川光・中西麻美（京大フィールド研）、中山耕至（京大農学研究科）、仲岡雅裕・柴田英昭・福澤加里部・伊佐田智規・頼末武史（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）

【日程】2017 年 9 月 1 日（金）～ 7 日（木）

9 月 1 日 実習生集合、ガイダンス、安全教育、講義、樹木識別実習

9 月 2 日 天然林毎木調査、昆虫相調査、土壌調査、講義、データ解析

9 月 3 日 パイロットフォレスト視察、牧草地土壌調査、水源域調査、樹木実習

9 月 4 日 別寒辺牛川の水生生物実習、講義、水質分析実習

9 月 5 日 厚岸湾および厚岸湖の水質・水生生物調査、レポート作成、グループ発表準備

9 月 6 日 グループ発表準備、愛冠自然史博物館見学、グループ発表、レポート作成、アンケート

9 月 7 日 レポート提出、解散

受講生は、4～5 人で「森班」、「里班」、「川班」、「海班」の 4 班を構成した。京都大学北海道研究林標茶区では、代表的な樹木の枝葉資料を用い、樹木検索図鑑による樹木識別法を学んだのち、天然生林の尾根と谷部のプロット（20×10m）に分かれて胸高直径と種類を記録した。尾根と谷部で種組成が大きく異なり、環境の違いを反映することを学んだ。ライトトラップを複数箇所に設置し、捕獲された昆虫を同定し、周辺の森林環境と捕獲された昆虫の種類や個体数との関係を考察した。また、調査プロット近くで土壌断面を作成し土壌層の調査を行った。尾根部の土壌断面では、火山灰の堆積と土壌形成プロセスの進行状況、谷部では、土壌中に見られる褐色斑紋の形成過程について考察した。その後、北海道研究林で取り組んでいるカラマツ人工林の間伐・皆伐・植林実験地を視察し、間伐による人工林環境の改善効果などについて学んだ。水質調査については、水生生物調査地点で採取した河川水と湧水を試料として、簡易比色分析法（パックテスト）と携帯型イオンクロマトグラフィーを併用して分析の原理と実際の試料測定を学んだ。

別寒辺牛川および厚岸湖における水生生物実習では、河川の上流と下流、集水域の環境の違い（森林 vs. 牧草地）などによる水生生物相や魚類の消化管内容物の違いを調べ、さらには別寒辺牛川の流入する厚岸湖と厚岸湾のアマモ場で生物採集を行い、食物連鎖について考察した。

また、厚岸湖と厚岸湾の数地点で採水した試料について、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所において、有色溶存有機物の光学特性に関する分析実習を行った。

実習生は、森林での毎木調査・土壌調査や水生生物の調査結果に関するレポートを作成した。また、愛冠自然史博物館の講演室で、本実習で得られたデータや知見に基づき、「森」「川」「里」「海」の各班それぞれに異なる場の視点から森里海の連環について考察しグループ発表を行った。毎年班ごとに特徴のある発表が行われてきたが、今年度は、里班が演劇風の発表を行い、とてもユニークな発表会となった。配役間のやり取りがとてもおもしろく楽しめる発表であったが、その一方で、やり取りの内容は、自然と人間の連環の本質をついた発表であり、実習に相応しいものと高く評価された。その他の班の発表も、それぞれ特徴があり、例年以上の内容だったと考えられる。

実習に当たっては、両大学のTAならびに両施設の技術職員はじめ多くのスタッフの協力により、効率よくまた安全に実施することができました。ここに記し、お礼申し上げます。



湿地林での土壌調査（地下水が上がってきた）



厚岸湖における水生生物調査（沖にはカキ棚）

⑤森里海連環学実習III：暖地性積雪地域における冬の自然環境

森林情報学分野 講師 中島 皇

実習(全学共通科目の後期集中講義)は2018年2月9～12日に3泊4日の日程で行われた。テーマは「暖地性の積雪(山間)地域における冬の自然環境を体感する。雪氷調査法(入門)を習得し、水が態を変えた雪や氷について理解を深めその影響を考究する。特に人間をはじめとする生物への影響をフィールドで実感する。」(シラバス)である。

この冬は、積雪はそれ程でもないが、かなりの冷え込み。面白い「固体の水」の現象が期待出来る。定員15人に対して、補欠番号を準備しなければならないほどの人気。参加予定者は14人(文学部生1(1),教育学部生1(1),工学部生6(2),農学部生5(2),総人学部生1(1):カッコは女子(内数))であったが、農学部的女子学生がインフルエンザのためにキャンセルした。TAは森林育成学研究室M2の女子院生(大牟田市出身:昨年も経験あり)とM1の男子院生(東京都出身)である。兩人とも芦生研究林で自身の調査を行うことがある。

また実習を始めて以来毎年参加の努力をしてくれる生態研の福島研究員と森林情報学研究室B4と大阪教育大学B4の男子学生も調査隊として加わり、十分に充実したスタッフとなった。

集中実習の参加体験記は京都大学新聞第2601号(2018年4月1日)に掲載されているのでそちらを参照頂ければ幸いである(細かい点では間違いがある(裏をとっていない。))が、上手くまとめられている文章である)。



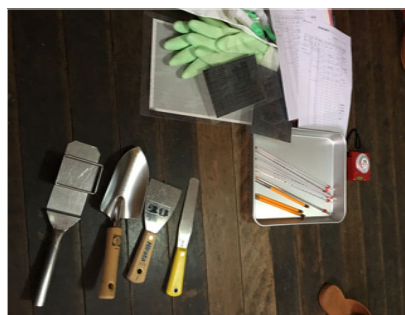
由良川にある沈下橋(場所:中)



足慣らし中の休憩



滝の傍に見られた「しぶき氷」



積雪調査の道具



積雪調査風景



班毎に調査結果を検討中

⑥森里海連環学実習Ⅳ：沿岸域生態系に与える陸・川・人の影響

基礎海洋生物学分野 教授 朝倉 彰

日本の国土を代表する豊かな森と多様性に富んだ海は、川で不可分につながり、「森が海を育み、海も森を育む」関係にある。しかし人類の経済効率最優先のふるまいによってこの連環は著しい影響を受け、森の破壊が海を著しく汚染している。沿岸域は海岸線を挟んで海と陸とがせめぎ合っている場所であり、そこに住む海の生物が形作る生態系には、陸域やそこに住む人間、また山から注ぎ込む川の影響が顕著である。

瀬戸臨海実験所は紀伊半島南西部に位置し、黒潮の影響から海洋生物の多様性が非常に高い。特に実験所北側に広がる田辺湾は、様々な底質環境が見られると共に、大小いくつかの川が注ぎ、田辺市・白浜町という小都市が面していて、河川の影響も大きい。そこで本実習は、こうした立地条件を生かして、河川から海にいたる様々な場所の生物とその環境条件を調べることによって、森里海と連環と生物の棲み分けについての理解をすることを目的とした。

参加は全学共通科目としての本実習で12人、抱き合わせの公開臨海実習（沿岸域生態系多様性実習）として9人（東邦大1、京大4、広大1、鹿児島大1、水産大1、熊本県1人）であった。

野外の実習場所として、和歌山県田辺市、上富田町、白浜町を流れる富田川およびその支流の高瀬川、そしてその川が注ぎ込む田辺湾を選んだ。高瀬川において、上流、中流、下流のマクロベントスを採集し、環境条件としての水質の調査を行った。また高瀬川河口域にほど近い対の浦での磯での調査を行った。高瀬川で採集された生物の大半は水生昆虫（幼虫）で、ほかに淡水エビやハゼなどの魚が採集された。また河川と海を行き来する回遊性のエビも採集された。河口域では汽水・干潟性のカニや軟体動物が多く、対の浦では紀伊半島の岩礁で典型的に見られる軟体動物、甲殻類、棘皮動物が見られた。河川から海洋にいたる環境条件の変化とそれにとまう生物相の変化について、議論を行った。



高瀬川上流での実習調査



河口域における調査実習（内之浦）

3) キャリア形成科目群 博物館実習

①博物館実習（自然史）

森林情報学分野 助教 寄元 道德

本実習は、「博物館」に収集・保管されている自然史標本資料の機能を理解するために、動物園、植物園、水族館などで収集・管理されている自然史標本資料の取り扱いや利用法の状況などを見学する一方で、それぞれの施設で行われている社会教育・研究活動を知ってもらおうとするものである。毎年、5部局（理学研究科、農学研究科、博物館、野生動物研究センター、フィールド研）の教員がリレー講義方式で計10回実施している。その中で、マツ属をはじめとする外国産針葉樹を多数植栽し植物園的な面を有している上賀茂試験地では、「上賀茂試験地の見学実習」という内容で実習が行われており、2017年度は、5月12日に、総合人間学部1人、理学部1人、農学部4人、理学研究科4人の計10人の出席を得て、実施された。

当日は、見学実習に先立ち、フィールド研と試験地の概要、京都市周辺と上賀茂試験地内の森林の特徴、マツ属や針葉樹の多様性と系統についての講義を行った。博物館運営に関わっていく際には、ふつう、各々の博物館が置かれている地域の自然史などの理解も必要となる場合が少なくないが、試験地内にある二次林と樹木を観察する一方で、それらの特徴、京都盆地の地域性など自然史的側面について学んだ。また、植栽されているマツ科やヒノキ科などの多種多様な外国産針葉樹のコレクションを見学する一方で、多数植栽されている見本林の維持管理や近縁種見本樹の維持の難しさなどについても学んだ。さらに、標本館に保存されているマツ属の球果や多くの針葉樹の材なども見学した。

見学終了後にレポートを課したが、普段何気なく眺めている京都市周辺に広がる二次林の理解が深まったこと、多種多様な針葉樹コレクションの多さの驚き、多様な近縁種を維持管理していくことの難しさ、などを認識したことが、昨年と同様に書かれており、多少の効果はあったようだった。



遠くに比叡山を望みながら

②博物館実習（館園実務・舞鶴水産実験所）

里海生態保全学分野／舞鶴水産実験所 助教 甲斐 嘉晃

特定助教 田城 文人

舞鶴水産実験所には博物館相当施設である水産生物標本館があり，ここを拠点として12月23日から27日という日程で博物館実習（館園実務）を行った。なお，事前・事後学習は総合博物館の岩崎教授の指導を仰いだ。本実習は，教育関係共同利用拠点事業の公開実習とし，京都大学だけでなく他大学生の受入も行った。昨年度は受講者が少なかったが，今年度は京大生3人と他大学生（筑波大）1人の合計4人で，定員の5人に近い数となった。

23日に東舞鶴駅に集合し，当日は標本を保管する意義などについての解説や水産生物標本館の見学を行った。翌24日には京都府漁協を訪ね，定置網の選別作業を見学した。そこで水揚げされる魚から標本サンプルを頂き，魚類標本の作成法や展示・解説の方法を学んだ。25日は舞鶴水産実験所とも研究協力体制のある宮津エネルギー研究所（魚っ知館）を訪問し，魚類の展示方法や希少魚類の育種・保全について知識を深めた。26日は天候に恵まれたため，午前中に教育研究船・緑洋丸に乗って舞鶴湾内で海洋生物の桁網を用いて採集し，それぞれの分類群ごとによった標本作製方法を学んだ。午後には，ほかの博物館との標本の貸し借りについて実習し，実際に海外の博物館から届いた標本を使った作業も行った。27日最終日には，標本の配架作業などを行い，また実習全体を通したまとめを行った。

今年度は前半に天候に恵まれたこともあり，生鮮な生物サンプルを用いた標本作製などが比較的順調に行えた。短期間ではあったが，当初目標としていたフィールドから博物館に至るさまざまな作業を体験することが出来たのではないかと感じている。



魚類標本の写真撮影



標本室の見学

③博物館実習（館園実務・瀬戸臨海実験所）

基礎海洋生物学分野 助教 大和 茂之

2017年の全学共通科目の博物館実習（館園実務）は、10月16日（月）から20日（金）までの日程で、瀬戸臨海実験所で実施された。参加者は、理学部と農学部と理学研究科から各1人ずつの3人であった。瀬戸臨海実験所では、学芸員資格修得を希望する学生を対象に、以前から博物館実習を水族館で行ってきたが、近年は京大生の受講はなかった。京大生向けの実習としては、今回は昨年に続いて2回目の実施であった。

京都大学の全学共通科目として実施するにあたっては、水族館における実習に加えて、自然博物館に関する講義（朝倉彰担当）と、動物分類学の研究標本（模式標本を含む）の取り扱いに関する実習（大和担当）などを追加している。水族館の実習は、飼育担当の技術職員（加藤哲哉，原田桂太，山内洋紀）が担当した。

水族館における実習では、海洋生物の飼育・展示に関する作業全般を、実際に体験させた。項目としては、開館準備、餌の準備、飼育生物への給餌、機械の点検、濾過槽の管理、展示生物のチェック、展示解説の作製、ホームページの更新、閉館作業など、朝の8時から夕方5時まで、飼育担当の技術職員と同じスケジュールで、作業を行った。また、水族館から出て、白浜駅に展示している水槽のメンテナンスや、野外での魚類の採集も行なった。採集では、釣り具の準備から、種の同定・記録、水槽への収容までを体験した。かなり体を動かす作業が多いので、普段デスクワークを中心としている学生には、多少きつかったようであるが、多様な生物に触れつつ、水族館の作業を一通り体験することが出来て、充実した日程であったようである。

初日の講義では、日本の博物館の現状とともに、実際に訪問した世界の博物館の紹介を交えながら、自然博物館の概要を説明した。

最終日には、瀬戸臨海実験所が所蔵する海産無脊椎動物の標本について、実習を行った。研究標本は、特定の日時と場所で採集されて、特定の研究者に研究された唯一のものであり、論文などの記述やデータの証拠となるものである。特に模式標本は、新種として発表されたときに、指定された標本であり、国際的にも保存が義務付けられている。このような標本を保存・管理することの意義について学んでもらうとともに、データベース化の作業の一端を体験してもらった。

水族館の年間スケジュールの都合で、本年度は10月の中旬にしか日程が取れなかった。そのために、10月初旬にガイダンスを実施して、すぐに実習となった。水族館の作業では、手取り足取りの説明が必要なため、受け入れ定員が最大3人までとなっている。日程調整や事前の準備なども大変ではあるが、京都大学における博物館相当施設の一つとして、今後も貢献していきたい。



バックヤードでの生物への給餌



標本のデータベース化作業

4) 少人数教育科目群 ILASセミナー

①京都のエコツーリズムー森での感動とは何かー

森林育成学分野 准教授 伊勢 武史

1. 本授業の趣旨

京都の歴史的・文化的繁栄の基盤として、自然環境との共生と持続可能な利用の果たしてきた役割は大きい。京都をとり巻く森林は、木材・燃料・食料の供給源であるとともに、京都に生きる人々の文化的・精神的幸福にも貢献してきた。現在においても、新緑や紅葉など京都の自然の人気は非常に高い。今後の京都のビジョンを描くうえで、市街地や史跡の観光だけではなく、エコツーリズムなど京都をとり巻く自然と人々のかかわりについて具体的に構想することは欠かせない。この授業では、森林が現代人の精神的幸福に貢献するメカニズムを探る。従来の「自然保護ありき」で語られる環境保全ではなく、進化生物学や心理学などの客観的な視点から、人々が森を心地よく思い、愛し、敬う感情とは何か・その感情はいつどこで生じるかを考える。

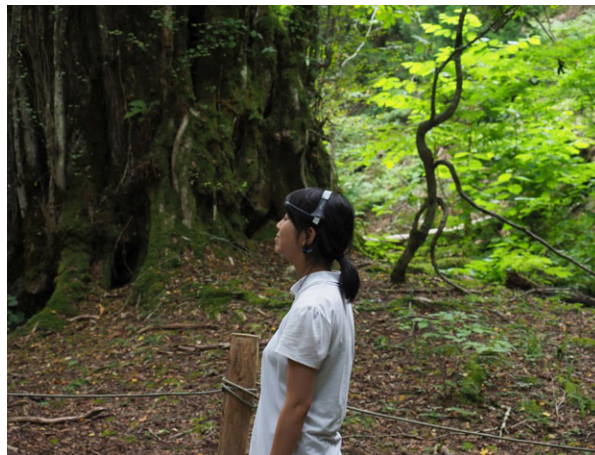
2. 授業の概要

この授業の到達目標は、京都を取り巻く自然の価値について、特に文化的生態系サービスについての知識を得、また実際に観光客に人気の森林環境を体験することで、エコツーリズムが果たす役割とは何か、今後の社会にどのような貢献を果たすかを考えることである。実習では、仮説を立て、調査によって検証し、考察するというプロセスを体得する。その結果として、森で生じる感動とは何かを考え、人にとってそれがどのような意味を持つかを分析する経験を積む。特に今年度は、ポータブル脳波計を用いた実験を企画し、学生自身が森での感動を客観的・定量的にとらえることを目的とした。

3. 授業内容

吉田キャンパス北部構内の農学部総合館 N283 号室において、講義および実習の説明会を7月19日に実施した。その後、9月5日から9月7日の3日間、京都府北部に位置する京都大学芦生研究林でフィールド学習を実施した。フィールド学習は、前半は講義、後半は実習で構成された。講義では、まず京都の人々と自然のかかわりを歴史的コンテキストと現代の環境問題を通して学んだ。次に、来訪者が森に抱く感覚を知るため、芦生研究林の来訪者へのアンケート調査・聞き取り調査の結果について、また森林の美的価値について芸術家による芦生研究林の体験談と制作物から学んだ。人間の心理を形づくる要因を知るために進化生物学・進化心理学の基礎も学んだ。

実習では、人間にとって自然の果たす目的は何かを、仮説を立て、調査によって検証し、考察するというプロセスを踏んだ。学生はグループごとに、来訪者にとって自然のもたらす精神的・文化的効果を明示的・定量的に調べ、森に対する気持ちについての普遍性や法則性を探った。指導教員はそれぞれの仮説の設定や研究手法、結果の解析を密接に指導した。特に今年度は、森林内で植物を観察する、溪流水に触れるなど、特定の行動がもたらす心理的効果の定量化を行った。



芦生研究林の下谷で、自然体験の心理的効果を脳波から推定する

②北海道の森林

森林環境情報学分野 准教授 舘野 隆之輔

北海道研究林を使った少人数向けの ILAS セミナー「北海道の森林」を8月5日から8日にかけての3泊4日で行ったので報告する。ポケゼミから ILAS セミナーへと名称が変更して2回目の開講で、ポケゼミから数えて今年で6回目の開講である。10人の募集に対して、参加学生は、法学部1人、理学部2人、医学部1人、工学部2人、農学部2人の計8人であった(2人は登録辞退)。今年度も受講者は抽選があったようであるが、2人が登録辞退した。

また昨年度から北海道研究林の教育関係共同利用拠点の採択に伴い公開森林実習2を開講することになり本セミナーと同時開講し、東京医科歯科大学、京都府立大学、鳥取環境大学からの参加者3人を加えて学生11人で実習を行った。担当教員2人に加えて、北海道研究林職員9人とTAの修士学生1人で指導を行った。

本セミナーは、北海道の森林・湿原の生態系や人と自然の関わりについて森林調査や森林作業などの野外体験を通して理解を深めることを目的として毎年行っている。実習では、緯度や標高、林内の光環境、湿地、火山ガス噴出孔などの自然環境下で環境条件の傾度に対して植生がどのように変化するかを簡単な調査や観察から学んだり、間伐体験で森林作業を学んだりした。

到着した日は、ガイダンスや植生に関する講義、切り枝を使った樹木識別実習を行った。2日目は、皆伐跡地やカラマツ人工林、不成績造林地のササ原、ミズナラ天然林など様々な植生タイプにおいて、光環境の測定や植生調査を行った。2日目は、北海道研究林内のアカエゾマツ人工林においてチェーンソーを用いた間伐体験を行った。例年通り、間伐の前後に林内光環境を測定と植生調査を行い、間伐が林内の光環境に与える影響について調べた。その後、野外に自生する樹木を対象に樹木識別の実習を行った。最終日は、摩周湖・硫黄山を見学し、火山活動により出来た地形や植生を学んだ。川湯硫黄山では、アカエゾマツ林からつつじヶ原自然探勝路を歩き、火山ガス噴出孔に近づくにつれて変化する植生を観察した。その後、釧路湿原の温根内木道を散策し、湿原の植生について学んだ。温根内ビジターセンターがリニューアルオープンした最初の訪問であった。

今年は、珍しい植物の写真を「インスタ映え、インスタ映え(2017年流行語大賞)」と言いながら撮影する植物好きの学生(本人はインスタはやっていないらしいが)がおり、北海道の自然を楽しんでいたようである。この言葉が、いつまで流行るかは知らないが、北海道の最高の自然やほかにはない貴重な体験ができるこのILASセミナーをフォトジェニックなセミナーとして売り出してみるのも悪くないのではと考えた今年のセミナーであった。



初めてのチェーンソー



間伐作業(列状間伐)を終えて

③森の創りだすもの

森林育成学分野 教授 徳地 直子

森は有形・無形のさまざまなものを私たちにもたらしてくれるが、森の実際の姿や森の作り出す機能の創出のためにどのようなしくみがあるのか、よく知っているとはいえない。この ILAS セミナー“森の創りだすもの”は、森に入っ
て、森にふれ、さまざまな森の性質をとらえることを目的としている。

そこで本実習は上賀茂試験地と芦生研究林において夏季休業期間（8 月 17～19 日）に行った。芦生研究林は京都から約 1 時間半と比較的都市に近いにも関わらず自然にめぐまれた地域で、関西随一の流域レベルでの天然生林の残った森林として知られている。そこで本年は、まず上賀茂試験地において我が国に多くみられる人工林を見学し、人工林との比較において天然生林の特徴について、生態学的にとらえることを目標の一つとした。

第 1 日目

上賀茂試験地に集合し、里山として使われてきて、現在はマツを中心とする外国産樹種の試験地となっている様子を見学した。その後、迎えに来ていただいたバスに乗り、芦生研究林に入った。研究林では、事務所の横の由良川において、河川を観察し、さらに、森林軌道に沿って森林観察を行い、人工林の姿について把握し、熊はぎ除けのテープ処理などから芦生の人工林がかかえる問題について考えた。また、廃村となった灰野の集落跡などを見学した。夜は、芦生研究林に関する説明を聞いたのち、森林河川の水質形成や林業経営について研究している院生からの研究紹介などの講義も受けた。

第 2 日目

芦生研究林杉尾峠から長治谷まで林内を散策し、森林生態系の様子を観察するとともに、樹木の識別を行い、植生の分布と森林生態系の特徴について学習した。前日に見学した人工林と比較して、天然生林の特徴を実感したようであった。そこから、人工林を管理することの重要性を体感した。また、シカ除外の実験を見学し、シカによる影響もみることができた。これらの地点、ならびに宮の森で伐採跡地の見学と河川水の採取、水生昆虫の観察を行った。事務所に戻り、講義室で水質をパックテストで確認した。2 班に分かれ、昨夜学習したことなどから最終日の班ごとの発表に向け、レポートを作成した。

第 3 日目

2 日目までに得たデータなどをまとめ、各班からの発表を行った。その後、使用した宿舎の清掃を行い、帰路について。

森林科学科の学生も複数名履修していた。が、森林や山によく入るものはいなかった。芦生研究林のような山奥の経験は、森林科学科の学生にとっても稀のようであった。機会があれば森林へも行ってみたいとは考えているようであったが、部活やバイトでそのような時間もないようであった。実習はそのような機会を提供するものとして機能していくのだろうか。そうであれば、より広い学部や学年への対応が行えるように考えていかねばならないだろう。

④京都の文化を支える森林－森林の持続的管理に関する地域の知恵と生態学的知見からのシナリオ作成

森林育成学分野 准教授 石原 正恵

上賀茂試験地、芦生研究林および北白川試験地において、8月28～30日に実施しました（公開森林実習Ibとの同時開講）。経済学部・工学部・総合人間学部の4人が参加しました。このILASセミナーは、文部科学省の地（知）の拠点整備事業で行われる、京都に関わるさまざまな課題を取り上げる京都学教育プログラムの中に位置づけられています。京都には豊かな森林・水などの自然に支えられ、その資源を利用することによって古より発展を遂げてきました。多くの文明が環境破壊と生態系サービスの劣化によって失われた事実とは対照的に、京都周辺には現在でも多くの森林や溪流が残り、京都の文化を支えています。本科目では、京都文化を支えるこれらの自然の利用方法や森林に対する人々の知恵を知り、生態学的手法を用いて評価検討し、将来の京都と森林自然の新しい関係を導き出すことを目的としました。

1日目は京都市内の里山林である上賀茂試験地を見学しました。安全教育、ガイダンスの後、試験地の歴史、特に戦後の荒廃した林分がその後生長してきたことを講義で学びました。その後、試験地を見学し、マツ枯れやナラ枯れ、その後のヒノキ林への遷移、マツを中心とした外国産樹種を観察し、生育している植物の特徴を学びました。芦生研究林では、美山町に移住した猟師の藤原氏から、森のめぐみを活かしエネルギーや水も含め地産地消の生活を実践しているお話を伺いました。学生のレポートでは、現代の生活と自然の関係に考えさせられるきっかけになったという感想や、農山村へのIターンや過疎化の問題についての意見を述べていました。

2日目は、芦生研究林の杉尾峠から上谷を抜け長治谷までを歩き、上賀茂とは対照的な原生的な森林そして由良川源流域を観察しました。防鹿柵の内外を比較し、シカによる食害による下層植生の衰退を実感し、さらには土壌・河川生態系への影響についての研究成果の解説を受けました。事務所に戻り、樹木の識別、前日設置したライトトラップで採取した昆虫、溪流水質の分析を行いました。学生からは、植物の多様性に感銘を受けた、昆虫や水質は今まで注目したことがなかったので良い機会となった、環境によって水質が異なることを学べてよかったという意見がありました。夕方には実習を通して得られた観察結果を、北海道研究林で行われていた京大農学部生対象の研究林実習（III）とテレビ会議を用いて交換・議論しました。

3日目は、京都市有のスギ人工林、（株）北桑木材センターを見学し、京都府での木材の生産現場から利用・流通について教員から説明を受けました。その後、（株）カモノセログでは、地域産材、特に大径木や今まで価値が低いとされてきた木材を住宅に用い、ライフスタイルの提案を含め、林業と森林の課題に取り組んでおられるお話を伺いました。林業を中心とした森林と人間の関係性や将来について、考えさせられました。最後に京都大学吉田キャンパス内にある北白川試験地を訪れ、見本園と材鑑室を見学しました。

本年は例年以上に実習が多い中、ILASセミナーの実施において芦生研究林、上賀茂試験地、北白川試験地の職員の方々に大変お世話になりました。お礼を申し上げます。



上賀茂試験地での講義



芦生研究林上谷での観察

⑤瀬戸内に見る森里海連環

森林情報学分野 講師 中島 皇

メンバーの顔合わせ、本セミナーの動機付け(森里海連環学や瀬戸内の予備知識, JR 徳山駅までのアクセス方法や課題(徳山試験地で発表する瀬戸内地域に関するレポート)のヒントなど)のセミナーを5月, 6月に1回ずつ北部キャンパスで行い, 8月7~10日に徳山試験地で合宿形式ゼミ(3泊4日)を行った。

今年は参加者が多く6人(経1, 理1, 工2, 農2(2): ()は女子内数)となった。フレッシュな新入生諸君が瀬戸内の恵まれたフィールド(環境: 森・里・海)に出て, 自ら体験し, 自然と人間の関わり方, 里の意味を考えることがこのセミナーの目的である。セミナー実施担当で瀬戸臨海実験所(白浜)の2人の先生のうち, 久保田先生は別の実習と重なったために最終日のみ参加。大和先生は全日程参加予定で, 特に川から海では生物観察をしっかり行うべく今年はタモ網やバットを準備した。担当TA(森林情報学研究室M2)も広島県尾道市(瀬戸内海沿岸)の出身である。

集中ゼミは, 8月7日(月)15:30にJR 徳山駅集合で始まるのであるが, TAと教員で直前下見と受け入れ準備をするため, 前日からの徳山入りが恒例である。今年は台風5号がノロノロと日本列島を伺い, 昨年同様にTAの就職試験(公務員(広島県)試験)が重なった。案の定, 紀勢本線が止まり, 大和先生は初日と二日目の午後まで欠席。また工学部の2人からは「集合時間に間に合わない。」と連絡が入った。自然の力には勝てないことや自分たちの見通しが甘いことを実感したなら価値がある。

8月8日(火)は徳山試験地技術班長・境さんに見学のサポートをお願いした。万葉の森(周南西緑地公園: 旧徳山試験地), 末武川の最源流部・烏帽子岳(697m)近くの赤松ヶ平展望台, 途中で車を降りて末武川の源流に沿って下り, 魚切ノ滝, 人の暮らしていた跡, 豊かな水田風景を見ながら下山した。八代の親水公園は生い茂っていた水辺の草は整備されていて, 昼食後には皆で魚を追いかけていた。さらに下って, 盆地の最下流部にある浄化センターを通して, 午後は温見ダム(下松市の水道水源池)で担当職員の方に説明を頂いた。最後に旧山陽道の沿線に鎮座する花岡八幡宮の森と(こけら)葺きの屋根を持つ多宝塔を見て, 山から海までのプログラムの1日目は終了した。大和先生と就職試験のTAは夜の部から合流である。

8月9日(水)は大和先生が担当の川から海への1日であるが, 午前中は試験地の森林を見学した。特にヒノキ人工林(ふるさと文化財の森(檜皮))では, 檜皮採取の現場で説明を受けた。次に末武川ダム(多目的ダム)の上流に移動して, 昨日からのプログラムを再開した。中・下流部の川の観察。各自, 網とバットを携えてそれぞれに生物を捜す。最後に全員で河口干潟に降りて干潟の状況を確認したり, 多くの生物を採取した。この夜は皆でバーベキューとなった。

8月10日(木)は前日から徳山入りして満を持していた久保田先生が, ILASセミナー「瀬戸内に見る森里海連環」用に準備した講義を聞いた。久保田先生は今年度で定年になる。1回生のみでなく上回生の参加も認めたが, 新入生の十分な参加があって上回生の参加者はいなかった。参加者の募集はなかなか難しいものである。



温見ダム(下松市水道局職員の方による説明)



末武川河口干潟にて(TAと大和先生とともに)

⑥原生的な森林の働き

森林情報学分野 講師 中島 皇

今年度は参加人数が少なく調整が容易だったので4月に開講出来た。4月19日(水)初回：顔合わせ・オリエンテーション。5月17日(水)2回目：北白川試験地のj.Podで「森林の働きについて」のゼミ。6月10日(土)1 dayゼミ：上賀茂試験地見学(都市近郊林と見本林：人為の影響と人の関わり・作られた森林)。最終が芦生研究林で7月初めの合宿形式ゼミ(2泊3日)になる。参加者は男子2人、学部別は農1、総人1、出身地は大阪市、さいたま市と今年も関東出身者の参加があった。TAは森林育成学研究室の大学院生(M1)である。この他に調査隊として森林情報学研究室のB4と大阪教育大学のB4が同行し、総勢6人での実施になった。フィールド(森林)に出て、自ら体験し、考え、自然と人間の関わり方に興味を持つ契機とすることがこのゼミの目的である。

6月30日(金)：集中ゼミは京都市左京区北端にある広河原バス停集合で始まる。去年も書いたが32番の京都バス(出町柳発)は鞍馬温泉から北では自由乗降バスになる。このバスの最終広河原行きは昔と違って回送となって京都市内へ帰っているようだ。このバスを「ネコバス」として売り出せば……。これまで30年以上、芦生と京都を行き来して来た者の空言である。例年なら芦生研究林からの迎車で芦生へとなるが、今年は参加者が2人のためスタッフの車に同乗した。芦生研究林到着後は昼食。午後から身支度を整えて由良川本流沿い(芦生では標高が低い谷沿い)の自然を観察しながら、トロッコ道を歩く。夕食はロールキャベツ。TAと調査隊の先輩達の協力もあって合格点の食事が出来上がった。自分の「始末」は自分で行うこともゼミの重要な要素である。夜は、芦生の概要説明と研究林が抱える問題点を話し合った。

7月1日(土)：雨模様。それはそれでOK。調査隊に同行し、幽仙谷集水域天然林研究区(暖温帯と冷温帯の移行帯の大面積・長期プロット)の粗粒状流出有機物観測場所で、調査内容や量水堰の説明も受けた。この他、内杉谷にある伏条台杉や雪崩道も見た。事務所より400m程標高の高い稜線にある林道は霧の中。今年は眺めどころか視界も危ない。それでも杉尾峠に近い福井県境からは日本海(若狭湾)が見えて、薄日も射して来た。由良川最源流の斜面下端から水が湧いている。原生的と言われる上谷の森で、途中昼食を取って、由良川を下って行く。原生的な森林そのものは時間とその他多くの要素に支配されているが、それを体験することがこのゼミを開講している意味である。幽仙谷とは異なるタイプの量水堰、下谷の大桂、二次林と人工林を観察した。下山後、事務所構内で芦生研究林の技術職員による指導で「木を測る」実習を実施した。物事を定量的に知る基本になる「もの測り方」は重要かつ基本的な技術である。夕食は炒め物。腹一杯になったのか？食後は大学院生TAである先輩の研究紹介を毎年のことであるが眠気と戦いながらも耳を傾け、質問をしていた。

7月2日(日) 最終日はこの3日間のまとめ。レポートと片付けである。幽仙谷で回収してきた天然林からの流出物と水生昆虫の観察とデッサン。アンケートに答えて感想文を書いた後、パスタの昼食。宿舎・食堂の片付けをして、セミナーは終了となった。



木を測る(事務所構内)



大きな倒木の下を潜って(上谷)

⑦貝類の不思議

基礎海洋生物学分野 助教 中野 智之

2017年5月4日(木)から7日(日)にかけて、和歌山県白浜町にある瀬戸臨海実験所を拠点として、ILASセミナー「貝類の不思議」を行った。このILASセミナーでは、日本人にとってなじみの深い貝類について、その多様性の高さや、生態、形態の美しさなどの理解を深める事を目的とした。受講生は、総合人間学部2人、工学部2人、法学部1人、農学部1人の合計6人が参加した。

初日は、瀬戸臨海実験所の研究棟や宿泊棟の案内から始まり、実験所に併設された白浜水族館において、貝類を含めた海洋生物の観察、バックヤードの見学を行った。バックヤードから水族館を見学する機会はそれほど多くなく、参加者にとっては生き物の飼育や展示の工夫などを裏側から観察し、非常に興味深い体験だったようである。夜の水族館では、ナイトツアーを行い、夜に活発に活動を始めた生き物の観察を行った。

2日目は、院生に手伝ってもらいながら、コモレビコガモガイ、ヒメクボガイ、ケブカガニを用いた捕食実験を行った。コモレビコガモガイというカサガイの1種は、子供の頃にヒメクボガイの貝の上にくっついて生活しているのだが、それにどのような意味があるのかを探る実験である。今回は、ヒメクボガイにくっついていて、カニからの捕食率が下がるのではないかと、いう事を確かめる実験を行った。

3日目は、白浜町にある番所崎の海岸でコドラート調査を行った。例年、実習生が数を数えるのに苦労する数mm程度のチビアシヤもたくさんおり、1,000個体を超える区画もあり、実習生を悩ませた。午後からは貝類やイカの形態観察および解剖を行った。その際には、解剖図と比較しながらそれぞれの体の構造の理解を深めた。特に、貝類のオスとメスの違いなどを知り驚いていたようである。夜には、解剖で使ったものや解剖で使用しなかったものも含めて、安全に食べられるものは食材として使用した。

最終日には宿泊棟、実習室の掃除をし、アンケートとレポートの提出をしてもらい解散とした。参加者達は普段何も気にせず食べていた貝類の体の構造や、貝類の奥深さを知る事で非常に満足してもらえたようである。



集合写真



水族館での解説

⑧森を育て活かすー林業体験をととして考える

森林育成学分野 准教授 長谷川 尚史

近年、地球温暖化をはじめとする地球環境問題への関心が高まり、来るべき循環型社会における森林の管理および資源としての利用法についての議論が活発に行われるようになってきた。特に資源としての国内の森林の価値は、国産材の成熟に伴って急激に上昇しつつあり、次世代の成長産業としての林業、すなわち持続的木材生産の復権がなされようとしている。森里海の健全な連環を成立させるためには、森林管理の持続可能性について、環境性だけでなく、経済性や社会性の観点からも捉えるとともに、農学、森林科学だけでなく、法学から工学に至るまで、様々な専門知識を有した人材を育成する必要がある。本セミナーは、日本で伝統的に行われてきた林業作業を体験するとともに、最先端の林業の作業現場を見学し、また山 村で暮らす人々と交流を行うことによって、多様な学生に将来の社会像について議論してもらうことを目的に、2011 年度から開講している（2012 年度は中止）。

6 回目となった本セミナーは、前回につづいて和歌山研究林を拠点として 8 月 21～24 日に開催した。本年度のセミナーの参加学生は、法学部 1 人、経済学部 1 人、工学部 1 人、農学部 1 人の 1 回生、計 5 人であった。また TA として森林育成学分野院生 1 人が指導を補助した。

初日はまず、奈良県吉野町の吉野材センターを訪問して、職員の方に吉野林業の歴史を解説していただき、製材品市場を見学した。その後、清光林業(株)が所有する川上村の直径 1m を超える 260 年生スギ人工林内において昼食をとり、ごまさんスカイタワーに移動して標高 1,300m の冷温帯林を観察、夕方に宿舎となる和歌山研究林清水分室に到着、本セミナーのガイダンスおよび講義を実施した。早朝から深夜に及ぶ例年通りの非常に内容の濃い初日となったが、参加学生の関心は高く、講義の際にも目を輝かせていた。2 日目は和歌山研究林と協定を結んでいるマルカ林業(株)所有地において下刈り実習を実施し、さらに和歌山研究林のスギ人工林で間伐プロットを設置、毎木調査を行った。夕方は龍神村に足を延ばし、山林地域における観光産業について解説した。夜は宿舎で毎木調査のデータ整理と間伐木の選定、間伐前後の蓄積量算出および樹冠投影図の作成等の内業を深夜まで行った。3 日目はチェーンソーを用いて選木した間伐木を実際に伐倒し、さらに造材、集材の実習を行った。近隣の木材市場の市況表を用いた採材実習も行った。夕方にはマルカ林業(株)を訪問し、林業会社の事業内容について解説していただいた後、高齢人工林と新植地、間伐現場を見学した。見学後は地域の方との交流会として、恒例となった BBQ を行った。最終日は朝に清水分室を出発して高野山に向かい、高野山寺領森林組合職員の方のご案内により、高野山境内の伝統建築と奥の院の 600 年生と言われるスギ林分と、間伐現場を見学した。また高野山寺領森林組合では、森林セラピーツアーを実施しており、本年度は実際に精進料理弁当の試食とハンモックでの昼寝を体験させていただいた。午後に高野山を後にし、橿原市のイオンモール内にある十津川村産直住宅を訪問、十津川村役場の方に最新の木造住宅について解説していただき、夕方には無事に大学本部に到着、解散した。

今年は関係者のご尽力によって、初めて高野山で森林セラピー体験をお願いすることができた。また、例年通り吉野材センターや清光林業(株)およびマルカ林業(株)の山林見学と十津川村産直住宅の見学も実施させていただき、これまで以上の充実した実習であった。参加学生も木材からセラピーに至るまでの森のめぐみと、それらを得るための先人の苦労を体感し、非常に大きな刺激になったようである。

当セミナーの開催にあたって多くの訪問先の皆様や和歌山研究林職員に多大なご協力をいただいた。この場をお借りして深くお礼申し上げる。



樹冠投影図の作成



森林セラピー体験

⑨環境の評価

森林情報学分野 教授 吉岡 崇仁

このゼミは、自然環境を評価することの意味について、自然科学的、社会科学的側面から考えることを目的としている。教室では、講義形式で環境評価に関わる概念、環境哲学や倫理学に関する考察を、そして徳山試験地では合宿を実施した。受講生は、工学部2人、農学部2人、経済学部1人の計5人であった。

講義室では6回のゼミを行い、環境の価値や環境意識などについて討議するとともに、環境を評価する意味について議論した。また、最終レポート作成の予習として、新聞に掲載された環境関連の話題について、その要約と記事に表れた環境評価の扱われ方をまとめた上で、その記事内容に対する自らの考えなどを発表した。フィールド合宿は、8月25～26日に、山口県周南市にある徳山試験地で行い、TA1人のほか、試験地の職員（技術班長、技術補佐員2人）も加わり実施した。安全教育と森林整備方法の概要を学んだ後、檜皮（ひわだ）生産のために維持されているヒノキ人工林の整備作業（林床植生の刈り取り）を行った。蒸し暑い中での作業であったが、休憩をはさみながら実施した。これにより、狭い面積ではあるが、ヒノキ人工林は見違えるように明るくきれいになり、人手をかけることで森がよくなることを実感することができた（写真1）。

翌日は、試験地の事務室にて、最終レポートの発表を行った。徳山高校および光丘高校の生徒計4人と教職員4人も議論に参加した（写真2）。レポートの内容は、サンゴの白化現象、産業廃棄物の違法投棄、地球温暖化、パリ協定、ニホンウナギ絶滅危惧に関する話題であった。ゼミで何度も議論された、人間中心主義、非人間中心主義の観点から質疑応答がなされるとともに、高校生からの質問にも答えていた。午後は、移転前に徳山試験地があった周南市西緑地に移動し、万葉の森を散策するとともに試験地当時から植栽されてきた国内外の樹木の観察をしながら、森林と人間の関わりについて考察を深めた。

森林整備作業では、徳山試験地の境技術班長、技術補佐員の石丸さん、徳原さんにお世話になりました。また、ゼミ発表でお世話になった徳山高校の爲國先生はじめ先生の皆さん、高校生の皆さんにお礼申し上げます。



徳山試験地ヒノキ人工林の整備実習



高校生を交えたゼミ発表会

⑩南紀の自然史

基礎海洋生物学分野 助教 大和 茂之

ILASセミナー「南紀の自然史」は、9月26～29日の3泊4日の日程で、瀬戸臨海実験所に宿泊して、現地実習を行った。昨年に続いて2回目の開催で、前回と同様に、田辺湾内の神島、畠島、天神崎の3つの地点に注目して、実際に現地を訪れて見学することを計画した。これらの地点の自然保護には、神島の南方熊楠、畠島の時岡隆、天神崎のナショナルトラスト運動など、先人の活動が関わっている。

4月時点で、参加学生は、法学部1人、医学部1人、農学部3人の計5人であった。5月にガイダンスをやった後は、夏休みの終りに現地で集合するという計画であったが、途中一人のキャンセルもなく、当初の5人で実習を実施した。しかし、その他の点では、計画通りのメニューがこなせないことも多かった。例えば、例年9月下旬には、他の大学の実習が行われないものと予想していたら、別の大学の実習と重なり、そのために実習室が使えないことになった。それで、講義室での説明と、フィールドでの観察・見学が中心となった。また、船の使える日程が限定されたことから、実習項目の変更にも融通がきかなくなかったところに、低気圧の接近で船が出せなくなってしまって、予定していた畠島に行けなくなった。

一日目は、実験所のすぐ前の番所崎の海岸を一周した。この日は潮の引きが悪かったが、現場の観察を中心として、多様な海岸の生物を見てもらえたように思う。

二日目は、朝からレンタカーで田辺市へ移動し、闘鶏神社（世界遺産に指定されていて、背後の森の保全に南方熊楠が尽力した）、南方熊楠顕彰館・南方熊楠邸を見学した。顕彰館では、特別に収蔵庫に入らせてもらい、南方熊楠が用いた資料に直接触れる機会となった。午後は、天神崎に移動し、背後の山や湿地から海岸までを見学した。山と海岸が一体となった自然を残すために、ナショナルトラスト運動の発祥となった場所を、実際に歩いて回った。

三日目の午前中は、実験所の水族館やそのバックヤードを見学し、白浜周辺の生物の概要と、それを飼育するための設備を説明した。午後は、低気圧接近で船が出せなくなったために、急遽予定を変更して、田辺湾奥の内之浦干潟と、鳥の巣半島で生物を観察した。干潟では、泥だらけになりながら、カニや貝類などの干潟特有の生物を観察した。鳥の巣半島のため池では、人為的な移入種であるアフリカツメガエルを駆除するために、地元の高校生が活動している場所を見学した。また、今回は船で見学することが出来なかった神島の森を対岸から眺めた。

四日目は、レポートを書いて、解散となった。

前年度と同じ日程を組んだのだが、潮が悪かったり、他の大学の日程と重なったり、船の利用が出来なかったりして、当初に予定していた項目のすべてを見てもらえなかったが、アンケートによれば、学生にはそれなりに満足してもらえたように思う。夏休み中の実験所での実習の過密さから、教員一人で学生に対応するのは、日程的にも体力的にも無理があり、次年度以降の実施は断念することにした。



天神崎海岸での観察



鳥の巣半島から神島を臨む

⑪森林河川調査入門

森林育成学分野 特定助教 中川 光

ILASセミナー「森林河川調査入門：見て確かめる川の生き物達の生息場所」を8月21～23日の日程で集中授業・実習形式で京都大学芦生研究林にて開講した。今回は法学部と理学部からそれぞれ1人の学生が参加した。1日目は、由良川の河川生物を紹介する講義の後、シュノーケルの使用方法についてレクチャーを行い、実際に水中での魚類や水生昆虫の活動する様子を観察させた。夕食後にもシュノーケリングによる魚類観察を行い、昼と夜での魚類の行動の違いや夜行性の魚類の生態に関する説明を行った。2日目は、野外観察から研究データを取得する方法について理解することを目的に、野外調査における調査手法・計画とデータの取り扱いの重要性に関する講義の後に、ライントランセクト法による魚類の定量的な観察と生息環境の計測を行った。TAの補助のもとで、得られた調査結果の取りまとめと解析、考察を学生自ら行い、3日目朝にその結果の発表を行わせて、講義終了とした。本講義において、受講者らはいずれも河川での水中観察は初めてであり、網等で捕獲されたものとは違う生き物の様子を新鮮な印象を受けたようである。また、定量観察では、実際に得られたデータをもとに各魚種が好む生息場所の違いなどについて、図表に取りまとめるなどの工夫をした上で考察し、本実習の、自然科学研究における野外観察からのデータ取得の基礎を理解するという目的を十分に達成できたものと思われる。



シュノーケリングによる生物観察



河川環境調査

(3) 大学院教育・学部教育

フィールド研は、協力講座として、京都大学大学院農学研究科へ3分野、理学研究科へ1分野が参画して、大学院教育および学部教育を行っている。また、大学院地球環境学舎へ基幹分野（協力分野）および協働分野として参画している。

協力講座としての教員配置と学生数（2017年10月現在）

	専攻	分野	教員	ポストドク など	博士後期 課程	修士課程	学部生 (4回生)
農学研究科	森林科学専攻 森林資源学講座	森林育成学分野	徳地 直子（教授） 長谷川 尚史（准教授） 伊勢 武史（准教授） 石原 正恵（准教授） 中川 光（特定助教）	1	5(1)	6	2
		森林情報学分野	吉岡 崇仁（教授） 舘野 隆之輔（准教授） 中島 皇（講師） 小林 和也（講師） 寄元 道德（助教） 坂野上 なお（助教） 中西 麻美（助教）	0	1	4(1)	2
	応用生物科学専攻	海洋生物環境学分野	荒井 修亮（教授） 市川 光太郎（准教授） 小林 志保（助教）	0	0	6	4
		里海生態保全学分野 ＜舞鶴水産実験所＞	山下 洋（教授） 益田 玲爾（准教授） 甲斐 嘉晃（助教） 鈴木 啓太（助教） 澤田 英樹（特定助教） 田城 文人（特定助教）	0	4	4(1)	-
	（講義担当教員として協力）		梅本 信也（准教授）	-	-	-	-
理学研究科	生物科学専攻	海洋生物学分科 ＜瀬戸臨海実験所＞	朝倉 彰（教授） 久保田 信（准教授） 大和 茂之（助教） 中野 智之（助教） 後藤 龍太郎（助教）	0	4	4	0
地球環境学舎	（基幹分野）	水域生物環境論分野 （協力分野）	山下 洋（教授） 鈴木 啓太（助教）	0	3	2	-

() 内は、休学中の学生数・+は、他分野所属だが当該分野で指導している学生数

大学院での提供科目

大学院農学研究科 森林科学専攻

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
森林情報学特論 II	舘野, 小林(和)	BA14	修士1回生以上	後期集中	2
森林育成学特論 II	伊勢, 石原	BA16	修士1回生以上	後期	2
森林情報学専攻演習1	吉岡, 舘野, 中島, 小林(和), 寄元, 坂野上, 中西	BB44	修士1回生以上	通年	4

森林情報学専攻演習2	吉岡, 舘野, 中島, 小林(和), 寄元, 坂野上, 中西	BB45	修士2回生以上	通年	4
森林育成学専攻演習1	徳地, 長谷川, 伊勢, 石原, 中川	BB46	修士1回生以上	通年	4
森林育成学専攻演習2	徳地, 長谷川, 伊勢, 石原, 中川	BB47	修士2回生以上	通年	4
森林情報学専攻実験1	吉岡, 舘野, 中島, 小林(和), 寄元, 坂野上, 中西	BC44	修士1回生以上	通年	5
森林情報学専攻実験2	吉岡, 舘野, 中島, 小林(和), 寄元, 坂野上, 中西	BC45	修士2回生以上	通年	5
森林育成学専攻実験1	徳地, 長谷川, 伊勢, 石原, 中川	BC46	修士1回生以上	通年	5
森林育成学専攻実験2	徳地, 長谷川, 伊勢, 石原, 中川	BC47	修士2回生以上	通年	5

大学院農学研究科 応用生物科学専攻

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
海洋生物環境学特論I	荒井, 市川	DA50	修士1回生以上	後期	2
海洋生物環境学演習1	荒井, 市川, 小林(志)	DB38	修士1回生以上	通年	3
海洋生物環境学演習2	荒井, 市川, 小林(志)	DB39	修士2回生以上	通年	3
里海生態保全学演習1	山下, 益田, 甲斐, 鈴木, 澤田, 田城	DB50	修士1回生以上	通年	3
里海生態保全学演習2	山下, 益田, 甲斐, 鈴木, 澤田, 田城	DB51	修士2回生以上	通年	3
海洋生物環境学専攻実験1	荒井, 市川, 小林(志)	DC38	修士1回生以上	通年	6
海洋生物環境学専攻実験2	荒井, 市川, 小林(志)	DC39	修士2回生以上	通年	6
里海生態保全学専攻実験1	山下, 益田, 甲斐, 鈴木, 澤田, 田城	DC50	修士1回生以上	通年	6
里海生態保全学専攻実験2	山下, 益田, 甲斐, 鈴木, 澤田, 田城	DC51	修士2回生以上	通年	6
海洋生物環境学特論I	荒井, 市川	DA50	修士1回生以上	後期	2

大学院農学研究科 地域環境科学専攻

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
環境保全の理念と実践	清水, ラヴァルニュ	EA38	修士1回生以上	前期	2
多様性保全の法政策	清水, ラヴァルニュ	EA39	修士1回生以上	後期	2

大学院理学研究科 生物科学専攻 (動物学系)

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
動物系統解析特論A	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8129	修士1・2回生	前期	2
動物系統解析特論B	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8130	修士1・2回生	後期	2
海洋生物学特論	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8040	修士1・2回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールA	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8133	修士1回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールB	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8134	修士1回生	後期	2
海洋生物学ゼミナールC	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8135	修士2回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールD	朝倉, 久保田, 大和, 中野, 後藤	8136	修士2回生	後期	2
生物科学専攻インターラボ	久保田ほか	9900	修士1・2回生	前期集中	1

大学院地球環境学舎 環境マネジメント専攻

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
地球資源・生態系管理論	山下ほか	3103	修士1・2回生	前期	2
里海学	山下	3273	修士1・2回生	後期前半	1
里域植生保全論	梅本	3563	修士1・2回生	前期集中	2
流域・沿岸域統合管理学	山下, 清水, 吉積	4515	修士1・2回生	前期	2
沿岸の環境保全	ラヴァルニュ	4517	修士1・2回生	後期後半	1
森里海連環の理論と実践	清水, 吉積ほか	4521	修士1・2回生	前期集中	1

大学院人間・環境学研究科（共生社会環境論）

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
地域環境リーダー論	吉積		修士1・2回生	前期	2
流域沿岸政策論	吉積		修士1・2回生	後期	2

学部での提供科目

農学部 森林科学科

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
森林育成学	徳地，長谷川	E128	3回生	後期	2
森林植物生態学	伊勢，石原		3回生	前期	2
森林資源管理学	館野，小林(和)，坂野上	E130	3回生	後期集中	2
森林環境学	吉岡，中島	E131	3回生	後期	2
森林総合実習及び実習法	長谷川，中島，寄元，坂野上ほか	E221	3回生	前期	2
研究林実習II	伊勢ほか	E238	3回生	後期集中	1
研究林実習 III	館野，小林(和)，中西ほか	E239	3回生	前期集中	2
研究林実習 IV	館野，小林(和)，中西ほか	E240	3回生	後期集中	2
課題研究	吉岡，徳地，長谷川，館野，伊勢，中島，小林(和)，寄元，坂野上，中西	E301	4回生		10

農学部 資源生物科学科

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
資源生物科学概論B	荒井ほか	A106	1回生	前期	2
海洋生物科学技術論と実習 I	荒井，益田，市川，甲斐，鈴木，小林(志)，田城，澤田	A205	2回生	前期集中	2
海洋生物科学技術論と実習 II	山下，益田，甲斐，鈴木，田城，澤田	A206	2回生	前期集中	2
植物調査法と実習	梅本ほか	A208	2回生	前期集中	2
海洋生物環境学I	荒井，市川	A223	3回生	前期	2
海洋生物生態学	山下，益田，甲斐，鈴木ほか	A224	3回生	前期	2
資源生物科学専門外書講義I（海洋生物G）		A236	3回生	前期	2
海洋生物科学技術論と実習IV	山下，荒井，益田，甲斐，鈴木，田城，澤田	A258	3回生	後期集中	2
海洋生物環境学II	荒井，市川	A307	3回生	後期	2
海洋生物科学	荒井，市川，小林(志)		2回生	後期	2
海洋生物資源学演習	荒井，市川，小林(志)	A512	4回生	通年	2
課題研究	荒井，市川，小林(志)	A518	4回生		10

理学部 生物科学科

講義名	担当教員	科目	対象	開講期	単位
海洋生物学	朝倉，久保田，加賀谷，中野，原村，後藤	2705	2回生以上	前期	2
無脊椎動物学	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	2708	2回生以上	後期	2
臨海実習第1部	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	2733	2回生以上	前期集中	2
生物学セミナーB	朝倉，久保田，大和，中野	3761	2回生以上	後期	2
臨海実習第2部	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	3767	3回生以上	前期集中	2
臨海実習第4部	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	3769	3回生以上	前期集中	2

◆学位授与

(農学：森林情報学分野)

修士 安松 亮 森林集水域内の渓流水中における溶存有機炭素および硝酸態窒素濃度の形成要因－集水域土壌の化学特性について－

修士 谷 鑫 芦生研究林長治谷シカ排除実験区におけるシカの食性調査

学士 鈴江 卓也 台風イベントによる粗粒状有機物の流域からの流出

(農学：森林育成学分野)

修士 角 和暁 深層学習による衛星画像を用いた竹林識別モデルの開発

修士 野田 佳愛 なぜ人は森で癒されるのだろうか～森林内での行動における脳波特性～

学士 阪部 拓海 スギが優占する冷温帯天然林における2017年台風21号による被害～ 幹折れに対する腐朽及びクマハギの影響 ～

学士 皆川 まり 深層学習によるコケの画像識別

(農学：里海生態保全学分野)

博士 藤田 純太 エビ類の生活史戦略と遺伝的集団構造に関する分子生態学的研究修士

修士 尾形 瑞紀 海底堆積物における環境DNAの保全性の検証

修士 難波 真梨子 キス科魚類の分類における頭部側線系の有効性

(農学：海洋生物環境学分野)

修士 生田 健吾 徳島県沿岸ワカメ漁場における栄養塩起源推定

修士 安江 功明 十和田湖におけるヒメマスと水環境の季節変動

学士 加藤 祐哉 絶滅危惧種チャオブラヤエイ稚魚の行動解析

学士 相良 朋香 音響学的種判別手法を用いたマレーシア・ランカウィ諸島周辺における小型鯨類2種の分布の解明

学士 横山 綾子 タイ国ケンクラチャン湖におけるメコンオオナマズ稚魚の生存率および水平移動に関する研究

学士 渡部 夏帆 淀川河口域における有機物の生成と初期分解過程

(地球環境学：水域生物環境論分野)

博士 Omweri, Justus Ooga Production dynamics of the mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan (日本海中部由良川河口におけるイサザアミ *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851)の生産ダイナミクス)

修士 岡崎 拓未 Genetic population structure and morphological variation of *Aptocyclus ventricosus*(Cyclopteridae) in the North Pacific (北太平洋におけるホテイウオ *Aptocyclus ventricosus* の遺伝的集団構造および形態的変異)

修士 小巻 拓平 福島県松川浦におけるニホンウナギの行動生態学的研究

(理学：基礎海洋生物学分野)

修士 井上 峻輔 サメハダテヅルモヅルの生態と形態についての研究

修士 戸川 優弥子 DNA data suggest that any 'Aplysia parvula' in Japan might not be a true *Aplysia parvula*.

(4) 森里海連環学教育プログラム

森里海連環学教育ユニットは、2012年に発足し、流域・沿岸域の統合管理を学ぶ大学院生のための「森里海連環学教育プログラム」を2013年度から開講した。このプログラムの科目は、3つの大学院（農学研究科、人間・環境学研究科、地球環境学舎）から提供されており、修了（14単位相当以上の修得）すれば、ユニットから森里海連環学教育プログラム修了証が授与される。2017年度の履修者は97人で、うち67人が修了した。2017年度に開講した科目は以下の通りである。

森里海連環学教育ユニットの教員配置（2017年4月現在）

	教員	(所属)
ユニット長	朝倉 彰（教授）	(フィールド研)
総合生態系管理学領域	山下 洋（教授）	(フィールド研)
	横山 壽（特任教授）	
	エドワルド・ラヴァルニュ（特定講師）	
流域環境ガバナンス領域	吉岡 崇仁（教授）	(フィールド研)
	柴田 昌三（教授）	(地球環境学舎)
	星野 敏（教授）	(地球環境学舎)
	清水 夏樹（特定准教授）	
沿岸域環境政策領域	浅野 耕太（教授）	(人間・環境学研究科)
	吉積 巳貴（特定准教授）	

科目一覧

(必修科目)

科目名	担当教員	科目コード	開講期	提供部局	単位
流域・沿岸域統合管理学	山下, 清水, 吉積	01	前期	地球環境学舎	2
森里海国際貢献学I	教育ユニット教員	02-1	前期集中	教育ユニット	1
森里海国際貢献学II	教育ユニット教員	02-2	後期集中		1

(履修推奨科目)

科目名	担当教員	科目コード	開講期	提供部局	単位
インターンシップ	教育ユニット教員	03	通年(随時)	教育ユニット	2
森里海特別研究	教育ユニット教員	04	通年		2

(選択科目)

	科目名	担当教員	科目コード	開講期	提供部局	単位
総合	地球環境政策・経済論	宇佐美 誠	11	前期	地球環境学舎	2
	地球資源・生態系管理論	舟川 晋也, 柴田 昌三*, 山下 洋*	13	前期		2
	環境倫理・環境教育論	ジェーン・シンガー, 浅利 美鈴	14	前期		2
	発展途上国における強制移住	ジェーン・シンガー	15	前期前半		1
	環境管理リーダー論 (環境リーダー論A)	藤井 滋穂ほか	19	前期前半		1
	サステナ最前線 (サステナビリティ学最前線)	森 晶寿	20	前期集中		2
	地域環境リーダー論	吉積 巳貴*	22	前期	人間・環境学研究科	2
	政策デザインI (社会制度論1)	佐野 亘	23	前期		2
	森里海に関する公共政策の評価I (社会環境制度評価論1)	浅野 耕太*	25	前期		2

科目名		担当教員	科目コード	開講期	提供部局	単位
森	生態系生産動態論	大澤 晃, 岡田 直紀	31	前期後半	地球環境学舎	1
	森里海連環の理論と実践	柴田 昌三*, 教育ユニット教員	32	前期集中		1
	森林経理学 (森林・人間関係学特論2)	松下 幸司	33	後期	農学研究科 (森林科学専攻)	1
	森林育成学 (森林育成学特論II)	伊勢 武史, 石原 正恵	34	後期		2
	森林管理のための生態系生態学 (森林情報学特論II)	舘野 隆之輔	35	後期集中		2
	森林水文学と環境 (森林水文学特論)	小杉 緑子, 勝山 正則	40	前期集中	農学研究科 (地域環境科学専攻)	2
	森林生態学 (森林生態学特論)	北山 兼弘	41	前期集中		2
	熱帯地域の環境と農業 (熱帯農業生態学特論)	縄田 栄治	42	前期		2
里	里山と流域環境 (景観生態保全論)	柴田 昌三*, 深町 加津枝	51	前期前半	地球環境学舎	1
	持続的農村開発論	星野 敏*	53	前期前半		1
	流域水環境の管理 (流域水環境管理論)	藤井 滋穂, 田中 周平, 原田 英典	54	前期前半		1
	環境保全の理念と実践	清水 夏樹*, エドワルド・ラヴァルニュ*	55	前期	農学研究科 (地域環境科学専攻)	2
	多様性保全の法政策	清水 夏樹*, エドワルド・ラヴァルニュ*	56	後期		2
	農村計画論 (農村環境計画論)	星野 敏	57	前期		2
	土壌学 (土壌学特論)	舟川 晋也, 渡邊 哲弘	58	後期		2
	流域沿岸政策論	吉積 巳貴*	72	後期	人間・環境学研究科	2
海	水圏光合成微生物学 (生命環境共生論)	宮下 英明	71	後期	人間・環境学研究科	2
	里海学	山下 洋*	73	後期前半	地球環境学舎	1
	沿岸の環境保全	エドワルド・ラヴァルニュ*	74	後期後半		1
	海洋生態系と生物多様性	エドワルド・ラヴァルニュ*	75	前期後半		1
	海洋生物環境学 (海洋生物環境特論I)	荒井 修亮, 市川 光太郎	76	後期	農学研究科 (応用生物学専攻)	2
	海洋環境の法と政策 (応用生物学特別講義VII)	加々美 康彦	77	前期集中		1
	海洋生物資源の国際管理 (応用生物学特別講義VIII)	八木 信行	78	前期集中		1
	海洋生物の生理生態学概論 (海洋資源生物学特論)	田川 正朋	79	後期		2
	海洋分子微生物学 (海洋分子微生物学特論)	左子 芳彦	82	前期		2

(英語スキルアップ講座)

科目名	担当教員	科目コード	開講期	提供部局	単位
英語スキルアップ講座	(外部講師)	—	前期	教育ユニット	—

(科目名欄の () 内は, 提供部局における科目名称)

(担当教員欄の * はユニット所属教員, それ以外はユニット協力教員)

(5) 教育関係共同利用拠点事業

1) 公開実習科目一覧

フィールド研9施設のうち、2011年4月に舞鶴水産実験所および瀬戸臨海実験所が、2015年7月に芦生研究林・北海道研究林・上賀茂試験地が、文部科学省から教育関係共同利用拠点到認定され、拠点事業として、公開実習を実施するほか、他大学による実習、および他大学生、大学院生による論文作成のための利用を受け入れている。2017年度に実施した公開実習は以下の15科目である。

黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点（瀬戸臨海実験所）

科目名	担当教員	実習期間	日数	学生数	学生の所属等
博物館実習（館園実務）	朝倉，大和	2017-05-23/27	5	3	北海道大学，奈良教育大学，倉敷芸術科学大学
自由課題研究	朝倉，久保田，大和，中野	2017-09-04/11	8	1	日本大学
発展生物学実習	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	2017-09-18/24	7	10	酪農学園大学(3)，奈良女子大学(2)，岡山大学，お茶の水大学，信州大学，富山大学，広島大学
海産無脊椎動物分子系統学実習	朝倉，久保田，中野，後藤	2018-03-03/10	8	7	京都大学(2)，新潟大学，東北大学，北海道大学，東京農工大学，信州大学，三重大学，琉球大学
沿岸域生態系多様性実習	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	2018-03-14/19	6	9	京都大学(4)，東邦大学，広島大学，鹿児島大学，水産大学校，熊本県立大学
藻類と海浜植物の系統と進化	朝倉，久保田，大和，中野，後藤	2018-03-27/31	6	7	九州大学(4)，東京農工大学(2)，学習院大学

日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点（舞鶴水産実験所）

科目名	担当教員	実習期間	日数	学生数	学生の所属等
森里海連環学実習I （芦生研究林と共同開催）	山下，徳地，益田，伊勢，甲斐，坂野上，中西，鈴木，中川，澤田，田城	2017-08-06/10	5	5	東京農工大学(2)，宮崎大学，京都学園大学(2)
海洋生物科学実習I	荒井，益田，甲斐，鈴木，澤田，田城	2017-08-24/29	6	3	東京海洋大学，福井県立大学，倉敷芸術大学，
海洋生物科学実習II	益田，甲斐，鈴木，澤田，田城	2017-08-29/09-03	6	1	福井県立大学
若狭湾秋季の水産海洋生物実習	益田，甲斐，鈴木，澤田，田城	2017-09-14/19	6	8	岡山大学，お茶の水女子大学(3)，東京農工大学，奈良女子大学，東海大学，酪農学園大学
博物館実習（館園実務）	甲斐，田城，鈴木	2017-12-23/27	5	1	筑波大学大学院
若狭湾春季の水産海洋生物実習	山下，益田，甲斐，鈴木，澤田，田城	2018-03-12/16	5	6	長崎大学，福井大学，京都学園大学(2)，近畿大学(2)

人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点（芦生研究林・北海道研究林・上賀茂試験地）

科目名	担当教員	実習期間	日数	学生数	学生の所属等
森里海連環学実習I （舞鶴水産実験所と共同開催）	山下，徳地，益田，伊勢，甲斐，坂野上，中西，鈴木，中川，澤田，田城	2017-08-06/10 （08-06/07）	2	5	京都学園大学(2)，東京農工大学(2)，宮崎大学(1)
森里海連環学実習II （北海道大学と共同開催）	吉岡，館野，小林，中西，中川ほか	2017-09-01/07 （09-01/04）	4	11	北海道大学(11)
公開森林実習I 近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴	吉岡，徳地，伊勢，石原，寄元，坂野上，中川	Ia:2017-08-17/19， Ib:2017-08-28/30	3×2 （芦） 1×2 （上）	27	Ia: 人間環境大学(14) Ib: 公立鳥取環境大学(6)，筑波大学(1)，広島大学(1)，東京農工大学(1)，早稲田大学(1)，九州大学(1)，京都学園大学(1)，日本自然環境専門学校(1)
公開森林実習II 夏の北海道東部の人と自然の関わり	館野，小林	2017-08-05/08	4	3	東京医科歯科大学(1)，公立鳥取環境大学(1)，京都府立大学(1)

2) 日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点

舞鶴水産実験所長 益田 玲爾

■他大学生が参加できる実習科目

全国の大学生を対象に以下の6科目の公開実習を開講した。「森里海連環学実習I」は、京都北部を流れる由良川をフィールドとして、源流から河口域までの各地点において水生昆虫と魚類を採集し、同時に水質や土地利用様式の調査を行う実習である。「海洋生物科学実習I, II」では、シュノーケリング講習、砕波帯の仔稚魚調査、魚類分類学および解剖学、動物プランクトンの観察、海洋観測、バイオリギング、底生生物調査と試料分析、魚市場見学、海洋無脊椎動物の採集・同定と生理活性物質の抽出・活性測定等を行った。「若狭湾秋季の水産海洋生物実習」および「若狭湾春季の水産海洋生物実習」では、若狭湾各地の沿岸から沖合にかけての定点で各種ネットにより生物を採集し、同時に海洋物理環境の観測を行い、得られたデータから生物多様性と環境の問題について考察した。加えて、秋季実習ではシュノーケリングによる生物観察や刺網による魚類の採集と分類・解剖を、また春季実習ではスズキの耳石解析や仔稚魚の胃内容物の観察も行った。「博物館実習」では、標本の整理やデータベース作成等について、水産生物標本館を利用して学んでもらった。これら実習の参加者は延べ132人、参加者の所属大学は延べ18大学となった。

■他大学による実習の受け入れ

近畿大学、関西学院大学および岐阜大学の3大学から合計4件の実習を受け入れた。これらの実習には、延べ278人の学生が参加した。

■他大学生、大学院生による論文作成のための利用

共同利用研究として、北海道大学、福井県立大学、東京大学、東京海洋大学、近畿大学、神戸大学、放送大学、鹿児島大学などから、合計630人の利用があった。

■運営実施体制

専任教員に加えて特定助教2人が共同利用を担当した。事業の実施にあたっては、ポスターを作成して全国の大学に配布した。また舞鶴水産実験所のホームページに公募情報を掲載し、全国の大学に周知した。共同利用運営委員会を4月に開催し、拠点としての質の向上を目指した。

さらに、大学間連携を進めるため、2016年3月に北海道大学・広島大学・長崎大学と本学との間で水産海洋実践教育ネットワーク協定を締結した。これにもとづいて2017年度には、上記3大学と本学が12科目の公開実習を共同実習教育プログラムとして提供した。このうち2大学の科目を受講した学生には、教育プログラムの修了証を4大学部局長名で発行している。

3) 黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点

瀬戸臨海実験所長 朝倉 彰

■公開臨海実習

瀬戸臨海実験所では、国立大学法人臨海臨湖実験所長会議に所属する施設が開講する公開臨海実習を文部科学省の財政的支援を受けながら 1989 年度から実施しており、2011 年度に文部科学省から教育関係共同利用拠点到認定されてからは、拠点事業として開講している。2012 年度からは概算要求による運営費交付金を獲得し、従来年間 2 科目の開講していたものを 5 科目に拡充し 2015 年度まで行った。2016 年度からは教育関係共同利用拠点は第二期の申請を行い、これが認められ 5 ヶ年の予定でその 2 年度目として実施した。2017 年度はさらに 1 科目を増やし合計 6 科目を実施した。

今年度は、以下のような日程・規模で行った。

博物館実習（館園実務）：2017年5月23～27日。3大学3人延べ15人参加。

自由課題研究：2017年9月4～11日。1大学1人延べ8人参加。

理学部臨海実習第4部と日程・内容を重ねた。

発展生物学実習：2017年9月18～24日。7大学10人延べ70人参加。

理学部臨海実習第2部と日程・内容を重ねた。

海産無脊椎動物分子系統学実習：2018年3月3～10日。7大学7人延べ64人参加。

沿岸域生態系多様性実習：2018年3月14～19日。6大学9人延べ54人参加。

全学共通科目「森里海連環学実習 IV：沿岸域生態系に与える陸・川・人の影響」と日程・内容を重ねた。

藻類と海浜植物の系統と進化：2018年3月27～31日。3大学7人延べ35人参加。

理学部臨海実習第3部と日程・内容を重ねた。

■他大学による実習の受け入れ

瀬戸臨海実験所では、施設・設備を活用して行った他大学による臨海実習を共同利用実習として受け入れている。本年度の受け入れ数は、延べ8大学（国立5、公立2、私立1）、9科目、49日間、194人（うち学生167人）、延べ1011人（うち学生延べ890人）であった。

■他大学学部生、大学院生による研究利用

瀬戸臨海実験所では、他大学の学部生および大学院生による研究目的での利用を共同利用実習として受け入れている。本年度の受け入れ数は、延べ25大学（16国立校、6私立校、3海外）、69人、134回、延べ360人であった。

■運営実施体制

4 月 6 日に共同利用運営委員会（学内委員 4 人・学外委員 6 人）を開催し、2016 年度実績報告、2017 年度事業計画の検討、2017 年度実施計画書の検討を行った。

各拠点事業（公開臨海実習・共同利用実習・共同利用研究）については、実験所教員 5 人（教授 1 人・准教授 1 人・助教 3 人）、技術職員 6 人、事務職員 5 人が分担して運営にあたったほか、拠点に対する運営費交付金を使って雇用した研究員 2 人が、拠点事業の運営補助にあたった。

■その他

拠点に対する運営費交付金を使って、拠点事業で用いる物品を充実させ、教育研究環境の向上を図った。また拠点事業による船舶の使用については、使用料を徴収しないようにするとともに、本事業による 1 回の利用につき図書室の複写料金を 100 枚分まで無料とした。

2017年4月7日に、水産・臨海・臨湖実験所フィールド実習ワークショップを行った。長崎大学海洋未来イノベーション機構環東シナ海環境資源研究センター長の征矢野清氏をお招きし「水産実験所における実践教育の新たな取り組み：水産海洋実践教育ネットワーク」を舞鶴水産実験所と共催で行った。

4) 人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点（芦生・北海道・上賀茂）

森林情報学分野 教授 吉岡 崇仁

■公開森林実習等の実施

芦生研究林と上賀茂試験地で開講した「公開森林実習I」では、受講希望者が多数であったことから2度開講した（Ia：8月17-19日、Ib：8月28-30日）。Iaでは、人間環境大学から14人が、Ibでは、8大学（公立鳥取環境大学6人、筑波大学1人、広島大学1人、東京農工大学1人、早稲田大学1人、九州大学1人、京都学園大学1人、日本自然環境専門学校1人）の計13人が受講した。北海道研究林で実施した公開森林実習IIでは、東京医科歯科大学、公立鳥取環境大学、京都府立大学からそれぞれ1人が京都大学の8人とともに受講した。また、芦生研究林と舞鶴水産実験所との共同で開講した「森里海連環実習 I」では、3大学（京都学園大学2人、東京農工大学2人、宮崎大学1人）計5人と京都大学生10人が芦生研究林を利用して受講した。北海道研究林と北海道大学厚岸臨海実験所との共同で開講した「森里海連環実習II」は、北海道大学11人と京都大学7人の計18人が北海道研究林を利用して実施した。テレビ会議システムを活用することにより、「公開森林実習Ib」と同時期に北海道研究林で実施されていた京都大学農学部の研究林実習III履修生との間で、実習内容の相互紹介や実習経験の意見交換を行った。研究林実習（III）においても、公開森林実習と同様の樹木実習とライトトラップによる昆虫相の実習を行っており、その結果を芦生と比較させた。本州と北海道という異なる植生帯で実習を受講している学生間で意見交換、質疑応答をすることができ、履修生の森林生態系に関する理解を深める一助とした。以上、本教育拠点では2017年度に4つの公開実習を実施し、11の大学・専門学校から計46人（延べ151人）を受入れた。また、実習のフォローアップを目的として、共同利用実習履修者等を招き、「人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点・実習検討会」を2018年3月19～20日に開催した。公開森林実習IおよびIIの履修生（公立鳥取環境大学1人、京都府立大学1人、人間環境大学3人）、修士研究のために拠点を利用した修士学生（近畿大学1人）と拠点運営委員（学外）3人、拠点教員5人が参加した。利用者から、より効果的な公開実習の実施方法の提案や対象とする学生像に関する質疑応答が行われ、今後の拠点活動にとって有意義な議論が行われた。検討会2日目は、「人と自然のつながりを学ぶ」エクスカージョンとして安曇川下流に位置する針江地区を訪れ、「針江生水の郷委員会」のガイドによる案内のもと、湧き水と水路を直結し、炊事場、洗濯場、冷蔵庫などの機能を併せ持つ仕組み「かばた」を視察した。普段見る機会があまりない自然と人々の暮らしの接点の一面を興味深く見学し、森と人とのつながりについて考察した。

■他大学による実習等の受け入れ

芦生研究林では3大学（関西大学、兵庫県立大学、京都光華女子大学）、北海道研究林では3大学（北海道教育大学、酪農学園大学、東京農業大学）、上賀茂試験地では5大学（京都教育大学、京都学園大学、京都府立大学、京都精華大学、兵庫県立大学）から、合計20科目の実習等を受け入れた。また、芦生研究林と上賀茂試験地では、サマープロジェクトとして、香港理工大学、北京大学、梨花女子大学と京都大学の合同プログラムを受け入れ、実施した。拠点全体での利用大学は、2国立大学、3公立大学、6私立大学、海外3大学の計14大学であった。受講生の利用数は、芦生研究林で延べ64人、北海道研究林で延べ242人、上賀茂試験地で延べ247人、合計で延べ552人の利用があった。

■他大学生、大学院生による論文作成等のための利用

共同利用としては、北海道大学、酪農学園大学、北海道教育大釧路校、宇都宮大学、東京農業大学、横浜国立大学、岐阜大学、京都府立大学、近畿大学、神戸大学、広島大学、鳥取大学、琉球大学の学生・院生の卒業論文（9件）、修士論文（11件）、博士論文（3件）、他大学の教員・研究者による共同研究（25件）を受入れ、計46件、延べ674人が利用した。

■運営実施体制

2017年度は、拠点活動の充実に向けて、新たに常勤准教授（芦生研究林、京都本部より異動）と常勤講師（北海道研究林、2/1採用）を拠点施設に配置した。また、引き続き特定助教1人を雇用するとともに、年度当初より新たに拠点活動に従事する教務補佐員、非常勤職員各2人を配置し、各施設の設備および拠点運営体制の充実を進めた。他大学から申請のあった共同利用の採択および拠点の運営を決定する共同利用運営委員会については、5月30日に開催したほか、年度途中で申請のあった共同利用に関しては、メール審議にて採択を行った。また、芦生研究林の教育・研究利用の促進を目指して、5月20日に大学・研究機関の学生・教職員を対象とする芦生研究林現地ツアーを実施した。

(6) 研究活動・外部資金の獲得状況

研究プログラム委員会委員長／山下 洋

2017年度 受託研究

(金額の単位はすべて千円)

委託者	委託研究名	研究担当者	職種	代表者名 (所属)	研究課題名	分担課題名	2017年度 交付額
東京大学	【国家基幹研究開発推進事業】海洋資源利用促進技術開発プログラム 海洋生物資源確保技術高度化	山下 洋	教授	渡 邊 良 朗 (東京大学大気海洋研究所)	沿岸海域複合生態系の変動機構に基づく生物資源生産力の再生・保全と持続的利用に関する研究		2,852
国立研究開発法人 科学技術振興機構	平成29年度戦略的創造研究推進事業 (CREST)	荒井 修亮	教授		海洋生物多様性および生態系の保全・再生に資する基盤技術の創出「データ高回収率を実現するバイオリギング・システムの構築 ～魚類の個体群・群集ダイナミクス解明に挑む～」	通信タイプと記憶タイプを組み合わせたデータ受信プラットフォームの開発 (課題Ⅲ), 個体の遊泳記録統計量の同時共有技術 (課題Ⅳ) 新規バイオリギング・システムの構築 (課題Ⅴ), 新バイオリギング・システムを活用した水棲生物のモニタリング技術の普及 (課題Ⅵ)	3,941
国立研究開発法人 科学技術振興機構	平成29年度戦略的創造研究推進事業 (CREST)	益田 玲爾	准教授		環境DNA分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発	潜水目視調査と水槽実験による環境DNA技術の現場検証および定量性の精緻化	18,271
東京大学	革新的技術開発・緊急展開事業 (うち地域戦略プロジェクト)	長谷川 尚史	准教授		ICTを活用した木材SCMシステムの構築		250
国立研究開発法人 科学技術振興機構	平成29年度戦略的創造研究推進事業 (さきがけ) *	伊勢 武史	准教授		粒子フィルタを用いた植林植生モデルのデータ同化手法の確立と環境変動下の植生動態の将来予測		13,528
大学コンソーシアム京都	「大学の知」を活かした多角的な市政研究事業	伊勢 武史	准教授		京都の風土・自然と文化のかかわりの多面的研究		1,200
受託研究	計6件						40,042

(* 2016年度の繰り越し分23.4千円を含む)

2017年度 受託事業

委託者	受託事業名	研究担当者	職種	2017年度 交付額
独立行政法人 日本学術振興会	大学の森で学ぼう 2017 ～森は水をきれいにする～	北海道研究林 林長 舘野 隆之輔	准教授	329
受託事業	計1件			329

2017年度 機関経理補助金

委託者	受託事業名	研究担当者	職種	2017年度 交付額
京都府	1 まち1 キャンパス事業(大学・地域連携プロジェクト支援) 人と自然の関係を多面的に考察する：エコツーリズムとはなんなのか	伊勢 武史	准教授	676
南丹市	1 まち1 キャンパス事業(大学・地域連携プロジェクト支援) 人と自然の関係を多面的に考察する：エコツーリズムとはなんなのか	伊勢 武史	准教授	676
機関経理補助金 計2件				1,352

2017年度 共同研究

代表者(団体)	研究課題名	研究担当者	職種	2017年度 交付額
鳥取大学乾燥地研究センター 共同利用・共同研究拠点「乾燥地 科学拠点」共同研究	黄土高原の半乾燥林における優占樹種の菌根タイプ の違いが窒素循環に与える影響	(代表) 舘野 隆之輔	准教授	248
公益財団法人たばこ総合研究セ ンター平成29年度研究助成	持続可能な茶業をめざした地域資源マネジメント～ 大和茶を事例として～	清水 夏樹 (代表)山本芳華准教授 (平安女学院大学 国際観光学部)	特定 准教授	500
共同研究 計2件				748

2017年度 寄附金

寄付者(団体)	プロジェクト名	担当教員	職種	2017年度 交付額
公益財団法人 日本財団	森里海連環再生プログラム助成金 (Link Again Program) *	山下 洋	教授	270,090
一般財団法人 自然環境研究セン ター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	吉岡 崇仁	教授	300
一般財団法人 自然環境研究セン ター	森林の炭素循環動態に関する研究助成金	吉岡 崇仁	教授	1,440
一般財団法人 自然環境研究セン ター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	徳地 直子	教授	360
一般財団法人 自然環境研究セン ター	森林の炭素循環動態に関する研究助成金	徳地 直子	教授	1,440
サントリーホールディングス株式 会社 コーポレートコミュニケー ション本部	都市近郊の里山林における「環境林施業と持続可能な バイオマス利用」	長谷川 尚史	准教授	1,150
認定NPO法人 アースウォッチ・ジ ャパン	森林の持つ環境保全機能と森林環境教育に関する研 究助成	中島 皇	講師	602
認定NPO法人 アースウォッチ・ジ ャパン	森林の持つ環境保全機能と森林環境教育に関する研 究助成	中島 皇	講師	390
一般財団法人 自然環境研究セン ター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	寄元 道徳	助教	360
一般財団法人 自然環境研究セン ター	森林の炭素循環動態に関する研究助成金	寄元 道徳	助教	1,200
舞鶴とり貝組合	舞鶴湾の環境調査助成	鈴木 啓太	助教	500
宮津湾とり貝育成組合	宮津湾の環境調査助成	鈴木 啓太	助教	90
株式会社MMT	音響技術による水中生物の生態解明と環境影響評価 の手法開発に関する研究	木村 里子	特定 研究員	939
公益財団法人 ひと・健康・未来研 究財団	自然公園における住民自立型環境ガバナンスの形成 に関する調査とモデル構築の試み	黄 琬恵	研究員	660
公益財団法人 阪本奨学会	森林施業遂行の為の森林管理技術取得及び知識の向 上	山内 隆之	技術 専門員	300
公益財団法人 日本科学協会	黒潮流域の砂浜海岸に出現する仔稚魚類の利用様式 の解明とその保全を目指して	山内 洋紀	技術 職員	230
美山ふるさと株式会社	芦生研究林の環境保全を目的とする助成 *	伊勢 武史	准教授	200

芦生山の家	芦生研究林の環境保全を目的とする助成 *	伊勢 武史	准教授	100
針畑活性化組合	芦生研究林の環境保全を目的とする助成 *	伊勢 武史	准教授	40
寄附金	計19件			280, 391

(* 2017年度分として受け入れ。教授会承認日は2018-05-16および2018-06-13)

(注：2016年度に交付された「森里海連環学教育プログラム」(日本財団高度人材育成プログラム)は、2017年度執行分を含んでいたが、この表には掲載していない。2016年度年報を参照のこと。)

2017年度 科学研究費補助金 (代表者)

(交付機関はすべて独立行政法人日本学術振興会)

研究種目	研究者	職種	代表者名 (所属)	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	交付額合計 ※予定含む	2017年度 交付額
基盤研究(A)	山下 洋	教授	—	2016-2019	16H02563	森から海までの生態系連環機構の解明によるニホンウナギ資源の再生	40, 300	9, 620
基盤研究(A)	荒井 修亮	教授	—	2017-2021	17H01678	紅海・インド洋・西太平洋沿岸域におけるジュゴン保護区の設定とイスラム漁村への影響	42, 510	16, 120
基盤研究(B)	徳地 直子	教授	—	2015-2018	15H04515	新しい森林生態系の窒素飽和メカニズムの提案とそれに基づく脆弱性の診断	16, 250	4, 030
基盤研究(B)	舘野 隆之輔	准教授	—	2015-2018	15H05113	降雨パターンの変化にたいする中国黄土高原の半乾燥地生態系の脆弱性の評価	15, 600	3, 770
基盤研究(C)	吉岡 崇仁	教授	—	2017-2019	17K07839	森林集水域における溶存有機物と硝酸塩の濃度形成メカニズムに関する研究	4, 810	1, 820
基盤研究(C)	吉積 巳貴	特定 准教授	—	2017-2019	17K00689	地域資源活用を通じた住民自立型防災まちづくり	4, 550	1, 560
基盤研究(C)	中西 麻美	助教	—	2014-2017	26450193	パイプモデルアロメトリーを用いたヒノキの葉バイオマス推定と窒素利用特性の評価	4, 810	0
基盤研究(C)	中西 麻美	助教	—	2017-2020	17K07840	酷暑がヒノキの花粉生産と幹成長に及ぼす影響	4, 810	1, 300
基盤研究(C)	佐藤 崇	研究員	—	2017-2019	17K07531	タラ目魚類の進化的解明：ミトコンドリアゲノムミクス漁村への影響	4, 680	1, 820
若手研究(A)	市川 光太郎	准教授	—	2016-2019	16H06158	紅海・アンダマン海におけるジュゴンの摂餌戦略比較—潮汐変動の影響に関する研究	25, 090	6, 630
若手研究(A)	小林 和也	講師	—	2017-2019	17H05048	性を維持する分子基盤の解明	25, 220	12, 090
若手研究(B)	石原 正恵	准教授	—	2016-2019	16K18719	気候変動・分断化が進むアジアの森林の将来像：大規模野外データと群集モデルの結合	4, 290	1, 430
若手研究(B)	小林 志保	助教	—	2017-2018	17K15302	内湾からの栄養塩流失の鍵を握る準易分解性溶存有機物の動態の解明	4, 420	2, 730
挑戦的 萌芽研究	伊勢 武史	准教授	—	2015-2017	15K12277	なぜ人の幸福に自然が必要か—文化的生態系サービスの意味を再定義する—	3, 900	1, 040
研究活動 スタート支援	後藤 龍太郎	助教	—	2017-2018	17H06795	共生からの解放にともなう種多緑化のメカニズムの解明：海産二枚貝類における検証	2, 730	1, 430
科学研究費補助金	計15件							65, 390

2017年度 科学研究費補助金 (分担者)

(交付機関はすべて独立行政法人日本学術振興会)

研究種目	研究者	職種	代表者名 (所属)	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	交付額合計 ※予定含む	2017年度 交付額
基盤研究(S)	中野 智之	助教	野尻 幸宏 (筑波大学)	2014-2018	26220102	海洋酸性化の沿岸生物と生態系への影響評価実験	—	1, 690
基盤研究(A)	山下 洋	教授	笠井 亮秀 (北海道大学)	2017-2020	17H01412	環境DNAを用いた全国の河川におけるニホンウナギの分布・生息量推定	—	910
基盤研究(A)	益田 玲爾	准教授	笠井 亮秀 (北海道大学)	2017-2020	17H01412	環境DNAを用いた全国の河川におけるニホンウナギの分布・生息量推定	—	910
基盤研究(A)	原村 隆司	特定助教	依田 憲 (名古屋大学)	2016-2019	16H01769	移動生態学的アプローチを基盤とした生物分散問題解決のための実証的研究	—	1, 170
基盤研究(B)	徳地 直子	教授	佐藤 拓哉 (神戸大学)	2015-2017	15H04422	複合生態系における寄生者感染動態と群集動態の関係の統合理解	—	195
基盤研究(B)	舘野 隆之輔	准教授	佐藤 拓哉 (神戸大学)	2015-2017	15H04422	複合生態系における寄生者感染動態と群集動態の関係の統合理解	—	195

基盤研究(B)	館野 隆之輔	准教授	鶴川 信 (鹿児島大学)	2016-2019	16H04937	窒素安定同位体比の変化に基づく外生菌根菌から樹木への窒素供給機能の評価手法の開発	—	975
基盤研究(B)	館野 隆之輔	准教授	智和 正明 (九州大学)	2017-2020	17H03833	大気窒素沈着が森林流域の窒素循環に与える感受性の地域性評価	—	650
基盤研究(B)	清水 夏樹	特定 准教授	山路 永司 (東京大学)	2014-2017	26304034	モンスーンアジア農村地域の持続的発展と比較農村計画学の確立	—	130
基盤研究(B)	中野 智之	助教	佐々木 猛智 (東京大学)	2014-2017	26291077	海産軟体動物の系統地理と種分類：アジア北西太平洋域における広域解析	—	195
基盤研究(B)	後藤 龍太郎	助教	狩野 泰則 (東京大学)	2015-2018	15H04412	深海化学合成系における腹足類の進化・適応と分散	—	455
基盤研究(B) 特定分野研究	吉積 巳貴	特定 准教授	吉野 章 (京大推進環境学学)	2015-2017	15KT0032	低窒素型農畜産業を軸とした食料循環に関する学際研究	—	575
基盤研究(B) 特定分野研究	清水 夏樹	特定 准教授	吉野 章 (京大推進環境学学)	2015-2017	15KT0032	低窒素型農畜産業を軸とした食料循環に関する学際研究	—	575
基盤研究(C)	伊勢 武史	准教授	中島 啓裕 (日本大学)	2015-2017	15K07487	自動撮影カメラとラジコンヘリによるニホンジカの革新的な密度推定手法の開発	—	130
基盤研究(C)	清水 夏樹	特定 准教授	服部 俊宏 (明治大学)	2016-2018	16K07948	臨海農業集落の存続基盤の明確化と類型化手法の確立	—	325
挑戦的 萌芽研究	徳地 直子	教授	大手 信人 (京大情報学 研究科)	2015-2017	15K14756	森林の窒素飽和現象長期予測のためのハイブリッドモデルの構築	—	58
挑戦的 萌芽研究	小林 志保	助教	中田 聡史 (神戸大学)	2016-2018	16K13882	沿岸域における海表面塩分マッピングのための海色衛星データ同化手法の開発	—	520
科学研究費補助金 計17件							9,658	

2017年度 科学研究費補助金（特別研究員奨励費）

（交付機関はすべて独立行政法人日本学術振興会）

研究者	職種	指導教員名	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	交付額 合計 ※予定含む	2017年度 交付額
岩岡 史恵	特別研究員 (DC1)	館野 隆之輔	2017-2019	17J07686	半乾燥地の外来種林の在来種林転換方法確立に向けた外生菌根菌の窒素獲得機能評価	2,800	1,000
科学研究費補助金（特別研究員奨励費） 計1件						1,000	

2017年度 研究助成金（学生取得分）

助成名	課題名	学生氏名	所属・学年	担当指導教員	2017年度 交付額
公益財団法人 水産 無脊椎動物研究所	海産等脚類ニホンコツブムシを用いた甲殻類の双方向音コミュニケーションの行動学的研究	中町 健	理学研究科 博士後期課程 2年	朝倉 彰	1,000
公益財団法人 水産 無脊椎動物研究所	サメハダテゾルモゾルの捕食行動と腕の形態についての研究	井上 峻輔	理学研究科 修士課程2年	朝倉 彰	600
公益財団法人 日本科学協会 笹川科学研究助成	海底堆積物を用いた環境DNA手法の開発と津波前後の魚類群集推定への応用	尾形 瑞紀	農学研究科 修士課程2年	益田 玲爾	710
寄附金 計3件					2,310

2017年度 その他の補助金

交付機関	研究者	職種	研究課題名	2017年度 交付額
大阪湾広域臨海環境整備センター	小林 志保	助教	海色衛星観測データを用いた埋立地周辺を含む大阪湾における赤潮動態の解明（その3）	1,710
その他の補助金 計1件				1,710

(7) 社会連携活動

1) フィールド研主催事業

① 京都大学・日本財団森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」

日時：2017年10月28日（土）13:00～16:45

会場：北部総合教育研究棟1階 益川ホール

プログラム：

基調講演「森里海連環学；森里海のもつれた三角関係を解く」

山下 洋 フィールド研センター長

特別講演「「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」について」

奥田 直久 環境省自然環境局自然環境計画課長

特別講演「社会に新しい価値を生み出す：日本の「革新者」たちのキラースキル」

齊藤 義明 野村総合研究所 2030年研究室長

教育プログラム報告「森里海連環学教育プログラムにおける教育成果・研究成果・社会への貢献」

朝倉 彰 森里海連環学教育ユニット長

森里海連環学の教育成果と実践に向けて

[活動報告1] 各グループ代表者（3人）：グループワークの報告・まとめ

[活動報告2] 修了生の活動報告

(1) 原田真実氏(経済産業省)

(2) KAYA ABDULGAFFAR 氏(トルコ・Ministry of Forest and Water Office of Turkey)

(3) KIEU KINH THI 氏(ベトナム・ダナン師範大学)

<クロージングセッション>

(1) HOANG HAI 氏(ベトナム・ダナン大学国際関係部部長)

(2) 倉田麻里氏(環境NGOイカオ・アコ理事)

(3) 梅村岳大氏(日本財団海洋事業部海洋チーム チームリーダー)

2) フィールド研共催・後援事業

① 第13回京都大学附置研究所・センターシンポジウム

「京都からの挑戦－地球社会の調和ある共存に向けて【京大起春風】」

日時：2018年3月17日（土）10:00-17:00

会場：おかやま未来ホール

主催：京都大学、京都大学研究連携基盤

3) 各施設等主催共催事業

① 芦生研究林

教育・研究利用現地ツアー 5月20日

芦生地域有害鳥獣対策協議会「知ろう、守ろう芦生の森」（共催） 8月5日

芦生研究林一般公開2017 <京大ウィークス参加イベント> 10月21日

② 北海道研究林

標茶町立標茶小学校 遠足 5月26日

木工教室（標茶町立沼幌小学校との共催） 6月26日

大学の森で学ぼう2017（ひらめき☆ときめきサイエンス～森の木を伐るとどうなるのか～） 8月4日

ミニ公開講座「自然観察会」（白糠区） <京大ウィークス参加イベント> 10月21日

「しべちゃアドベンチャースクール」ステージ6「冬の野外活動」 2018年1月20～21日

（標茶町教育委員会社会教育課との共催）

③ 和歌山研究林

ウッズサイエンス（計23回） 4月18日～2018年1月9日

総合的な学習の時間「SIMIZUタイム」（森林ウォーク） 5月31日

（和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催）

総合的な学習の時間「森のことを知ろう」環境（有田川町立八幡小学校との共催） 6月1日

夏季特別課外実習「関西研修」和歌山立海南高等学校	8月3～4日
職業体験学習（有田川町立八幡中学校との共催）	9月20～22日
ひらめき☆ときめきサイエンス「寄生虫が溪流魚を育む！？ハリガネムシを通して自然をみてみよう」 （神戸大学大学院理学研究科との共催）	9月30日
総合的な学習の時間「森は友だち 森林の町清水」環境 （有田川町立八幡小学校との共催）	11月9日
和歌山県紀の国森づくり基金活用事業（緑育推進事業） （株式会社マルカ林業との共催）	11月17日
④ 上賀茂試験地	
上賀茂試験地春の自然観察会	4月22日
上賀茂試験地秋の自然観察会〈京大ウィークス参加イベント〉	11月3日
京都市青少年科学センター 未来のサイエンティスト養成事業 秋冬期講座	12月2日
⑤ 徳山試験地	
周南市連携事業 和田中学校環境学習	6月23日
第15回周南市連携講座	6月24日
周南市・フィールド研連携公開講座〈京大ウィークス参加イベント〉	10月14日
第16回周南市連携講座	11月25日
⑥ 北白川試験地	
外来種いけばな（京都市、池坊、スターバックスとの共催）	6月3日、12月3日
⑦ 紀伊大島実験所	
古座川合同調査（古座川プロジェクト：第137～148回）	毎月開催
⑧ 舞鶴水産実験所	
水産・臨海・臨湖実験所フィールド実習ワークショップ 「水産実験所における実践教育の新たな取り組みー水産海洋実践教育ネットワーク」	4月7日
安全管理講習会	4月10日
SPP事業実習 京都府立西舞鶴高等学校	5月23日～9月23日
京都府立海洋高等学校 講師・審査員	7月7日、2018年2月1日、2月20日
SPP事業実習 京都府立南陽高等学校	7月8日～8月2日
SSH事業実習 京都教育大学附属高等学校	7月26～28日
福井県立若狭高等学校 臨海実習講師・講演	9月6日
京都府立久美浜高等学校 講師	11月1日
博物館実習（館園実務）	12月23～27日
京都市立大藪小学校 講師	2018年1月31日
⑨ 瀬戸臨海実験所	
春休みイベント「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」	4月1～9日
春休みイベント「大水槽のエサやり体験」（月・火・水曜日に開催）	4月3～5日
瀬戸海洋生物学セミナー（第46～48回）	4月11日、4月15日、6月16日
きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験」	4月29日、5月27日、6月24日
博物館実習	5月22～28日
特別企画展「ヤドカリと貝殻ー生態と芸術ー」	7月8日～10月22日
夏休みイベント「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」	7月22日～8月31日
夏休みイベント「大水槽のエサやり体験」（月・火・水曜日に開催）	7月24日～8月31日
博物館実習（館園実務）	10月16～20日
きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の飼育体験」	10月21日、12月9日、2018年2月3日
瀬戸臨海実験所 施設見学会〈京大ウィークス参加イベント〉	10月28日
自衛消防訓練	11月28日
冬休みイベント「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」	12月23日～2018年1月8日
特別企画展「ガタガール生物展」	2018年3月3日～5月30日
春休みイベント「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」	2018年3月24～31日

春休みイベント「大水槽のエサやり体験」(月・火・水曜日に開催)

2018年3月26～28日

4) 森里海連環学教育ユニット主催共催事業

- ① 瀬戸内海研究フォーラム in 京都「川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系」

場所：百周年時計台記念館国際交流ホール

9月6～7日

- ② 森里海連環学教育プログラム国際ワークショップ「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」

場所：北部総合教育研究棟 益川ホール等

10月27～28日

- ③ 森里海国際セミナー

「Future Prospect of Eco-tourism Research for Studies on the Connectivity of Hills, Humans and Oceans (CoHHO)」

場所：ハノイ工科大学 (ベトナム)

11月1日

- ④ 森里海連環学教育プログラム2017年度3月期修了証授与式

場所：旧演習林事務室棟 ラウンジ

2018年3月26日

(8) 広報活動

1) フィールド研の刊行物

□ フィールド研年報

『京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第14号』, 京都大学フィールド科学教育研究センター, 129p., 2017.

□ FSERC News

<No. 42 2017年6月>

—目次—

センター長就任挨拶：就任のご挨拶 フィールド科学教育研究センター長 (山下 洋)

社会連携ノート：社会連携シンポジウム「ひろげよう、フィールドの世界」を開催 (前田 雅彦)

新人紹介：小林 和也 (森林情報学分野 講師)

後藤 龍太郎 (基礎海洋生物学分野 助教)

受賞の記録：

活動の記録：

2017年1月～4月

予定：

研究者の異動：

フィールド散歩：春の各施設及びその周辺の写真3枚

<No. 43 2017年10月>

—目次—

研究ノート：環境DNA 研究の最前線：海水から魚の量や種類を知る技術 (益田 玲爾)

社会連携ノート：白浜水族館特別企画展「ヤドカリと貝殻—生態と芸術—」を開催 (朝倉 彰)

京大ウィークス2017でフィールド研6施設がイベントを開催 (市川 光太郎)

受賞の記録：

予定：

活動の記録：2017年5月～8月

研究者の異動：

フィールド散歩：夏から秋の各施設及びその周辺の写真6枚

<No. 44 2018年2月>

—目次—

研究ノート：外来種オオヒキガエルの防除法 (原村 隆司)

社会連携ノート：森里海国際シンポジウムの開催 (清水 夏樹)

受賞の記録：

活動の記録：2017年9月～12月

研究者の異動：

予定：

2018年度公開実習の実施予定：

フィールド散歩： 秋から冬の各施設及びその周辺の写真3枚

2) 施設等の刊行物

□森林研究（森林生態系部門紀要）

『森林研究』80号，京都大学フィールド科学教育研究センター森林生態系部門発行，94p.，2018.

－目次－

資料

京都大学北海道研究林標茶区における水生昆虫層と分類群同定キー (中川 光，佐藤 拓也)

附表

79号掲載論文「間伐とシカ排除柵設置がスギの幹成長に及ぼす直接的・間接的影響－芦生の未間伐スギ人工林における事例－」表1 (オンライン版 <http://hdl.handle.net/2433/192796> のみに掲載)

□瀬戸臨海実験所紀要

『Publications of the Seto Marine Biological Laboratory』 Volume 44，京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所編集，(逐次オンライン出版 <http://hdl.handle.net/2433/208999>)

(2017年度は発行なし)

□研究林・試験地情報

『研究林・試験地情報 2016（平成28）年度』，京都大学フィールド科学教育研究センター森林・里域フィールド管理部門，88p.，2018.

－目次－

各施設年次報告

芦生研究林年次報告 (伊勢 武史)

北海道研究林年次報告 (舘野 隆之輔)

和歌山研究林年次報告 (長谷川 尚史)

上賀茂試験地年次報告 (徳地 直子)

徳山試験地年次報告 (吉岡 崇仁)

北白川試験地年次報告 (吉岡 崇仁)

個別報告

和歌山研究林における災害対策工事の取り組み (荒井 亮)

北海道研究林で行われた直営伐出作業の生産性調査 (北川 陽一郎)

研修報告

研究資料

業務資料

□瀬戸臨海実験所年報

(2017年度は発行なし)

□森里海連環学教育ユニット

『2017年度森里海連環学教育プログラム履修要覧』，京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニット 編集・発行，95p.，2016.

『森里海連環学教育ユニット活動記録2017』，京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニット 編集・発行，50p.，2018.

『森里海NEWSLETTER』 No. 8, 京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニット 編集・発行，26p.，2017. (2017年4月 オンライン出版)

『森里海NEWSLETTER』 No. 9, 京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニット 編集・発行，27p.，2017. (2017年9月 オンライン出版)

『2017年度森里海連環学教育プログラム インターンシップ・国際学会発表成果報告書集』，京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニット 編集・発行，495p.，2018.

3. 各施設等の活動

(1) 各施設等の活動概要

1) 芦生研究林

芦生研究林長 伊勢 武史

■教育研究

2017 年度における芦生研究林の教育研究利用者総数は 2,952 人で、昨年より 92 人増加した。実習等の教育利用者数は 1,016 人で、うち学内利用は 656 人と前年より 149 人減少した一方、他大学の利用は 227 人で 16 人増加した。また研究利用者数は 1,936 人であり、学内利用が前年に比べ 293 人増加、他大学が 26 人増加した。教育研究の受け入れサービス向上のため、送迎など技術職員の直接的な補助が 150 人と前年より 181 人減少した（いずれも延べ人数）。

学生実習のうち 2 件はフィールド研が主催し全国の大学から学生を募集して行われた。全国大学演習林協議会と連携して開催された公開森林実習では、8 大学（筑波大学、広島大学、東京農工大学、早稲田大学、九州大学、京都学園大学、鳥取環境大学、人間環境大学）から 26 人の学生が参加し、協定に基づく単位互換手続きが執られた。この実習の前半日程と同時に本学の少人数セミナーも開催された。「森里海連環学実習Ⅰ」では、学内の複数の学部生のほか、他大学（京都学園大学、宮崎大学、東京農工大学）からの学生も参加した。

研究として、本年もシカによる植生変化に関する内外の研究者による一連の事業が実施された。上谷の一流域において 13ha の集水域全体を防除柵で保護する試験が行われており、設置後 10 年を経過して回復がみられる植生のモニタリングとともに、水質に関するモニタリングも継続して実施し、卒業論文等の作成に活用された。近年シカによる食害が著しい芦生研究林では、このような防鹿柵の設置と管理は、教育研究を実施する上で大変重要な業務となっており、本年度も研究林職員が積極的に柵の維持管理作業の補助を行った。さらに今年度は、上谷の別の流域にも大規模防鹿柵を設置した。

加えて、フィールド研の研究プロジェクトである林内の実生発生調査、種子生産量調査および採水・水質調査を継続した。

■社会連携

京大ウィークス参加事業として芦生研究林一般公開を 10 月 21 日に開催した。教職員による下谷、森林軌道の散策や、川魚調査体験、サイエンスカフェなどのイベントに応募者、当日参加者併せて 60 人が参加した。

地域のガイド団体によって設立された一般社団法人芦生もりびと協会との協定を締結し、ガイドツアーを総計 2,610 人受け入れた。その他に一般利用で 1,718 人が利用した。さらに、芦生地域有害鳥獣対策協議会による「知ろう、守ろう芦生の森植生調査等ボランティア活動」を共催した。

■施設の特記事項

2016 年に、京大基金の枠組みで芦生研究林基金というクラウドファンディングを立ち上げた。2017 年度にも引き続き多くの寄付が寄せられた。特に、12 月から 3 月まで実施したキャンペーンでは、寄付してくださった方々への記念品（芦生研究林オリジナル手ぬぐい）を差し上げるという企画であった。集まった寄付金は芦生研究林の保護と教育、研究の発展のために有効に使用していく予定である。

台風被害については、第 2 章第 1 節第 4 項「芦生研究林と上賀茂試験地における台風 21 号被害」をご参照いただきたい。

2) 北海道研究林

北海道研究林長 舘野 隆之輔

■教育研究

北海道研究林は、京都大学における教育研究に加えて、教育関係共同利用拠点施設として、他大学の教育研究も積極的に受け入れている。2017年度は教育利用17件、研究利用34件、その他利用3件の合計54件の利用申請を受け付け、延べ2,036人の利用を受け入れた。2013年以降は利用者が5年連続で延べ2,000人を超えている。

教育利用は、学内の実習として、全学共通および農学部の実習が3回と少人数のILASセミナー1回が行われ、延べ591人の利用があった。今年度から北海道研究林の常駐教員が2人体制となり、新任教員の専門分野に対応したメニューを組み入れるなど新しい試みを行った。「森里海連環学実習II」は北海道大学厚岸臨海実験所と共同で行い、9月1～7日の7日間の日程で、本学の7人と、北海道大学の11人の計18人が参加し、別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質、水生生物調査を通じて、森・里・海の繋がりについて学んだ。「研究林実習III」は、8月24～31日の8日間の日程で18人が参加し、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに間伐施業などを実践した。「研究林実習IV」は、2月19～25日の7日間の日程で16人が参加し、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学んだ。また少人数セミナーが8月5～8日の4日間の日程で開講され、植生と環境条件との関わりを野外観察や調査を通して学び、また間伐などの林業体験を行った。ILASセミナー「北海道の森林」には、8人が参加し、2016年度から教育関係共同利用拠点事業である「公開森林実習II」には、京都府立大学、鳥取環境大学、東京医科歯科大学から3人が参加した。

その他、2017年度は、学外の実習やセミナーとして、酪農学園大学3件や北海道教育大学釧路校2件など延べ329人の利用があり、教育拠点としての他大学実習利用も増加傾向にある。

研究利用は、34件の申請を受け付け、延べ830人の利用があった。本学9件延べ455人、他大学22件延べ342人、一般3件延べ33人で、研究内容は森林の植生と土壌の関わりに関する研究、道東特有の気象条件と大気窒素沈着に関する研究、森と川の繋がりに関する研究、森林内の植物・動物・微生物に関する研究など多岐にわたった。

■社会連携

社会連携として、6件の催しを実施し、延べ227人の利用があった。日本学術振興会の研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の一環として、「大学の森で学ぼう2017～森の木を伐るとどうなるのか～」と題して、小学5,6年生、中学生、高校生を対象として行った。開催日は、8月4日で、参加者は12人に加えて、近隣高校の教員や受講生の保護者3人が見学にきた。

また2017年度も京大ウィークスの一環としてミニ公開講座を白糠区で行った。開催日は、10月21日で、参加者は10人であった。その他、例年行っている沼幌小学校との共催の「木工教室」、標茶町教育委員会との共催の「しべちやアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座」、標茶高校インターンシップ受入れ、標茶小学校遠足受入れなどを行った。また近隣高校とのSSH関連の連携を開始した。

■施設の特記事項

2017年度は、昨年度に引き続き、教育拠点としての他大学教育利用の推進に力を入れた。近年の利用の増加に伴い、実習などで施設が埋まる時期の研究利用を断ることもあったが、施設を一部改築するなどの整備を進めた。また社会連携活動の一環として取り組んできた「ひらめき☆ときめきサイエンス」に関連して、「平成29年度ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」を受賞することが出来た。施設一丸となって6年に渡り取り組んできた成果であると考えている。2017年度は、新任講師の赴任に伴い教員二人常駐体制となった最初の年度となったが、これまでとは異なる研究分野の利用者の受入れが増加し、また実習内容も一部更新するなど、新しい取り組みを進めた1年であった。

3) 和歌山研究林

和歌山研究林長 長谷川 尚史

■教育研究

和歌山研究林では、2017年度に17件の研究利用申請を受け付け、延べ1,031人の研究利用を受け入れた（昨年比延べ222人増）。学内からの利用はフィールド研教職員や農学研究科、農学部などの利用があったほか、学外からは神戸大学、京都府立大などの高等教育機関の調査が実施された。

教育利用としては9件の申請を受け、延べ224人の利用があった（昨年比137人増）。学内では1回生向けの少人数セミナー1件が開催された。また学外利用としては、有田川町内の小学校および高等学校による体験学習や中学校の職業体験のほか、SSH指定校である和歌山県立海南高校の1年生2人、2年生7人を対象にした課外実習と、本年度設立されたばかりの和歌山県農林大学校林業研修部の研修をはじめて受け入れた。また県立有田中央高等学校清水分校の利用として、今年も「SHIMIZU・タイム(森林ウォーク)」を開催したほか、3年ぶりに3年生対象の選択科目であるウッズサイエンスを開講した。ウッズサイエンスは同校との協定に基づく1年間のプログラムで、2002年度から森林調査法や森林科学に関する講義、実習を行っている。受講生は地域の森林組合などに就職するケースもあり、地域の活性化および人材育成に関する社会連携事業としても位置づけている。今年度の受講生は1人であったが、受講生は上記の和歌山県農林大学校林業研修部に進学し、地域の人材育成にも貢献している。また小学校の利用としては、今年度も町立八幡小学校の総合的な学習の時間「森のことを知ろう」を受け入れ、技術職員を中心に対応した。また昨年度から独立行政法人日本学術振興会の事業である「ひらめき☆ときめきサイエンス」を神戸大学大学院理学研究科との共催で実施している。今年度も「寄生虫が溪流魚を育む！？～ハリガネムシを通して自然をみてみよう～」を実施し、県外から11人の高校生と引率者5人が参加し、参加生徒に未来博士号を授与した。

■社会連携

一昨年度に実施団体として登録を行った和歌山県の「紀の国緑育推進事業」に関し、同様に登録している清水森林組合およびマルカ林業（株）と連携した教育活動を昨年に引き続き実施した。今年度は和歌山市立野崎小学校のマルカ林業（株）所有山林における学校行事に研究林教職員が参加し、間伐体験や樹木識別などの環境教育を行った。また3回目となる京大ウィークス事業「和歌山研究林ミニ公開講座」は、有田川町や教育委員会、地域の公共施設等にご協力いただき計画しており、定員の20人を上回る31人の応募があったが、台風の接近により中止した。

さらに2012年度から活動している、地権者であるマルカ林業株式会社、和歌山県、およびフィールド研で構成する三者協議会については、本年度も和歌山県県有林およびマルカ林業株式会社の間伐施業地における調査に協力するとともに、地域における持続的森林管理手法に関する意見交換を行った。本協議会における情報収集を元に立案した森林経営計画については、清水森林組合との協定に基づいて実行し、切捨間伐4.68ha、搬出間伐4.72ha、415mの作業道作設と、研究林利用者が利用できる路網への整備を行った。

■施設の特記事項

和歌山研究林の事務所・研究棟は仮設物を元にしたプレハブであり、大人数の実習や研究利用を受け入れにくいことから、清水市街に清水分室を設置し、少しでも多くの利用者・利用グループを受け入れられるよう工夫している。これらの努力によって研究林利用者数は大きく伸びており、本年度の総利用者数は延べ1,601人と、2010年度から倍増している。宿泊可能人数の制限で、利用者数は限界に達しているが、今年度は研究棟の一部を改造してシャワールームを2機設置するなど、利便性の向上に努めている。一方、予算減少の中、842ha中約450haを占める人工林の整備・利用が進まないことも大きな問題であるが、上述の森林経営計画の実行と合わせ、県の環境林整備事業を活用して40haの保育間伐も行った。さらに近年、搬出間伐や路網作設などの業務が減少する中、技術職員の技術レベル維持・向上を図る必要があることから、必要性の高い事業を直営作業によって実施することとした。本年度は路網の維持管理作業において作業機が接触する立木を伐採、搬出、販売したほか、作業道の拡幅、新設も再開した。これらの直営事業の計画、実行には、昨年度までに整備したLiDARによる微地形図や立木データを活用するとともに、さらにドローンや林内レーザースキャナなどの新たな技術の活用も模索しているところである。

4) 上賀茂試験地

上賀茂試験地長 徳地 直子

■教育研究

2017 年度の利用申請は計 83 件あり，教育研究に市民の見学などの利用も加えると延べ 2,597 人が訪れた。

学生実習など教育関係では 34 件の利用があり，利用者数は延べ 1,026 人であった。教育関係共同利用拠点として学外からの利用も積極的に受け入れており，他大学の学生を対象にした実習「公開森林実習 I-近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴-」には 8 大学 1 専門学校（人間環境大学，筑波大学，広島大学，東京農工大学，早稲田大学，九州大学，日本自然環境専門学校，京都学園大学，鳥取環境大学）から 27 人が参加した。他にも京都精華大学，京都府立大学，京都教育大学，京都学園大学，兵庫県立大学の実習を受け入れた。

研究に関しては 45 件延べ 841 人の利用があり，研究成果として 5 件の査読論文，7 件の学会発表，2 件の卒業論文，1 件の修士論文が公表された。本学から近い一方で人口密集地域外という立地からドローンを活用した利用も多く，学生の訓練飛行や実習，技術開発も活発に行われている。

■社会連携

社会連携活動として，2017 年度も春と秋に 2 回の自然観察会を開催した。春の観察会 16 人，秋の観察会 33 人の参加があり，応募者にはリピーターも多い。このほかにも，京都市青少年科学センターの「未来のサイエンティスト養成講座」，京都銀行の「京銀ふれあいの森事業（森林ボランティア活動・巣箱観察会）」，総合地球環境学研究所による京都府立北稜高校生を対象とした「地球環境学の扉」，シニア自然大学校の自然観察会など，学外の諸団体が主催する観察会に加え，国有林や美山町森林組合といった外部の研修も積極的に受け入れた。

■施設の特記事項

2017 年 10 月 23 日の台風 21 号により外国産マツの造林地を中心に 327 本 238m³ が根返り，幹折れの被害を受けた（詳細は台風報告を参照）。これにより従来行ってきた，全林を対象としたナラ枯れ，マツ枯れの調査が行えなかった。

近畿中国森林管理局京都大阪森林管理事務所と行っているニホンジカ等個体数調整共同研究では，有害鳥獣捕獲申請および狩猟期の囲い罠による捕獲によりオス 3 頭，メス 4 頭を捕獲した。また，京都大学熊野寮への出没騒動などで増加が懸念されるイノシシ対策として，上賀茂猟友会の協力を得て，檻 2 基による捕獲をスタートさせ，2 頭を捕獲した。

森林フィールド教育共同利用拠点に係る施設整備として，永年の念願であった，事務室棟および実験室棟のトイレ改修を行った。これにより男女のトイレが分けられ，また実験室棟では和式のものが洋式に改良された。これまで上賀茂試験地での実習は女性のトイレが少ないこと，社会人向けの場合は和式では不便であったことなどから，トイレの時間により実習時間が短くなってしまう傾向にあったが，今回の改良により時間の短縮と快適さが著しく向上した。実習に至るまでの不便さや問題点が改善され，実習に集中できることは実習する側としても，おそらく受講者にとっても基本であると思われる，よりよい実習を目指すよいきっかけになった。

5) 徳山試験地

徳山試験地長 吉岡 崇仁

■教育研究

2017年度における徳山試験地の利用件数はほぼ例年通りであった。大学生による教育利用は延べ40人、高校生による教育利用8人、周南市との連携で実施した公開講座等での一般人の教育利用57人であった。この他、試験地内の樹木観察など個人・グループでの一般利用が113人あった。なお、研究に関する利用はなかった。

教育利用のうち、京都大学の全学共通科目である少人数セミナー（ILASセミナー）では、2科目を受け入れた。ILASセミナー「環境の評価」は、1泊2日（8月25～26日）の日程で実施され、延べ12人の京大生が利用した。8月25日に、檜皮生産のために維持されているヒノキ人工林の整備作業（林床植生の刈り取り）を行った。翌日は試験地事務所にてゼミのレポート発表を地元の徳山高校・光丘高校の生徒4人と教諭4人の参加の下に行った。もう一つのILASセミナー「瀬戸内に見る森里海連環」は、3泊4日（8月7～10日）の日程で実施され、延べ28人の京大生が利用した。試験地のヒノキ人工林と天然林の観察・見学の他、周南西緑地公園：旧徳山試験地（万葉の森）、末武川の最源流部・烏帽子岳の赤松ヶ平展望台や温見ダム（下松市の水道水源池）などを見学し、笠戸湾内で瀬戸臨海実験所の大和茂之助教の解説により海洋生物の観察を行った。

■社会連携

周南市との連携協定締結により連携事業に関する協力・利用を引き続き行い、2017年度は下記の通り計3回、延べ57人の受講生が徳山試験地を利用した。周南市公園花とみどり課と協力して実施している連携講座に関しては、第15、16回を6月と11月にそれぞれ実施し、受講者は19人と18人であった。連携公開講座（10月14日）は京大ウィークス2017として実施し、周南・光・山口・柳井市から、高校生（5人）を含む20人の参加者があった。まず始めに、公益社団法人全国社寺等屋根工事技術保存会理事である原皮師（もとかわし）の大野浩二氏による檜皮（ひわだ）採取作業の見学を行った。徳山試験地のヒノキ人工林は、2007年に文化庁から「ふるさと文化財の森（檜皮）」に指定され、檜皮葺のための檜皮を生産する森として維持されており、これを広く地域住民に知ってもらうための取組みでもある。次に水質分析に関する講義・実習を行い、pHメータやパックテストを用いた簡易測定法により、各種の測定を実演した。参加者が持参した水試料を測定し、水質の意味を知る機会となった。さらに、周南市との連携事業の一環として周南市立和田中学校の環境体験学習（ヒノキ人工林の林床整備作業）を実施したのに加えて、山口県立徳山高校との連携講義やSSH活動（山口・岩国・徳山高校共同セミナー）にも協力した。

■施設の特記事項

試験地内の「ふるさと文化財の森」に指定されたヒノキ人工林において、全国社寺等屋根工事技術保存会による檜皮採取の技術研修が昨年度に引き続き行われた。2004、2005年度に檜皮（荒皮）を採取したヒノキが10年を経過したので、2度目の檜皮（黒皮）を採取し、檜皮採取者（原皮師）を養成するものである。この研修によって檜皮（黒皮）が2,381kg生産された。

6) 北白川試験地

北白川試験地長 吉岡 崇仁

■教育研究

北白川試験地では、2017年度には、9件の教育利用、26件の研究利用、4件の一般利用、合計39件の利用申請を受け付けた。年間利用者の延べ人数は、教育利用が214人、研究利用が2,562人、一般利用が390人の合計3,166人であり、部局内と農学研究科からの利用が中心であった。

教育利用では、食品有機化学実習によるサワラの枝葉から抗菌物質を精製する実験、森林水文学・砂防学実習や土壌物理学実習による計測機器の使用方法や土壌採取方法の習得、森林科学実習による樹木識別や葉の形質測定、応用生態学実習による野生動物調査に用いる発信機の使用方法の習得など、本学学生を対象とする実習利用があった。また、8月19日、30日には他大学生を対象とする京都大学公開森林実習の一環として、人間環境大学・筑波大学・広島大学・東京農工大学・早稲田大学・京都学園大学・鳥取環境大学からの受講生（計27人）による実習利用があった。

研究利用では苗畑を利用した樹木類の植栽試験や播種試験、ガラス室やハウス内での鉢植えによる樹木類を中心とする植物の生育試験、見本園を利用した樹木・昆虫類などのサンプル採取やナラ枯れに関する研究のほか、敷地を利用した木造建築物の耐久試験や在来緑化植物の形態的・遺伝的変異に関する研究など多岐にわたる分野での利用があった。

■社会連携

一般利用では、京都市・池坊・スターバックス・京大の共催で実施した「外来種いけばな」ワークショップ（72人）などに加え、利用申請を伴わない本学教職員や学生、一般市民の散策や見学による利用者が318人あった。

北白川試験地は、本学キャンパス内にあるため身近で利便性の高い教育研究施設であることに加えて、数少ない憩いの場として本学教職員、学生を初め一般市民にとっても貴重な存在である。この数年の利用者数は増えており、今年度は研究利用に増加の傾向が見られている。

■施設の特記事項

2017年度は、通常業務として、見本樹の剪定、草刈り、境界木の剪定等を行った。また、境界沿いにある危険木8本の剪定および樹高調整を直営で行った。また、危険木および管理上支障となる6本の伐採についても直営で行った。更に、見本樹の高木化、高齢化に伴う被害の危険性がある樹木は危険木と見なし、予め枝下ろしや剪定を行う必要が生じている。被害防止のための枝下ろしや剪定を行う必要があるが、経費が高額となり一度に行うのが難しく、毎年予算を計上し継続して行う必要がある。一方で近年は、見本樹の急な枯死や災害等による消失に備え、後継樹の育成に取り組んでいる。消失した種や希少な種を中心に播種や挿し木、接ぎ木などの方法で増殖を試み、苗畑やガラス室で約50種の苗木を育成している。

また、センター長裁量経費により、老朽化した堆肥舎と堆肥溜舎の解体撤去を行い、利用者への安全確保に加えて、手狭となっていた研究利用地を拡大することができた。

7) 紀伊大島実験所

紀伊大島実験所長 梅本 信也

■教育研究

紀伊大島実験所は2004年度以来継続している古座川プロジェクトの拠点であり、その具体的な展開である古座川合同調査を実施する植物班、シダ類班、きのこ班、聞き書き班、文化班、河川班、ダム班、水害班など、官民学諸班の参加者間の連絡調整、情報交換、議論、資料閲覧、簡易宿泊の場として2017年度も積極的に活用された。古座川合同調査は毎月開催され、4月の第137回調査から翌年3月の第148回調査まで本年度も合計12回実施された。古座川合同調査はフィールド研の3大柱のひとつである地域連携を前提に行っており、次項目の社会連携と不可分の関係にある。合計12回の調査内容の一部は「古座川合同調査報告集」第13巻・No.2および第14巻・No.1として出版され、夏季に古座川流域等を対象に実施される集中講義や地域連携用の副読本とされた。古座川プロジェクトの展開を円滑にするために、和歌山県が主体運営する古座川流域協議会や地域行政諸機関、古座川内水面漁協、和歌山東漁業協同組合各支所との連絡調整ならびに共同調査を行った。

8月に予定していた地球環境学舎院生向け「里域植生保全論」（宿泊型集中講義）と1回生向けILASセミナー「里域連環学入門」（宿泊型集中講義）は相手方の都合により中止した。9月には農学部2回生向け「植物調査法と実習」（宿泊型集中講義）、1回生向けILASセミナー「地域連環学入門」（宿泊型集中講義）が実施された。

■社会連携

紀伊大島実験所は、従来の教育、プロジェクト研究、教員研究、地域貢献を意識しての諸活動を、フィールド研と統合した後は、教育・研究・社会連携に書き換えて、さらに関係地域や分野を拡大して活動している。2017年度の延べ利用者数は800人前後、一般訪問者、講義実習関係の学生院生、教員や研究者、行政機関職員、マスコミ関係者からの利用は毎月40人前後である（上記の教育研究を参照）。

■特記事項

1999年に紀伊大島は本州と串本大橋により地続きとなったが、想定外の副産物として島内にイノシシが侵入・増殖し、島民の生活に甚大な被害をもたらしている。和歌山県鳥獣保護区である当実験所が有する希少な植生、たとえばショウガ科アオノクマタケランも被害を受けているため、2009年初夏から保護区規制を一部解除して和歌山県、串本町、当実験所等が共同で捕獲作戦を展開し、徐々にではあるが個体群減少などの成果が表れ始めている。串本町、串本町猟友会と共同で当実験所を特別な捕獲エリアとし、捕獲檻を3基設置してイノシシ捕獲作戦を実行し、2011年度には8頭、2012年度に8頭、2013年度には6頭、2016年度は5頭が捕獲されたが、島内および所内での諸被害は続いている。

8) 舞鶴水産実験所

舞鶴水産実験所長 益田 玲爾

■教育研究

2017年度に舞鶴水産実験所里海生態保全学分野に所属する大学院生の数は、修士課程4人、博士後期課程4人である。これに加えて、プロジェクトによる特定研究員1人と研究員1人、技術補佐員2人を擁する。

外部資金により舞鶴水産実験所において実施している大型プロジェクトには、「国家基幹研究開発推進事業：沿岸海域複合生態系の変動機構に基づく生物資源生産力の再生・保全と持続的利用に関する研究」「東北マリンサイエンス拠点形成事業」「戦略的創造研究推進事業（CREST）：海洋生物多様性および生態系の保全・再生に資する基盤技術の創出環境DNA分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発」がある。

2011年度から採択された全国共同利用教育拠点としての活動は、2015年度で第1期を終了し、2016年度から第2期の採択が決定し活動を開始した。詳細は、第2章5節2項「日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点」の項を参照されたい。上記事業に加えて、高校の臨海実習3校（京都教育大附属高校、京都府立西舞鶴高校、同南陽高校）を受入れるとともに、舞鶴市小学校理科教員研修のための講義を行っている。

■社会連携

京都府下を中心に、市民団体等の企画への講師派遣の協力、小学校や高等学校の生徒に対する出前授業を行った。これらのうち高校生・保安学校生を対象としたものに、サイエンスパートナーシッププログラム（京都府立南陽高校、同西舞鶴高校）、スーパーサイエンスハイスクール（京都教育大学附属高校）、見学学習（京都府立海洋高校、福井県立若狭高校、海上保安学校）などがある。また、「子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業」の一環として講師を派遣している（京都府立久美浜高校）。さらに、一般市民向けとして、京大総合博物館レクチャーシリーズ、アースウォッチ・ジャパン、宮津与謝退職校舎長会、東舞鶴ロータリークラブ、舞鶴市中央公民館いきいきセミナー、舞鶴市ネイチャーガイド養成講座、京都府海の民学舎において講演を行っている。また、京都新聞の企画による出前授業を京都市立大藪小学校で行った。舞鶴市海辺の生き物観察会、舞鶴市池内川水辺の生き物観察会等の講師派遣に協力した。このほか、当実験所教員が京都府漁業調整委員などを担当し、京都府北部地域や舞鶴市の地域産業の活性化において重要な役割を担っている。

■施設の特記事項

海洋教育研究船緑洋丸を着岸する栈橋の係留鎖および栈橋本体の劣化が進行していたため、本年度には鎖を交換するとともに、栈橋の改修を行った。また、標本館および宿泊棟のトイレを全面的に改修した。宿泊棟において稼働率の低かった大浴室を廃してシャワーユニット6基を設置した。

2002年3月に建てられた研究棟は、軽量鉄骨による簡易的な建造物であり、耐久性が低いことから、今後長期間使用できるとは考えられない。同時期に建設された飼育棟も、既に老朽化が進み、特に錆による支柱の劣化は著しく、2015年度に一部について補修工事を行ったものの、大規模な台風では倒壊する危険性がある。今後さらなる増加が見込まれる実習や研究目的の利用者の安全および利便性を確保するためにも、できるだけ早く鉄筋コンクリート製の建物を建築する必要がある。

9) 瀬戸臨海実験所

瀬戸臨海実験所長 朝倉 彰

■教育研究

瀬戸臨海実験所にある理学研究科海洋生物学分科の修士課程に大学院生が2人入学した。また同分科修士課程にて2人が修士号を取得して、1人が就職、1人が他大学博士後期課程に進学した。

2017年度は、教育関係共同利用拠点事業の第2期の2年度目である。当実験所は、日本でも特に海洋生物相の豊かな場所に立地しており、その特徴を活かした、より充実した臨海実習や共同利用のために、この教育拠点活動を推進してきている。本年度は従来からの5つの公開臨海実習に加えて新たに1つの博物館実習を実施した。これからも、当実験所を利用する方々のより一層の利便性が達成されるよう活動していきたいと考えている。

当実験所では「瀬戸海洋生物学セミナー」と称して、外来の研究者に講演していただくかたちで公開のセミナーを実施している。2017年度は、杜 祖健／Anthony T. Tu 名誉教授(Colorado State University, USA)、宇野 裕美 特定准教授(京都大学 生態学研究センター)の講演会が行われた。

2017年に中野智之助教が中心となり瀬戸臨海実験所がホスティングする形で、白浜町にて日本貝類学会平成29年度大会を実施し、全国から約150人の参加があった。またこの大会の会期中に朝倉教授、中野助教、大越健嗣日本貝類学会会長が中心となり日本甲殻類学会と日本貝類学会の合同シンポジウム International symposium on evolutionary biology of parasitic and symbiotic relationships between mollusks and crustaceans が開催され、Andrew Jeffs (Univ. Auckland, New Zealand)、Emiliano H. Ocampo (Univ. Mar del Plata, Argentina)、J. Antonio Baeza (Clemson Univ., South Carolina, USA) らを海外から招聘した。

■社会連携

2014年に全面改装した白浜水族館の入館者は、改装前の年間6万人台より多い年間7万人台となり、2017年度は8万人に達した。水族館では、夏休み、冬休み、春休みに毎日「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」を行った。また春休み、夏休み中の月・火・水曜日に「大水槽のエサやり体験」を実施した。

白浜水族館では夏の企画展として「ヤドカリと貝殻：生態と芸術」を実施した(7月8日～10月1日)。これは世界で活躍する現代美術家のAKI INOMATAさんのヤドカリ作品と、京都大学白浜水族館のヤドカリ研究の成果のコラボレーション企画である。また、2018年3月からは「ガタガール生物展」を実施した(3月3日～5月30日)。

■施設の特記事項

瀬戸臨海実験所は大学、高校、中学の多数の臨海実習が行われており、また白浜水族館には年間7万人以上の入館者があり、こうした人たちを安全に避難誘導することは、施設の重要課題のひとつである。本年度は12月に白浜消防署の指導のもと、大津波に対する訓練として海拔30 mにある南方熊楠記念館に逃げる訓練を行った。またその後消防署の方より、地震対策に関する講話をいただいた。

10) 森里海連環学教育ユニット

森里海連環学分野 連携教授 横山 壽

■教育研究

フィールド研は、公益財団法人日本財団の支援を受けて、2012年度に農学研究科、人間・環境学研究科、地球環境学
堂・学舎とともに「森里海連環学教育ユニット」を設立し、2013年度より京都大学全大学院生を対象にした「森里海連
環学教育プログラム」を開講した。2017年度には、特任教授1人、特定准教授2人、特定講師1人、研究員3人、支援室に
は特定職員2人、事務補佐員3人の体制で本プログラムを進めた。本年度には、53人の新規履修生に前年度からの継続履
修生44人を加えて、97人の学生を受け入れた。本年度は隔年開講科目を除く39科目を開講した。授業は原則として英語
で行い、研究フィールドを活用した実習「森里海の理論と実践」および分野融合型の少人数ゼミ「森里海国際貢献学I、
II」を含め、カリキュラムを円滑に実施した。また、英語スキルアップ講座として3コースを開講し、延べ24人が受講
し、英語によるコミュニケーション力の強化を図った。他方、長期海外インターンシップ研修を受けた成績優秀な履修
生32人、および国際学会で優れた発表を行った履修生20人に補助金を給付した。また、2016年度に採用した奨学生1人
に奨学金を継続して支給した。本年度には67人の学生(9月期2人)が修了し、この5年間の修了生累計は208人となった。

研究面では、横山壽連携教授は、瀬戸内海中西部の底質を分析し、環境省による調査結果との比較より30年間の環境
変化を評価した。清水夏樹連携准教授は、近畿圏の農山村やドイツ等を対象に地域資源活用による観光や地域振興の研
究を進めた。吉積巳貴連携准教授は、地域資源を活用した住民自立型地域づくりに関する調査・研究を国内外で実施し
た。エドワルド・ラヴァルニュ連携講師は、スズキの個体群に及ぼす生育場の役割および稚魚の成長に関する調査・研
究を行った。安佛かおり研究員は、大阪湾と瀬戸内海において、植物プランクトンの基礎生産力の季節変動を調べた。
黄琬惠研究員は里山ランドスケープについての調査研究を実施した。包薩日椰研究員は、里山・里海のインバウンド観
光について調査研究を実施した。

■社会連携

教育プログラムの成果を検証し、修了生と京都大学、社会とのネットワークづくりを目的に、10月に「森里海連環を
担う人材育成の成果と展望」と題する国際ワークショップを開催した。また、11月には、ベトナム、ハノイ工科大学に
おいてエコツーリズムを主題とする国際セミナーを開催した。

■特記事項

森里海連環学教育ユニットの活動を紹介するニュースレター(森里海NEWSLETTER No. 8, No. 9)をウェブ上で公表す
るとともに、ユニットの活動を紹介する年報(森里海連環学教育ユニット活動記録2016および2017)を刊行した。

11) 森里海連環学プロジェクト支援室

森里海連環学プロジェクト支援室長 山下 洋

■特記事項

2017年度、森里海連環学プロジェクト支援室は、室長、副室長、技術職員1人の3人体制で、森里海連環学に関する野外調査、試料分析、実験室（N083, E002, N188）・分析機器等の管理を行った。支援室として担当した業務は以下の通りである。

- ・松川浦プロジェクトの調査支援
- ・松川浦プロジェクトの水試料分析（栄養塩）
- ・分析機器の保守管理
- ・化学物質の管理
- ・実験廃液の管理
- ・無機廃液の処理
- ・有機廃液の処理
- ・その他（機器類の修理や事務的な調書対応等）

12) 企画情報室

企画情報室長 山下 洋

■特記事項

<会議業務>

企画情報室は、教授会などでのテレビ会議システムの設営、資料の配信を担当した。

<広報>

広報委員会の指示の下、定期刊行物として、年報を1号（第14号）、ニュースレターを3号（42～44号）、ニュースメールの配信を4回、編集・発行・発送した。インターネット上ではフィールド研のウェブページを随時更新しており、2017年度にWordPressで作成・公開したウェブページは401ページ、映像データベースでの写真の公開は538枚であった。なお、2010年度以前に作成したhtml形式のページのほぼすべてをWordPressに移行、収容する作業が完了した。その他、百周年時計台記念館におけるディスプレイ映像の更新、展示用パネルの管理等を行った。日本テレビの番組「ZIP!」からの電話取材に対応した。

<情報システムの企画、開発、運用>

情報セキュリティ委員会の指示の下、学内ネットワークにおけるVLANの設定、メーリングリストの管理、共用機器類の管理、各施設等の不具合等に対する連絡調整、テレビ会議システムの運用などを担当している。公開ウェブページは、WordPressによるシステムを逐次更新しており、年度末で4.9.4となった。H.323プロトコルによるpolycom機器等をくみあわせたテレビ会議システムの2017年度における利用回数は118回で、その他、各施設と他大学との接続などに対する支援を行った。2016年度から開催されるようになった「生態フィールド学系会議」において、2017年度からテレビ会議による運用を開始し、また電子投票システムを含むEcoMeeting機能の利用を開始した。電子投票の初めての運用は2018年1月であった。芦生研究林の新しいウェブページを新たに設定し、公開支援を行った。懸案であった北海道研究林標茶区の光ファイバー利用を開始することができ、すべての施設のネットワーク回線の光ファイバー化を達成した。全施設におけるコンピュータウィルス対応支援として、Microsoft Windows10における大型更新プログラムへの対応、標的型攻撃メールへの対応、不審なメールについての相談対応などを行った。その他、舞鶴水産実験所宿泊棟への無線LAN機器設置、第2会議室の大型モニタ故障、VLAN設定変更時トラブルなどに対応した。

<各施設およびフィールド研教職員の各種情報の収集>

フィールド研および教職員の各種活動状況を収集するため、各施設から毎月報告される利用実績報告書の集計、新聞・雑誌等のフィールド研関連記事の収集、講義や事業の映像記録、研究業績・外部資金・各種活動などの業績調べを行っている。（なお、教職員の利用するコンピュータソフトウェアライセンスの管理状況調査は、2017年度は実施されなかった。）

<フィールド研常設各種委員会に係る実務>

その他各委員会の実務として、シラバス調べ、アンケート集計、調書への対応などを行った。

<フィールド研行事（イベント）に係る実務>

10月に北部総合教育研究棟益川ホールで実施した森里海国際シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」における事前準備、そのほか久保田准教授の最終講義、教育ユニット修了式などにおいて映像撮影等を行った。

<その他>

各種申請・提出書類の作成の支援、施設・教職員による業務の支援、教職員交流イベントの開催支援等を弾力的に行った。

研究資源アーカイブ化事業として、前年度デジタル化した芦生研究林所蔵16mmフィルムなどの映像19本と、瀬戸臨海実験所所蔵の遠藤吉三郎海藻標本ガラス乾板写真175枚を公開した。また、朝鮮演習林などのガラス乾板写真とネガ写真179枚と、写真帳など10冊の紙焼き写真647枚のデジタル化を行った。

非常勤職員が5年年限を迎えたため、新たな非常勤職員を採用した。

j. Pod実証実験棟の南側扉の修理工事の支援を行った。

(2) 各施設を利用した学生実習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備 考
17.06.09 ～ 17.06.11	3	京都大学	人間・環境研究科	野生生物研究会合宿		66	0	
17.05.13 ～ 17.05.14	2	京都大学他		人間・環境学研究科:動物多様性科学ゼミ1・2		36	4	
17.05.22	1	京都大学	生存圏研究所	居住圏環境共生学演習	大学院生	4	7	
17.05.27 ～ 17.05.28	2	京都大学	経営管理大学院	ILASセミナー		16	4	
17.06.02	1	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	アジア・アフリカ地域研究演習		16	5	
17.06.30 ～ 17.07.02	3	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「原生的な森林の働き」	全学1回生	12	5	他大学生10人含む
17.08.05 ～ 17.08.10	2	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習I: 芦生研究林-由良川-丹後海のつながりを探る	学部学生	38	30	
17.08.17 ～ 17.08.19	3	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「森の創り出すもの」	全学1回生	12	3	(公開森林実習と併催)
17.08.21 ～ 17.08.23	3	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「森林河川調査入門」		9	8	
17.08.28 ～ 17.09.01	5	京都大学	農学部	研究林実習I	2回生	75	25	
17.08.28 ～ 17.08.30	3	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「京都の文化を支える森林」	全学1回生	12	3	
17.09.05 ～ 17.09.07	3	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「京都のエコツアーリズム」	全学1回生	21	7	他大学生2人含む
17.09.12 ～ 17.09.15	4	京都大学	農学部	研究林実習II	3回生	64	14	
18.02.09 ～ 17.02.12	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習III: 暖地性積雪地域における冬の自然環境	全学共通	61	12	
17.05.20	1	京都大学	フィールド研	教育・研究利用現地ツアー	京大生ほか	7	8	一般2人含む 一般1人含む 一般対象
17.08.03 ～ 17.08.10	8	京都大学	フィールド研	サマープログラム(香港工科大外)	3回生	88	18	
17.06.24	1	光華女子大学	キャリア形成学部	キャリア形成ゼミIII		9	3	
17.07.20	1	関西大学	社会学部	メディア特論A	3回生	2	2	
17.08.17 ～ 17.08.30	6	京都大学	フィールド研	公開森林実習I: 近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴	大学校1年生	81	47	
17.09.14	1	京都府立林業大学校	森林林業科	森林風致実習		1	20	
17.10.12 ～ 17.10.13	1	京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター	The Japanese Garden Intensive Seminar Plus in Kyoto 2017		50	10	
計	58		(21件)			680	235	

北海道研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備 考
17.08.05 ～ 17.08.08	4	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「北海道の森林」	全学共通	36	17	標茶区
17.09.01 ～ 17.09.04	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習II: 夏の北海道東部の人と自然の関わり (北海道大学との共催)		84	47	標茶区(京大36・北大48人:TAを含む)
17.08.23 ～ 17.08.31	9	京都大学	農学部	研究林実習III	3回生	156	57	標茶区
17.08.26	1	京都大学	農学部	研究林実習III	3回生	20	10	白糠区
18.02.19 ～ 08.02.25	7	京都大学	フィールド研	研究林実習IV	3回生	118	46	標茶区
17.06.23 ～ 17.06.25	3	酪農学園大学	農食環境学群	専門ゼミナールI	3年	21	5	標茶区
17.07.06 ～ 17.07.07	2	東京農業大学	生物産業学部	生物生産学特別実験・実習	学部3年	40	10	標茶区
17.07.11 ～ 17.07.13	3	北海道教育大学釧路校		山岳生態学実習		36	9	標茶区
17.08.05 ～ 17.08.08	4	京都大学	フィールド研	公開森林実習II: 夏の北海道東部の人と自然の関わり		12	0	(併催)
17.08.21 ～ 17.08.23	3	酪農学園大学		アカエゾマツ下枝からの精油蒸留と精油の機能性検査		9	9	
17.09.12 ～ 17.09.15	4	酪農学園大学		水圏・地圏総合実習	3年	80	26	標茶区
18.02.13 ～ 18.02.16	4	北海道教育大学釧路校		冬のフィールド教育演習	学部2-3年	56	16	標茶区
計	48		(12件)			668	252	

和歌山研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17.08.21 ～ 17.08.24	4	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「森を育て活かすー林業体験をとおして考える」		24	13	
17.09.05 ～ 17.09.11 17.10.02 ～ 17.10.06	7 5	京都大学 和歌山県農 林大学校	フィールド研	特別セミナー「紀中地域の森林管理」 最適作業システムについて		7 25	6 7	
計	16		(3件)			56	26	

上賀茂試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17.04.29	1	京都大学	大学院農学研究科	森林科学専攻新入生歓迎会		151	60	他大学生 1人一般2 人含む
17.05.12	1	京都大学	フィールド研	博物館実習	3回生以上	11	2	
17.05.15 ～ 17.05.16	2	京都大学	野生動物研究セン ター	ドローン実習	院生	17	13	
17.05.16 ～ 17.06.06	2	京都大学	農学部	森林基礎科学実習I	2回生	55	3	
17.06.10	1	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「原生的な森林の働き」	全学1回生	2	1	
17.06.14 ～ 17.07.05	4	京都大学	農学部	森林生物学実験及び実験法	3回生	69	6	
17.06.15 ～ 17.06.22	2	京都大学	農学部	森林総合実習及び調査法	3回生	44	6	
17.06.28	1	京都大学	農学部	土壌物理学・水環境工学実験	3回生	26	2	
17.07.11	1	京都大学	大学院地球環境学堂	ILASセミナー「木文化再生：森林から 都市へ」	全学1回生	4	5	
17.07.15	1	京都大学	大学院地球環境学堂	里山再生論	修士1・2 回生	20	1	
17.07.26	1	京都大学	大学院アジア・ア フリカ地域研究研 究科	ドローン飛行、写真撮影、画像処理実 習	研究室学 生	4	3	
17.08.17	1	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「森の創り第一すもの」	全学1回生	4	1	(併催)
17.08.28	1	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「京都の文化を支える森 林」	全学1回生	4	1	(併催)
17.04.24 ～ 17.05.01	2	京都精華大学	人文学部	ネイチャーワーク	1回生	66	2	
17.05.22 ～ 17.06.26	2	京都府立大学	生命環境学部	森林植物学実習	2回生	82	7	
17.07.25	1	京都精華大学	人文学部	自然教育論（実習）	4回生	5	1	
17.08.03	1	京都大学	学際融合教育研究 推進センター	China-Japan-Korea SERVE Initiative 2017（京都大学、香港理工大学、北 京大学、梨花女子大学共同プログラ ム）	各大学学 生	12	1	
17.08.17 ～ 17.08.28	2	京都大学	フィールド研	公開森林実習I	他大学生	27	17	
17.09.28	1	京都教育大学	教育学部	栽培実習II	1-4回生	9	4	
17.09.28	1	京都教育大学	教育学部	食農教育の実践II	1-4回生	8		(併催)
17.10.05	1	京都精華大学	デザイン学部	フィールドデザインプロジェクト：ネ イチャーゲームの体験演習	3回生	6	2	
17.11.01	1	京都精華大学	人文学部	現代社会論	2回生	18	2	
17.11.12	1	京都学園大学	バイオ環境学部	都市緑化材料学	3回生	37	2	
17.11.22	1	兵庫県立大学	大学院シミュレー ション学研究科	生態系システムシミュレーション	博士前期	9	7	
18.03.19	1	京都大学	フィールド研	「人と自然のつながりを学ぶ森林 フィールド教育共同利用拠点」実習検 討会		9	6	
計	34		(25件)			699	155	

徳山試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17.08.06 ～ 17.08.10	5	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「瀬戸内に見る森里海連 環」	1回生	28	10	TAを含む
17.08.25 ～ 17.08.26	2	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「環境の評価」	全学1-2回 生	12	2	TAを含む
計	7		(2件)			40	12	

北白川試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17. 04. 12	1	京都大学	農学部	森林科学科新入生オリエンテーション	1回生	60	28	
17. 04. 19	1	京都大学	農学部	土壌物理学・水環境工学実験 採土方法の習得と土壌の三相分布測定	3回生	28	1	
17. 06. 05	1	京都大学	農学部	木本植物の葉の形質測定	2回生	30	1	
17. 06. 07	1	京都大学	農学部	有機化学実験	3回生	3	2	
17. 08. 30	1	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「京都文化を支える森林」	全学1-2回生	4	1	
17. 10. 19	1	京都大学	農学部	森林水文学・砂防学実験及び実験法	3回生	2	1	
17. 11. 15	1	京都大学	農学部	応用生態学実験及び実験法	3回生	15	1	
17. 08. 19 ～ 17. 08. 30	2	京都大学	フィールド研	公開森林実習Ⅰ：近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴	他大学	27	5	
計	9		(8件)			169	40	

紀伊大島実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17. 09. 04 ～ 17. 09. 08	5	京都大学	農学部	植物調査法と実習	2回生	62	7	一般2人含む
17. 09. 18 ～ 17. 09. 22	5	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「地域連環学入門」	全学1回生	5	5	
計	10		(2件)			67	12	

舞鶴水産実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17. 07. 08 ～ 17. 07. 09	2	京都大学	理学部	地質科学野外巡検ⅠA（大島半島巡検）		26	6	
17. 08. 07 ～ 17. 08. 10	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習Ⅰ：芦生研究林ー由良川ー丹後海コース		40	48	TAのべ8人含む
17. 08. 24 ～ 17. 08. 29	6	京都大学	農学部	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ		124	12	
17. 08. 29 ～ 17. 09. 03	6	京都大学	農学部	海洋生物科学技術論と実習Ⅱ		102	30	
17. 09. 04 ～ 17. 09. 07	4	京都大学	大学院農学研究科	水資源利用光学実験（大学院）、水理学実験（学部）		127	7	
17. 09. 14 ～ 17. 09. 15	2	京都大学	国際高等教育院	ILAS「Learn in English Summer Program」		12	4	
17. 12. 23 ～ 17. 12. 27	5	京都大学	フィールド研	博物館実習（館園実務）		15	12	
18. 02. 23	1	京都大学	大学院農学研究科	舞鶴合同セミナー		17	5	他大学生5人を含む
18. 03. 12 ～ 18. 03. 16	5	京都大学	農学部	海洋生物科学技術論と実習Ⅳ		55	25	
17. 05. 24 ～ 17. 05. 27	4	近畿大学	農学部	水圏生態学実験・実習Ⅰ		76	15	
17. 05. 27 ～ 17. 05. 28	2	近畿大学	農学部	沿岸藻場実習		38	5	
17. 08. 07 ～ 17. 08. 10	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習Ⅰ（公開実習）		20	0	（併催）
17. 08. 18 ～ 17. 08. 22	5	関西学院大学	理工学部	臨海実習		110	42	
17. 08. 24 ～ 17. 08. 29	6	京都大学	フィールド研	海洋生物科学実習Ⅰ（公開実習）		18	0	（併催）
17. 08. 29 ～ 17. 09. 03	6	京都大学	フィールド研	海洋生物科学実習Ⅱ（公開実習）		6	0	（併催）
17. 09. 08 ～ 17. 09. 13	6	岐阜大学	教育学部	臨海実習及び実験		54	22	
17. 09. 24 ～ 17. 09. 29	6	京都大学	フィールド研	若狭湾秋季の水産海洋生物実習（公開実習）		60	21	京大生12名含む
17. 12. 23 ～ 17. 12. 27	5	京都大学	フィールド研	博物館実習（館園実務）（公開実習）		5	0	（併催）
18. 03. 02 ～ 18. 03. 04	3	京都大学	地球環境学舎	国際スプリングスクール		36	5	
18. 03. 12 ～ 18. 03. 16	5	京都大学	フィールド研	若狭湾春季の水産海洋生物実習（公開実習）		30	0	（併催）
計	87		(20件)			971	259	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
17.04.05 ～ 17.04.06	2	京都大学	理学部	生物科学専攻インターラボ		88	11	
17.05.04 ～ 17.05.07	4	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「貝類の不思議」		28	4	
17.09.04 ～ 17.09.11	8	京都大学	理学部	臨海実習第1部	2回生以上	32	40	
17.09.04 ～ 17.09.11	8	京都大学	理学部	臨海実習第4部	3回生以上	8	0	(併催)
17.09.06 ～ 17.09.07	2	京都大学	防災研究所	ILASセミナー「川を観る、海を観る」	全学1回生	6	6	
17.09.18 ～ 17.09.24	7	京都大学	理学部	臨海実習第2部	3回生以上	28	19	
17.09.26 ～ 17.09.29	4	京都大学	フィールド研	ILASセミナー「南紀の博物誌」		20	4	
17.10.15 ～ 17.10.20	6	京都大学	フィールド研	博物館実習（館園実務）		18	24	
17.11.02 ～ 17.11.03	2	京都大学	理学部	地質科学野外巡検IB		26	4	
17.09.01 ～ 17.09.02	2	京都大学	国際高等教育院	ILAS Learn in English Summer Program(LESP)		8	3	
18.03.14 ～ 18.03.19	6	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習Ⅳ：沿岸域生態系に与える陸・川・人の影響		72	24	
18.03.27 ～ 18.03.31	5	京都大学	理学部	臨海実習第3部		10	9	
17.04.07 ～ 17.04.12	6	和歌山大学	教育学部	臨海実習		48	17	
17.05.22 ～ 17.05.28	7	京都大学	フィールド研	公開臨海実習「博物館実習」		21	21	
17.06.06 ～ 17.06.10	5	奈良女子大学	理学部	臨海実習II		90	15	
17.06.25 ～ 17.06.29	5	奈良教育大学	教育学部	臨海実習		150	20	
17.06.11 ～ 17.06.15	5	大阪教育大学	教育学部	臨海実習		55	10	
17.07.07 ～ 17.07.13	7	大阪市立大学	理学部	臨海実習		175	23	
17.09.18 ～ 17.09.24	7	京都大学	フィールド研	公開臨海実習「発展生物学実習」		70	0	(併催)
17.08.18 ～ 17.08.22	5	関西学院大学	理工学部	臨海実習I		120	25	
17.09.04 ～ 17.09.11	8	京都大学	フィールド研	公開臨海実習「自由課題研究」		8	0	(併催)
17.09.12 ～ 17.09.17	6	大阪大学	理学部	生物学臨海実習		126	16	
17.09.25 ～ 17.09.30	6	大阪大学	インターナショナルカレッジ	Marine Biology Field Work		60	30	
18.03.03 ～ 18.03.10	8	京都大学	フィールド研	公開臨海実習「海産無脊椎動物分子系統学実習」		62	48	京大生のべ16人を含む
18.03.14 ～ 18.03.19	6	京都大学	フィールド研	公開臨海実習「沿岸域生態系多様性実習」		54	0	(併催) 京大生のべ24人を含む
18.03.27 ～ 18.03.31	5	京都大学	フィールド研	公開臨海実習「藻類と海浜植物の系統と進化」		35	0	(併催)
計	142		(26件)			1,418	373	

(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等

(参加者数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17.08.02 ～ 17.08.03	2	大阪府立大手前高等学校	夏季合宿「照葉樹林帯から夏緑樹林帯の生物多様性の観察」	生物部2・3年生	46	0	
17.05.02 ～ 17.12.02	4	芦生地域有害鳥獣対策協議会	知ろう守ろう芦生の森	一般	37	6	共催研究
17.09.14	1	京都府立林業大学校	森林林業科1年「森林風致実習」における学びと森林保全に対する意識	一般	20	1	
17.10.21	1	京大フィールド研 芦生研究林	芦生研究林一般公開（京大ウィークス）	一般	60	14	
計	8	(4件)			163	21	

北海道研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17.05.26	1	標茶小学校	遠足	3年生	48	2	
17.06.26	1	沼幌小学校	木工教室	1～6年生	23	3	
17.08.06 ～ 17.08.08	3	北海道標茶高等学校	総合的な学習の時間 インターンシップ	高校3年生	12	0	
18.01.20 ～ 18.01.21	2	標茶町教育委員会	しべちャアドベンチャースクールステージ6	小中高生	87	9	共催
17.08.04	1	京大フィールド研 北海道研究林	ひらめき☆ときめきサイエンス	中高生	15	7	白糠区
17.10.21	1	京大フィールド研 北海道研究林	ミニ公開講座「自然観察会」（京大ウィークス）	一般	10	11	
計	9	(6件)			195	32	

和歌山研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17.04.18 ～ 17.12.19	13	和歌山県立有田中央高等学校清水	ウッズサイエンス	高校3年生	26	18	共催
17.06.01	1	有田川町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森のことを知ろう」	小学5年生	13	5	
17.05.31	1	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間「SIMIZUタイム」（森林ウォーク）	高校1年生	6	4	共催
17.08.03 ～ 17.08.04	2	和歌山県立海南高等学校	第1・2学年夏季特設課外授業「関西研修」（SSH事業）	1・2年生	22	12	
17.09.20 ～ 17.09.22	3	有田川町立八幡中学校	職業体験学習	中学2年生	12	12	共催
17.11.09	1	有田川町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森は友だち 森林の町清水」環境	小学5年生	13	5	共催
17.09.30	1	神戸大学理学研究科	ひらめき☆ときめきサイエンス	中高生	19	6	共催
計	22	(7件)			111	62	

上賀茂試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17.07.14	1	総合地球環境学研究所	京都府立北稜高校 地球環境学の扉	高校2年生	32	0	
17.10.03	1	総合地球環境学研究所	京都市教育相談総合センターふれあいの杜学習室 上賀茂試験地の見学・散策	ふれあいの杜学習室生徒	20	1	
17.11.29	1	京都府立北陵高校	北稜エッセイII（森林の生物の多様性）	高校2年生	40	1	
17.12.02	1	京都市青少年科学センター	未来のサイエンティスト養成事業 秋冬期講座	小学4年生～中学生	23	5	
17.04.05	1	京大農学研究科	障がいのある子ども達らの生活能力向上のための治療的教育	小学生・中学生	13	4	
17.04.22	1	京大フィールド研 上賀茂試験地	上賀茂試験地春の自然観察会		16	7	
17.04.22 ～ 17.11.25	5	株式会社京都銀行	「京銀ふれあいの森」森林ボランティア活動		200	2	
17.05.11	1	NPO法人シニア自然大学校	自然観察		18	1	
17.11.03	1	京大フィールド研 上賀茂試験地	上賀茂試験地秋の自然観察会（京大ウィークス）		33	7	
計	13	(9件)			395	28	

徳山試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
16. 06. 08	1	周南市公園花とみどり課	和田中学校環境体験学習	中学生	31	3	
17. 08. 26	1	徳山高校・光丘高校 科学部生物班	森林施業に関する体験学習（ILASセミナーに参加）	高校生	8	0	高校生6人（併催）
17. 06. 24	1	周南市公園花とみどり課	京都大学フィールド研・周南市連携講座（第15回）		25	4	共催
17. 10. 14	1	周南市公園花とみどり課	京都大学フィールド科学教育研究センター・周南市連携公開講座（京大ウィークス）		23	3	共催
17. 11. 25	1	周南市公園花とみどり課	京都大学フィールド研・周南市連携講座		20	5	共催
17. 12. 04 ～ 18. 01. 19	19	全国社寺等屋根工事技術保存会	檜皮採取研修		77	0	
計	24	(6件)			184	15	

北白川試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17. 06. 03 ～ 17. 12. 03	2	「YES, WE DO KYOTO !」プロジェクト（京都市・スターバックスコーヒージャパン）	IKEBANA of Alien Species 外来種いけばなワークショップ		68	4	
計	2	(1件)			68	4	

紀伊大島実験所（該当案件なし）

舞鶴水産実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17. 04. 19	1	兵庫県立香住高等学校	実験所見学等		23	1	
17. 06. 07	1	京都府立海洋高校	施設見学		22	3	
17. 08. 23	1	舞鶴市内小学校	理科教員研修		25	1	
17. 07. 24 ～ 17. 07. 25	2	京都府立西舞鶴高等学校	夏季実習		38	7	
17. 07. 26 ～ 17. 07. 28	3	京都教育大附属高等学校	臨海実習		48	3	
17. 07. 31 ～ 17. 08. 02	3	京都府立南陽高等学校	舞鶴臨海実習		42	4	
17. 08. 03	1	香住高校・福山大学	施設見学		11	1	
17. 09. 06	1	福井県立若狭高校	施設見学		21	1	
17. 06. 08 ～ 17. 12. 15	6	舞鶴市中保育所	施設見学		348	2	
18. 03. 06	1	海上保安学校	施設見学		16	1	
計	20	(10件)			594	24	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
17. 05. 24 ～ 17. 05. 25	2	和歌山県立日高高等学校	ナチュラサイエンスⅠ特別講義「京都大学瀬戸臨海実験所研修」		85	2	
17. 05. 26	1	樟蔭中学校	海辺の生物観察		60	1	
17. 06. 03	1	開智中学校	中学2年生体験学習		41	1	
17. 07. 15 ～ 17. 07. 17	3	大阪市立汎愛高等学校	理科課題研究「白浜臨海実習」		60	3	
17. 07. 24 ～ 17. 07. 27	4	滋賀県立膳所高等学校	サイエンスキャンプ（第48回生物実習旅行）		116	4	
17. 07. 28 ～ 17. 07. 30	3	奈良県立奈良高等学校	SSH 和歌山研究講座		51	3	
17. 08. 04 ～ 17. 08. 05	2	兵庫県立尼崎小田高等学校	サイエンスリサーチ科 臨海実習		26	4	
17. 08. 08 ～ 17. 08. 09	2	奈良女子大学附属中等教育学校	SSH 海の学校		48	2	
17. 07. 20 ～ 17. 07. 23	3	滋賀県立石山高等学校	石山高校海洋実習（略称：BMC）		96	3	
17. 10. 05	1	大阪府立千里高等学校	サイエンス・キャンプ		24	3	
17. 12. 26 ～ 17. 12. 27	2	大阪府立豊中高等学校	生物研修旅行		26	2	
17. 04. 29 ～ 17. 06. 24	3	京大フィールド研 瀬戸臨海実験所	きのくに県民カレッジ「磯採集体験」		56	9	
17. 10. 21 ～ 18. 02. 03	3	京大フィールド研 瀬戸臨海実験所	きのくに県民カレッジ「水族館の飼育体験」		39	9	
17. 10. 28	1	京大フィールド研 瀬戸臨海実験所	施設見学会（京大ウィークス）		18	5	
計	31	(14件)			746	51	

4.教職員の活動

(1) 研究成果

◆著書

森林生態系部門

■伊勢 武史

伊勢 武史. 丹波の森林資源の多面的な役割：芦生研究林の生態系サービス. 京都学研究会 編. 京都を学ぶ【丹波編】：文化資源を発掘する. ナカニシヤ出版, 2018, p.24-43.

里域生態系部門

■梅本 信也

梅本 信也. 環境という用語の諸相. 環境問題研究会事務局 編. 箱舟：環境問題研究会30周年記念誌. 環境問題研究会, 新宮市, 2017, p.41-42.

■甲斐 嘉晃

甲斐 嘉晃. メバル科, ハチ科, ハオコゼ科, オニオコゼ科, イボオコゼ科, コチ科, ハリゴチ科, セミホウボウ科, ギンダラ科, ハタハタ科, ダンゴウオ科, クサウオ科, タウエガジ科, イカナゴ科. 中坊 徹次. 小学館の図鑑Z 日本魚類館. 小学館, 東京, 2018.

■田城 文人

田城 文人. ホラアナゴ科. 中坊 徹次. 小学館の図鑑Z 日本魚類館 ～精緻な写真と詳しい解説～. 小学館, 東京都千代田区, 2018, p.72-73.

海洋生態系部門

■久保田 信

久保田 信. きらめく生物たちの命と海: とある生物学者の白浜だより(2). 紀南出版 (電子出版 Kindle版), 2017, 213p.

■後藤 龍太郎

Goto, Ryutaro. Role of selective flower abortion in the maintenance of obligate pollination mutualism. Kato, Makoto; Kawakita, Atsushi. Obligate Pollination Mutualism. Ecological Research Monograph. Springer, Tokyo, Tokyo, Japan, 2017, p.181-193, doi:10.1007/978-4-431-56532-1_9.

森里海連環学教育ユニット

■横山 壽

Yokoyama, Hisashi. Mercury pollution in Minamata. Springer, Singapore, 2018, p.53-67, doi:10.1007/978-981-10-7392-2.

■清水 夏樹

Hattori, Toshihiro; Shimizu, Natsuki; Saito, Akemi. The Regional Structure and Farming Resumption in a Tsunami-Affected Community: The Case Studies of Otomo and Hirota Districts in Rikuzentakata City: Iwate Prefecture. Santiago-Fandiño, V.; Sato, S.; Maki, N.; Iuchi, K. (Eds.). The 2011 Japan Earthquake and Tsunami: Reconstruction and Restoration, Insights and Assessment after 5 Years. Springer, Berlin, Germany, 2018, p.355-368, doi:10.1007/978-3-319-58691-5.

■吉積 巳貴

Yoshizumi, Miki; Miyaguchi, Takaaki (編集). Community Initiatives for Local Sustainability. 北斗プリント社, 2018.

Yoshizumi, Miki. Self-sustaining community resilience through local asset management: A case study of local community association "Shinryo Aigoukai" in Shinryo town of Tanabe city, Wakayama, Japan. Community Initiatives for Local Sustainability. 北斗プリント社, 2018, p.164-176.

Yoshizumi, Miki; Kobayashi, Hirohide; Hirai, Satoshi. Self-sustaining community resilience through local asset management: A case study of local community association "Shinryo Aigoukai" in Shinryo town of Tanabe city, Wakayama, Japan. Community Initiatives for Local Sustainability. 北斗プリント社, 2018, p.177-197.

◆原著論文・総説 (査読あり)

森林生態系部門

■吉岡 崇仁

Fukushima, Keitaro; Ishii, Katsuyuki; Yoshioka, Takahito. Effects of deer grazing on soil C and N dynamics in *Miscanthus sinensis* grassland and *Quercus serrata* forest in Ashiu research forest, Japan. Journal of Forest Research. 2017, 22(5), p.309-313, doi:10.1080/13416979.2017.1347030.

Watanabe, Kenta; Fukuzaki, Koji; Fukushima, Keitaro; Aimoto, Michihiro; Yoshioka, Takahito; Yamashita, Yoh. Iron and fluorescent dissolved organic matter in an estuarine and coastal system in Japan. *Limnology*. 2017, 19(2), p.229-240, doi:10.1007/s10201-017-0536-9.

■徳地 直子

Bol, Ei Thandar; Tokuchi, Naoko. Impact of forest disturbances on soil properties: a case study in Mon State, Myanmar. *Tropics*. 2018, 26(4), p.99-109, doi:10.3759/tropics.MS16-18.

Bol, Ei Thandar; Tokuchi, Naoko. Impacts of forest disturbance on composition, structure and floristics of tropical evergreen forest, Mon state, Myanmar. *Global Journal of Bio-Science and Biotechnology*. 2017, 6(3), p.415-427.

■館野 隆之輔

Tateno, Ryunosuke; Taniguchi, Takeshi; Zhang, Jian; Shi, Wei-Yu; Zhang, Jian-Guo; Du, Sheng; Yamanaka, Norikazu. Net primary production, nitrogen cycling, biomass allocation, and resource use efficiency along a topographical soil water and nitrogen gradient in a semi-arid forest near an arid boundary. *Plant and Soil*. 2017, p.1-14, doi:10.18922/jjfe.59.1_1.

Tateno, Ryunosuke; Takeda, Hiroshi. Nitrogen resorption efficiency of 13 tree species of a cool temperate deciduous forest in Central Japan. *Journal of Forest Research*. 2018, in press, doi:10.1080/13416979.2018.1432303.

Hosokawa, Nanae; Isobe, Kazuo; Urakawa, Rieko; Tateno, Ryunosuke; Fukuzawa, Karibu; Watanabe, Tsunehiro; Shibata, Hideaki. Soil freeze-thaw with root litter alters N transformations during the dormant season in soils under two temperate forests in northern Japan. *Soil Biology and Biochemistry*. 2017, 114, p.270-278, doi:10.1016/j.soilbio.2017.07.025.

Iwaoka, Chikae; Imada, Shogo; Taniguchi, Takeshi; Du, Sheng; Yamanaka, Norikazu; Tateno, Ryunosuke. The impacts of soil fertility and salinity on soil nitrogen dynamics mediated by the soil microbial community beneath the halophytic shrub tamarisk. *Microbial Ecology*. 2017, doi:10.1007/s00248-017-1090-z.

Kerfahi, Dorsaf; Tateno, Ryunosuke; Takahashi, Koichi; Cho, HyunJun; Kim, Hyoki; Adams, Jonathan M. Development of soil bacterial communities in volcanic ash microcosms in a range of climates. *Microbial Ecology*. 2017, 73(4), p.775-790, doi:10.1007/s00248-016-0873-y.

Nakayama, Masataka; Tateno, Ryunosuke. Solar radiation strongly explains the quantity of forest tree root exudates. *Trees*. 2018, 32(3), p.871-879, doi:10.1007/s00468-018-1685-0.

Shi, Wei-Yu; Du, Sheng; Morina, Joseph C.; Guan, Jin-Hong; Wang, Kai-Bo; Ma, Ming-Guo; Yamanaka, Norikazu; Tateno, Ryunosuke. Physical and biogeochemical controls on soil respiration along a topographical gradient in a semiarid forest. *Agricultural and Forest Meteorology*. 2017, 247(1), p.1-11, doi:10.1016/j.agrformet.2017.07.006.

北川 陽一郎, 松山 周平, 太田 健一, 岡部 芳彦, 勝山 智憲, 岸本 泰典, 佐藤 修一, 柴田 泰征, 中川 智之, 西岡 裕平, 林 大輔, 古田 卓, 山内 隆之, 吉岡 歩, 館野 隆之輔. 北海道東部におけるエゾシカの日周活動と時空間分布の季節変化. *森林立地*. 2017, 59(1), p.1-11, doi:10.18922/jjfe.59.1_1.

■伊勢 武史

Ise, Takeshi; Minagawa, Mari; Onishi, Masanori. Classifying 3 moss species by deep learning, using the "Chopped Picture" method. *Open Journal of Ecology*. 2018, 8(3), p.8, doi:10.4236/oje.2018.83011.

■石原 正恵

Prayoto; Ishihara, Masae Iwamoto; Firdaus, Rachmad; Nakagoshi, Nobukazu. Peatland Fires in Riau, Indonesia, in Relation to Land Cover Type, Land Management, Landholder, and Spatial Management. *Journal of Environmental Protection*. 2017, 8(11), Article ID:79973, 21 pages, doi:10.4236/jep.2017.811081.

■小林 和也

Hasegawa, Eisuke; Mizumoto, Nobuaki; Kobayashi, Kazuya; Dobata, Shigeto; Yoshimura, Jin; Watanabe, Saori; Murakami, Yuuka; Matsuura, Kenji. Nature of collective decision-making by simple yes/no decision units. *Scientific Reports*. 2017, volume 7, Article number: 14436, doi:10.1038/s41598-017-14626-z.

Mitaka, Yuki; Kobayashi, Kazuya; Matsuura, Kenji. Caste-, sex-, and age-dependent expression of immune-related genes in a Japanese subterranean termite, *Reticulitermes speratus*. *PLoS ONE*. 2017, 12, e0175417.

Tasaki, Eisuke; Kobayashi, Kazuya; Matsuura, Kenji; Iuchi, Yoshihito. Long-lived termite queens exhibit high Cu/Zn-superoxide dismutase activity. *Oxidative medicine and cellular longevity*. Hindawi, 2018, Vol.2018: Article ID 5127251, doi:10.1155/2018/5127251.

■中西 麻美

稲垣 善之, 深田 英久, 野口 享太郎, 倉本 恵生, 中西 麻美. 高知県のヒノキ人工林における間伐後の樹冠葉量の変化. *森林応用研究*. 2018, 27, p.1-9.

■中川 光

Nakagawa, Hikaru. Temperature-dependent gastric evacuation rate of the Japanese delicate loach *Niwaella delicata* (Cobitidae). *Ichthyological Research*. 2018, 65(1), p.172-174, doi:10.1007/s10228-017-0599-y.

- Nakagawa, Hikaru; Yamamoto, Satoshi; Sato, Yukuto; Sado, Tetsuya; Minamoto, Toshifumi; Miya, Masaki. Comparing local- and regional-scale estimations of the diversity of stream fish using eDNA metabarcoding and conventional observation methods. *Freshwater Biology*. 2018, doi:10.1111/fwb.13094.
- Yamamoto, Tamiji; Kishigami, Tomoko; Nakagawa, Hikaru. Uptake kinetics of nitrate, ammonia and phosphate by the dinoflagellate *Heterocapsa circularisquama* isolated from Hiroshima Bay, Japan. *Phycological Research*. 2017, p.1440-1835, doi:10.1111/pre.12193.
- 中川 光, 佐藤 拓哉. 京都大学北海道研究林標茶区における水生昆虫相と分類群同定キー. *森林研究*. 2018, 80, p.1-94.
- 藤井 佐織
- Fujii, Saori; Cornelissen, Johannes H. C.; Berg, Matty P.; Mori, Akira S.. Tree leaf and root traits mediate soil faunal contribution to litter decomposition across an elevational gradient. *Functional Ecology*. 2018, 32(3), p.840-852, doi:10.1111/1365-2435.13027.
- 里域生態系部門
- 山下 洋
- Fujita, Junta; Drumm, David T; Iguchi, Akira; Ueda, Yuji; Yamashita, Yuho; Ito, Masaki; Tominaga, Osamu; Kai, Yoshiaki; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. Deep-Sea Phylogeographic Structure Shaped by Paleoenvironmental Changes and Ongoing Ocean Currents Around the Sea of Japan in a Crangonid Shrimp, *Argis lar*. *Zoological Science*. 2017, 34(5), p.406-413, doi:10.2108/zs170014.
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihito; Yamashita, Yoh. Upstream migration mechanisms of juvenile temperate sea bass *Lateolabrax japonicus* in the stratified Yura River estuary. *Fisheries Science*. 2018, 84(2), p.163–172, doi:10.1007/s12562-017-1167-0.
- Fukunishi, Yuichi; Masuda, Reiji; Seikai, Tadahisa; Nakamura, Mitsuo; Tagawa, Masatomo; Yamashita, Yoh. Comparison of UV-B tolerance between wild-type and albino Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* juveniles. *水産増殖. 日本水産増殖学会*, 2017, 65(2), p.149-152.
- Kasai, Akihito; Fuji, Taiki; Suzuki, Keita W.; Yamashita, Yoh. Partial migration of juvenile temperate seabass *Lateolabrax japonicus*: a versatile survival strategy. *Fisheries Science*. 2018, 84(2), p.153–162, doi:10.1007/s12562-017-1166-1.
- Kumagai, Yoichiro; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Physico-chemical and macrobenthic characteristics of a salt marsh created in the aftermath of the Great East Japan Earthquake. *Coastal marine science. International Coastal Research Center, Atmosphere and Ocean Research Institute, the University of Tokyo*, 2017, 40(2), p.86-94.
- Kurita, Yutaka; Okazaki, Yuji; Yamashita, Yoh. Ontogenetic habitat shift of age-0 Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* on the Pacific coast of northeastern Japan: differences in timing of the shift among areas and potential effects on recruitment success. *Fisheries Science*. 2018, 84(2), p.173-187, doi:10.1007/s12562-018-1180-y.
- Minami, Kenji; Sawada, Hideki; Masuda, Reiji; Takahashi, Kohji; Shirakawa, Hokuto; Yamashita, Yoh. Stage-specific distribution of Japanese sea cucumber *Apostichopus japonicus* in Maizuru Bay, Sea of Japan, in relation to environmental factors. *Fisheries Science*. 2018, 84(2), p.251–259, doi:10.1007/s12562-017-1174-1.
- Miyajima-Taga, Yuko; Masuda, Reiji; Kurihara, A.; Komi, R.; Yamashita, Yoh; Takeuchi, Toshio. Efficacy of feeding tiger puffer *Takifugu rubripes* on moon jellyfish with respect to nutritional composition and behavioural traits. *Aquaculture Nutrition*. 2018, 24, p.504-514, doi:10.1111/anu.12583.
- Miyajima-Taga, Yuko; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Feeding capability of black scraper *Thamnaconus modestus* on giant jellyfish *Nemopilema nomurai* evaluated through field observations and tank experiments. *Environmental Biology of Fishes*. 2017, 100, p.1237-1249.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ontogeny of turbiditaxis in hatchery-reared Japanese anchovy *Engraulis japonicus* juveniles. *Journal of Fish Biology*. 2018, doi:10.1111/jfb.13580.
- Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Lavergne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. *Estuarine, Coastal and Shelf Science*. 2018, 211, p.188-198, doi:10.1016/j.ecss.2017.09.025. (オンライン公開 2017-09-28)
- Sawada, Hideki; Yamashita, Yoh. Vertical distribution of juvenile sea cucumber *Apostichopus japonicus* in a mesocosm experiment. *Proceedings of the Design Symposium on Conservation of Ecosystem Volume 5 (The 16th SEASTAR2000 workshop)*. 2017, p.10-14, doi:10.14989/226613.
- Watanabe, Kenta; Fukuzaki, Koji; Fukushima, Keitaro; Aimoto, Michihiro; Yoshioka, Takahito; Yamashita, Yoh. Iron and fluorescent dissolved organic matter in an estuarine and coastal system in Japan. *Limnology*. 2017, 19(2), p.229–240, doi:10.1007/s10201-017-0536-9.
- Watanabe, Yoshiro; Kawamura, Tomohiko; Yamashita, Yoh. Introduction: the coastal ecosystem complex as a unit of structure and function of biological productivity in coastal areas. *Fisheries Science*. 2018, 84, p.149–152, doi:10.1007/s12562-018-1176-7.
- Yamamoto, Keigo; Saito, Mami; Yamashita, Yoh. Relationships between the daily growth rate of Japanese anchovy *Engraulis japonicus* larvae and environmental factors in Osaka Bay, Seto Inland Sea, Japan. *Fisheries Science*. 2018, 84(2), p.373–383, doi:10.1007/s12562-018-1178-5.

- Yamaguchi, M.; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Phototaxis, thigmotaxis, geotaxis and response to turbulence in sea cucumber *Apostichopus japonicus* juveniles. *Fisheries Science*. 2018, 84(1), p.33-39, doi:10.1007/s12562-017-1147-4.
- 久米 学, 和田 敏裕, 高木 淳一, 堀 友彌, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 山下 洋. 福島県松川浦におけるクロホシマンジュウダイ幼魚の初記録. *魚類学雑誌*. 2017, 64(2), p.201-205.
- 原田 真実, 久米 学, 望岡 典隆, 田村 勇司, 神崎 東子, 橋口 峻也, 笠井 亮秀, 山下 洋. 大分県国東半島・宇佐地域の伊呂波川と桂川に設置したウナギ石倉かごにより採集されたニホンウナギと水生動物群集. *日本水産学会誌*. 2018, 84(1), p.45-53, doi:10.2331/suisan.17-00032.
- 三簾 仁志, 横山 寿, 山下 洋. 地盤沈下と津波により誕生した塩性湿地における海藻・海草上の小型甲殻類群集. *東京大学国際沿岸海洋研究センター研究報告*. 2017, 36-2. (2017-07-21 オンライン公開 http://www.icrc.aori.u-tokyo.ac.jp/publication/j-report_onlinefirst.html) .
- 益田 玲爾
- Fukunishi, Yuichi; Masuda, Reiji; Seikai, Tadahisa; Nakamura, Mitsuo; Tagawa, Masatomo; Yamashita, Yoh. Comparison of UV-B tolerance between wild-type and albino Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* juveniles. *水産増殖*. 水産増殖. 日本水産増殖学会, 2017, 65(2), p.149-152.
- Jo, Toshiaki; Murakami, Hiroaki; Masuda, Reiji; Sakata, Masayuki K.; Yamamoto, Satoshi; Minamoto, Toshifumi. Rapid degradation of longer DNA fragments enables the improved estimation of distribution and biomass using environmental DNA. *Molecular Ecology Resources*. 2017, 17(6), p.e25-e33, doi:10.1111/1755-0998.12685.
- Minami, Kenji; Sawada, Hideki; Masuda, Reiji; Takahashi, Kohji; Shirakawa, Hokuto; Yamashita, Yoh. Stage-specific distribution of Japanese sea cucumber *Apostichopus japonicus* in Maizuru Bay, Sea of Japan, in relation to environmental factors. *Fisheries Science*. 2018, 84(2), p.251-259, doi:10.1007/s12562-017-1174-1.
- Miyajima-Taga, Yuko; Masuda, Reiji; Kurihara, A.; Komi, R.; Yamashita, Yoh; Takeuchi, Toshio. Efficacy of feeding tiger puffer *Takifugu rubripes* on moon jellyfish with respect to nutritional composition and behavioural traits. *Aquaculture Nutrition*. 2018, 24, p.504-514, doi:10.1111/anu.12583.
- Miyajima-Taga, Yuko; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Feeding capability of black scraper *Thamnaconus modestus* on giant jellyfish *Nemopilema nomurai* evaluated through field observations and tank experiments. *Environmental Biology of Fishes*. 2017, 100, p.1237-1249.
- Nakata, Kuniaki; Yamamoto, Ikki; Miyama, Yoshifumi; Nakamaru, Toru; Masuda, Reiji; Tagawa, Masatomo . Undulated flooring in the rearing tank decreases hypermelanosis in Japanese flounder *Paralichthys olivaceus*. *Fisheries Science*. 2017, 83(6), p.1027-1035, doi:10.1007/s12562-017-1135-8.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ontogeny of turbiditaxis in hatchery-reared Japanese anchovy *Engraulis japonicus* juveniles. *Journal of Fish Biology*. 2018, doi:10.1111/jfb.13580.
- Takahashi, K.; Masuda, Reiji. Net-chasing training improves the behavioral characteristics of hatchery-reared red sea bream (*Pagrus major*) juveniles. *Canadian Journal of Fisheries and Aquatic Sciences*. 2017, doi:10.1139/cjfas-2017-0073.
- Ushio, Masayuki; Hsieh, Chih-hao; Masuda, Reiji; Deyle, Ethan R.; Ye, Hao; Chang, Chun-Wei; Sugihara, George; Kondoh, Michio. Fluctuating interaction network and time-varying stability of a natural fish community. *Nature*. 2018, 554(7692), p.360-363, doi:10.1038/nature25504.
- Ushio, Masayuki; Murakami, Hiroaki; Masuda, Reiji; Sado, Tetsuya; Miya, Masaki; Sakurai, Sho; Yamanaka, Hiroki; Minamoto, Toshifumi; Kondoh, Michio. Quantitative monitoring of multispecies fish environmental DNA using high-throughput sequencing. *Metabarcoding and Metagenomics*. 2018, doi:10.1101/113472.
- Yamaguchi, Mai; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Phototaxis, thigmotaxis, geotaxis and response to turbulence in sea cucumber *Apostichopus japonicus* juveniles. *Fisheries Science*. 2018, 84(1), p.33-39, doi:10.1007/s12562-017-1147-4.
- 甲斐 嘉晃
- Kai, Yoshiaki; Fricke, Ronald. Taxonomic review of the deep water flathead genus *Parabembras* with description of the new species *Parabembras multisquamata* from the western. *ZooKeys*. 2018, 740, p.59-76, doi:10.3897/zookeys.740.21729.
- Kai, Yoshiaki; Tohkairin, Akira; Fujiwara, Kunihiro; Hamatsu, Tomonori. *Careproctus iacchus*, a new variegated snailfish (Liparidae) from the Seas of Japan and Okhotsk. *Ichthyological Research*. 2018, doi:10.1007/s10228-018-0626-7.
- Kai, Yoshiaki; Yamanaka, Tomoyuki. Tsugaru Strait hybrid zone between two Japanese marine sculpins (genus *Cottiusculus*). *Marine Biodiversity*. 2017, doi:10.1007/s12526-017-0771-7.
- Fujita, Junta; Drumm, David T; Iguchi, Akira; Ueda, Yuji; Yamashita, Yuho; Ito, Masaki; Tominaga, Osamu; Kai, Yoshiaki; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. Deep-Sea Phylogeographic Structure Shaped by Paleoenvironmental Changes and Ongoing Ocean Currents Around the Sea of Japan in a Crangonid Shrimp, *Argis lar*. *Zoological Science*. 2017, 34(5), p.406-413, doi:10.2108/zs170014.
- Han, Sang-Yun; Kim, Jin-Koo; Tashiro, Fumihito; Kai, Yoshiaki; Yoo, Joon-Taek. Relative importance of ocean currents and fronts

- in population structures of marine fish: a lesson from the cryptic lineages of the *Hippocampus mohnikei* complex. Marine Biodiversity. 2017, doi:10.1007/s12526-017-0792-2.
- Han, Sang-Yun; Kim, Jin-Koo; Kai, Yoshiaki; Senou, Hiroshi. Seahorses of the *Hippocampus coronatus* complex: taxonomic revision, and description of *Hippocampus haema*, a new species from Korea and Japan (Teleostei, Syngnathidae). Zookeys. 2017, (712), p.113-139, doi:10.3897/zookeys.712.14955.
- Lee, Soo Jeong; Kim, Jin-Koo; Kai, Yoshiaki; Ikeguchi, Shin'ichiro; Nakabo, Tetsuji. Taxonomic review of dwarf species of *Eumicrotremus* (Actinopterygii: Cottoidei: Cyclopteridae) with descriptions of two new species from the western North Pacific. Zootaxa. 2017, 4282 (2), p.337-349, doi:10.11646/zootaxa.4282.2.7.
- Matsunuma, Mizuki; Sato, Mao; Kai, Yoshiaki. Redescription of *Atopocottus tribranchius* (Cottidae) from Japan with comments on the generic diagnosis and distribution. Species Diversity. 2017, 22(1), p.87-97, doi:10.12782/sd.22_87.
- Matsunuma, Mizuki; Kai, Yoshiaki; Motomura, Hiroyuki. First record of the false scorpionfish *Centrogenys vaigiensis* (Perciformes: Centrogeniidae) from the western Indian Ocean. Cybium. 2017, 41(3), p.290-292.
- Stevenson, Duane E.; Mecklenburg, Catherine W.; Kai, Yoshiaki. Taxonomic clarification of the *Eumicrotremus asperimus* species complex (Teleostei: Cyclopteridae) in the eastern North Pacific. Zootaxa. 2017, 4294 (4), p.419-435, doi:10.11646/zootaxa.4294.4.2.
- 甲斐 嘉晃, 野田 勉. 岩手県沿岸から得られた稀種アマクサウオ *Liparis bikunin* の記録. 魚類学雑誌. 2017, 64, p.55-57.
- 後藤 陽子, 甲斐 嘉晃, 堀本 高矩, 坂口 健司, 美坂 正. マルチプレックスPCR法による北海道北部に生息するイカナゴ属魚類の種判別簡易化の検討. 北海道立水産試験場研究報告. 2018, 93, p.81-88.
- 吉川 茜, 岡本 誠, 甲斐 嘉晃. ツマリニギスの日本海南部, 渥美半島沖, および東シナ海北部における記録. 魚類学雑誌. 2018, doi:10.11369/jji.17-054.
- 鈴木 啓太
- Kasai, Akihito; Fuji, Taiki; Suzuki, Keita W.; Yamashita, Yoh. Partial migration of juvenile temperate seabass *Lateolabrax japonicus*: a versatile survival strategy. Fisheries Science. 2018, 84(2), p.153-162, doi:10.1007/s12562-017-1166-1.
- Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Lavergne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. Estuarine, Coastal and Shelf Science. 2018, 211, p.188-198, doi:10.1016/j.ecss.2017.09.025. (オンライン公開 2017-09-28)
- 田城 文人
- Tashiro, Fumihito; Hibino, Yusuke; Miyamoto, Kei. First records of the rare snake eel *Ophichthus exourus* (Pisces: Anguilliformes: Ophichthidae) from the Northern Hemisphere. Species Diversity. 2017, 22, p.213-217, doi:10.12782/specdiv.22.213.
- Tashiro, Fumihito; Tabata, Runa; Nishizawa, Hideaki; Mitamura, Hiromichi. A rare species of *Uropterygius* (Anguilliformes, Muraenidae) found in the stomach content of a Yellow-lipped Sea Krait from Japan. Check List. 2018, 14(1), p.163-166, doi:10.15560/14.1.163.
- Han, Sang-Yun; Kim, Jin-Koo; Tashiro, Fumihito; Kai, Yoshiaki; Yoo, Joon-Taek. Relative importance of ocean currents and fronts in population structures of marine fish: a lesson from the cryptic lineages of the *Hippocampus mohnikei* complex. Marine Biodiversity. 2017, doi:10.1007/s12526-017-0792-2.
- Kawai, Toshio; Tashiro, Fumihito; Imamura, Hisashi; Aungtonya, Charatsee. Deep-sea fishes collected from the Andaman Sea by R/V Chakratong Tongyai during 1996-2000. Part 1: Order Scorpaeniformes. Phuket Marine Biological Center Research Bulletin. 2017, 74, p.23-32.
- Tabata, Runa; Tashiro, Fumihito; Nishizawa, Hideaki; Takagi, Junichi; Kidera, Noriko; Mitamura, Hiromichi. Stomach Contents of Three Sea Kraits (Hydrophiinae: *Laticauda* spp.) in the Ryukyu Islands, Japan. Current Herpetology. 2017, 36(2), p.127-134, doi:10.5358/hsj.36.127.
- 田城 文人. 東北沖太平洋で採集された日本初記録の粒状発光器を欠くクロボウズギス属魚類. 魚類学雑誌. 2017, 64(1), p.37-41.
- 澤田 英樹
- Sawada, Hideki; Yamashita, Yoh. Vertical distribution of juvenile sea cucumber *Apostichopus japonicus* in a mesocosm experiment. Proceedings of the Design Symposium on Conservation of Ecosystem Volume 5 (The 16th SEASTAR2000 workshop). 2017, p.10-14, doi:10.14989/226613.
- Minami, Kenji; Sawada, Hideki; Masuda, Reiji; Takahashi, Kohji; Shirakawa, Hokuto; Yamashita, Yoh. Stage-specific distribution of Japanese sea cucumber *Apostichopus japonicus* in Maizuru Bay, Sea of Japan, in relation to environmental factors. Fisheries Science. 2018, 84(2), p.251-259, doi:10.1007/s12562-017-1174-1.
- Takada, Yoshitake; Kajihara, Naoto; Sawada, Hideki; Mochizuki, Shota; Murakami, Takuhiko. Environmental factors affecting benthic invertebrate assemblages on sandy shores along the Japan Sea coast: implications for coastal biogeography. Ecological Research. 2017, 33(1), p.271-281.

■久米 学

Kume, Manabu; Kitano, Jun. Genetic and stable isotope analyses of threespine stickleback from the Bering and Chukchi seas. Ichthyological Research. 2017, 64(4), p.478-480, doi:10.1007/s10228-017-0580-9.

Kume, Manabu; Mori, Seiichi; Kitano, Jun; Sumi, Tetsuya; Nishida, Shotaro. Impact of the huge 2011 Tohoku-oki tsunami on the phenotypes and genotypes of Japanese coastal threespine stickleback populations. Scientific Reports. 2018, 8, Article number: 1684, doi:10.1038/s41598-018-20075-z.

久米 学, 和田 敏裕, 高木 淳一, 堀 友彌, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 山下 洋. 福島県松川浦におけるクロホシマシメウダイ幼魚の初記録. 魚類学雑誌. 2017, 64(2), p.201-205.

原田 真実, 久米 学, 望岡 典隆, 田村 勇司, 神崎 東子, 橋口 峻也, 笠井 亮秀, 山下 洋. 大分県国東半島・宇佐地域の伊呂波川と桂川に設置したウナギ石倉かごにより採集されたニホンウナギと水生動物群集. 日本水産学会誌. 2018, 84(1), p.45-53, doi:10.2331/suisan.17-00032.

海洋生態系部門

■朝倉 彰

Rogers, D. C.; Ahyong, S. T.; Boyko, C.B.; D'Acoz, C.D.; and 74 signatories including Asakura, Akira. Images are not and should not ever be type specimens: a rebuttal to Garraffoni & Freitas. Zootaxa. 2017, 4269 (4), p.455-459, doi:10.11646/zootaxa.4269.4.3.

Yamamori, Luna; Kagaya, Katsushi; Asakura, Akira. Preliminary report on the shell fighting behaviour of *Pagurus filholi* in two different climate regions in Japan. Crustaceana. 2017, 90, p.1803-1808, doi:10.1163/15685403-00003733.

Yoshikawa, Akihiro; Nakano, Tomoyuki; Satoh, Takashi P.; Asakura, Akira. A colour variation of *Clibanarius virescens* (Krauss, 1843) (Decapoda, Anomura) collected from Amami Oshima Island and Okinawa, Japan. Crustaceana. 2018, 91(1), p.85-101, doi:10.1163/15685403-00003748.

Zeina, Amr; Asakura, Akira. A new species of *Cerapus* Say, 1817 (Amphipoda: Ischyroceridae) from the Red Sea, with a key to the worldwide species of the genus. Journal of Crustacean Biology. 2017, 37(3), p.296-302, doi:10.1093/jcibiol/rux024.

■荒井 修亮

Horie, Jun; Mitamura, Hiroshi; Ina, Yasuhiro; Mashino, Yasuhiko; Noda, Tetsuhiro; Moriya, Kyoji; Arai, Nobuaki; Sasakura Toyoki. Development of a method for classifying and transmitting high-resolution feeding behavior of fish using an acceleration pinger. Animal Biotelemetry. 2017, 5(12), doi:10.1186/s40317-017-0127-x.

Nishizawa, Hideaki; Kono, Y.; Arai, Nobuaki; Shoji, Jun; Mitamura, Hiromichi. Ventilatory and behavioural responses of the marbled sole *Pseudopleuronectes yokohamae* to progressive hypoxia. Journal of Fish Biology. 2017, 90(6), p.2363-2374, doi:10.1111/jfb.13319.

Shoji, Jun; Mitamura, Hiromichi; Ichikawa, Kotaro; Kinoshita, Hikari; Arai, Nobuaki. Increase in predation risk and trophic level induced by nocturnal visits of piscivorous fishes in a temperate seagrass bed. Science Report. 2017, 7, Article number: 3895, doi:10.1038/s41598-017-04217-3.

Tanaka, Kotaro; Ichikawa, Kotaro; Nishizawa, Hideaki; Kittiwattanawong, Kongkiat; Arai, Nobuaki; Mitamura, Hiromichi. Differences in vocalisation pattern of dugongs between fine-scale habitats around Talibong Island, Thailand. Acoustic Australia. 2017, 45(2), p.243-251, doi:10.1007/s40857-017-0094-7.

Wada, Toshihiro; Kamiyama, Kyoichi; Mitamura, Hiromichi; Arai, Nobuaki. Horizontal movement and emigration of juvenile spotted halibut *Verasper variegatus* released in a shallow brackish lagoon. Fisheries Science. 2017, 83, p.573-585, doi:10.1007/s12562-017-1099-8.

久米 学, 和田 敏裕, 高木 淳一, 堀 友彌, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 山下 洋. 福島県松川浦におけるクロホシマシメウダイ幼魚の初記録. 魚類学雑誌. 2017, 64(2), p.201-205.

■久保田 信

久保田 信. カギノテクラゲの一種(刺胞動物門, ヒドロ虫綱, 淡水クラゲ目)の付着姿勢. 日本生物地理学会会報. 2018, 72, p.247-249.

久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に生息するスナガニ類(甲殻類, スナガニ科)の巣穴数の月変動. 南紀生物. 2017, 59(1), p.93-94.

久保田 信. 和歌山県田辺湾におけるイシサンゴ類とイソギンチャク類(刺胞動物門, 花虫綱)の白化からの回復. 日本生物地理学会会報. 2018, 72, p.232-235.

久保田 信. 和歌山県田辺湾とその近隣海域におけるムラサキイガイ個体群の激減とミドリイガイ個体群の激増(続報). 日本生物地理学会会報. 2018, 72, p.223-225.

久保田 信. 和歌山県みなべ町の海岸へ漂着した特大の軽石. 漂着物学会誌. 漂着物学会, 2017, 15, p.25.

久保田 信, 北田 博一, 菅野 和彦. 放射能の影響下にある福島県と茨城県産ベニクラゲとニホンベニクラゲ(ヒドロ

- 虫綱, 花クラゲ目)の奇形. 日本生物地理学会会報. 2018, 72, p.219-222.
- 久保田 信, 土生 紳吾. 島根県と和歌山県で発見された稀少なハナウスラヒトデ(棘皮動物). 日本生物地理学会会報. 2018, 72, p.226-228.
- 久保田 信, 新稲 一仁. 和歌山県西牟婁郡白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所付近で採集されたオオサルパ(タリア綱, サルパ目). 漂着物学会誌. 2017, 15, p.26.
- 亀卦川 樹, 北田 洋平, 向井 有理, 越中谷 賢治, 久保田 信. ニホンベニクラゲ(ヒドロ虫綱, 花クラゲ目)『若返り』現象の誘導. 日本生物地理学会会報. 2018, 72, p.266-270.
- 鈴木 明彦, 久保田 信. 和歌山県白浜町に打ち上げられたウミギク属貝殻に見られる穿孔痕 *Oichnus simplex*. 漂着物学会誌. 2017, 15, p.16.
- 市川 光太郎
- Shoji, Jun; Mitamura, Hiromichi; Ichikawa, Kotaro; Kinoshita, Hikari; Arai, Nobuaki. Increase in predation risk and trophic level induced by nocturnal visits of piscivorous fishes in a temperate seagrass bed. Science Report. 2017, 7, Article number: 3895, doi:10.1038/s41598-017-04217-3.
- Takagi, Junichi; Ichikawa, Kotaro; Arai, Nobuaki; Miyamoto, Yoshinori; Uchida, Keiichi; Fujioka Ko; Fukuda, Hiromu; Mitamura, Hiromichi. Evaluation of multipath effects on depth measurements provided by acoustic transmitters in shallow water. Proceedings of the Design Symposium on Conservation of Ecosystem (The 16th SEASTAR2000 workshop). 2017, 5, p.15-19, doi:10.14989/226612.
- Tanaka, Kotaro; Ichikawa, Kotaro; Nishizawa, Hideaki; Kittiwattanawong, Kongkiat; Arai, Nobuaki; Mitamura, Hiromichi. Differences in vocalisation pattern of dugongs between fine-scale habitats around Talibong Island, Thailand. Acoustic Australia. 2017, 45(2), p.243-251, doi:10.1007/s40857-017-0094-7.
- 大和 茂之
- 大和 茂之. 南方曼荼羅論再考: 燕石考に「名」を読み取る. 熊楠研究. 南方熊楠顕彰会, 2018, 12, p.6-27.
- 大和 茂之. 和歌山県行幸記念自然博物館について. 熊楠研究. 南方熊楠顕彰会, 2018, 12, p.144-157.
- 中野 智之
- Nakayama, Ryo; Sasaki, Takenori; Nakano, Tomoyuki. Molecular analysis reveals a new cryptic species in a limpet *Lottia kogamogai* (Patellogastropoda: Lottiidae) from Japan. Zootaxa. Mangolia Press, 2017, 4277(2), p.237-251, doi:10.11646/zootaxa.4277.2.4.
- Williams, Suzanne T.; Lockyer, Anne E.; Dyal, Patricia; Nakano, Tomoyuki; Churchill, Celia K.C.; Speiser, Daniel I. Colorful seashells: Identification of haem pathway genes associated with the synthesis of porphyrin shell color in marine snails. Ecology and Evolution. 2017, 7(23), p.10379-10397, doi:10.1002/ece3.3552.
- Yoshikawa, Akihiro; Nakano, Tomoyuki; Satoh, Takashi P.; Asakura, Akira. A colour variation of *Clibanarius virens* (Krauss, 1843) (Decapoda, Anomura) collected from Amami Oshima Island and Okinawa, Japan. Crustaceana. 2018, 91(1), p.85-101, doi:10.1163/15685403-00003748.
- 中野 智之. カサガイ目概説. ちりぼたん. 2018, 48(1-4), p.1-19.
- 小林 志保
- Kobayashi, Shiho; Nakada, Satoshi; Nakajima, Masaki; Yamamoto, Keigo; Akiyama, Satoshi; Fuchi, Masaki; Hayashi, Masataka; Ishizaka, Joji. Visualization of the distribution of dissolved organic matter in Osaka Bay using a satellite ocean color sensor (COMS/GOCI). Journal of Water and Environment Technology. 2017, 15(2), p.55-64, doi:10.2965/jwet.16-055.
- Kobayashi, Shiho; Nakada, Satoshi; Takagi, Shuzo; Hirose, Naoki. Parameter optimization of a 3D coastal model using Green's functions for modelling river plume dynamics. Journal of Advanced Simulation in Science and Engineering. 2017, 3(2), p.153-164, doi:10.15748/jasse.3.153.
- Nakada, Satoshi; Kobayashi, Shiho; Hayashi, Masataka; Ishizaka, Joji; Akiyama, Satoshi; Fuchi, Masaki; Nakajima, Masaki. High-resolution surface salinity maps in coastal oceans based on geostationary ocean color images: quantitative analysis of river plume dynamics. Journal of Oceanography. 2018, p.1-18, doi:10.1007/s10872-017-0459-4.
- 小林 志保, 藤原 建紀, 駒井 幸雄, 田中 周平, 鈴木 裕識. 沿岸海域の貧酸素化を引き起こす有機物の起源推定: 炭素安定同位体比を用いたアプローチ. 水環境学会誌. 2018, 41(1), p.1-10, doi:10.2965/jswe.41.1.
- 後藤 龍太郎
- Goto, Ryutaro; Ishikawa, Hiroshi; Hamamura, Yoichi. The enigmatic bivalve genus *Paramya* (Myoidea: Myidae): symbiotic association of an East Asian species with spoon worms (Echiura) and its transfer to the family Basterotiidae (Galeommatoidea). Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom. 2017, 97(7), p.1447-1454, doi:10.1017/S0025315416000758.
- Kato, Makoto; Yamamori, Luna; Goto, Ryutaro; Tsubaki, Remi; Ohsuga, Ken. A new large tellinid species of the genus *Pharaonella* (Mollusca: Bivalvia) from the Ryukyu Archipelago, Japan (Mollusca, Bivalvia). ZooKeys. Springer Japan, 2017,

705, p.1-13, doi:10.3897/zookeys.705.12888.

■佐藤 崇

Satoh, Takashi P. Complete mitochondrial genome sequence of *Glaucosoma buergeri* (Pempheriformes: Glaucosomatidae) with implications based on the phylogenetic position. Mitochondrial DNA Part B Resources . 2018, 3(1), p.107-109, doi:10.1080/23802359.2018.1424583.

Yoshikawa, Akihiro; Nakano, Tomoyuki; Satoh, Takashi P.; Asakura, Akira. A colour variation of *Clibanarius virescens* (Krauss, 1843) (Decapoda, Anomura) collected from Amami Oshima Island and Okinawa, Japan. Crustaceana. 2018, 91(1), p.85-101, doi:10.1163/15685403-00003748.

森里海連環学教育ユニット

■横山 寿

Kumagai, Yoichiro; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Physico-chemical and macrobenthic characteristics of a salt marsh created in the aftermath of the Great East Japan Earthquake. Coastal marine science. International Coastal Research Center, Atmosphere and Ocean Research Institute, the University of Tokyo, 2017, 40(2), p.86-94.

Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Lavergne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. Estuarine, Coastal and Shelf Science. 2018, 211, p.188-198, doi:10.1016/j.ecss.2017.09.025. (オンライン公開 2017-09-28)

■清水 夏樹

清水 夏樹. 「人」にこだわる地域・事業コーディネートの試み. 水土の知. 2017, 85(11), p.3-6.

岩崎 萌汰, 清水 夏樹, 星野 敏, 鬼塚 健一郎. 京都府下の農家民宿におけるインバウンドの実態に関する研究. 農村計画学会誌. 2017, 36巻 (論文特集号), p.235-241.

河村 充起, 星野 敏, 清水 夏樹, 鬼塚 健一郎. 農家民宿群形成と継続の課題に関する研究: 石川県能登町「春蘭の里」を事例として. 農村計画学会誌. 2017, 36巻 (論文特集号), p.242-249.

北山 幸治, 鬼塚 健一郎, 星野 敏, 清水 夏樹. 農村景観に対する印象と意識の地域内外での差異に関する研究: 訪問客の増加につながる効果的な情報発信に向けて. 農村計画学会誌. 2017, 36巻 (論文特集号), p.250-256.

黄 琬惠, 清水 夏樹. 台湾における環境教育法の施行と集落経営型の環境教育の実態. 環境情報学会 学術研究論文集. 2017, 31, p.83-88, doi:10.11492/ceispapers.ceis31.0_83.

黄 琬惠, 清水 夏樹. 台湾における住民参加型グリーンツーリズムの発展と法制度: 震災復興地域における中山間集落を事例に. 農村計画学会誌. 2017, 36巻 (論文特集号), p.229-234.

山本 芳華, 清水 夏樹. 持続可能な茶業をめざした地域資源マネジメント: 大和茶普及イベントを通じた商品開発の動向把握について. 平安女学院大学研究年報. 2017, 18, p.34-42.

■Lavergne,Edouard

Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Lavergne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. Estuarine, Coastal and Shelf Science. 2018, 211, p.188-198, doi:10.1016/j.ecss.2017.09.025. (オンライン公開 2017-09-28)

■黄 琬惠

黄 琬惠, 清水 夏樹. 台湾における環境教育法の施行と集落経営型の環境教育の実態. 環境情報学会 学術研究論文集. 2017, 31, p.83-88, doi:10.11492/ceispapers.ceis31.0_83.

黄 琬惠, 清水 夏樹. 台湾における住民参加型グリーンツーリズムの発展と法制度: 震災復興地域における中山間集落を事例に. 農村計画学会誌. 2017, 36巻 (論文特集号), p.229-234.

■包 薩日娜

包 薩日娜, 服部 俊宏. 首都圏在住の移住希望者の移住情報収集行動. 農村計画学会誌. 2017, 36, p.209-216.

白眉センター

■原村 隆司

Haramura, Takashi. Behavioral responses of cane toad (*Rhinella marina*) adults and tadpoles to chemical cues. Bangladesh Journal of Zoology.. 2017, 45, p.149-157, doi:10.3329/bjz.v45i2.35710.

Haramura, Takashi; Crossland, Michael R.; Takeuchi, Hirohiko; Shine, Richard. Methods for invasive species control are transferable across invaded areas. PloS ONE. 2017, 12(11), p.e0187265, doi:10.1371/journal.pone.0187265.

■加賀谷 勝史

Yamamori, Luna; Kagaya, Katsushi; Asakura, Akira. Preliminary report on the shell fighting behaviour of *Pagurus filholi* in two different climate regions in Japan. Crustaceana. 2017, 90, p.1803-1808, doi:10.1163/15685403-00003733.

管理技術部

■北川 陽一郎, 太田 健一, 岡部 芳彦, 勝山 智憲, 岸本 泰典, 佐藤 修一, 柴田 泰征, 中川 智之, 西岡 裕平, 林 大輔, 古田 卓, 山内 隆之, 吉岡 歩

北川 陽一郎, 松山 周平, 太田 健一, 岡部 芳彦, 勝山 智憲, 岸本 泰典, 佐藤 修一, 柴田 泰征, 中川 智之, 西岡 裕平, 林 大輔, 古田 卓, 山内 隆之, 吉岡 歩, 館野 隆之輔. 北海道東部におけるエゾシカの日周活動と時空間分布の季節変化. 森林立地. 2017, 59(1), p.1-11, doi:10.18922/jjfe.59.1_1.

◆原著論文・総説（査読なし）

森林生態系部門

■長谷川 尚史

長谷川 尚史. 林内走行の限界への挑戦. 森林利用学会誌. 2017, 32(3), p.149-156.

■伊勢 武史

Ise, Takeshi; Minagawa, Mari; Onishi, Masanori. Identifying 3 moss species by deep learning, using the "chopped picture" method. arXiv. :1708.01986, 2017.

里域生態系部門

■益田 玲爾

益田 玲爾, 村上 弘章, 高橋 宏司, 源 利文, 宮 正樹. 環境DNAの有効性：水槽実験とフィールドでの検証. 海洋と生物. 2018, 40(1), p.17-22.

海洋生態系部門

■久保田 信

Kubota, Shin; Collins, Allen. A single origin of bivalve-inhabiting Hydrozoans (Cnidaria, Hydrozoa, Leptomedusae) in the family Eirenidae based on an analysis of 16S rRNA gene. Biogeography. Biogeographical Society of Japan, 2017, 19, p.75-79.

Kubota, Shin; Hui-Tai, Lee Tiger; Tan, William. Occurrence of a rare Thecocodium medusa (Anthomedusae, Ptilocodiidae) from Taiwan. Kuroshio Biosphere. 黒潮生物研究財団, 2018, 14, p.7-9.

Kubota, Shin; Hanzawa, Naoto. Occurrence of *Eugymnanthea* sp. (Leptomedusae, Eirenidae), an evolutionary advanced species of the bivalve-inhabiting hydrozoans, from Ongael Lake, Palau Islands, associated with *Brachidontes* sp. (Bivalves, Mytilidae). Kuroshio Biosphere. 黒潮生物研究財団, 2018, 14, p.22-26.

Kubota, Shin; Nagai, Satoshi. 16S Mitochondrial gene sequence analysis of some Turritopsis (Hydrozoa, Oceanidae) from Japan and Abroad. Kuroshio Biosphere. 黒潮生物研究財団, 2018, 14, p.1-6.

Asano, Gyoichi; Kubota, Shin; Yamakami, Yoshimi; Fujii, Michihiko. Identification of manubrium pigments in two species of Turritopsis medusae (Cnidaria, Hydrozoa) in Japan. Kuroshio Biosphere. 黒潮生物研究財団, 2018, 14, p.10-16.

Suzuki, Akihiko; Kubota, Shin. Traces of the predatory gastropod (ichnospecies *Oichnus simplex*) found in shells of *Spondylus* sp. (Mollusca, Spondylidae) washed ashore at Shirahama Town, Wakayama Prefecture, Japan. 漂着物学会誌. 2017, 15, p.15-16.

久保田 信. イシガケチョウ(鱗翅目)が和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所"北浜"で塩分補給.

KINOKUNI. 和歌山昆虫研究会, 2017, 91, p.15-15.

久保田 信. 幾つかの和歌山県串本町産軟体動物の特長の貝殻. 本覺寺杼貝. 黒潮貝類同好会, 2018, 83, p.17-18.

久保田 信. 幾つかの特長の海産軟体動物の貝殻. 阪神貝類談話会機関紙 かいなかま. 2017, 51(1), p.41-43.

久保田 信. ウスバキトンボが京都大学瀬戸臨海実験所北浜（和歌山県白浜町）へ漂着. KINOKUNI. 和歌山昆虫研究会, 2017, 92, p.19-20.

久保田 信. ウスバキトンボの京都大学瀬戸臨海実験所構内（和歌山県白浜町）への2017年の初見日. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.1-2.

久保田 信. ウスバキトンボ(トンボ科)の京都大学瀬戸臨海実験所構内（和歌山県白浜町）への出現. KINOKUNI. 和歌山昆虫研究会, 2017, 91, p.12-14.

久保田 信. 沖縄島と伊江島にいた小形のモンシロチョウ(シロチョウ科). くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.3.

久保田 信. 北浜にニッパヤシ果実が再び漂着. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.24-25.

久保田 信. 最近入手した特大の貝殻. 本覺寺杼貝. 黒潮貝類同好会, 2017, 81, p.31-33.

久保田 信. 穿孔されたタカラガイ. 本覺寺杼貝. 黒潮貝類同好会, 2017, 82, p.27-28.

久保田 信. ボラが9回連続ジャンプ. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.25-25.

久保田 信. ホルマリン固定された数種のヒドロクラゲ(刺胞動物門, ヒドロ虫綱)のGFP分布パターン. Kuroshio Biosphere. 黒潮生物研究財団, 2018, 14, p.18-21.

- 久保田 信. 四つ葉と二つ葉のクローバー. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.23.
- 久保田 信. 和歌山県内之浦干潟の2種の二枚貝. 本覺寺桴貝. 黒潮貝類同好会, 2017, 82, p.31-32.
- 久保田 信. 和歌山県串本産の巨大なシマメノウフネガイ(カリバガサ科). 本覺寺桴貝. 黒潮貝類同好会, 2017, 82, p.29-30.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町瀬戸漁港に漂着したサツマゴキブリ (ゴキブリ目, ゴキブリ上科). KINOKUNI. 和歌山昆虫研究会, 2017, 92, p.21.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町でツバメが二番目の巣を隣り合わせに作成. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.31-31.
- 久保田 信. 4例目のハリテボク果実の和歌山県白浜町の海岸への漂着記録. 漂着物学会会報「どんぶらこ」. 2017, 56, p.1.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所"北浜"へ漂着したホシダカラガイ(腹足綱, タカラガイ科)の成貝. 漂着物学会会報「どんぶらこ」. 2017, 56, p.2-3.
- 久保田 信. 京都大学瀬戸臨海実験所に保管されていた大形のゾウクラゲの標本. 漂着物学会会報「どんぶらこ」. 2017, 57, p.4-5.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所"南浜"へオオミズナギドリ(ミミズナギドリ科)が漂着. 漂着物学会会報「どんぶらこ」. 2017, 58, p.13.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所"北浜"で初めて生青したオカヒジキ(ヒユ科/アカザ科). 漂着物学会会報「どんぶらこ」. 2017, 58, p.13-14.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所構内でのクマゼミ(半翅目, セミ科)の一日の鳴き始め時刻の2017年の月変化. KINOKUNI. 和歌山昆虫研究会, 2017, 92, p.17-18.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所北浜におけるヒトハリザトウムシ(鋏角類, ザトウムシ類)の定住性. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.4-6.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する瀬戸漁港へ漂着した大形で平たい軽石. どんぶらこ. 漂着物学会会報, 2017, 56, p.1-2.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町の海岸でハチジョウダカラ(腹足綱, タカラガイ科)の打ち上げ. 本覺寺桴貝. 黒潮貝類同好会, 2017, 81, p.19-22.
- 久保田 信. 和歌山県白浜町の定点における2017年のオカヤドカリ類(甲殻類, 異尾類)の出現と放仔行動. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.7.
- 久保田 信. 和歌山県田辺湾への2013年4月以降のハクジラ類(哺乳類)の記録. くろしお. 南紀生物同好会, 2017, 36, p.26-27.
- 久保田 信. 和歌山県のとある川の巻貝類. 本覺寺桴貝. 黒潮貝類同好会, 2018, 83, p.19-20.
- 久保田 信. 和歌山県産の矮小なクマゼミ(半翅目, セミ科). KINOKUNI. 和歌山昆虫研究会, 2017, 92, p.18.
- 平澤 康太, 久保田 信. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所"北浜"へ打ち上げられたイモガイ類(腹足綱, 前鰓亜綱, 新腹足目)の貝殻目録. 漂着物学会会報「どんぶらこ」. 2017, 57, p.3-4.

森里海連環学教育ユニット

■横山 寿

横山 寿. 沿岸環境研究への安定同位体比分析法の利用. 海洋化学研究. 海洋化学研究所, 宇治, 2017, 30(2), p. 120-124.

白眉センター

■原村 隆司

原村 隆司. データロガーを用いた外来生物オオヒキガエルの防除の試み(奮闘編). 日本バイオリギング研究会会報. 2018, 139, p.10-11.

◆その他(一般誌・報告書等)

森林生態系部門

■長谷川 尚史

長谷川 尚史. 林業イノベーションの方向性. 山林. 2017, 1598, p.2-10.

長谷川 尚史. 林業におけるイノベーション: 斜陽産業から成長産業へのパラダイムシフト. Suruga Institute report. 2017, 140, p.8-11.

■伊勢 武史

伊勢 武史. 僕はなぜ、仏像に手を合わせるのだろうか? 季刊誌「ひとりふたり・・・」. 法蔵館, 2017, 143.

里域生態系部門

■益田 玲爾

益田 玲爾. 舞鶴の海から. 京大広報. 2017, 729, p.4839.

■梅本 信也

梅本 信也(編集). 古座川合同調査報告集第13巻第2号. 京都大学紀伊大島実験所, 福知山市, 2017, p.511-1121.

梅本 信也(編集). 古座川合同調査報告集第14巻第1号. 京都大学紀伊大島実験所, 福知山市, 2018, p.1-660.

■田城 文人

田城 文人. ホラアナゴ科: 200mを超える深海で, 人知れず暮らすなかまたち. 中坊徹次 編・監修. WEB図鑑Z「日本の魚とはどのようなものか」. 小学館, 2017. http://bp.shogakukan.co.jp/z_sakana/vol21.html

■久米 学

久米 学. タイリクバラタナゴの苦い思い出. 向井 貴彦. 岐阜県の魚類. 岐阜新聞社総合メディア局出版室, 2017.

久米 学. ハリヨの現状と保全. 向井 貴彦. 岐阜県の魚類. 岐阜新聞社総合メディア局出版室, 2017.

海洋生態系部門

■久保田 信

久保田 信. (書評)『美しい海の浮遊生物図鑑』若林香織・田中裕志(著) 阿部秀樹(写真). タクサ: 日本動物分類学会誌. 2018, 44, p.69-70.

久保田 信. 京都大学の思い出. 京都大学生協同組合 教職員情報. 2018, 142.

久保田 信. <レポート>和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所構内の一角におけるクマゼミ(半翅目、セミ科)雌雄の羽化数の2016年の経時的変化. 瀬戸臨海実験所年報. 2017, 29, p.15-17.

久保田 信, 新稲 一仁. <レポート>ベニクラゲの一種(ヒドロ虫綱、花クラゲ目)のポリプの実験室での成長. 瀬戸臨海実験所年報. 2017, 29, p.18-20.

■中野 智之

河村 真理子, 岡西 政典, 中野 智之, 加藤 哲哉, 原田 桂太, 山内 洋紀, 千徳 明日香, 小泉 智弘, 中山 凌, 中町 健, 吉川 晟弘, 高橋 陽子. 白浜の海岸生物観察ガイド: 動物・海藻・陸上植物. 朝倉 彰 編集. 京都大学 フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所/白浜水族館, 和歌山県郡白浜町, 2018, p.1-94.

■河村 真理子

河村 真理子, 岡西 政典, 中野 智之, 加藤 哲哉, 原田 桂太, 山内 洋紀, 千徳 明日香, 小泉 智弘, 中山 凌, 中町 健, 吉川 晟弘, 高橋 陽子. 白浜の海岸生物観察ガイド: 動物・海藻・陸上植物. 朝倉 彰 編集. 京都大学 フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所/白浜水族館, 和歌山県郡白浜町, 2018, p.1-94.

森里海連環学教育ユニット

■吉積 巳貴

吉積 巳貴. 近江八幡と京都大学の連携で次世代リーダーをつくる. 環境会議. 2017, 2017年秋号.

管理技術部

■荒井 亮

荒井 亮. 和歌山研究林における災害対策工事の取り組み. 研究林・試験地情報. 2018, 2016(平成28)年度, p.25-27.

■北川 陽一郎

北川 陽一郎. 北海道研究林で行われた直営伐出作業の生産性調査. 研究林・試験地情報. 2018, 2016(平成28)年度, p.28-31.

■加藤 哲哉, 原田 桂太, 山内 洋紀

河村 真理子, 岡西 政典, 中野 智之, 加藤 哲哉, 原田 桂太, 山内 洋紀, 千徳 明日香, 小泉 智弘, 中山 凌, 中町 健, 吉川 晟弘, 高橋 陽子. 白浜の海岸生物観察ガイド: 動物・海藻・陸上植物. 朝倉 彰 編集. 京都大学 フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所/白浜水族館, 和歌山県郡白浜町, 2018, p.1-94.

◆学会発表（発表要旨を含む）

森林生態系部門

■長谷川 尚史

Hasegawa, Hisashi; Shirasawa, Hiroaki; Okada, Hiroyuki; Suzuki, Hideaki; Sakaguchi, Seiichiro; Nakane, Takao. Long-term wood supply planning using precise forest information. Productivity and Safety of Final Cutting on Mountain Forests. 松山, 2017-07-25, 2017, p.P10.

吉田 雅理・北山 兼弘・長谷川 尚史・小野田 雄介. 針広混交林における樹冠構造の複雑性と森林生産性の関係. 日本生態学会. 札幌, 2018-03-17, 2018, p. P2-079.

岡田 広行・坂口 精一郎・鈴木 秀明・立山 健太郎・榎田 健三郎・吉田 保衡・中根 貴雄・政所 拓・澤井 政宏・長谷川 尚史・白澤 紘明. スマート林業の展開（IV）：特性の異なる地域での木材SCMシステム構築. 日本森林学会. 高知, 2018-03-28, 2018, p. K4.

■館野 隆之輔

Iwaoka, Chikae; Hyodo, Fujio; Taniguchi, Takeshi; WShi, eiyou; Du, Sheng; Yamanaka Norikazu; Tateno Ryunosuke. The symbiotic relationship between dominant canopy trees and soil microbes affects the nitrogen source utilization of co-existing understory trees. 2017 AGU Fall meeting. New Orleans, 2017-12-12, 2017.

Iwaoka, Chikae; Taniguchi, Takeshi; Du, Sheng; Yamanaka, Norikazu; Tateno, Ryunosuke. Soil microbial communities associated with each step in nitrogen transformation along a rainfall gradient in semiarid forests. 第65回日本生態学会大会. 札幌、札幌コンベンションセンター, 2018-03-14/18, 2018.

Nagane, Miwako; Shibata, Hideaki; Uchida, Yoshitaka; Tateno Ryunosuke. Effects of nutrient addition on nitrous oxide and nitrate leaching from soils under different land-use in northern Japan. International Workshop on N2O Emissions in Various Ecosystems: Site-Based Research and Global Synthesis. Taiwan Agricultural Research Institute, 2017-11-28/12-01, 2017.

岡 裕章, 磯部 一夫, 渡辺 恒太, 館野 隆之輔, 妹尾 啓史, 柴田 英昭. 北方林における積雪パターンの変化に対する微生物群集の応答. 日本土壌肥料学会 講演要旨集. 2017, 63, p.34.

堅田 元喜, 福島 慶太郎, 小嵐 淳, 山口 高志, 渡辺 誠, 館野 隆之輔. 森林源流域から進行する窒素飽和メカニズムの解明と森林炭素蓄積能力への影響評価. 第65回日本生態学会大会. 札幌、札幌コンベンションセンター, 2018-03-14/18, 2018.

中山 理智, 館野 隆之輔. 北海道東部の天然林における土壌深度ごとの細胞外酵素活性と細根形態. 日本森林学会大会 第129回. 高知, 2018-03-26, 2018, doi:10.11519/jfsc.129.0_336.

長根 美和子, 柴田 英昭, 内田 義崇, 館野 隆之輔. 北海道東部の異なる土地利用下における土壌からの亜酸化窒素発生と硝酸溶脱の関係. 第65回日本生態学会大会. 札幌コンベンションセンター, 2018-03-14/18, 2018.

兵藤 不二夫, 田中 洋, 原口 岳, 館野 隆之輔, 廣部 宗, 陀安 一郎. 冷温帯林の二次遷移に伴う地上部-地下部の生態特性とアリ群集の食性の変化. 第65回日本生態学会大会. 札幌コンベンションセンター, 2018-03-14/18, 2018.

細川 奈々枝, 磯部 一夫, 浦川 梨恵子, 館野 隆之輔, 福澤 加里部, 渡辺 恒太, 柴田 英昭. 土壌の凍結融解が根リター増加を介して土壌の窒素変換に与える影響. 日本森林学会大会第129回. 高知, 2018-03-26, 2018, doi:10.11519/jfsc.129.0_718.

■伊勢 武史

Ise, Takeshi; Minagawa, Mari; Onishi, Masanori. Obtaining big data of vegetation using artificial neural network. American Geophysical Union Fall Meeting. 2017-12-15, 2017.

伊勢 武史, 渡辺 俊太郎. 自由集会：ディープラーニングが革新する生態学. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-17, 2018.

伊勢 武史, 渡辺 俊太郎. ビッグデータで植物の季節変化を解明する. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-17, 2018.

大西 信徳, 伊勢 武史. 人工知能は樹種を識別できるのか：ドローンと深層学習を用いた上空からの挑戦. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-16, 2018.

角 和暁, 渡辺 俊太郎, 伊勢 武史. 深層学習による衛星画像を用いた竹林識別モデルの開発. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-16, 2018.

野田 佳愛, 伊勢 武史. なぜ人は森で感動するのだろうか：脳波からみる行動別心理的効果の違い. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-15, 2018.

皆川 まり, 伊勢 武史, 大西 信徳. 人工知能によるコケマップの完成を目指して：苔庭管理のための画像認識モデルの提案. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-15, 2018.

渡辺 俊太郎, 伊勢 武史. 深層学習による衛星画像からの樹種識別とその応用: 竹林での試み. 日本生態学会第65回大会. 札幌, 2018-03-17, 2018.

■石原 正恵

石原 正恵. 産みっぱなし論文術. 第129回日本森林学会. 高知市, 2018-03-28, 2018.

石原 正恵. シカ生息地におけるオオバアサガラ林の成立と剥皮による枯死. 第129回日本森林学会. 高知市, 2018-03-28, 2018.

■小林 和也

Kobayashi, Kazuya. Sex as a maintenance mechanism of biodiversity. 2nd CER-NIE Joint Symposium, 2017 Ecology in a new generation: Interdisciplinary approach to biodiversity. Maskawa Hall, Kyoto University, 2017-12-09, 2017.

Kobayashi, Kazuya. Sex as a maintenance mechanism of biodiversity. 第33回個体群生態学会大会. 福岡市, 2017-10-14, 2017.

小林 和也. 生態系を駆動するメカニズムとしての進化生態学 ~遺伝子から物質循環まで~. 道東森里海連環シンポジウム. 厚岸町, 2017-10-27, 2017.

小林 和也. 性を維持する分子基盤の解明. 第5回生態進化発生コロキウム. 東京都目黒区, 2017-12-28, 2017.

小林 和也. 性に秘められた鍵 -生物多様性の維持メカニズム-. 第65回日本生態学会大会. 札幌市, 2018-03-17, 2018.

小林 和也, 長谷川 英祐, 石井 康規. 効率か? 存続か? それが問題だ! -生物は何に対して最適化されているのか?. 第65回日本生態学会大会. 札幌市, 2018-03-19, 2018.

■坂野上 なお

坂野上 なお. 北関東における新たな国産材産地の形成とプレカットおよび住宅産業の動向. 第129回日本森林学会大会. 高知大学 (高知市), 2018-03-27, 2018.

■中西 麻美

中西 麻美, 稲垣 善之, 大澤 直哉, 柴田 昌三. 京都市におけるヒノキの繁殖器官の生産に前年の気温と繁殖が及ぼす影響. 第68回応用森林学会大会. 高松, 2017, A09.

中西 麻美, 稲垣 善之, 大澤 直哉, 柴田 昌三. ヒノキの繁殖器官の生産に前年夏の気象条件が及ぼす影響. 第129回日本森林学会大会. 高知, 2018-03-28, 2018.

■中川 光

中川 光. 集水域の森林下層植生が衰退した河川の環境と魚類相の10年間の変化. 第65回生態学会大会. 札幌, 2018-03, 2018, P2-205.

里域生態系部門

■山下 洋

Furukawa, Genki; Sawada, Hideki; Mitamura, Hiromichi; Ichikawa, Kotaro; Masuda, Reiji; Arai, Nobuaki; Yamashita, Yoh. Aestivation sites of Japanese sea cucumber (*Apostichopus japonicas*) determined by acoustic biotelemetry. 4th International Conference on Fish Telemetry. Cairns, Australia, 2017-06-19/23, 2017, 4, p.137.

Hoshiba, Yasuhiro; Matsumura, Yoshimasa; Hasumi, Hiroyashu; Itoh, Sachihiko; Yamashita, Yoh. Effects of suspended sediment matters induced by high riverine discharge on coastal mixing: a model simulation. 2017年度地球惑星連合大会(JpGU). 幕張メッセ, 2017-05-22, 2017.

Hoshiba, Yasuhiro; Matsumura, Yoshimasa; Hasumi, Hiroyashu; Itoh, Sachihiko; Yamashita, Yoh. Simulation on the Effects of Suspended Sediment Matters Induced by High Riverine Discharge on Coastal Mixing. AOGS. シンガポール, 2017-08-08, 2017.

Inoue, Hiroshi; Laverigne, Edouard; Kume, Manabu; Yamashita, Yoh. Spatial and seasonal change of coastal benthic community in Tango Bay, Japan. International Workshop on Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies - An Opportunity for Networking. 京都大学, 2017-10-28, 2017.

Kanzaki, Toko; Kume, Manabu; Hashiguchi, Shunya; Harada, Mami; Mochioka, Noritaka; Kasai, Akihiko; Tamura, Yuji; Yokoyama, Hisashi; Arai, Nobuyuki; Yamashita, Yoh. Comparison of aquatic biological production systems between two rivers in Oita Prefecture, Japan. 日本水産学会国際シンポジウム. 東京海洋大学, 2017-09-24, 2017, p.SP05-07.

Kimura, S.; Tsutsui, M.; Suzuki, Keita W.; Sawada, Hideki; Fukunishi, Y.; Yamane, K.; Watanabe, Y.; Yamashita, Yoh. Application of otolith oxygen stable isotope ratios for identification of two Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, populations which use Tango Bay as a nursery ground. The 10th Flatfish International Symposium. Saint Malo, France, 2017-11-14, 2017, p.108.

Komaki, Takuhei; Hori, Tomoya; Kume, Manabu; Noda, Takuji; Mitamura, Hiromichi; Arai, Nobuaki; Yamashita, Yoh. Comparison of movement patterns between wild ; cultured eels *Anguilla japonica* in Matsukawa-ura lagoon, Fukushima Prefecture, Japan. 京都大学・日本財団森里海国際シンポジウム『森里海連環を担う人材育成の成果と展望』. 京都大学, 2017-10-28, 2017.

- Okazaki, Takumi; Duane, E. Stevenson; Ueda, Yuji; Hamatsu, Tomonori; Kai, Yoshiaki; Yamashita, Yoh. Genetic population structure of *Aptocyclus ventricosus* in the Northern Pacific. 京都大学・日本財団森里海国際シンポジウム『森里海連環を担う人材育成の成果と展望』. 京都大学, 2017-10-28, 2017.
- Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Laverigne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. International Workshop on Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies – An Opportunity for Networking. 京都大学, 2017-10-28, 2017.
- Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Laverigne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. HUST & KU International Symposium on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia. ハノイ大学, 2017-10-31, 2017.
- Yokoyama, Hisashi; Sugimoto, Ryo; Rihei, Takahito; Tamura, Yuji; Yamashita, Yoh. Relationship between the intertidal snail, *Batillaria multiformis* and watershed characteristics, estimated from the stable carbon and nitrogen isotope analysis. 日本水産学会国際シンポジウム. 東京海洋大学, 2017-09-24, 2017, p.SP05-06.
- Yoon, Seokjin; Suzuki, Keita W.; Yamashita, Yoh; Kasai, Akihito. A Lagrangian modeling approach for the transport of temperate seabass eggs and larvae in a region of freshwater influence. The JSFS 85th Anniversary-Commemorative International Symposium. 東京海洋大学, 2017-09-23, 2017.
- Yoon, Seokjin; Suzuki, Keita W.; Yamashita, Yoh; Kasai, Akihito. Numerical simulation of the transport of temperate seabass eggs and larvae in a region of freshwater influence. Korean Federation of Fisheries Science and Technology Societies (KOFFST) International Conference 2017. 釜山, 韓国, 2017-11-08, 2017.
- 山下 洋. 森里海連環学：森里海のもつれた三角関係を解く. 京都大学・日本財団森里海国際シンポジウム『森里海連環を担う人材育成の成果と展望』. 京都大学, 2017-10-28, 2017.
- 山下 洋. 将来へ向けた会員制度のあり方：多様な参画の確保へ向けて. 平成30年度日本水産学会理事会シンポジウム「日本水産学会のこれから－課題と展望」. 東京海洋大学, 2018-03-26, 2018.
- 井上 博, 上田 祐司, 藤原 邦浩, 山下 洋. 日本海西部におけるエコパスモデルを用いた底魚類資源の将来予測. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.117.
- 井上 博, 澤田 英樹, 山下 洋. 丹後海沿岸におけるエコパスモデルを用いた漁業評価. 平成29年度日本水産学会近畿支部例会. 京都大学, 2017-12-10, 2017, p.20.
- 伊藤 幸彦, 笠井 亮秀, 竹茂 愛吾, 銭本 慧, 木村 伸吾, 鈴木 啓太, 三宅 陽一, 舟橋 達宏, 山下 洋, 渡邊 良朗. Circulation and haline structure of a microtidal bay in the Sea of Japan influenced by the winter monsoon and the Tsushima Warm Current. 2017年度地球惑星連合大会(JpGU). 幕張メッセ, 2017-05-20, 2017.
- 岡崎 拓未; Stevenson, Duane E.; 上田 裕司; 濱津 友紀; 甲斐 嘉晃; 山下 洋. 北太平洋におけるホテイウオ *Aptocyclus ventricosus* の遺伝的集団構造. 第50回日本魚類学会年会. 北海道大学函館キャンパス, 2017-09-16, 2017, p.25.
- 久米 学, 寺島 祐樹, 山下 洋. ニホンウナギのクロコにおける河川内分布と微生息環境. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.133.
- 小巻 拓平, 堀 友彌, 山田 学, 成田 薫, 高木 淳一, 久米 学, 野田 琢嗣, 和田 敏裕, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 山下 洋. 福島県松川浦におけるニホンウナギの天然個体と養殖個体の行動特性の比較. 平成29年度日本水産学会近畿支部例会. 京都大学, 2017-12-10, 2017, p.18.
- 笹野 祥愛, 村上 弘章, 鈴木 啓太, 源 利文, 山下 洋, 益田 玲爾. 環境DNAを用いて調査したクロダイの沿岸依存性と産卵期・仔魚期の分布特性. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-29, 2018, p.47.
- 定行 洋亮, 山中 裕樹, 久米 学, 山下 洋, 山崎 彩, 笠井 亮秀. 環境DNA調査によるニホンウナギの淡水域分布特性の解明. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.38.
- 澤田 英樹, 鈴木 啓太, 篠原 義昭, 山下 洋. 宮津湾における漁解禁前のマナモコの分布に関する考察. 2017年日本ブラントトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学 彦根市, 2017-09-05, 2017, p.105.
- 多賀 真, 山下 洋. マサバ太平洋系群における未成魚越冬群指数の見直し. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.113.
- 多賀 真, 山下 洋. 房総・鹿島灘で採集したマサバ仔稚魚の成長と水温・餌料密度の関係. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.133.
- 外館 香奈, 富士 泰期, 高林 長将, 曾我部 共生, 鈴木 勇人, 栗田 豊, 山下 洋, 笠井 亮秀. 仙台湾におけるスズキの卓越年級群の形成要因. 2017年度水産海洋学会研究発表大会. 広島市, 2017-11-19, 2017, p.92.

村上 弘章, 山本 哲史, 源 利文, 南 憲吏, 宮下 和士, 深谷 肇一, 尹 錫鎮, 笠井 亮秀, 澤田 英樹, 鈴木 啓太, 益田 玲爾, 山下 洋, 近藤 倫生. 舞鶴湾におけるマアジとカタクチイワシの環境DNAの水平・鉛直分布. 平成30年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 東京海洋大学, 2018.

■益田 玲爾

Masuda, Reiji; Hatakeyama, Makoto; Ogata, Mizuki; Yokoyama, Katsuhide; Tanaka, Masaru. Recovery of coastal fauna after the 2011 tsunami in Japan revealed by bimonthly underwater visual censuses conducted over six years. The JSFS 85th Anniversary-Commemorative International Symposium. 東京海洋大学, 2017-9-22, 2017.

Masuda, Reiji; Murakami, Hiroaki; Ogata, Mizuki; Sado, Tetsuya; Miya, Masaki. Environmental DNA metabarcoding of marine coastal fish reflects long-term monitoring data based on underwater visual census. The 10th Indo-Pacific Fish Conference. タヒチ島パペーテ, 2017-10-02, 2017.

Furukawa, Genki; Sawada, Hideki; Mitamura, Hiromichi; Ichikawa, Kotaro; Masuda, Reiji; Arai, Nobuaki; Yamashita, Yoh. Aestivation sites of Japanese sea cucumber (*Apostichopus japonicas*) determined by acoustic biotelemetry. 4th International Conference on Fish Telemetry. Cairns, Australia, 2017-06-19/23, 2017, 4, p.137.

Minamoto, Toshifumi; Jo, Toshiaki; Murakami, Hiroaki; Masuda, Reiji; Sakata, Masayuki; Yamamoto, Satoshi. Longer DNA fragments enables the improved estimation of distribution and biomass using environmental DNA. 2017 ESA Annual Meeting. ポートランド, USA, 2017-08-10, 2017.

Takahashi, Kohji; Masuda, Reiji. Net-chasing training improves the behavioral characteristics of fish and crustaceans. 東京海洋大学, 2017-9-22, 2017.

Ushio, Masayuki; Murakami, Hiroaki; Masuda, Reiji; Sado, Tetsuya; Miya, Masaki; Sakurai, Sho; Yamanaka, Hiroki; Minamoto, Toshifumi; Kondoh, Michio. Quantitative monitoring of multispecies fish environmental DNA using high-throughput sequencing. 2017 ESA Annual Meeting. ポートランド, USA, 2017-08-10, 2017, doi:10.1101/113472.

Yoon, Seokjin; Kasai, Akihito; Yamamoto, Satoshi; Minamoto, Toshifumi; Minami, Kenji; Miyashita, Kazushi; Masuda, Reiji; Kondoh, Michio. Numerical simulation on distribution of environmental DNA of Japanese jack mackerel (*Trachurus japonicus*) in a semi-closed bay. 2017 The Korean Society of Fisheries and Aquatic Science Spring Meeting. 韓国, 2017-05-12, 2017.

Yoon, Seokjin; Kasai, Akihito; Yamamoto, Satoshi; Minamoto, Toshifumi; Minami, Kenji; Miyashita, Kazushi; Masuda, Reiji; Kondoh, Michio. Relationship between fish distribution and their environmental DNA in a semi-closed bay. The international Society for Ecological Modelling Global Conference 2017. 韓国チェジュ, 2017-09-19, 2017.

笹野 祥愛, 村上 弘章, 鈴木 啓太, 源 利文, 山下 洋, 益田 玲爾. 環境DNAを用いて調査したクロダイの沿岸依存性と産卵期・仔魚期の分布特性. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-29, 2018, p.47.

徐 寿明, 村上 弘章, 益田 玲爾, 源 利文. 環境DNA分析手法における基礎研究の現状と展望. 第65回日本生態学会大会. 北海道大学農学部, 札幌, 2018-03-15, 2018.

高橋 さやか, 村上 弘章, 笹野 祥愛, 尾形 瑞紀, 益田 玲爾. マアジの環境DNA放出量におよぼす給餌, ストレスおよび個体差の影響. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018.

水谷 昂栄, 山田 敏之, 益田 玲爾, 中田 訓彰, 田川 正朋. 網敷き飼育によるヒラメ着色型黒化の防除. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-29, 2018.

村上 弘章, 山本 哲史, 源 利文, 南 憲吏, 宮下 和士, 深谷 肇一, 尹 錫鎮, 笠井 亮秀, 澤田 英樹, 鈴木 啓太, 益田 玲爾, 山下 洋, 近藤 倫生. 舞鶴湾におけるマアジとカタクチイワシの環境DNAの水平・鉛直分布. 平成30年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 東京海洋大学, 2018.

■甲斐 嘉晃

甲斐 嘉晃, 三澤 遼, 濱津 友紀, 上田 祐司, 藤原 邦浩. ナガヅカからウエガジへのミトコンドリアDNAの浸透. 北海道大学・函館, 2017-09-15/18, 2017.

内田 喜隆, 辻 俊宏, 甲斐 嘉晃. クロマグロ・コシナガ未成魚の簡易形態識別. 日本水産学会. 東京海洋大学・東京, 2018-03-27/30, 2018.

岡崎 拓未; Stevenson, Duane E.; 上田 祐司; 濱津 友紀; 甲斐 嘉晃; 山下 洋. 北太平洋におけるホテイウオの遺伝的集団構造. 北海道大学・函館, 2017-09-15/18, 2017.

田城 文人, 鈴木 啓太, 永野 優季, 野口 俊輔, 上田 祐司, 藤原 邦浩, 河合 俊郎, 甲斐 嘉晃. 日本海産カレイ目魚類相. 2017年度日本魚類学会年会. 北海道大学・函館, 2017-09-15/18, 2017.

中山 直英, 甲斐 嘉晃. 沖縄舟状海盆から採集されたソコダラ科トウジン属の1未記載種. 日本魚類学会. 北海道大学・函館, 2017-09-15/18, 2017.

難波 真梨子; 武藤 望生; Veera Vilasri; 甲斐 嘉晃. キス属魚類の分類における頭部側線系の有効性. 北海道大学・函館,

2017-09-15/18, 2017.

三澤 遼, 濱津 友紀, 上田 祐司, 藤原 邦浩, 遠藤 広光, 甲斐 嘉晃. ドブカスベにおける遺伝的集団構造. 北海道大学・函館, 2017-09-15/18, 2017.

■鈴木 啓太

Suzuki, Kentaro S.; Kumakura, Emi; Suzuki, Keita W.; Yoden, Takaya; Nogata, Yasuyuki. Unusual way of reproduction contributes to ephyrae recruitment of moon jellyfish *Aurelia* sp. in Maizuru Bay, Japan. XIth International Larval Biology Symposium. Honolulu, Hawaii, 2017-08-10, 2017.

Yoon, Seokjin; Suzuki, Keita W.; Yamashita, Yoh; Kasai, Akihide. A Lagrangian modeling approach for the transport of temperate seabass eggs and larvae in a region of freshwater influence. The JSFS 85th Anniversary-Commemorative International Symposium. 東京海洋大学, 2017-09-23, 2017.

Yoon, Seokjin; Suzuki, Keita W.; Yamashita, Yoh; Kasai, Akihide. Numerical simulation of the transport of temperate seabass eggs and larvae in a region of freshwater influence. Korean Federation of Fisheries Science and Technology Societies (KOFFST) International Conference 2017. 釜山, 韓国, 2017-11-08, 2017.

鈴木 啓太, 澤田英樹. 舞鶴湾の冬季ブルームの連続観測: 雪と雨の影響の違い. 2017年日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学 彦根市, 2017-09-04, 2017, p.121.

澤田 英樹, 鈴木 啓太, 篠原 義昭, 山下 洋. 宮津湾における漁解禁前のマナモコの分布に関する考察. 2017年日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学 彦根市, 2017-09-05, 2017, p.105.

鈴木 健太郎, 熊倉 恵美, 鈴木 啓太, 余田 昂彌, 野方 靖行. 舞鶴湾における直達発生型ミズクラゲの個体群動態. 日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学, 2017-09-04, 2017.

■澤田 英樹

田城 文人, 鈴木 啓太, 永野 優季, 野口 俊輔, 上田 祐司, 藤原 邦浩, 河合 俊郎, 甲斐 嘉晃. 日本海産カレイ目魚類相. 2017年度日本魚類学会年会. 北海道大学・函館, 2017-09-15/18, 2017.

岸本 早貴, 河合 俊郎, 田城 文人. アンダマン海南部から採集されたアカゴチ科バラハイゴチ属の1未記載種. 2017年度日本魚類学会年会. 函館, 2017-09-16/17, 2017.

日比野 友亮; 田城 文人; McCosker, John E. 日本沿岸から得られたウミヘビ属の3未記載種とタルミウミヘビ *Ophichthus stenopterus* の分類学的地位. 2017年度日本魚類学会年会. 函館, 2017-09-16/17, 2017.

■田城 文人

Furukawa, Genki; Sawada, Hideki; Mitamura, Hiromichi; Ichikawa, Kotaro; Masuda, Reiji; Arai, Nobuaki; Yamashita, Yoh. Aestivation sites of Japanese sea cucumber (*Apostichopus japonicus*) determined by acoustic biotelemetry. 4th International Conference on Fish Telemetry. Cairns, Australia, 2017-06-19/23, 2017, 4, p.137.

澤田 英樹, 鈴木 啓太, 篠原 義昭, 山下 洋. 宮津湾における漁解禁前のマナモコの分布に関する考察. 2017年日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学 彦根市, 2017-09-05, 2017, p.105.

鈴木 啓太, 澤田英樹. 舞鶴湾の冬季ブルームの連続観測: 雪と雨の影響の違い. 2017年日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学 彦根市, 2017-09-04, 2017, p.121.

村上 弘章, 山本 哲史, 源 利文, 南 憲吏, 宮下 和士, 深谷 肇一, 尹 錫鎮, 笠井 亮秀, 澤田 英樹, 鈴木 啓太, 益田 玲爾, 山下 洋, 近藤 倫生. 舞鶴湾におけるマアジとカタクチイワシの環境DNAの水平・鉛直分布. 平成30年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 東京海洋大学, 2018.

■久米 学

Inoue, Hiroshi; Lavergne, Edouard; Kume, Manabu; Yamashita, Yoh. Spatial and temporal change of coastal benthic community in Tango Bay, Japan. 2017 CoHHO International Symposium: Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies — An Opportunity for Networking —. 2017-10-28, 2017.

Kanzaki, Toko; Kume, Manabu; Hashiguchi, Shunya; Harada, Mami; Mochioka, Noritaka; Kasai, Akihide; Tamura, Yuji; Yokoyama, Hisashi; Arai, Nobuyuki; Yamashita, Yoh. Comparison of aquatic biological production systems between two rivers in Oita Prefecture, Japan. 日本水産学会国際シンポジウム. 東京海洋大学, 2017-09-24, 2017, p.SP05-07.

Kanzaki, T.; Kume, Manabu; Hashiguchi, S.; Harada, M.; Mochioka, N.; Kasai, A.; Tamura, Y.; Yokoyama, H.; Arai, N.; Yamashita, Yoh. Comparative study of land use and aquatic biological production systems between two rivers in Oita Prefecture, Japan. 2017 CoHHO International Symposium: Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies — An Opportunity for Networking —. 2017-10-28, 2017.

Komaki, T.; Hori, T.; Yamada, M.; Narita, K.; Takagi, J.; Kume, Manabu; Nod, T.; Wada, T.; Mitamura, H.; Arai, N.; Yamashita, Yoh. Comparison of movement patterns between wild and cultured eels *Anguilla japonica* in Matsukawa-ura lagoon, Fukushima Prefecture, Japan. 2017 CoHHO International Symposium: Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies — An

Opportunity for Networking－. 2017-10-28, 2017.

久米 学. 森里海連環の解明を目指して：河川におけるニホンウナギの生態からのアプローチ. 平成29年度国立遺伝学研究所研究会「生態と分子をつなぐトゲウオ研究の最前線」. 2017.

久米 学. 趣旨説明：これまでの淡水魚保全における研究者と行政との関係. 日本魚類学会シンポジウム「淡水魚保全における河川行政との連携」. 2017-09-18, 2017.

久米 学, 寺島 祐樹, 山下 洋. ニホンウナギのクロコにおける河川内分布と微生息環境. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.133.

柿岡 諒, 久米 学, 石川 麻乃, 安齋 賢, 北野 潤. 北海道別寒辺牛川河口域周辺におけるウキゴリ属魚類の遺伝・形態的特徴. 日本魚類学会年会 講演要旨. 2017, 50, p.120.

小巻 拓平, 堀 友彌, 山田 学, 成田 薫, 高木 淳一, 久米 学, 野田 琢嗣, 和田 敏裕, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 山下 洋. 福島県松川浦におけるニホンウナギの天然個体と養殖個体の行動特性の比較. 平成29年度日本水産学会近畿支部例会. 京都大学, 2017-12-10, 2017, p.18.

定行 洋亮, 山中 裕樹, 久米 学, 山下 洋, 山崎 彩, 笠井 亮秀. 環境DNA調査によるニホンウナギの淡水域分布特性の解明. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018, p.38.

細木 拓也, 西田 翔太郎, 久米 学, 森 誠一, 北野 潤. 大津波によって形成された新規生息地におけるトゲウオの形態分化. 日本生態学会年会. 2018-03-16, 2018.

■高橋 さやか

Takahashi, Sayaka; Takahashi, Erina. Synchronicity between the timings of leaf opening and vessel formation in twigs and stems in *Fagus crenata* and *Quercus acutissima*. 日本生態学会 第65回全国大会. 札幌, 2018-03-16, 2018.

高橋 さやか, 高橋 絵里奈. 開葉時期と枝の道管形成時期の同調性：京都大学上賀茂試験地のタマミズキの事例. 第68回応用森林学会大会. 高松, 2017, A10.

海洋生態系部門

■荒井 修亮

荒井 修亮. 日本水産学会のこれから：課題と展望：今後の学会のあり方：2：支部活動の視点から. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

飯野 浩太郎, 町 敬介, 福西 悠一, 浦辺 清治, 荒井 修亮, 市川 光太郎, 三田村 啓理. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得2：超小型発信機を用いたキジハタ人工種苗の行動追跡の試み. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

市川 光太郎, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 芹澤 健太, 渡辺 俊, 塚本 勝巳. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得3：ニホンウナギ天然魚と養殖魚の活動量と水温の関係. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

上原 慧也, 市川 光太郎, 荒井 修亮. 持続時間と周波数変調パターンによるジュゴンの鳴音の分類と地域間比較. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

小見山 桜楽, 高城 淳一, 三田村 啓理, 市川 光太郎, 荒井 修亮. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得7：高頻度・高精度測位を可能にする超音波信号方式の評価. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

相良 朋香; 木村 里子; Ponnampalam, Louisa; 依田 憲; 荒井 修亮. マレーシア・ランカウイ諸島における小型鯨類2種の音響学的種判別手法の開発と分布の解明. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

世古 将太郎, 竹内 泰介, 土橋 靖史, 市川 光太郎, 荒井 修亮, 三田村 啓理. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得1：産卵期におけるイセエビの移動の解明. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

高木 淳一, 市川 光太郎, 荒井 修亮, 宮本 佳則, 内田 圭一, 小路 淳, 三田村 啓理. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得8：魚類の帰巢中の行動様式の変化と方向転換. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

鷹崎 和義, 川田 暁, 和田 敏裕, 三田村 啓理, 高木 淳一, 堀 友彌, 野田 琢嗣, 荒井 修亮. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得4：福島家阿武隈川水系におけるチャンネルキャットフィッシュの駆除方法. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

原 廣史郎, 西澤 秀明, 西川 完途, 荒井 修亮. 鴨川下流域における交雑オオサンショウウオの移動範囲. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

三田村 啓理, 和田 敏裕, 高木 淳一, 堀 友彌, 野田 琢嗣, 鷹埼 和義, 荒井 修亮. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 5 : 河川におけるチャンネルキャットフィッシュのモニタリング手法の確率. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

横山 綾子, 三田村 啓理, Thavee Viputhanumas, 荒井 修亮, 光 永靖, 山根 央之. バイオテレメトリーを用いたメコンオオナマズ稚魚の生残率および水平移動の解明. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

和田 敏裕, 三田村 啓理, 高木 淳一, 堀 友彌, 野田 琢嗣, 鷹埼 和義, 荒井 修亮. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 6 : 福島県阿武隈川信夫ダムにおけるチャンネルキャットフィッシュの行動. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

■市川 光太郎

Ichikawa, Kotaro. The dugong acoustics around the world. International mermaid symposium, 2nd Toba symposium of dugongs: 30th Anniversary of Serena. 2018-02-22/23, 2018.

Ichikawa, Kotaro; Matsuo, Yuuki. Vocal behavior of serena. International mermaid symposium, 2nd Toba symposium of dugongs: 30th Anniversary of Serena. 2018-02-22/23, 2018.

Ichikawa, Kotaro; Mitamura, H.; Arai, Nobuaki; Serizawa, K.; Watanabe, S.; Tsukamoto, K. Effect of water temperature on activity patterns of the Japanese eel *Anguilla japonica* by using ultrasonic telemetry. the 4th International Conference on Fish Telemetry. 2017-06-19/23, 2017.

Abe, Akane; Ichikawa, Kotaro; Kittiwattanawong, Kongkiat; Arai, Nobuaki. Investigation of fishing conditions and human-dugong relations in an Islamic fishing village in the southern Thailand. International mermaid symposium, 2nd Toba symposium of dugongs: 30th Anniversary of Serena. 2018-02-22/23, 2018.

Furukawa, Genki; Sawada, Hideki; Mitamura, Hiromichi; Ichikawa, Kotaro; Masuda, Reiji; Arai, Nobuaki; Yamashita, Yoh. Aestivation sites of Japanese sea cucumber (*Apostichopus japonicas*) determined by acoustic biotelemetry. 4th International Conference on Fish Telemetry. Cairns, Australia, 2017-06-19/23, 2017, 4, p.137.

Kugai, Yuma; Ichikawa, Kotaro; Arai, Nobuaki; Tanaka, Kotaro; Kittiwattanawong, Kongkiat. Soundscape changes in the dugong habitat around Talibong Island of Thailand. International mermaid symposium, 2nd Toba symposium of dugongs: 30th Anniversary of Serena. 2018-02-22/23, 2018.

Mitamura, H.; Arai, Nobuaki; Ichikawa, Kotaro; Miyamoto, Y.; Uchida, K.; Kitagawa, T.; Fukuda, H.; Fujioka, K.; Miyashita, K. Inter-individual communication biotelemetry system. the 4th International Conference on Fish Telemetry. 2017-06-19-23, 2017.

Serizawa, Kenta; Watanabe, Shun; Ichikawa, Kotaro; Mitamura, Hiromichi; Arai, Nobuaki; Tsukamoto, Katsumi. Hiding-place usage of yellow-phase Japanese eels revealed by ultrasonic telemetry in a semi-natural pond. The JSFS 85th Anniversary-Commemorative International Symposium “Fisheries Science for Future Generations”. 2017-09-22/24, 2017.

Takagi, J.; Ichikawa, Kotaro; Arai, Nobuaki; Miyamoto, Y.; Uchida, K.; Fujioka, K.; Fukuda, H.; Mitamura, H. Behavioural response of schooling small fish to potential predators in a fish pen. the 4th International Conference on Fish Telemetry. 2017-06-19/23, 2017.

Tanaka, Kotaro; Ichikawa, Kotaro; Arai, Nobuaki; Kittiwattanawong Kongkiat; Mitamura, Hiromichi. Discrimination of dugong calls and tonal noise by machine learning. the 22nd Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals. 2017-10-22/27, 2017.

Tanaka, Kotaro; Ichikawa, Kotaro; Arai, Nobuaki; Kittiwattanawong, Kongkiat; Mitamura, Hiromichi. Improvement of automatic detection for dugong calls by machine learning. The 6th International Seminar on Biodiversity and Evolution: Wildlife Science by New Biologging studies. 2017-05-30, 2017.

Tanaka, Kotaro; Ichikawa, Kotaro; Ponnampalam, Louisa; Alfian, Kee; Wei, Heng Khang; Jol, Ng Ern; Arai, Nobuaki. Detection of dugong feeding events by passive acoustic monitoring in Sibu-Tinggi Islands, Johor, Malaysia. International mermaid symposium, 2nd Toba symposium of dugongs: 30th Anniversary of Serena. 2018-02-22/23, 2018.

Uehara, Keiya; Ichikawa, Kotaro; Arai, Nobuaki. Seasonal and individual differences of movement patterns of dugongs in Okinawa, Japan. International mermaid symposium, 2nd Toba symposium of dugongs: 30th Anniversary of Serena. 2018-02-22/23, 2018.

Yasue, Yoshiaki; Takahashi, Shingo; Ichikawa, Kotaro; Mitamura, Hiromichi; Arai, Nobuaki. Horizontal swimming speed and migration path of kokanee salmon in Lake Towada. The JSFS 85th Anniversary-Commemorative International Symposium “Fisheries Science for Future Generations”. 2017-09-22/24, 2017.

市川 光太郎, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 芹澤 健太, 渡辺 俊, 塚本 勝巳. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 3 : ニホンウナギ天然魚と養殖魚の活動量と水温の関係. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

飯野 浩太郎, 町 敬介, 福西 悠一, 浦辺 清治, 荒井 修亮, 市川 光太郎, 三田村 啓理. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 2 : 超小型発信機を用いたキジハタ人工種苗の行動追跡の試み. 平成30年度日本水産学会

春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

上原 慧也, 市川 光太郎, 荒井 修亮. 持続時間と周波数変調パターンによるジュゴンの鳴音の分類と地域間比較. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

上原 慧哉, 荒井 修亮, 市川 光太郎. 沖縄近海のジュゴンの分布、移動速度および行動圏の個体間比較と季節変動. 海洋理工学会平成 29 年度 春季大会. 2017-06-08/09, 2017.

川北 哲史, 市川 光太郎. 羽音の音響情報解析による昆虫の分類手法の開発. 第62回日本応用動物昆虫学会大会. 2018-03-25/27, 2018.

小見山 桜楽, 高城 淳一, 三田村 啓理, 市川 光太郎, 荒井 修亮. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 7 : 高頻度・高精度測位を可能にする超音波信号方式の評価. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

世古 将太郎, 竹内 泰介, 土橋 靖史, 市川 光太郎, 荒井 修亮, 三田村 啓理. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 1 : 産卵期におけるイセエビの移動の解明. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

高木 淳一, 市川 光太郎, 荒井 修亮, 宮本 佳則, 内田 圭一, 小路 淳, 三田村 啓理. バイオテレメトリーによる水圏生物の行動情報の取得 8 : 魚類の帰巢中の行動様式の変化と方向転換. 平成30年度日本水産学会春季大会. 東京, 2018-03-26/30, 2018.

田中 広太郎; 市川 光太郎; Ponnampalam, Louisa; Alfian, Kee; Wei, Heng Khang; Jol, Ng Ern; 荒井 修亮; 三田村 啓理. マレーシア・ジョホール州シブ島およびティンギ島沿岸域における受動的音響観察を用いたジュゴンの摂餌音の検出. 平成30 年度日本水産学会春季大会. 2018-03-27/29, 2018.

橋本 優一郎; 西澤 秀明; Uzair, Mohd Rusli; 市川 光太郎; Joseph, Juanita . 音はウミガメ幼体の同期的な孵化脱出行動の手がかりとなるか? : ウミガメ幼体の発する音および産卵浜の環境音の特定. 平成30年度日本水産学会春季大会. 2018-03-27/29, 2018.

渡邊 俊, 芹澤 健太, 市川 光太郎, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 塚本 勝巳. ニホンウナギは冬眠するか? 2017年度日本魚類学会年会. 2017-09-15/18, 2017.

渡邊 俊, 芹澤 健太, 市川 光太郎, 三田村 啓理, 荒井 修亮, 塚本 勝巳. 大型実験池におけるニホンウナギの行動解析: バイオテレメトリー法による長期追跡. 東アジア鰻学会第一回研究発表会. 2018-03-31, 2018.

■中野 智之

Togawa, Y.; Nakano, R.; Nakano, Tomoyuki. The cryptic diversity in *Aplysia parvula*. International Symposium "Multidisciplinary explorations into molluscan diversity and evolution". Okayama University, 2017, 2017.

奥村 洋介, 中野 智之. 巻貝類の移動パターンの解析. 日本生態学会第65回全国大会. 札幌コンベンションセンター, 2018-03, 2018.

中山 凌, 中野 智之. カサガイに見られる浮遊幼生の着底基質の選択性について. 2017年日本プランクトン学会・ベントス学会合同大会. 滋賀県立大学, 2017.

中山 凌, 中野 智之. カサガイ類におけるカニ類からの捕食回避. 軟体動物多様性学会2017年度大会. 大阪市立自然史博物館, 2018-03-03/04, 2018.

中山 凌, 中野 智之. カサガイ類に見られる住み込み共生. 2017年日本ベントス学会自由集会. 滋賀県立大学, 2017.

中山 凌, 中野 智之. コモレビコガモガイ浮遊幼生の着底基質選択性. 日本貝類学会平成29年度大会. 和歌山県白浜町 ホテルシーモア, 2017, 2017.

中山 凌, 中野 智之. 捕食回避に見るカサガイの巻貝への付着行動. 日本甲殻類学会・日本貝類学会共催シンポジウム「捕食・被食と殻の役割」. 東京大学大気海洋研究所柏キャンパス, 2017.

奥村 洋介, 中山 凌, 中野 智之. コモレビコガモガイの巻貝殻上での帰家行動. 軟体動物多様性学会2017年度大会. 大阪市立自然史博物館, 2018-03-03/04, 2018.

■小林 志保

Kobayashi, Shiho; Fujiwara, Tateki. The spread of terrestrial organic matter into a coastal sea during flood events and its impact on the sediments; a case study in the Seto Inland Sea, Japan. WET2017. 北海道, 2017.

Ookuno, Jun-ichi; Senbokuya, Kei; Ookei, Noriyuki; Nakada, Satoshi; Kobayashi, Shiho. Observation of Generation and Disappearance of Hypoxia in the Western Part of Nanao Bay. JpGU2017. 2017.

小林 志保. 沿岸海域における貧酸素化対策技術の開発. 水環境学会関西支部. 大阪, 2017.

生田 健吾, 上田 幸男, 湯浅 明彦, 池脇 義弘, 棚田 教生, 小林 志保. 徳島県沿岸ワカメ漁場における栄養塩起源推定. 水産学会. 東京海洋大学, 2018-03-29, 2018.

田中 佑一, 生田 健吾, 山本 圭吾, 秋山 諭, 原田 慈雄, 御所 豊穂, 湯浅 明彦, 石坂 丞二, 中田 聡史, 小林 志保. リモートセンシングを用いた大阪湾から紀伊水道への溶存有機物の流出経路の推定. 瀬戸内海研究フォーラムin 京都. 京都, 2017-09-06, 2017, 2017, p.41.

渡部 夏帆, 渕 真輝, 中田 聡史, 林 美鶴, 小林 志保. 淀川河口域における有機物の生成・分解と貧酸素化への影響. 水産学会. 東京海洋大学, 2018-03-27, 2018.

■後藤 龍太郎

Goto, Ryutaro. Living together with crustaceans: Evolution and adaption of symbiotic mollusks. 日本貝類学会・甲殻類学会合同シンポジウム, International Symposium on evolutionary biology of parasitic and symbiotic relationships between molluscs and crustaceans. 和歌山県西牟婁郡ホテルシーモア, 2017-04, 2017.

Harrison, Teal; Goto, Ryutaro; Boyle, Michael J.; Foighil, Diarmaid Ó. How do seven commensal bivalves share the same host? Society for Integrative and Comparative Biology; Annual meeting 2018. San Francisco, USA, 2018-01-05, 2018.

Kobayashi, Genki; Goto, Ryutaro; Takano, Tsuyoshi; Kojima, Shigeaki. Epifaunal life style and surface deposit feeding may enable bamboo worms (Annelida: Maldanidae) to invade chemosynthesis-based ecosystems (selected flash talk of the poster presentation). 6th International Symposium on Chemosynthesis-Based Ecosystems. Massachusetts, USA, 2017-08, 2017.

後藤 龍太郎. ウロコガイ科二枚貝における住み込み共生と進化. 2017年度日本ベントス学会大会 自由集会「住み込み共生の生態学」. 滋賀県立大学, 2017-09-03, 2017.

後藤 龍太郎. 住み込み共生する二枚貝の進化と適応. 生態研セミナー. 京都大学生態学研究センター, 2017-07-21, 2017.

後藤 龍太郎; Simon, Eric; 遠藤 一佳. 腕足動物シャミセンガイ類の多様性と分子系統解析. 日本動物分類学会第53回大会. 神奈川県横浜市JAMSTEC, 2017-06-04, 2017.

小林 元樹, 後藤 龍太郎, 高野 剛史, 小島 茂明. 日本産タケフシゴカイ科環形動物の分子系統. 日本動物分類学会第53回大会. 神奈川県横浜市JAMSTEC, 2017-06-04, 2017.

吉川 晟弘, 後藤 龍太郎, 朝倉 彰. 潮間帯ヤドカリに見られる日光浴行動の効用. 2017年度日本ベントス学会大会. 滋賀県立大学, 2017-09-04, 2017.

吉川 晟弘, 後藤 龍太郎, 朝倉 彰. ヤドカリに片利共生するヒラフネガイの宿主利用形式と形態適応. 2017年度日本動物学会. 富山大学, 2017-09-23, 2017.

■佐藤 崇

Kon, Takeshi; Sado, Tetsuya; Ruber, Lucas; Satoh, Takashi P.; Yoshino, Tetsuo; Nishida, Mutsumi; Miya, Masaki. Molecular phylogenetics and the diversification of the gobioid fishes. The 10th Indo-Pacific Fish Conference. Tahiti, 2017-10-03, 2017.

佐藤 崇. アカマンボウ目魚類の系統進化と潜在的種数の推定. 第50回日本魚類学会年会. 北海道大学函館キャンパス, 2017-09-16, 2017.

森里海連環学教育ユニット

■清水 夏樹

Yamamoto, Yoshika; Shimizu, Natsuki. A study on the tea farming types for considering sustainable local resource management on the yamato-cha, Nara prefecture. HUST & KU International Symposium on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia in conjunction with the 10th Regional Conference on Environmental Engineering. ベトナム ハノイ, 2017-10-30/11-01, 2017.

■吉積 巳貴

Yoshizumi, Miki. A study on community based tourism management for sustainable community of ethnic minority: A case study of Hong Ha commune, Thua Thien Hue province, Vietnam. Proceeding of International Conference of Asian-Pacific Planning Societies 2017. 名古屋, 2017-08-25, 2017.

Yoshizumi, Miki. Information sharing system for promoting sustainable community initiatives: A case study of Nishinomiya city, Japan. 2017 International conference on East Asian architecture and city. 2017-04-28, 2017, p.164-165.

Yoshizumi, Miki; Ngoc, Nguyen Tung; Kobayashi, Hirohide. Potential of community-based ecotourism as a new income source for sustainable community: Case studies of Hong Ha commune in Vietnam and Hikigawa area in Japan. The 4th EnvironmentAsia International Conference on "Practical Global Policy and Environmental Dynamics". 2017-06-22, 2017.

加藤 彩季, 小林 広英, 吉積 巳貴. 国立公園内の小半島集落における土地利用状況と里山環境整備に関する考察 : 和歌山県田辺市鳥の巣半島集落の事例. 平成29年度 瀬戸内海研究フォーラムin京都「川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系」. 京都大学, 2017-09-06, 2017.

黄 琬惠, 吉積 巳貴. 留学生の視点から見る日本世界農業遺産イメージ分析 : 和歌山県みなべ・田辺世界農業遺産を事

例に、平成29年度 瀬戸内海研究フォーラムin京都「川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系」．京都大学, 2017-09-06, 2017.

■Lavergne, Edouard

Inoue, Hiroshi; Lavergne, Edouard; Kume, Manabu; Yamashita, Yoh. Spatial and seasonal change of coastal benthic community in Tango Bay, Japan. International Workshop on Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies – An Opportunity for Networking. 京都大学, 2017-10-28, 2017.

Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Lavergne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. HUST & KU International Symposium on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia in conjunction with the 10th Regional Conference on Environmental Engineering. Hanoi, Vietnam, 2017-10-31, 2017.

Omweri, Justus Ooga; Suzuki, Keita W.; Lavergne, Edouard; Yokoyama, Hisashi; Yamashita, Yoh. Seasonality and occurrence of the dominant mysid *Neomysis awatschensis* (Brandt, 1851) in the Yura River estuary, central Sea of Japan. CoHHO International Symposium, "Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies - An Opportunity for Networking". Kyoto, Japan, 2017-10-28, 2017.

Percival, J.; Liversage, K.; Tsutsumida, N.; Stirnemann, R.; Van Dijken, S.; Lavergne, Edouard. The role of seascape structure and habitat connectivity on fish communities within Samoan mangroves. CoHHO International Symposium, "Achievements and Perspectives of the CoHHO Studies - An Opportunity for Networking", Kyoto, Japan. 2017-10-28, 2017.

Percival, J.; Liversage, K.; Tsutsumida, N.; Stirnemann, R.; Van Dijken, S.; Lavergne, Edouard. The importance of habitat connectivity and structure on fish biodiversity and assemblages within Samoan mangroves. 10th Indo-Pacific Fish Conference. Tahiti, 2017-10, 2017, p.2-6.

■黄 琬惠

黄 琬惠. Sustainable development of Nation Park in Japan; Case study in Tanabe city Torinosu Peninsula in Wakayama. HUST & KU International Symposium on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia in conjunction with the 10th Regional Conference on Environmental Engineering. ベトナム ハノイ, 2017.

黄 琬惠, 吉積 巳貴. 留学生の視点から見る日本世界農業遺産イメージ分析：和歌山県みなべ・田辺世界農業遺産を事例に。平成29年度 瀬戸内海研究フォーラムin京都「川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系」．京都大学, 2017-09-06, 2017.

■安佛 かおり

安佛 かおり, 宮原 一隆, 山本 圭吾, 秋山 諭, 笠井 亮秀. 東部瀬戸内海における基礎生産構造. 第65回 日本生態学会大会. 札幌, 2017-03-16, 2017.

■包 薩日娜

包 薩日娜, 服部 俊宏. 首都圏在住移住希望者へのwebアンケートによる地方移住要件と意向に関する研究. 環境情報学会 学術研究論文集. 2017, 31, p.231-236, doi:10.11492/ceispapers.ceis31.0_231.

白眉センター

■原村 隆司

Haramura, Takashi. Acoustic cues can be used to attract invasive cane toads in Japan. Joint Meeting of Ichthyologists & Herpetologists 2017. Austin USA, 2017-07-12/16, 2017.

■加賀谷 勝史

Kagaya, Katsushi. Behavioral plasticity of a spring-driven ultrafast smashing by mantis shrimp. The 8th International Symposium on Adaptive Motion of Animals and Machines (AMAM2017). Hokkaido University, Sapporo, Japan, 2017-06-29, 2017.

加賀谷 勝史. テッポウエビ大鉗における発生学的モジュラリティ. 日本動物学会. 富山, 2017-09-21/23, 2017.

管理技術部

■加藤 哲哉, 原田 桂太, 山内 洋紀

山内 洋紀, 原田 桂太, 加藤 哲哉. 田辺湾鳥ノ巣半島アマモ場における魚類の出現状況. 第44回 全国国立大学法人 臨海・臨湖実験所・センター技術職員研修会議. 白浜, 2017-11-16, 2017.

■原田 桂太

原田 桂太. 白浜水族館の設備と管理業務の紹介. 京都大学総合技術部 第5専門技術群（核・放射線系）専門研修会. 白浜, 2017-10-30, 2017.

■山本 恒紀

山本 恒紀. 海洋観測研究実習船ヤンチナの紹介. 京都大学総合技術部 第5専門技術群（核・放射線系）専門研修会. 白浜, 2017-10-30, 2017.

(2) 他大学・各種学校の講義・実習

(高校生以下を対象とする講義などは、(6)社会貢献活動 参照)

森林生態系部門

吉岡 崇仁 奈良教育大学 「生態科学特論」・非常勤講師 (9月19～22日)
長谷川 尚史 和歌山県農林大学校「森林情報講習」「木材生産」・講師
京都府立林業大学校「林業機械化概論」・外部講師
伊勢 武史 東京藝術大学 「社会基盤としての芸術」・非常勤講師
館野 隆之輔 酪農学園大学「生態環境総合実習」一部担当
東京農業大学網走校「生物生産学特別実習・実験」一部担当
中島 皇 京都教育大学「栽培実習II」「食農教育の実践II」・非常勤講師 (9月28日)

里域生態系部門

益田 玲爾 岐阜大学「臨海実習」・非常勤講師
関西学院大学「臨海実習」・非常勤講師
鈴木 啓太 関西学院大学「臨海実習」・非常勤講師
澤田 英樹 関西学院大学「臨海実習」・非常勤講師
田城 文人 関西学院大学「臨海実習」・非常勤講師

海洋生態系部門

荒井 修亮 放送大学学園 「海洋生物情報学」・非常勤講師 (面接授業担当)
放送大学学園 客員教員 (京都学習センター所属)
放送大学学園 客員教授 (大学院研究指導担当)
久保田 信 紀南看護専門学校「生物学」・非常勤講師
大和 茂之 関西学院大学「臨海実習」・非常勤講師
滋賀県立大学 「環境学野外実習」・外部講師
中野 智之 紀南看護専門学校「生物学」・非常勤講師
奈良教育大学「野外実習A-II」・非常勤講師
大阪教育大学「臨海実習」・非常勤講師
後藤 龍太郎 大阪市立大学「臨海実習」・非常勤講師

森里海連環学教育ユニット

清水 夏樹 北里大学獣医学部「環境経済学」・非常勤講師
吉積 巳貴 龍谷大学「アジアの地域・都市政策」・非常勤講師

(3) 学会等における活動

◆学会役員・シンポジウム企画等

森林生態系部門

- 吉岡 崇仁 日本生態学会：第19回琵琶湖賞運営委員
生物地球化学研究会：会長
日本陸水学会：学会賞選考委員
- 徳地 直子 日本森林学会：評議員
日本生態学会：関西支部会評議員
- 長谷川 尚史 森林利用学会：常務理事，編集委員
森林作業システム研究会：主事
全国大学演習林協議会：森林管理技術表彰委員
第22回森林生産システム研究会「これからの森づくりを想定した新次元林業での作業システム」現地検討会およびシンポジウムコーディネータ，2017-11-24/25
平成30年度森林利用学会シンポジウム「森林資源を上手に活用していくために一川上～川下の情報共有を通じて」コーディネータ，2018-03-29
- 舘野 隆之輔 一般社団法人：日本森林学会・英文誌編集委員
- 伊勢 武史 日本学術会議：日本学術会議委員（iLEAPS小委員会委員）
日本学術会議：日本学術会議委員（Clic小委員会委員）
- 石原 正恵 日本生態学会：大規模長期生態学専門委員会委員
日本学術会議環境学委員会：地球惑星科学委員会合同IGBP・WCRP・DIVERSITAS合同分科会 GLP小委員会委員

里域生態系部門

- 山下 洋 水産海洋学会：学会賞受賞候補推薦委員
水産海洋学会：事業委員
日本水産学会：東日本大震災災害復興支援検討委員会委員
日本水産学会：財務担当理事
- 益田 玲爾 日本水産学会：編集委員会委員
日本水産学会：国際交流委員会委員
- 梅本 信也 日本雑草学会：社会福祉部会委員
- 甲斐 嘉晃 日本魚類学会：代議員，編集委員長，学会賞選考委員，50周年記念シンポジウム実行委員会委員，優秀発表賞選考委員会委員
- 鈴木 啓太 水産海洋学会：編集委員会委員
- 久米 学 陸水生物研究会：運営委員
国際トゲウオ学会：9th International conference on stickleback behaviour and evolution 実行委員
日本魚類学会シンポジウム「淡水魚保全における河川行政との連携」企画，2017-09-18

海洋生態系部門

- 朝倉 彰 国際甲殻類学会 The Crustacean Society (USA) : TCS-Carcinological Society of Japan : Liaison Officer
日本甲殻類学会：会長，国際誌Crustacean Research編集委員長
日本ベントス学会：Plankton&Benthos Research Editorial Board,
International symposium on evolutionary biology of parasitic and symbiotic relationships between molluscs and crustaceans. 2017-04-15/16
International Symposium: Frontiers in Crustacean Biology: Asian Perspectives 2017-10-08
- 荒井 修亮 日本バイオロギング研究会：会長
日本水産学会：理事，近畿支部長，学会賞選考委員，日本水産学会創立85周年記念事業委員会委員
- 大和 茂之 南紀生物同好会：編集委員
- 中野 智之 軟体動物多様性学会：事務局，編集委員
日本貝類学会：評議員，学会誌Venus編集委員，平成29年度大会白浜大会実行委員長
International symposium on evolutionary biology of parasitic and symbiotic relationships between molluscs and crustaceans. Chair, Organizing Committee 2017-04-15/16
日本甲殻類学会：日本貝類学会共催シンポジウム「捕食・被食と殻の役割」大会実行委員 2017-10-06
- 小林 志保 日本水産学会：近畿支部幹事
日本水環境学会：幹事
- 市川 光太郎 日本水産学会：企画広報委員会委員
- 河村 真理子 日本プランクトン学会：若手の会世話人

森里海連環学教育ユニット

清水 夏樹 農村計画学会：評議員
日本環境共生学会：学術・編集委員
農業農村工学会：農業農村整備政策研究部会幹事，農村計画研究部会代表幹事，平成30年度農業農村工学会大会実行委員会委員
吉積 巳貴 都市計画学会：関西支部研究発表委員
白眉センター
原村 隆司 日本爬虫両棲類学会：編集補佐員

◆受賞歴

森林生態系部門

館野 隆之輔 年月日：2017年7月3日
受賞者名：館野 隆之輔（北海道研究林）
授賞内容：「平成29年度ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」（日本学術振興会）
館野 隆之輔 年月日：2018年3月16日
受賞者名：岩岡 史恵, 谷口 武士, 杜 盛, 山中 典和, 館野 隆之輔
授賞内容：“Soil microbial communities associated with each step in nitrogen transformation along a rainfall gradient in semiarid forests”（第65回日本生態学会大会 口頭発表，英語口頭発表優秀賞）
小林 和也 年月日：2017年10月13日
受賞者名：小林 和也
授賞内容：“Sex allocation promotes the stable co-occurrence of competitive species” Kazuya Kobayashi, Scientific Reports 7, Article number: 43966 (2017) 第33回個体群生態学会，個体群生態学会奨励賞

里域生態系部門

山下 洋 年月日：2017年10月28日
受賞者名：井上 博・Lavergne, Edouard・久米 学・山下 洋
授賞内容：“Spatial and seasonal change of coastal benthic community in Tango bay, Japan”（森里海国際シンポジウム ポスター発表，ポスター賞）
甲斐 嘉晃 年月日：2017年9月16日
受賞者名：難波 真梨子・武藤 望生・Vilasri Veera・甲斐 嘉晃
授賞内容：「キス属魚類の分類における頭部側線系の有効性」（2017年度日本魚類学会 ポスター発表，優秀ポスター発表賞）
久米 学 年月日：2017年10月28日
受賞者名：井上 博・Lavergne, Edouard・久米 学・山下 洋
授賞内容：“Spatial and seasonal change of coastal benthic community in Tango bay, Japan”（森里海国際シンポジウム ポスター発表，ポスター賞）

海洋生態系部門

中野 智之 年月日：2017年9月5日
受賞者名：中山 凌・中野 智之
授賞内容：「カサガイ類に見られる浮遊幼生の着底基質の選択性について」（2017年日本プランクトン学会・日本ベントス学会・合同大会 口頭発表，学生優秀発表賞）
中野 智之 年月日：2017年8月27日
受賞者名：Togawa, Yumiko; Nakano, Rie; Nakano Tomoyuki.
授賞内容：“The Cryptic Diversity in Aplysia parvula.” (International Symposium ‘Multidisciplinary Explorations into molluscan diversity and evolution’, 優秀発表賞)
中野 智之 年月日：2018年3月3日
受賞者名：Okumura, Yosuke; Nakayama, Ryo; Nakano Tomoyuki.
授賞内容：“Homing behavior of Lottia tenuisculpta on the gastropod shell.” (International Malacological Seminar, Society for the Study of Molluscan Diversity, 優大会優秀賞(Research of Excellence))
小林 志保 年月日：2017年11月7日
受賞者名：小林志保
授賞内容：“沿岸海域における貧酸素化対策技術の開発”（日本水環境学会関西支部第12回 奨励賞）

森里海連環学教育ユニット

吉積 巳貴 年月日：2017年4月21日
受賞者名：Tung, Nguyen Ngoc; Kobayashi, Hirohide; Ongsavangchai, Nawit; Yoshizumi, Miki .

授賞内容：共著書“Transformation and Conservation of Traditional Garden Houses in Hue Citadel Area, Vietnam”
(ベトナム建築協会 National Architectural Award, 銀賞)

Lavergne, Edouard

年月日：2017年10月28日

受賞者名：井上 博・Lavergne, Edouard・久米 学・山下 洋

授賞内容：“Spatial and seasonal change of coastal benthic community in Tango bay, Japan”（森里海国際シンポジウム ポスター発表，ポスター賞）

黄 琬惠

年月日：2017年9月7日

受賞者名：黄 琬惠

授賞内容：「留学生の視点から見る日本世界農業遺産イメージ分析 ―和歌山県みなべ・田辺世界農業遺産を事例に―」（平成29年度 瀬戸内海研究フォーラムin京都「川と海のつながりが育む豊かな文化と生態系」ポスター発表，ポスター優秀賞）

（4）社会貢献活動

◆学外委員会委員等

森林生態系部門

- 吉岡 崇仁 京都府南丹広域振興局：芦生地域有害鳥獣対策協議会 委員
全国大学演習林協議会：理事
- 徳地 直子 農林水産省：農林水産技術会議事務局・国立研究開発法人審議会 臨時委員
岐阜県：清流の国ぎふ森林・環境基金事業評価審議会 委員
京都府：環境影響評価専門委員会 委員
京都市：環境影響評価審査会 委員
一般財団法人防災研究協会：非常勤研究員
京都府八幡市：環境審議会 委員
西山森林整備推進協議会：会長
天王山周辺森林整備推進協議会：顧問
- 長谷川 尚史 林野庁：平成29年度林業普及指導員資格試験 審査委員
近畿中国森林管理局：技術開発委員会 委員
全国森林組合連合会：平成29年度F L・F M研修検討委員会 委員
森林研究・整備機構森林総合研究所：「革新的技術開発・緊急展開事業（うち地域戦略プロジェクト）」専門PO
和歌山県：農林水産部 森林審議会 委員
京都府：農林水産部「京の木生産・利用倍增アクションプラン」検討委員会 委員長
京都府：農林水産部「林業の星」ステップアップ制度実施検討委員会 委員
兵庫県：農政環境部農政企画局 農林水産政策審議会 委員
兵庫県：森林審議会委員・松くい虫防除対策部 会長
京都市：京都市域における集中的な森林整備モデル実施検討会議 委員長
京都市：所有者不明等の森林に関する対策検討会議 委員長
有田川町：林業活性化協議会 委員
住友林業株式会社：資源環境本部 森林クラウドシステム標準化検討委員会 委員
一般財団法人 日本情報経済社会推進協会：ICT地域創生協議会 委員
公益社団法人 農林水産・食品産業技術振興協会：「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業」1次（書面）審査専門評価委員
公益財団法人阪本奨学会：研究助成選考委員
- 舘野 隆之輔 鳥取大学乾燥地研究センター：共同研究委員会 委員
北海道大学大学院環境科学院：審査委員（副査）
標茶町：標茶町林業推進協議会 委員
- 伊勢 武史 国立研究開発法人科学技術振興機構：研究者
京都府：芦生の森植生回復検討委員会 委員
京都府：芦生の森適正利用検討委員会 委員
京都府南丹広域振興局農林商工部：芦生地域有害鳥獣対策協議会 委員
- 石原 正恵 日本学術会議：委員
- 坂野上 なお 滋賀県：公共事業評価監視委員会 委員
大阪府：未利用材木質資源有効活用推進事業事務局運営事業に係る公募型プロポーザル方式事業者選定委員会 委員

大阪府：森林審議会 委員
 京都市：環境審議会 委員
 社団法人 滋賀県造林公社：理事
 中西 麻美 奈良県：公共事業評価監視委員会 委員
 特定非営利活動法人森林再生支援センター：理事
 中川 光 京都府南丹広域振興局 芦生地域有害鳥獣対策協議会：オブザーバー
 京都大学農学部四明会：委員

里域生態系部門

山下 洋 いであ株式会社 大阪支社：環境影響評価に関する専門家
 滋賀県：第20期滋賀県内水面漁場管理委員会 委員
 農林水産省：農林水産技術会議事務局 委託プロジェクト研究「水産業再生プロジェクト」運営委員
 農林水産技術会議委託プロジェクト研究：「生態系ネットワーク修復による持続的な沿岸漁業生産技術の開発」評価委員
 北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション：洞爺湖実験所，臼尻水産実験所，七飯淡水実験所及び忍路臨海実験所共同利用協議会：委員
 長崎大学海洋未来イノベーション機構環東シナ海環境資源研究センター：共同利用運営協議会 委員
 公益財団法人とやま国際センター：日本海学推進機構専門委員
 日本学術振興会：科学研究費委員会専門委員
 舞鶴環境市民会議：顧問
 益田 玲爾 京都府農林水産部水産課：京都海区漁業調整委員会 委員
 梅本 信也 和歌山県：環境影響評価審査会 委員
 和歌山県立博物館：施設アドバイザー
 古座川流域協議会：専門委員

海洋生態系部門

朝倉 彰 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター：水圏ステーション厚岸臨海実験所及び室蘭臨海実験所共同利用協議会 委員
 荒井 修亮 国立極地研究所：運営会議南極観測審議委員会生物圏専門部門 委員・編集委員会 委員
 沖縄防衛局：普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境監視等委員会 委員
 一般財団法人漁港漁場漁村総合研究所：「有用魚種の行動解析に基づく漁場整備の検討」に係る検討委員会 委員
 大阪府立環境農林水産総合研究所：研究アドバイザー委員会 委員
 岐阜県都市建築部街路公園課：メコンオオナマズ学術調査委員会 特別会員
 京都大学農学部四明会：委員
 東北大学大学院情報科学研究科 科学研究費新学術領域研究：「生物情報移動学」領域評価者
 久保田 信 和歌山県立自然博物館：協議会委員・評価部会長
 白浜国際交流協会：会長
 海の生き物を守る会：関西地区運営委員
 紀州文化交流会：理事
 大和 茂之 公益財団法人 天神崎の自然を大切に作る会：評議員
 田辺市：南方熊楠顕彰会：理事・学術部委員
 小林 志保 大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所：共同研究員

森里海連環学教育ユニット

清水 夏樹 近畿農政局：近畿農政局農村振興関係交付金交付先選定審査委員会 外部委員
 京丹波町：木質バイオマスエネルギー活用推進委員会 委員長
 京丹波町：バイオマス産業都市構想策定委員会 委員長
 吉積 巳貴 滋賀県：環境審議会 委員
 神戸市：神戸市みちの懇談会 委員
 関西広域環境保全計画に関する有識者会議：委員

◆高校生までを対象としたプログラム

森林生態系部門

吉岡 崇仁 周南市立和田中学校「体験学習」（徳山試験地），2017-06-23
 徳山高校：SSHプログラム（徳山試験地・徳山高校・山口高校・周南総合庁舎），2017-06-11，08-06，2018-02-10
 長谷川 尚史 有田中央高校清水分校：SIMIZUタイム（ウッズサイエンス）（森林ウォーク）講師（和歌山研究林・有田中央高校清水分校），2017-04-25/2018-01-09，05-31

海南高校：SSHプログラム「和歌山研究林実習」講師（和歌山研究林），2017-08-03
 沼野 隆之輔 日本学術振興会 研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の一環「大学の森で学ぼう2017 ～森の木を伐るとどうなるのか～」(ミニ講義，伐採体験，野外調査体験等 対象：小学校高学年・中学生・高校生)を開催（北海道研究林），2017-08-04

中西 麻美 京都府立西舞鶴高等学校：講師，2017-05-23/09-23

里域生態系部門

山下 洋 京都府立西舞鶴高等学校：講師（舞鶴水産実験所，京都府立西舞鶴高等学校ほか），2017-06-15/09-23
 益田 玲爾 京都府立海洋高校：栽培漁業コース3年生研修において，講演「水中から見た若狭湾の生物と環境」（舞鶴水産実験所），2017-06-07
 京都教育大附属高等学校：臨海実習講師・講演「魚類心理学」（舞鶴水産実験所），2017-07-26/28
 福井県立若狭高等学校：海洋科学科1年生 臨海実習講師・講演「魚目線の環境問題」（舞鶴水産実験所），2017-09-06
 京都府立久美浜高等学校：出前授業「若狭湾の魚たちの素顔」（久美浜高等学校），2017-11-01
 京都新聞：「ソフィアがやってきた！」特別授業「海の中から見た環境問題」（京都市立大藪小学校），2018-01-31
 京都府立海洋高等学校：研究発表会 審査員（京都府立海洋高校），2018-02-01
 甲斐 嘉晃 京都府立西舞鶴高等学校：講師，2017-05-23/09-23
 京都府立南陽高等学校：講師，2017-07-08/08-02
 鈴木 啓太 京都府立西舞鶴高等学校：講師，2017-05-23/09-23
 京都府立南陽高等学校：講師，2017-07-31/08-02
 田城 文人 京都府立西舞鶴高等学校：講師，2017-05-23/09-23
 澤田 英樹 京都府立西舞鶴高等学校：講師，2017-05-23/09-23
 京都府立海洋高等学校：海洋科学科 講師・ナマコ養殖技術に関する講演（京都府立海洋高等学校），2018-02-20
 京都府立海洋高等学校：海洋工学科 学習・研究成果中間発表会 審査員（京都府立海洋高等学校），2017-07-07

海洋生態系部門

荒井 修亮 京都教育大学附属高等学校：Japan-UK Science Workshop 2017 in Kyoto 講師，2017-07-31/08-03
 久保田 信 滋賀県膳所高等学校：SSH事業 講師，2017-07-26
 奈良県立奈良高等学校：SSH和歌山研究講座 講師，2017-07-28/29
 市川 光太郎 京都教育大学附属高等学校：Japan-UK Science Workshop 2017 in Kyoto 講師，2017-07-31/08-03
 木津川市立州見台小学校において，平成29年度「子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業」に係る出前授業「水中の生き物を音でみる」実施（木津川市）
 大和 茂之 和歌山県立日高高校：講師 2017-05-25/26
 和歌山県高校文化連盟：講師 2017-06-08
 大阪府立千里高校：講師 2017-10-05
 中野 智之 滋賀県膳所高等学校：SSH事業 講師，2017-07-24/27
 奈良県立奈良高等学校：SSH事業 講師，2017-07-28/29
 奈良北高校：講師，2017-09-20
 大阪府立豊中高等学校：SSH事業 講師，2017-12-26/27
 後藤 龍太郎 滋賀県膳所高等学校：SSH事業 講師，2017-07-24/27
 木村 里子 京都教育大学附属高等学校：Japan-UK Science Workshop 2017 in Kyoto 講師，2017-07-31/08-03
 河村 真理子 滋賀県立膳所高等学校：講師（瀬戸臨海実験所），2017-07-24/27
 兵庫県立尼崎小田高等学校：講師（瀬戸臨海実験所），2017-08-04/05
 滋賀県立石山高等学校：講師（瀬戸臨海実験所），2017-07-20/23
 大阪市立汎愛高等学校：講師（瀬戸臨海実験所），2017-07-15/17
 佐藤 崇 滋賀県立膳所高等学校：SSHサイエンスキャンプ 講師（瀬戸臨海実験所），2017-07-26

森里海連携学教育ユニット

清水 夏樹 福岡県立京都高校：SGH(スーパーグローバルハイスクール)2年生対象課題研究「日本および環太平洋地域における農業振興策研究」遠隔講義講師(2回)（福岡県立京都高等学校），2017-06-15,07-13

◆社会人等を対象としたプログラム

森林生態系部門

吉岡 崇仁 周南市連携講座（徳山試験地），2017-06-24, 11-25
 京都大学ウィークス 周南市連携公開講座（徳山試験地），2017-10-14
 徳地 直子 上賀茂試験地「春の自然観察会」

- 上賀茂試験地「秋の自然観察会」
- 長谷川 尚史 林野庁九州森林管理局林業生産管理勉強会「作業システムの評価と生産管理」において講演, 2017-05-11
国際ウッドフェア2017「ここが変だよ, 林業界のICT化〜ICT化は皆さんの業務効率につながっていますか?〜」コメンテータ(ビッグハット), 2017-05-25
平成29年度岐阜県森林研究所研究成果発表会「イノベーションの視点から日本林業の方向性を探る」において, 講演(わかくさ・プラザ多目的ホール), 2017-07-13
平成29年度鹿児島県森林・林業振興大会「イノベーションの視点から 日本林業の方向性を探る」において, 講演(かごしま県民交流センター), 2018-02-07
京大テックフォーラム「フィールドデータを活用した次世代型一次産業」において, 講演「精密森林方法を活用した林業イノベーション」(新丸の内ビルディング), 2018-03-09
シンポジウム「次世代の森林・木質資源と住まいを考える」において, 研究発表「ICT技術を用いた新たな森林資源管理と木材SCMの構築」(時計台記念館国際交流ホールI), 2017-11-30
森林所有権制度研究会第二回研究会「ICTを活用した森林管理の未来像」において, 講演(立命館大学大阪いばらきキャンパス), 2018-01-20
- 伊勢 武史 「知ろう, 守ろう 芦生の森ー芦生の森探索とシカ防護ネット設置ボランティア活動ー」開催(芦生研究林)
NHK総合テレビ「まちけん参上!〜あなたの街のおもしろ検定〜(京都府南丹市・美山町)」放送(芦生研究林), 2017-12-03
日本テレビ「所さんの目がテン!」「京都に秘境絶景があった」放送(芦生研究林), 2017-12-17
KBS京都, TOKYO MX他「有頂天家族2」が」放送(芦生研究林), 2017-04-10〜
TV朝日系列「人間の証明」放送(芦生研究林), 2017-04-02
「学生のためのキャリア発見シンポジウム〜先人たちの研究人生解体新書〜」において, 講演「工夫してトリッキーに生きる」(京都大学国際科学イノベーション棟), 2017-10-07
平成29年度 京都大学森林科学公開講座「感じる樹木」において, 講演「人はなぜ, 森で感動するんだろう?」(生存圏研究所 木質ホール), 2017-10-14
第33回(2017)京都賞記念ワークショップ「植物の生き方を知り地球環境の変化を予測する」において, 講演「シミュレーションで予測する地球温暖化と生態系のかかわり」(国立京都国際会館), 2017-11-12
大和田良写真展「FORM: SCENERY SEEN THROUGH BONSAI」対談出演(gallery Main), 2017-05-20
京都市×スターバックスコラボイベント「外来種いけばな」企画・実施(京都大学北白川試験地・スターバックスコーヒー 京都烏丸六角店), 2017-06-03, 12-07/10
「YES, WE DO KYOTO! TALK “わたしらしい” エコってなんだろう」出演(スターバックス コーヒー 京都三条大橋店), 2017-12-09
第二回aiカルチャー協働研究会"LOVE & INTELLIGENCE"出演(東京都・丸ビル 1階マルキューブ), 2017-10-22
大学コンソーシアム京都からの助成金でイベント「コケ×古都×フォト」企画・実施(京都市・無鄰菴), 2018-01-20
- 石原 正恵 「国内及び海外のフィールドを活用した研究教育活動に関する国際研究集会において, 講演“Pros and Cons of Ecotourism at the Ashiu Forest Research Station, Kyoto University”(京都大学国際科学イノベーション棟), 2017-12-08/09
「芦生研究林の植物」写真展にともなう講演会「芦生研究林の概要」(京都府立植物園), 2018-03-04
- 寄元 道德 上賀茂試験地「春の自然観察会」
上賀茂試験地「秋の自然観察会」
- 中川 光 日本テレビ「所さんの目がテン!」「京都に秘境絶景があった」放送(芦生研究林), 2017-12-17
- 里域生態系部門**
- 山下 洋 「国内及び海外のフィールドを活用した研究教育活動に関する国際研究集会」において, オープニングセッションを担当(京都大学国際科学イノベーション棟), 2017-12-08/09
第84回京都大学丸の内セミナーにおいて, 講演「森・里・海のややこしい三角関係」(京都大学東京オフィス), 2017-07-07
NHK総合テレビ「ダーウィンが来た!」第534回「徹底比較! ヒラメとカレイ」放送(取材協力・舞鶴湾), 2017-12-17
- 益田 玲爾 「5年間の潜水調査で2011年津波後の海の生き物たちの回復が明らかに」展示(京都大学総合博物館1階ロビー), 2017-04-28/05-14
京都大学総合博物館のレクチャーシリーズにおいて, 講演「5年間の潜水調査で2011年津波後の海の生き物たちの回復が明らかに」(京都大学総合博物館), 2017-05-13
アースウォッチ・ジャパンにおいて, 特別講演「潜水調査で明らかとなった津波後の生き物たちの回復」(舞根森里海研究所), 2017-05-21
宮津与謝退職校園長会において, 講演「丹後の海・魚の研究から」(宮津市清輝楼), 2017-06-03

- 舞鶴東ロータリークラブにおいて、講演「舞鶴の魚たちの生態と調理法」(舞鶴市マーレたかた), 2017-06-15
- 第47回北洋研究シンポジウム～環境DNAを用いた水産生物のモニタリング～において、講演「環境DNAによる資源量推定に向けての水槽実験とフィールドでの検証」(北海道大学農学部), 2017-06-17
- 舞鶴市中央公民館いきいきセミナーにおいて、講演「舞鶴の魚の楽しみ方～海の底から食卓まで～」(舞鶴市中央公民館), 2017-06-22
- 舞鶴市大浦会館 海辺の生き物調査 講師(舞鶴市ととのいえ・小橋海岸), 2017-07-25
- 池内川水辺の生き物観察会 講師・講演(舞鶴市布敷公民館), 2017-08-04
- 舞鶴市小学校理科教員研修において、講演「舞鶴の海に学ぶ」(舞鶴水産実験所), 2017-08-23
- 舞鶴市ネイチャーガイド養成講座において、講演「舞鶴湾の魚たち」(舞鶴商工観光センター), 2017-08-29
- 舞鶴市中保育所見学会において、講演「まいづるのうみのいきものだいしゅうごう」(舞鶴水産実験所), 2017-09-05
- アースウォッチ・ジャパンにおいて、特別講演「潜水調査で明らかとなった津波後の生き物たちの回復」(舞根森里海研究所), 2017-09-17
- 京都府海の民学舎講義「水中から見た京都の海」(舞鶴水産実験所), 2017-10-17
- 海上保安学校海洋科学科見学会において、講演「京大舞鶴水産実験所の秘密」(舞鶴水産実験所), 2018-03-06
- NHK総合テレビ京都放送局「京いちにち」において、「ナマコを増やせ 高校生が奮闘」放送(舞鶴水産実験所取材協力・宮津湾), 2018-01-19
- NHK総合テレビ「ダーウィンが来た!」において、第534回「徹底比較! ヒラメとカレイ」放送(取材協力・舞鶴湾), 2017-12-17
- 甲斐 嘉晃 読売テレビ「所さんの目がテン!」において、「さかなクン興奮の珍魚」放送(舞鶴実験所・コバンザメの生態について取材), 2017-11-09 (日本テレビは2017-10-29放送)
- 海洋生態系部門**
- 朝倉 彰 「国内及び海外のフィールドを活用した研究教育活動に関する国際研究集会において、講演“Education at Shirahama Aquarium, Kyoto University”(京都大学国際科学イノベーション棟), 2017-12-08/09
- 久保田 信 朝日放送「おはようコールABC」において、おきトクのコーナーに出演(瀬戸臨海実験所), 2017-10-19
- TBSテレビ「Nスタ」において、トクする! 3コマニュース「クラゲが世界を救う」放送(瀬戸臨海実験所・取材協力), 2017-11-13
- TBSテレビ系列「世界ふしぎ発見!」放送(取材協力), 2018-02-03
- MBSテレビ「Voice」において、「寒波で熱帯性の魚凍死」放送(取材協力), 2018-02-06
- 読売テレビ「情報ネットten」において、「凍死魚」に関するニュース放送(取材協力), 2018-02-06
- 関西テレビ「みんなのニュース 報道ランナー」において、「南紀の海に異変! その理由は…」が放送(取材協力), 2018-02-26
- MBSテレビ「Voice 憤懣本舗」において、「サンゴや熱帯魚に異変 和歌山の海に一体何が 地元漁師たちも困惑」放送(取材協力), 2018-03-26
- FMビーチステーションラジオ「白浜千年ロマン」出演, 2017-01/03 毎月2回
- FMビーチステーションラジオ「まちかどマチネ」出演, 2017-03-03,10,17
- 「学生のためのキャリア発見シンポジウム～先人たちの研究人生解体新書～」において、講演「夢こそ人生旅のソースー生物学こそ全人類の基礎」(京都大学国際科学イノベーション棟), 2017-10-07
- 「不死のベニクラゲと早死のカイヤドリヒドラクラゲの生活史・生態・分類・系統について」最終講義(理学研究科セミナーハウス), 2018-02-08
- 瀬戸臨海実験所 磯の観察会&学習会において、講演(貝塚私立自然遊学館), 2017-08-19
- 第71回和歌山県科学教育研究大会(西牟婁大会)において、講演(西牟婁地方科学教育研究会), 2017-11-10
- 平成29年度(中・総)理科夏季研修講座 理科教員指導力向上講座において、講演(京都市総合教育センター), 2017-07-26
- 上富田町生涯学習推進委員会主催による「まちづくり講座」において、講演(和歌山県上富田町役場), 2017-08-31
- まほろばけいはんなSSHサイエンスフェスティバルにおいて、講演(奈良県立奈良高等学校), 2017-10-28
- 「ベニクラゲ講座」において、講演(白浜町立図書館), 2017-12-09
- 白浜町老人クラブ連合会 役員研修会において、講演「田辺湾は日本一のクラゲ天国～特に不老不死のベニクラゲの神秘～」(クアハウス白浜), 2018-02-02
- 市川 光太郎 セレナ来館30周年記念事業講演会において、講演「人魚の歌声」～鳴き声からわかるジュゴンの秘密～(鳥羽市), 2018-03-04

大和 茂之 天神崎の自然を大切にする会・磯観察会 講師 2017-06-11
中野 智之 平成29年度ふるさと自然探検隊(水辺観察教室) 講師, 2017-07-22
番所崎海の生き物を学ぼう! 講師, 2017-08-06

(5) 国際活動

◆国際研究プロジェクト

海洋生態系部門

河村 真理子 The 14th China-Japan-Korea international jellyfish workshop (中国 上海, 2017-11-27/12-01)

◆国際学会

森林生態系部門

伊勢 武史 INTECOL2017 Beijing (中国 北京発展ビル, the China National Convention Center, 2017-08-20/22)
AGU Fall Meeting 2017 (アメリカ New Orleans Morial Convention Center, 2017-12-15/16)

里域生態系部門

山下 洋 10th International Flatfish Symposium. (フランス Saint-Malo, 2017-11-10/16)
益田 玲爾 10th Indo-Pacific Fish Conference (タヒチ Maison de la Culture, 2017-10-02/06)
澤田 英樹 第4回International Conference on Fish Telemetry (オーストラリア Cairns, 2017-06-20/23)

海洋生態系部門

朝倉 彰 森里海連環学教育プログラム国際シンポジウム (京都 京都大学益川ホール, 2017-10-27/28)
東南アジアネットワークフォーラム (ベトナム Luc Thuy Restaurant, 2017-10-29)
HUST & KU Intl. Symp. on the Education and Research of the Global Environmental Studies in Asia (ベトナム Ta Quang Buu Library Build., HUST, 2017-10-30/31)
Asian Marine Biology Sympojium (熊本県立大学, 2017-11-02/05)
市川 光太郎 第4回Intl. Conference on Fish Telemetry (オーストラリア the Pullman Reef Hotel, 2017-06-19/23)
22nd Biennial Society for Marine Mammalogy Conference on the Biology of Marine Mammals (カナダ Halifax Convention Centre, 2017-10-21/29)

森里海連環学教育ユニット

清水 夏樹 東南アジアネットワークフォーラム (ベトナム Luc Thuy Restaurant, 2017-10-29)
HUST & KU Intl. Symp. on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia (ベトナム Ta Quang Buu Library Build., HUST, 2017-10-30/11-01)
吉積 巳貴 The 2017 International Conference on East Asian Architecture and City (韓国 Haevichi Hotel, 2017-04-25/26)
4th Environment Asia International Conference (タイ チェラロンコン大学, 2017-06-17/23)
東南アジアネットワークフォーラム (ベトナム Luc Thuy Restaurant, 2017-10-29)
HUST & KU Intl. Symp. on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia (ベトナム Ta Quang Buu Library Build., HUST, 2017-10-30/31)
Lavergne, Edouard 東南アジアネットワークフォーラム (ベトナム Luc Thuy Restaurant, 2017-10-29)
HUST & KU Intl. Symp. on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia (ベトナム Ta Quang Buu Library Build., HUST, 2017-10-30/11-01)
黄 琬惠 Sustainable Development Conference 2017 (タイ Aetas Lumpini Hotel, 2017-07-12/16)
東南アジアネットワークフォーラム (ベトナム Luc Thuy Restaurant, 2017-10-29)
HUST & KU Intl. Symp. on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia (ベトナム Ta Quang Buu Library Build., HUST, 2017-10-30/31)
安佛 かおり 東南アジアネットワークフォーラム (ベトナム Luc Thuy Restaurant, 2017-10-29)
HUST & KU Intl. Symp. on the Education & Research of the Global Environmental Studies in Asia (ベトナム Ta Quang Buu Library Build., HUST, 2017-10-30/31)

◆海外調査

森林生態系部門

伊勢 武史 研究課題に関する森林調査 (中国 Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, 2017-03-23/25)
舘野 隆之輔 研究課題に関する調査 (中国 公路山試験地, 紙坊溝試験地, 公路山試験地, 中国科学院水土保持研究所, 2017-08-10/16)

里域生態系部門

田城 文人 研究課題に関する標本調査 (アメリカ The Academy of Natural Sciences of Drexel Univ., Museum Support

Center, Smithsonian Inst., 2017-10-25/11-02)

海洋生態系部門

- 朝倉 彰 採集に関する打合せと標本調査および情報収集 (オーストラリア クイーンズランド博物館, 2017-08-21/22)
- 荒井 修亮 研究課題 (ジュゴン) のフィールド調査 (タイ タリボン島周辺海域, 2018-01-27/30)
- 市川 光太郎 研究課題 (ジュゴン) のフィールド調査 (タイ プーケット海洋生物学センター, 2017-07-14, タリボン島, 2017-07-15/18)
- 研究課題 (ジュゴン) のフィールド調査 (パラオ マラカル湾, 2017-09-25/29)
- 研究課題 (ジュゴン) に関する生態調査 (タイ タリボン島周辺海域, 2017-10-08/16)
- 研究課題 (ジュゴン) に関する音響観察 (マレーシア ティンギ島, 2017-11-15/29)
- 研究課題 (ジュゴン) に関する音響観察 (スーダン 紅海大学, 2017-12-18, ドンゴナープ湾, 2017-12-19/28)
- 研究課題 (ジュゴン) に関する生態調査 (タイ タリボン島周辺海域, 2018-01-11/02-01)

森里海連環学教育ユニット

- 横山 寿 養殖場の視察と研究打合せ (中国 上海周辺の養殖場および中国水産研究院東海研究所, 2017-12-10/13)
- 今後の研究に関する協議と視察 (フィリピン ダバオ市内周辺, 2018-02-20/22)
- 清水 夏樹 研究課題に関するインタビュー調査および実態調査 (スイス Buhl農場 アフォルテン村, ドイツ 農家民宿Mattenhof Zell a Harmerbach, German National Tourist board, Maizer Wohnmarkt, 2018-02-19/23)
- 吉積 巳貴 研究課題に関するワークショップの開催, 打ち合わせおよび現地調査 (ベトナム フェ科学大学, フェ省ナムドン, フェ科学大学, ダナン大学, 2017-08-09/16)
- 研究課題に関する研究打合せおよび現地調査 (ベトナム タンポボ保育園, ダナン大学, ダナン工科大学周辺地区, ダナン市周辺地区, 2017-12-16/18)
- LAVERGNE Edouard-Alexandre 研究打合せおよび情報収集 (フランス IRESTEA Bordeaux Centre, 2018-03-13/18)

◆在外研究

森林生態系部門

- 館野 隆之輔 ジョンワプログラムにおいて在外研究 (イギリス グランフィールド大学, 2018-03-10/12-13)

◆その他出張研修

(該当案件なし)

◆招へい外国人学者

森里海連環学教育ユニット

- Fu Jing／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (中国水産科学研究院 研究員: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-25/29, 受入教員: 横山 壽)
- Zhou Jin／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (中国水産科学研究院 准教授: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-25/29, 受入教員: 横山 壽)
- Hoang Thi Nguyen Hai／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (ベトナム フェ農林大学 研究員: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-24/29, 受入教員: 横山 壽)
- Kaya Abdulgaffar／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (トルコ共和国農業村落省 職員: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-25/31, 受入教員: 横山 壽)
- Carrasco Mansilla Sandra Milena／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (オーストラリア メルボルン大学 講師: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-24/30, 受入教員: 横山 壽)
- Kieu Thi Kinh／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (ベトナム ダナン大学 講師: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-25/31, 受入教員: 横山 壽)
- Hoang Hai／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (ベトナム ダナン大学国際部 部長: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-25/31, 受入教員: 横山 壽)
- Huynh Phuoc／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (ベトナム ダナン科学技術協会 副協会長: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-25/11-01, 受入教員: 横山 壽)
- Tran Thuong Tho／森里海連環学教育ユニット国際シンポジウムに参加 (ベトナム環境保護局 マネージャー: 京都大学吉田キャンパス北部構内, 2017-10-26/29, 受入教員: 横山 壽)

◆外国人共同研究者

里域生態系部門

- Nishimura, Bunei (西村 文英 西ブルターニュ大学博士課程)／水産業を基盤とした地域振興に関する研究 (日本国 籍: フランス, 京都大学, 2015-08-01/2017-09-30)

◆留学生

森林生態系部門

谷 鑫 (ゴウ シン)	私費留学生 (中国, 吉岡 崇仁)
Ei Thandar Bol	国費留学生 (ミャンマー, 徳地 直子)
Akari Phyu Phyu Thets	国費留学生 (ミャンマー, 徳地 直子)
Pyae Sone Soe	私費留学生 (ミャンマー, 徳地 直子)

里域生態系部門

蔣 薇 (ジャン ウェイ)	国費留学生 (中国, 山下 洋, 里海生態保全学)
Omweri, Justus Ooga	国費留学生 (ケニア, 山下 洋, 地球環境学舎)
Alisa Kutzer	国費留学生 (ドイツ, 山下 洋, 地球環境学舎)
Sonia Bopuquet	短期交流学生留学生 JGPプログラム (フランス, 山下 洋, 地球環境学舎)

(6) 研修参加・資格取得等

◆職員研修 (学外)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション技術職員専門研修

開催日時・場所	10月3～5日 北海道大学苫小牧研究林
参加者	古田 卓

第26回九州地区農学部附属演習林技術職員研修

開催日時・場所	10月10～13日 琉球大学与那フィールド (全国大学演習林協議会)
参加者	紺野 絡

近畿地区国立大学法人等教室系技術職員研修

開催日時・場所	10月28日 京都大学吉田南総合館・京都府立植物園
参加者	林 大輔・細見 純嗣・奥田 賢

中国・四国・近畿地区演習林協議会技術職員研修

開催日時・場所	11月8～9日 島根大学三瓶演習林 (全国大学演習林協議会)
参加者	山内 隆之・宮城 祐太

第20回関東甲信越地区演習林等技術職員研修

開催日時・場所	11月8～9日 東京大学 田無演習林 (全国大学演習林協議会)
参加者	柴田 泰征

第44回 全国国立大学法人臨海・臨湖実験所・センター技術職員研修会議

開催日時・場所	11月15～17日 京都大学フィールド研瀬戸臨海実験所
参加者	加藤 哲哉・原田 桂太・山内 洋紀・山本 恒紀

◆職員研修 (学内)

京都大学技術職員研修 (第6 専門技術群: 情報系): 理学研究科セミナーハウス

11月13日	横田 盤・中村 はる奈
--------	-------------

ドローン研修 (京都大学フィールド科学教育研究センター森林系技術職員研修): 上賀茂試験地

11月15～16日	奥田 賢・山中 公・北川 陽一郎・中川 智之・岸本 泰典・荒井 亮・勝山 智憲・藤井 弘明・大橋 健太・岡部 芳彦・林 大輔・吉岡 歩・黒田 真人・山内 隆之
-----------	---

京都大学技術職員研修 (第4専門技術群: 生物・生態系): 附属農場

11月17日	山内 隆之・境 慎二郎・細見 純嗣・黒田 真人・中村 はる奈
--------	--------------------------------

京都大学技術職員専門研修 (第2専門技術群: システム・計測系): 鉄道総合研究所 風洞技術センター

2018年1月25日	境 慎二郎・紺野 絡
------------	------------

京都大学技術職員研修: アサーティブコミュニケーション研修 (教室系技術職員等向けヒューマンスキル研修)

	: 農学部大会議室
2018年2月22日	紺野 絡・中村 はる奈

京都大学技術職員専門研修（第2回）（第1専門技術群：工作・運転系）：京都梅小路公園 緑の館他
2018年3月9日 境 慎二郎・細見 純嗣

（パソコン研修は今年度該当案件なし）

◆免許・資格等の取得

危険物取扱者免状（乙種第4類）	なし	
中型車自動車運転免許（8t限定解除）	北川 陽一郎	
大型特殊自動車運転免許	なし	
潜水士	なし	（以上、免許）
第三級陸上特殊無線技士	北川 陽一郎・木本 恵周	（無線従事者国家試験）
毒物劇物取扱責任者	なし	（毒物及び劇物取締法による資格）
地山の掘削及び土止め支保工作業主任者技能講習	勝山 智憲	
はい作業主任者技能講習	荒井 亮・勝山 智憲	
小型移動式クレーン運転技能講習	なし	
フォークリフト運転技能講習	なし	
車両系建設機械（整地等）運転技能講習	なし	
車両系建設機械（解体用）運転技能講習	なし	
不整地運搬車運転技能講習	なし	
高所作業車運転技能講習	林 大輔	
玉掛け技能講習	なし	（以上、労働安全衛生法による技能講習）
自由研削用といしの取替え等の業務に係る特別教育	なし	
アーク溶接等の業務に係る特別教育	なし	
機械集材機械の運転の業務に係る特別教育	なし	
伐木等の業務に係る特別教育（立木の伐木作業者）	長谷川 敦史	
伐木等の業務に係る特別教育（チェーンソー作業者）	なし	
赤十字ベシックライフサポーター認定	山内 隆之・宮城 祐太	
小型車両系建設機械（整地等）の運転の業務に係る特別教育（3トン未満）	なし	
クレーンの運転の業務に係る特別教育（5t未満）	なし	
巻上げ機（ウインチ）の運転の特別教育	なし	（以上、労働安全衛生法による特別教育）
振動工具取扱作業安全衛生教育（チェーンソー以外）	なし	
刈払機取扱作業安全衛生教育	なし	
職長教育	なし	
職長・安全衛生責任者教育	なし	
林内作業車を使用する集材作業に従事する者に対する安全教育	なし	（以上、労働安全衛生法の通達による教育）
第1種衛生管理者免許	なし	（労働安全衛生法による免許）
上級救命講習	なし	
普通救命講習I	なし	（以上、消防本部 認定）
Cカード（オープンウォーターダイバー）	なし	（スクーバダイビング技能認定）
防災士資格	なし	（特定非営利活動法人 日本防災士機構認定）
無人航空従事者試験 3 級	吉岡 歩	（ドローン検定協会株式会社認定）

◆安全衛生に関する講習会等

安全運転管理者講習	上西 久哉	
危険物取扱者保安講習（乙種第4類）	細見 純嗣・北川 陽一郎・西岡 裕平・岸本 泰典・宮城 祐太・荒井 亮	
安全衛生推進者養成講座	なし	
衛生推進者養成講習	なし	

5. 資料

(1) 職員配置表

平成30年 1月 16日現在

区分	教授	准教授	講師	助教	事務職員	技術職員	非常勤職員等
流動分野研究室	荒井 修亮	市川光太郎		小林 志保			正木 千秋 伊藤 真保
研究室(北部構内)	吉岡 崇仁 ■山下 洋 □徳地 直子 △横山 壽	伊勢 武史 *清水 夏樹 *吉積 巳貴	中島 皇 *ラヴァルニ エドワルド	坂野上なお *藤井 佐織 (研究員) ◆久米 学			川崎 茜 熊谷 千穂 三田村万美子 ▼橋田理也子 渡部俊太郎 前田 雅彦 鎌内 宏光 ▼中西 恵 (派)谷口あかね 篠原 綾子
企画情報室	(室長) 山下 洋					●榎田 盤 中村はる奈	
森里海連環学 プロジェクト支援室	(室長) 山下 洋					(兼)○向 昌宏	
事務室					(課長補佐) 南 幸一 (掛長) 福島 慎吉		山本みゆき
森林フィールド管理部門						▽◎山内 隆之	
里域フィールド管理部門						▽◎境 慎二朗	
水域フィールド管理部門						◎加藤 哲哉	
芦生研究林	(兼)★徳地 直子	(研究林長) ★伊勢 武史 ★石原 正恵		★坂野上なお ◆中川 光	(掛長) 垣田 明彦 飯間 昭彦	●紺野 絡 ○細見 純嗣 ○奥田 賢 古田 卓 山中 公 北川陽一郎 木本 恵周	中野はるみ 山口サト子 奥田 寛美
北海道研究林		(研究林長) 舘野隆之輔	小林 和也	▼中西 麻美	(掛長) 安井 正	[標茶区] ●柴田 泰征 ●中川 智之 ○柳本 順 ○太田 健一 西岡 裕平 岸本 泰典 宮城 祐太 (再)佐藤 修一	川村由紀枝 清水 道子
和歌山研究林	(兼)★徳地 直子	(研究林長) 長谷川尚史				●上西 久哉 ○浅野 善和 ○荒井 亮 長谷川敦史 勝山 智憲	松場 香枝
上賀茂試験地	(試験地長) ★徳地 直子			寄元 道徳		●藤井 弘明 ○大橋 健太 ○岡部 芳彦 林 大輔 吉岡 歩	
徳山試験地	(試験地長) ★吉岡 崇仁					(兼)▽●境 慎二朗	徳原 典子 石丸美由希
北白川試験地	(試験地長) (兼)吉岡 崇仁					(兼)●山内 隆之 ●平井 岳志 黒田 真人	北村伊都子
紀伊大島実験所		(実験所長) 梅本 信也					
舞鶴水産実験所	★山下 洋	(実験所長) 益田 玲爾		甲斐 嘉晃 鈴木 啓太 ◆澤田 英樹 ◆田城 文人	(主任) 武田賀津美	○向 昌宏 小倉 良仁	荻野 文代 山下 正枝 藤井 初美 澤田 友子 佐織 悦子 正木 京子 潮見 美咲 高橋さやか
瀬戸臨海実験所	(実験所長) 朝倉 彰	久保田 信		大和 茂之 中野 智之 後藤龍太郎 *原村 隆司 *加賀谷勝史	(掛長) 治岡淳一郎 (専門職員) 砂田 明展 横山 隆一	(兼)●加藤 哲哉 原田 桂太 山内 洋紀 山本 恒紀 (再)津越 健一 (再)興田喜久男	興田 道子 河村真理子 松本 真代 佐藤 崇
森里海連環学教育ユニット	(ユニット長[兼]) 朝倉 彰 ◆横山 壽	◆清水 夏樹 ◆吉積 巳貴	◆ラヴァルニ エドワルド		◆林 晴夫 ◆永田 裕美		安佛かおり 黄 琬恵 富田 寿子 包 薩日娜 (派)濱田 綾香

■センター長 □副センター長 *連携教員 ◆特定有期雇用教職員 △社会連携教授 ▲特任教授
勤務地：★京都 ▽北白川試験地 ▼上賀茂試験地

◎技術長 ●技術班長 ○技術主任
(兼)兼務 (再)再雇用

(2) 常設委員会名称および委員一覧

平成29年4月1日現在

<教授が担う委員会>

将来構想企画委員会	○山下・吉岡・朝倉・徳地・荒井
教育研究評価委員会	○山下・吉岡・朝倉・徳地・荒井
施設・設備整備委員会	○山下・吉岡・朝倉・徳地・荒井
兼業審査委員会	○吉岡・山下・朝倉・徳地・荒井
自己点検・評価委員会	○山下・吉岡・朝倉・徳地・荒井・横山

<教授が当面委員長を務める委員会>

教育プログラム委員会	○朝倉・益田・長谷川・中島・市川
研究プログラム委員会	○吉岡・徳地・小林（和也）・市川・清水・後藤
広報委員会	○荒井・中野・梅本・石原・中西・鈴木・小林（志保）・横田
人権問題対策検討委員会	○山下・吉岡・朝倉・徳地・荒井・フィールド研担当事務長
情報セキュリティ委員会	○山下・荒井・鈴木（部局情報セキュリティ責任者）・小林（和也）・横田
放射線障害防止委員会	○山下・甲斐（エックス線作業主任者）・徳地・中野
国際委員会	○朝倉・益田・伊勢・大和
労働安全衛生委員会	○徳地・坂野上・甲斐・大和・向・技術長
公用車管理委員会	○山下・伊勢・市川・中島
芦生研究林基金運営委員会	○吉岡・山下・伊勢・徳地・石原・坂野上・フィールド研担当事務長

<准教授・講師・助教が委員長を務める委員会>

社会連携委員会	○市川・舘野・伊勢・坂野上・後藤・清水
---------	---------------------

<教育関係共同利用拠点運営委員会>

舞鶴水産実験所	○山下・益田・朝倉・小林（志保）
瀬戸臨海実験所	○山下・朝倉・益田
芦生・北海道・上賀茂	○山下・伊勢・舘野・徳地・長谷川

（○は、委員長）

危機管理委員会（役職指定）	全教授・各施設長・技術長
技術職員のあり方検討委員会（役職指定）	専任教授（流動分野を除く）・技術長・ （事務部）フィールド研担当事務長・フィールド研担当課長補佐・ 総務課課長補佐（総務・人事担当）・総務課第二総務人事掛長
教育研究組織改革検討ワーキンググループ	山下・吉岡・朝倉・徳地・荒井・益田・中野・伊勢・舘野・甲斐・石原

(3) 全学委員会等

平成29年7月1日現在

<部局長が対応する委員会>

教育研究評議会	地球環境学堂・学舎 協議会	総合技術部 委員会
研究資源アーカイブ運営委員会	情報セキュリティ委員会	研究連携基盤運営委員会

<他の教員が対応する委員会>

学際融合教育研究推進センター運営連絡会	朝倉（職指定 ユニット長）
情報環境機構KUINS利用負担金検討委員会	中西
総合博物館運営委員会	吉岡
野生動物研究センター連携協議会	朝倉
大学評価委員会 点検・評価実行委員会	朝倉
学生の安全対策検討WG委員	徳地
組換えDNA実験安全委員会	甲斐
吉田キャンパス整備専門委員会	
優秀女性研究者賞選考委員会	徳地
教員活動評価WG委員	荒井
農学研究科建築委員会オブザーバー	徳地
農学研究科（北部）総合研究棟ワーキンググループ	長谷川・松尾
農学研究科防火・防災委員会	吉岡
農学研究科省エネルギー小委員会（環境・安全・衛生委員会）	小林（志保）
北部構内交通委員会	寄元
農学研究科コンピュータ援用物理系実習室運営委員会	長谷川
農学研究科コンピュータ援用物理系実習室管理実務委員会	坂野上

(4) 運営委員会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名
1号	山下 洋	フィールド研 センター長
2号	吉岡 崇仁	フィールド研 教授
	朝倉 彰	フィールド研 教授
	徳地 直子	フィールド研 教授
	荒井 修亮	フィールド研 教授
3号	渡辺 勝敏	理学研究科 准教授
	北山 兼弘	農学研究科 教授
	大澤 晃	地球環境学堂 教授
	高林 純示	生態学研究センター 教授
	本川 雅治	総合博物館 准教授
	石川 登	東南アジア研究所 教授

(5) 協議員会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名	備考
1号	山下 洋	フィールド研 センター長	
2号	吉岡 崇仁	フィールド研 教授	
	朝倉 彰	フィールド研 教授	
	徳地 直子	フィールド研 教授	
	荒井 修亮	フィールド研 教授	
3号	森脇 淳	理学研究科 教授	理学研究科研究科長
	曾田 貞滋	理学研究科 教授	
	縄田 栄治	農学研究科 教授	農学研究科長
	富永 達	農学研究科 教授	農学研究科附属農場長
	舟川 晋也	地球環境学堂 教授	地球環境学堂長
	中村 裕一	学術情報メディアセンター 教授	
	中野 伸一	生態学研究センター 教授	生態学研究センター長
	岩崎 奈緒子	総合博物館 教授	総合博物館長

(6) 教育関係共同利用拠点運営委員会

舞鶴水産実験所共同利用運営委員会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名
1号	山下 洋	フィールド研 センター長
2号	益田 玲爾	フィールド研 准教授（舞鶴水産実験所長）
3号	朝倉 彰	フィールド研 教授（瀬戸臨海実験所）
4号	小林 志保	京都大学 フィールド研 助教
5号	塩尻 かおり	龍谷大学 農学部 講師
	張野 宏也	神戸女学院大学 人間科学部 教授
	白山 義久	独立行政法人 海洋研究開発機構 理事
	富永 修	福井県立大学 海洋生物資源学部 教授
	小路 淳	広島大学 生物圏科学研究科 准教授
	三宅 崇	岐阜大学 教育学部 准教授

瀬戸臨海実験所共同利用運営委員会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名
1号	山下 洋	フィールド研 センター長
2号	朝倉 彰	フィールド研 教授（瀬戸臨海実験所長）
3号	益田 玲爾	フィールド研 准教授（瀬戸臨海実験所）
4号	渡辺 勝敏	京都大学 理学研究科 准教授
5号	仲岡 雅裕	北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 教授
	窪川 かおる	東京大学 海洋アライアンス海洋教育促進研究センター 特任教授
	西田 宏記	大阪大学 理学研究科 教授
	川井 浩史	神戸大学 内海域環境教育研究センター 教授
	深見 裕伸	宮崎大学 農学部 准教授
	白山 義久	独立行政法人 海洋研究開発機構 理事

芦生研究林・北海道研究林・上賀茂試験地共同利用運営委員会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名
1号	山下 洋	フィールド研 センター長
2号	伊勢 武史	フィールド研 准教授（芦生研究林長）
	館野 隆之輔	フィールド研 准教授（北海道研究林長）
	徳地 直子	フィールド研 教授（上賀茂試験地長）
3号	吉岡 崇仁	フィールド研 教授
4号	檀浦 正子	京都大学 地球環境学 助教
5号	高原 光	京都府立大学大学院 生命環境学研究科 教授
	板倉 豊	京都精華大学 人文学部 教授
	藤井 芳一	人間環境大学 人間環境学部 准教授
	佐藤 拓哉	神戸大学大学院 理学研究科 准教授
	小林 元	信州大学 農学部附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター 准教授
	高木 正博	宮崎大学 農学部附属フィールド科学教育研究センター田野フィールド 教授

(7) 森里海連環学教育ユニット関連委員会

森里海連環学教育ユニット 運営協議会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名
1号	朝倉 彰	フィールド研 教授
2号	縄田 栄治	農学研究科長
	杉山 雅人	人間・環境学研究科長
	舟川 晋也	地球環境学堂長
	山下 洋	フィールド研 センター長
3号	星野 敏	農学研究科 教授
	浅野 耕太	人間・環境学研究科 教授
	柴田 昌三	地球環境学堂 教授
	荒井 修亮	フィールド研 教授

森里海連環学教育ユニット 事業推進委員会

平成29年4月1日現在

区分	氏名	所属・職名
1号	朝倉 彰	フィールド研 教授
2号	星野 敏	農学研究科 教授
	浅野 耕太	人間・環境学研究科 教授
	柴田 昌三	地球環境学堂 教授
	山下 洋	フィールド研 教授
3号	横山 壽	ユニット 特定教授・フィールド研 特任教授
	清水 夏樹	ユニット 特定准教授・フィールド研 連携准教授
	吉積 巳貴	ユニット 特定准教授・フィールド研 連携准教授
	Edouard LAVERGNE	ユニット 特定講師・フィールド研 連携講師

(8)新聞・雑誌等に掲載された記事

センターに関する記事

年月日	掲載面	掲載紙	タイトル	内容・キーワード等
2017年4月21日	4面	紀伊民報	ハクサンボクが開花 京大紀伊大島実験所	紀伊大島実験所
2017年5月18日	21面	京都新聞	外来種いけばなに挑戦 池坊、来月ワークショップ	北白川試験地
2017年5月25日	4面	紀伊民報	赤い花、ブラシのよう 串本京大島実験所で咲く	紀伊大島実験所
2017年6月5日	25面	読売新聞	森の写真とアロマ共演 10日まで南丹で作品展	芦生研究林
2017年6月9日	4面	紀伊民報	アオノクマタケラン枯れる、串本の紀伊大島	紀伊大島実験所
2017年6月10日	25面	京都新聞	森と命のつながり体感 北桑田高生ら、京大芦生研究林ツアー	芦生研究林
2017年6月17日	1面	紀伊民報	く水鉄砲くマタケランと温暖化	紀伊大島実験所
2017年6月18日	25面	京都新聞	変わりゆく奥深き森 丹波高原の四季 第2章	芦生研究林
2017年7月6日	9面	紀伊民報	干潟に砂の芸術品 小動物の巣から	白浜水族館
2017年7月8日	1面	紀伊民報	京大水族館 世界の街背負う 特別展 芸術作品にヤドカリ	白浜水族館
2017年7月26日	1面	京都新聞夕刊	芦生のササ 消滅危機 シカ食害、「最後の群生地」も	芦生研究林
2017年7月27日	29面	読売新聞	アートで迫るヤドカリ 京大白浜水族館	白浜水族館
2017年8月4日	3面	紀伊民報	釣つとコラム 深海魚展行ってきた	白浜水族館
2017年8月11日	9面	紀伊民報	裏側案内や生き物解説 31日まで 京大白浜水族館	白浜水族館
2017年8月19日	1面	紀伊民報	はさみ四つまたのカニ 京大白浜水族館	白浜水族館
2017年9月12日	4面	紀伊民報	植物や土壌の調査法学ぶ 串本 京大生が大島実験所で	紀伊大島実験所
2017年9月22日	4面	紀伊民報	住民に聞き取り学ぶ 串本 京大1年の山本さん	紀伊大島実験所
2017年9月24日	1面	紀伊民報	瀬戸臨海実験所を見学 10月28日、白浜	瀬戸臨海実験所
2017年10月3日	21面	京都新聞	丹波高原の四季―第2章 種の多様性 維持危ぶまれ―ササ 衰退の一途―	芦生研究林
2017年10月6日	4面	紀伊民報	古座川調査 報告集の新刊発行 京大大島実験所	紀伊大島実験所
2017年10月14日	4面	紀伊民報	オオモクゲンジ咲く 京大大島実験所	紀伊大島実験所
2017年10月25日	24面	京都新聞	シンポジウム「森里海連環を担う人材育成の成果と展望」	森里海連環学教育ユニット
2017年11月5日	4面	毎日新聞ふれあい毎日	森・里・海のつながり学ぶ 周南市と京都大学フィールド科学教育研究センターの連携公開講座 「川から森を診る」講座や、檜皮採取の実演	徳山試験地
2017年11月5日	14面	紀伊民報	水抜いたら大きなウナギ 白浜のため池	白浜水族館
2017年11月28日	9面	紀伊民報	ユウレイイカ捕獲 白浜 深海性のイカ	白浜水族館
2017年12月31日	19面	京都新聞	芦生研究林 喪失の風景描く 調査の女性、あすから東山で水彩画展 食害被害の下層植物再現	芦生研究林
2018年1月16日	8面	京都大学新聞	教授と一緒に裏まで見学 白浜水族館 休み中イベント	白浜水族館
2018年1月24日	25面	毎日新聞	京大 芦生研究林に寄付を 食害対策や研究施設改善	芦生研究林
2018年2月9日	19面	朝日新聞	300年後を示し、考えてもらうのが使命 森との共生 空から探る	芦生研究林および伊勢准教授
2018年2月15日	8面	紀伊民報	白浜で婚活イベント 3月11日 参加者募集	白浜水族館
2018年2月23日	27面	京都新聞	解けては凍る 造形美 一芦生研究林・氷柱―	芦生研究林
2018年3月3日	25面	京都新聞	芦生の危機まざまざ 左京で写真展 研究林の現状伝える	芦生研究林
2018年3月4日	1面	紀伊民報	漫画「ガタガール」原画展と生物展始まる 熊楠記念館と京大水族館	白浜水族館
2018年3月31日	14面	紀伊民報	田辺湾の島は、上陸が禁じられています。	瀬戸臨海実験所

教職員に関する記事

年月日	掲載面	掲載紙	タイトル	教職員
2017年12月5日	20面	京都新聞 洛西版	この街この人 親しんでもらえる山に 西山森林整備推進協議会の会長 徳地 直子さん	徳地 直子
2017年4月1日	9面	紀伊民報	北浜海岸より 漂流物のささやき 番外編 4 沿岸生物 シナイ半島で調査 (以下、「連載」と略記)	久保田 信
2017年4月22日	9面	紀伊民報	連載 番外編 5 ハチジョウダカラ すさみに珍タカラガイ	
2017年4月29日	9面	紀伊民報	連載 36. カゴメノリ 穴だらけの褐藻	
2017年5月13日	9面	紀伊民報	連載 37. カブトクラゲ 吹き寄せられて繁殖	
2017年5月20日	9面	紀伊民報	連載 38. ハリセンボン 多数の棘持つフグ	
2017年5月31日	1面	紀伊民報	珍しいハナガサクラゲ	
2017年6月17日	7面	紀伊民報	連載 39. ニホンヤモリザメ 深海からの”珍客”	
2017年6月24日	7面	紀伊民報	連載 40. トックリガンガゼモドキ 田辺湾で珍しい毒ウニ	
2017年7月1日	7面	紀伊民報	連載 41. ハナガサクラゲ 毒々しくカラフル	
2017年7月8日	9面	紀伊民報	連載 42. アカクラゲとミズクラゲ 素手で触らないで	
2017年7月15日	9面	紀伊民報	連載 43. タコブネ 雌だけがつくる貝殻	
2017年7月22日	9面	紀伊民報	連載 44. アラハダカ 深海性ハダカイイワシの仲間	
2017年7月29日	9面	紀伊民報	連載 45. ナガミル 長く伸びる緑藻	
2017年8月19日	9面	紀伊民報	連載 46. ウスベニコウイカ 甲の片面が赤色	
2017年7月1日	4面	紀伊民報	珍しい南方系の貝漂着 串本町潮岬住崎海岸「ホシダカラ」	
2017年9月9日	9面	紀伊民報	連載 47. ハチジョウダカラ 初めての打ち上げ	
2017年9月9日	7面	紀伊民報	サンゴの白化 近年で最大規模 京大准教授 白浜町臨海を調査	
2017年9月16日	9面	紀伊民報	連載 48. コモンイモ 珍しいイモガイ打ち上げ	
2017年9月30日	7面	紀伊民報	会誌「本覚寺杵貝」第82号 黒潮貝類同好会が発行	
2017年9月30日	12面	紀伊民報	地域資源PR 物語を絡ませて 田辺で講演「水鉄砲」筆者・	

2017年10月19日	1面	紀伊民報	ミドリイガイ 熱帯の二枚貝が増加 海水温上昇の田辺湾	久保田 信
2017年10月21日	7面	紀伊民報	連載 49. ウスバキトンボ 死滅回遊の果てに	
2017年10月28日	9面	紀伊民報	連載 50. ヤギ類 しなやかな“小枝”	
2017年10月29日	27面	朝日新聞 奈良版	科学に親しんで 奈良高生ら発表 けいはんなでフェス	
2017年10月31日	1面	紀伊民報	大規模白化から回復 白浜町臨海のサンゴ	
2017年11月11日	4面	紀伊民報	連載 51. ソウジョウイモ 白浜が北限のイモガイ	
2017年11月22日	1面	紀伊民報	希少なヒトデ 日ノ御埼沖で捕獲	
2017年11月25日	7面	紀伊民報	連載 52. エビクラゲ 瀬戸内海からの“珍客”	
2017年11月25日	8面	紀伊民報	会報「くろしお」発行 南紀生物同好会	
2017年12月2日	7面	紀伊民報	連載 53. オオミズナギドリ 旅の途中に力尽き	
2017年12月5日	11面	紀伊民報	9日にクラゲの話 白浜町立図書館	
2017年12月9日	9面	紀伊民報	連載 54. カエルアンコウ類 オビクラゲのような卵帯	
2017年12月16日	7面	紀伊民報	連載 55. イシガキフグ とげは手裏剣、撒菱か！	
2017年12月23日	7面	紀伊民報	連載 56. アダンの実 南の島より“珍客”	
2018年1月13日	7面	紀伊民報	連載 57. シマメノウフネガイ 外来種の巻貝	
2018年1月20日	7面	紀伊民報	連載 58. ハナデンシャ “電飾”のウミウシ	
2018年1月28日	6面	紀伊民報	連載 59. オオバン 淡水域の渡り鳥	
2018年2月3日	7面	紀伊民報	連載 60. ハナビラウオ クラゲに寄り添う	
2018年2月6日	1面	紀伊民報	寒くて熱帯魚「凍死」白浜・北浜海岸 7年ぶり大量漂着	
2018年2月9日	11面	紀伊民報	釣っとコラム 寒波で魚「受難の年」	
2018年2月10日	7面	紀伊民報	連載 61. コンゴウフグ 寒波で凍死の受難	
2018年2月11日	21面	朝日新聞	ベニクラゲ 私も不老不死に 久保田・京大准教授 最終講義 「ウルトラな能力」研究は続く	
2018年2月24日	7面	紀伊民報	連載 62. イバラタツ 硬いととげで身を守る	
2018年3月31日	7面	紀伊民報	連載 63. カモメとカラス 自然界の厳しさ知る	
2017年4月7日	1面	舞鶴市民新聞	「若狭湾 水中散歩」15年の連載に終止符 海の中から180回の金字塔	益田 玲爾
2017年4月7日	1面	舞鶴市民新聞	若狭湾水中散歩 (180) マエソ	
2017年4月29日	24面	京都新聞	震災後の東北の海紹介 京大博 研究者が生物写真展	
2017年5月11日	24面	毎日新聞	京大の多彩な研究講演 13日から4回 総合博物館で	
2017年6月30日	30面	朝日新聞	若狭湾の海洋生物学 京大実験所を海洋高生訪問	
2017年7月27日	21面	朝日新聞	ウナギの子ども大海で「ナビ能力」 体内コンパス+潮の干満で泳ぐ向き察知	
2018年2月8日	22面	京都新聞	生物の種の多様性 集団安定性に作用 龍大教授ら 舞鶴湾調査し実証	
2018年2月13日	26面	毎日新聞	あちら増えればこちら減る 舞鶴湾の魚 15種中14種で相互作用 龍谷大と京大チーム 12年間調査	
2018年2月16日	19面	読売新聞	海の生物 数学的関係 舞鶴湾調査	
2018年3月4日	14面	京都新聞	ソフィアがやってきた！ 教える 伝える 海水温上昇、南方系の魚増加	
2018年3月22日	25面	朝日新聞	海の生き物同士増やし合う仲も	長谷川 尚史
2017年4月20日	1面	京都新聞	林業振興へ森林集約化 京都市、500ヘクタール規模「モデル地区」設定	
2017年4月21日	22面	毎日新聞	林業「大規模集約型に」検討会議 京都市へ制度創設提言	
2017年7月15日	17面	岐阜新聞	間伐や雪害対策研究成果を発表	
2017年8月3日	16面	中日新聞	県森林研究所員3人が成果発表	伊勢 武史
2017年6月4日	23面	京都新聞	外来種の草花生ける 身近な自然に思いはせ 左京	
2017年6月4日	29面	読売新聞	外来種生け花 個性の競演	
2017年7月1日	1面	京大新聞	複眼時評 生物学が語る『人間とはなにか』	
2017年11月21日	4面	紀伊民報	キウイのような味 シマサルナシを採取 紀伊大島	梅本 信也
2018年3月1日	4面	紀伊民報	古座川合同調査報告集 京大大島実験所が刊行	
2018年3月1日	18面	朝日新聞	バケツの水から 魚40種類の生息確認 「環境DNA」使った調査 琵琶湖周辺で 京大など	中川 光
2018年2月28日	29面	京都新聞	水中のDNAで魚推測 京滋の河川、簡単に分布調査	
2017年9月27日	9面	紀伊民報	全長60センチのシロマダラ 白浜町堅田で見つかる	中野 智之

(9)各施設利用者数

(2017年度)
(単位：人)

(所属) (目的)	京都大学					他大学				
	教育		研究		その他	教育		研究		その他
	教職員等	学生	教職員等	学生		教職員等	学生	教職員等	学生	
芦生研究林	198	459	758	383	69	37	181	89	244	4
北海道研究林標茶区	212	346	255	165	12	51	302	66	167	14
北海道研究林白糠区	21	20	39	18	2	0	0	10	33	0
和歌山研究林	56	24	51	82	1	1	10	259	631	0
上賀茂試験地	169	409	172	70	47	31	280	32	37	5
徳山試験地	31	40	0	0	29	0	0	0	0	0
北白川試験地	39	147	1,231	859	108	1	27	1	0	17
紀伊大島実験所	12	65	9	8	4	0	0	8	0	0
舞鶴水産実験所	208	528	265	2,870	3	65	450	73	669	8
瀬戸臨海実験所	350	506	32	3,217	40	152	1,027	74	334	33
計	1,296	2,544	2,812	7,672	315	338	2,277	612	2,115	81

(所属) (目的)	教育研究機関等			一般			合計
	教育	研究	その他	教育	研究	その他	
芦生研究林	52	16	62	110	336	4,069	7,067
北海道研究林標茶区	182	15	2	3	36	11	1,839
北海道研究林白糠区	0	4	0	10	22	18	197
和歌山研究林	132	8	265	1	0	80	1,601
上賀茂試験地	90	264	91	110	266	524	2,597
徳山試験地	16	0	79	93	0	113	401
北白川試験地	0	423	3	0	48	262	3,166
紀伊大島実験所	0	23	0	2	637	2	770
舞鶴水産実験所	241	112	364	25	96	35	6,012
瀬戸臨海実験所	645	24	59	52	101	81,822	88,468
計	1,358	889	925	406	1,542	86,936	112,118

(10)瀬戸臨海実験所附属水族館 月別入館者数

(2017年度)
(単位：人)

月	有料入館者数							有料入館者 徴収金額計 (円)	無料 入館者 数	入館者 数 計	(参考) 前年度有料 入館者数 計
	個人		団体		障害者		計				
	大人	小人	大人	小人	大人	小人					
4月	4,485	772	43	0	111	17	5,428	2,932,650	141	5,569	5,169
5月	5,222	724	143	5	137	21	6,252	3,435,900	384	6,636	5,978
6月	3,741	330	156	0	84	20	4,331	2,445,600	84	4,415	4,352
7月	5,729	1,052	69	9	123	18	7,000	3,757,450	45	7,045	6,792
8月	9,684	2,894	187	173	153	54	13,145	6,610,250	196	13,341	11,984
9月	5,461	436	223	5	174	10	6,309	3,584,400	157	6,466	6,632
10月	4,470	389	200	20	195	11	5,285	2,981,700	728	6,013	4,954
11月	4,692	425	199	16	221	17	5,570	3,136,150	228	5,798	4,392
12月	4,515	719	37	0	109	9	5,389	2,934,450	28	5,417	4,847
1月	5,794	850	168	5	114	18	6,949	3,804,950	18	6,967	5,895
2月	4,877	442	175	0	122	6	5,622	3,178,850	226	5,848	4,462
3月	6,707	999	127	0	203	44	8,080	4,412,100	174	8,254	7,685
計	65,377	10,032	1,727	233	1,746	245	79,360	43,214,450	2,409	81,769	73,142

(臨海実習等で実験所を利用した学生や教員、ならびに外来研究者等の来訪者は含まない。)

(11) 人事異動（2017年度）

氏名	新職名	旧職名	異動年月日
山 下 洋	センター長		2017. 4. 1
吉 岡 崇 仁	センター長 免	センター長	〃
横 山 壽	森里海連環学教育ユニット・特任教授／フィールド研 社会連携教授（研究員）	森里海連環学教育ユニット・特任教授／フィールド研 連携教授	〃
山 内 隆 之	森林フィールド管理部門技術長／北白川試験地 技術班長（兼務）	森林フィールド管理部門技術長／北海道研究林 技術班長（兼務）	〃
宮 城 祐 太	北海道研究林・技術職員	採用	
奥 田 賢	芦生研究林・技術専門職員 技術主任	芦生研究林・技術職員	〃
北 川 陽一郎	芦生研究林・技術職員	北海道研究林・技術職員	〃
木 本 恵 周	芦生研究林・技術職員	上賀茂試験地・技術職員	〃
中 川 智 之	北海道研究林・技術班長	北海道研究林・技術主任	〃
大 橋 健 太	上賀茂試験地・技術主任	北白川試験地 技術主任	〃
柳 本 順	北海道研究林・技術主任	和歌山研究林・技術主任	〃
勝 山 智 憲	和歌山研究林・技術職員	芦生研究林・技術職員	〃
林 大 輔	上賀茂試験地・技術職員	芦生研究林・技術職員	〃
佐 藤 修 一	北海道研究林・技術職員（再雇用）	里域フィールド管理部門・技術長	〃
横 山 隆 一	瀬戸臨海実験所・事務掛	教育推進・学生支援部学生課（企画掛）	〃
包 薩 日 娜	森里海連環学教育ユニット・研究員	採用	2017. 5. 1
木 村 里 子	国際高等教育院 附属データ科学イノベーション教育研究センター・特定講師	海洋生態系部門 海洋生物環境学分野・特定研究員	2017. 9. 1
松 尾 隆	医学部附属病院総務課・課長補佐	事務室・フィールド研担当事務長補佐（農学研究科当事務部／北部構内事務部総務課 課長補佐）	2017.10. 1
南 幸 一	事務室・フィールド研担当事務長補佐（農学研究科当事務部／北部構内事務部総務課 課長補佐）	奈良文化財研究所研究支援推進部総務課 課長補佐	〃
井 上 智 志	医学部附属病院医務課・専門職員（外来掛）	芦生研究林・事務掛長	
垣 田 明 彦	芦生研究林 事務掛長	芦生研究林事務掛 専門職員	〃
飯 間 昭 彦	芦生研究林 事務掛	医学部附属病院医務課（診療情報業務掛）	〃
高 橋 さやか	舞鶴水産実験所 研究員	採用	2017.11. 1
藤 井 佐 織	白眉センター 特定助教	採用（日本学術振興会海外特別研究員（アムステルダム自由大学））	2017.11.16
平 井 岳 志	北白川試験地 技術専門職員 技術班長	芦生研究林 技術専門職員 技術班長	2018. 1.16
久 保 田 信	定年退職	瀬戸臨海実験所・准教授	2018. 3.31
横 山 壽	任期満了退職	森里海連環学教育ユニット・特任教授	〃
吉 積 巳 貴	任期満了退職 立命館大学 食マネジメント学部 准教授へ異動	森里海連環学教育ユニット・特定准教授	〃
原 村 隆 司	任期満了退職／酪農学園大学農食環境学群環境共生学類 准教授 へ異動	白眉センター・特定助教	〃
田 城 文 人	任期満了退職／北海道大学総合博物館（分館水産科学館）助教へ異動	舞鶴水産実験所・特定助教	〃

藤 井 佐 織	辞職（森林総合研究所 森林昆虫研究領域主任研究員へ異動）	白眉センター 特定助教	〃
安 佛 かおり	任期满了退職（滋賀県立大学環境科学研究科博士研究員へ異動）	森里海連環学教育ユニット・研究員	〃
黄 琬 恵	任期满了退職（総合地球環境学研究所 研究員へ異動）	森里海連環学教育ユニット・研究員	〃
包 薩 日 娜	任期满了退職（カリフォルニア大学デービス校 研究員へ異動）	森里海連環学教育ユニット・研究員	〃
平 井 岳 志	早期退職	北白川試験地・技術専門職員	〃
林 晴 夫	任期满了退職	森里海連環学教育ユニット・特定職員	〃

(12) 規程の改正等

- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター外部資金等受入れ内規」の改正（平成29年4月12日教授会で承認・4月1日施行）
- ・「森里海連環学教育研究ユニット（仮称）設置準備委員会要項」の制定（平成29年6月14日教授会で承認・施行）

京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第15号
平成30年10月31日発行

発 行 京都大学フィールド科学教育研究センター
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

印 刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2

